上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ

（財団法人　市原市文化財センター調査報告書 第60集）

千葉県　市原市

祇園原貝塚

（ぎおんばら）

（本文編１）

１９９９

財団法人　市原市文化財センター

序

市原市の中央部を流れる養老川河口近くの右岸に広がる台地は、奈良時代に上総国分寺の建立された地として“国分寺台”の名で親しまれております。この地に土地区画整理事業が進められ、昭和47年以降文化財の大規模な発掘調査が実施されることになりました。

調査の結果、国分寺に関連する遺跡はもとより、旧石器時代以降各時代の遺跡・遺物が数多く発見され、なかでも昭和63年に公表された「王賜」銘鉄剣は、我が国で書かれた最古の文字を有する鉄剣として、全国的な話題を集めたところであります。また、縄文時代についても、西広貝塚・祇園原貝塚などの大型貝塚をはじめ、早期の貝塚が発見された諏訪台遺跡や小貝塚の点在する南中台遺跡など、貴重な成果を得ることとなりました。

今回報告する祇園原貝塚は、昭和52～53年度・57年度に道路建設及び宅地造成部分を対象として発掘調査が行われ、縄文時代後期～晩期の竪穴住居跡をはじめ、多くの遺構・遺物が発見されております。特に住居跡では、今まで発見されることの稀であった出入口の付設が確認されるなど、縄文時代の住居・集落の研究に一石を投じる大きな成果を上げております。

本報告書が、学術的な資料としてはもとより、文化財に対する理解や保護思想の育成のために、広く活用されることを願うものであります。

最後に、文化庁文化財保護部記念物課・千葉県教育庁文化課・市原市国分寺台土地区画整理組合をはじめとする、関係機関のご指導・ご協力に対し、深く感謝の意を表します。

平成11年３月

市原市教育委員会
教育長　大　野　　皎

例　　言

1．本書は、千葉県市原市根田地先に所在の祇園原貝塚の調査報告書である。

2．発掘調査は、市原市教育委員会が国庫補助事業として計画し、上総国分寺台遺跡調査団が実施したものである。整理事業は、文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の委託により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行については市原市教育委員会がおこなった。

3．調査は4度に分けておこなわれたが、調査対象総面積は15,300㎡である。

4．発掘調査、整理作業は下記のとおりおこなった。

第1次調査　昭和52年度　調査担当　米田耕之助・鷹野光行・大貫静夫

第2次調査　昭和53年度　調査担当　米田耕之助・鷹野光行・大貫静夫

第3次調査　昭和57・58年度　調査担当　小川和博・中野修秀

第4次調査　昭和57年度　調査担当　鷹野光行

整　理　平成6年4月1日～平成10年8月7日　整理担当　忍澤成視・大村　直（平成7・8年度）

5．本書の執筆、作成は忍澤がおこなった。住居出土の発泡土器の分析については、川鉄テクノリサーチ株式会社に委託した。遺構出土の炭・灰の分析、貝層出土の動物遺存体の同定の一部、人骨の鑑定、石器石材の肉眼鑑定についてはパリノサーヴェイ株式会社に委託した。動物遺存体の分析結果の総括について早稲田大学金子浩昌氏より、人骨の分析結果について日本赤十字看護大学森本岩太郎氏・聖マリンナ医科大学平田和明氏より玉稿を賜った。

6．本書を作成するにあたり、発掘調査当時学生として参加していた財団法人総南文化財センター菅谷通保氏、新潟県企画調整部企画課西田泰民氏、財団法人千葉県文化財センター西野雅人氏より協力・助言をいただき、菅谷氏・西田氏からは出土土器の分析結果について原稿を頂いた。記して謝意を表したい。

7．動物遺存体および包含層出土石器に関するデータのうち、量が膨大で報告書の本編中に収録できないと判断したものについては、付録のCD-ROMに情報を納めてあるので参照頂きたい。

凡　　例

石器・石製品、土器・土製品、骨角貝製品実測図中の記号・トーン、遺構実測図中の記号・トーンの意味は次のとおりである。

摩耗痕	⇤●⇥	炉・焼土		土器（床面付近）	●
摩耗強	⇤●●⇥				
敲打痕	⇤○⇥	灰		石器・石製品	▲
敲打強	⇤○○⇥				
凹み状の摩耗・敲打	⇤▼⇥	炭化物		土製品	◆
研磨痕	⇤□⇥				
敲打面		混土貝層		特殊土器（香炉・釣手・異形・手燭など）	■
赤彩		混貝土層			

本　文　目　次

序
例　言
I　序　説
1　調査に至る経緯と経過…… 1
2　遺跡の立地と環境 …… 3
3　調査の方法と概要 …… 11
II　縄文時代の遺構と遺物
1　住居 …… 15
2　土坑 ……234
3　埋葬人骨 ……312
4　埋設土器 ……339
5　道路状遺構 ……350
III　自然科学分析
1　発泡土器の分析 ……352
2　炭化物・灰の分析 ……370
3　埋葬人骨の分析 ……376
4　石器石材の分析 ……386
IV　弥生・古墳、奈良・平安時代の遺構と遺物
1　弥生・古墳時代 ……413
2　奈良・平安時代 ……509

挿図目次

第１図　市原市内縄文時代主要遺跡分布図 ……5・6
第２図　遺跡位置図……10
第３図　遺跡全体図……13
第４図　調査区グリッド配置図……14
第５図　縄文時代住居配置図 ……43・44
第６図　１号住居実測図……45
第７図　２号住居実測図および出土遺物……45
第８図　３号住居実測図……46
第９図　21号住居実測図……46
第10図　４号住居実測図および出土遺物……47
第11図　５号住居実測図……48
第12図　６号住居実測図および出土遺物……49
第13図　７号住居実測図および出土遺物……50
第14図　８・９号住居実測図および出土遺物(1) ……51
第15図　８・９号住居実測図および出土遺物(2) ……52
第16図　10・11・12号住居実測図 ……53・54
第17図　10号住居出土遺物……55
第18図　11号住居出土遺物……56
第19図　12号住居出土遺物……56
第20図　14号住居実測図および出土遺物……57
第21図　13号住居実測図および出土遺物……57
第22図　15号住居実測図および出土遺物……58
第23図　16・17・18号住居実測図……59
第24図　19・20号住居実測図 ……61・62
第25図　19号住居出土遺物(1) ……63
第26図　19号住居出土遺物(2) ……64
第27図　19号住居出土遺物(3) ……65
第28図　20号住居出土遺物(1) ……66
第29図　20号住居出土遺物(2) ……67
第30図　22号住居実測図……68
第31図　23号住居実測図および出土遺物……69
第32図　24号住居実測図および出土遺物……70
第33図　25号住居実測図……71
第34図　25号住居出土遺物(1) ……72
第35図　25号住居出土遺物(2) ……73
第36図　25号住居出土遺物(3) ……74
第37図　26号住居実測図および出土遺物(1) ……75
第38図　26号住居出土遺物(2) ……76
第39図　26号住居出土遺物(3) ……77
第40図　26号住居出土遺物(4) ……78
第41図　27号住居実測図……79
第42図　27号住居出土遺物(1) ……80
第43図　27号住居出土遺物(2) ……81
第44図　28・29号住居実測図……82
第45図　29号住居実測図および出土遺物(1) ……83
第46図　29号住居出土遺物(2) ……84
第47図　29号住居出土遺物(3) ……85
第48図　29号住居出土遺物(4) ……86
第49図　29号住居出土遺物(5) ……87
第50図　29号住居出土遺物(6) ……88
第51図　28号住居出土遺物……88
第52図　30・31号住居実測図 ……89・90
第53図　30号住居出土遺物(1) ……91
第54図　30号住居出土遺物(2) ……92
第55図　31号住居出土遺物(1) ……93
第56図　31号住居出土遺物(2) ……94
第57図　31号住居出土遺物(3) ……95
第58図　32・33・34・35・36・37号住居実測図 ……97・98
第59図　33号住居実測図および出土遺物(1) ……99
第60図　33号住居出土遺物(2) ……100
第61図　32号住居出土遺物 ……100
第62図　34号住居実測図および出土遺物(1) ……101
第63図　34号住居出土遺物(2) ……102
第64図　34号住居出土遺物(3) ……103
第65図　35号住居実測図および出土遺物 ……104
第66図　36号住居出土遺物 ……105
第67図　37号住居実測図および出土遺物 ……105
第68図　38号住居実測図および出土遺物 ……106
第69図　39号住居実測図および出土遺物 ……107
第70図　40号住居実測図 ……108
第71図　40号住居出土遺物(1) ……109
第72図　40号住居出土遺物(2) ……110
第73図　41号住居実測図 ……111
第74図　41号住居出土遺物(1) ……112
第75図　41号住居出土遺物(2) ……113
第76図　41号住居出土遺物(3) ……114
第77図　41号住居出土遺物(4) ……115
第78図　42Ａ・Ｂ号住居実測図……117・118
第79図　42号住居出土遺物(1) ……119
第80図　42号住居出土遺物(2) ……120
第81図　42号住居出土遺物(3) ……121
第82図　42号住居出土遺物(4) ……122
第83図　42号住居出土遺物(5) ……123
第84図　42号住居出土遺物(6) ……124
第85図　42号住居出土遺物(7) ……125
第86図　42号住居出土遺物(8) ……126
第87図　42号住居出土遺物(9) ……127
第88図　42号住居出土遺物(10) ……128
第89図　42号住居出土遺物(11) ……129
第90図　42号住居出土遺物(12) ……130
第91図　43号住居実測図 ……131
第92図　43号住居出土遺物(1) ……132
第93図　43号住居出土遺物(2) ……133
第94図　43号住居出土遺物(3) ……134
第95図　44号住居実測図および出土遺物 ……135
第96図　45号住居実測図および出土遺物(1) ……136
第97図　45号住居出土遺物(2) ……137
第98図　45号住居出土遺物(3) ……138
第99図　46号住居実測図 ……139
第100図 46号住居出土遺物(1) ……140
第101図 46号住居出土遺物(2) ……141
第102図 46号住居出土遺物(3) ……142
第103図 46号住居出土遺物(4) ……143
第104図 46号住居出土遺物(5) ……144
第105図 46号住居出土遺物(6) ……145
第106図 47号住居実測図 ……147・148
第107図 47号住居出土遺物(1) ……149
第108図 47号住居出土遺物(2) ……150
第109図 47号住居出土遺物(3) ……151
第110図 48号住居実測図 ……152
第111図 48号住居出土遺物(1) ……153
第112図 48号住居出土遺物(2) ……154
第113図 48号住居出土遺物(3) ……155
第114図 49Ａ・49Ｂ号住居実測図……157・158
第115図 49Ａ号住居出土遺物(1) ……159
第116図 49Ａ号住居出土遺物(2) ……160
第117図 49Ａ号住居出土遺物(3) ……161
第118図 49Ｂ号住居出土遺物(1) ……162
第119図 49Ｂ号住居出土遺物(2) ……163

第120図 50号住居実測図 ……165・166
第121図 50号住居実測図(柱穴深度分類図) ……167
第122図 50号住居主要遺物出土状況 ……169・170
第123図 50号住居出土遺物1(床面・柱穴) ……171
第124図 50号住居出土遺物2(床面・柱穴) ……172
第125図 50号住居出土遺物3(覆土) ……173
第126図 50号住居出土遺物4(床面・柱穴) ……174
第127図 50号住居出土遺物5(床面) ……175
第128図 50号住居出土遺物6(床面) ……176
第129図 50号住居出土遺物7(床面) ……177
第130図 50号住居出土遺物8(柱穴) ……178
第131図 50号住居出土遺物9(床面) ……179
第132図 50号住居出土遺物10(床面) ……180
第133図 50号住居出土遺物11(柱穴) ……181
第134図 50号住居出土遺物12(床面) ……182
第135図 50号住居出土遺物13(床面) ……183
第136図 50号住居出土遺物14(床面・柱穴) ……184
第137図 50号住居出土遺物15(床面・柱穴) ……185
第138図 50号住居出土遺物16(覆土) ……186
第139図 50号住居出土遺物17(覆土) ……187
第140図 50号住居出土遺物18(覆土) ……188
第141図 50号住居出土遺物19(覆土) ……189
第142図 50号住居出土遺物20(床面) ……190
第143図 50号住居出土遺物21(床面) ……191
第144図 50号住居出土遺物22(床面) ……192
第145図 50号住居出土遺物23(床面) ……193
第146図 50号住居出土遺物24(床面) ……194
第147図 50号住居出土遺物25(床面) ……195
第148図 50号住居出土遺物26(床面) ……196
第149図 50号住居出土遺物27(柱穴) ……197
第150図 50号住居出土遺物28(柱穴) ……198
第151図 50号住居出土遺物29(床面) ……199
第152図 50号住居出土遺物30(床面) ……200
第153図 50号住居出土遺物31(床面・柱穴) ……201
第154図 50号住居出土遺物32(覆土) ……202
第155図 50号住居出土遺物33(覆土) ……203
第156図 50号住居出土遺物34(床面) ……204
第157図 50号住居出土遺物35(柱穴) ……205
第158図 50号住居出土遺物36(覆土) ……206
第159図 50号住居出土遺物37(覆土) ……207
第160図 51号住居実測 ……209・210
第161図 51A号住居出土遺物(1) ……211
第162図 51A号住居出土遺物(2) ……212
第163図 51A号住居出土遺物(3) ……213
第164図 51A号住居出土遺物(4) ……214
第165図 51B号住居出土遺物(1) ……215
第166図 51B号住居出土遺物(2) ……216
第167図 51B号住居出土遺物(3) ……217
第168図 51B号住居出土遺物(4) ……218
第169図 51B号住居出土遺物(5) ……219
第170図 51B号住居出土遺物(6) ……220
第171図 51B号住居出土遺物(7) ……221
第172図 51B号住居出土遺物(8) ……222
第173図 51A・51B号住居出土遺物(1) ……223
第174図 51A・51B号住居出土遺物(2) ……224
第175図 51A・51B号住居出土遺物(3) ……225
第176図 51A・51B号住居出土遺物(4) ……226
第177図 51A号住居出土遺物(5) ……227
第178図 51B号住居出土遺物(9) ……227
第179図 51A・51B号住居出土遺物(5) ……228
第180図 51A・51B号住居グリッド区分模式図 ……228
第181図 52号遺構実測図 ……229
第182図 53号遺構実測図および出土遺物 ……229
第183図 54号遺構実測図 ……230
第184図 54号遺構出土遺物(1) ……231
第185図 54号遺構出土遺物(2) ……232
第186図 55号遺構実測図および出土遺物 ……233
第187図 土坑形態分類図 ……238
第188図 土坑および埋設土器配置図 ……243・244
第189図 土坑実測図および出土遺物(1) ……245
第190図 土坑出土遺物(2) ……246
第191図 土坑実測図および出土遺物(3) ……247
第192図 土坑実測図および出土遺物(4) ……248
第193図 土坑出土遺物(5) ……249
第194図 土坑出土遺物(6) ……250
第195図 土坑実測図および出土遺物(7) ……251
第196図 土坑実測図および出土遺物(8) ……252
第197図 土坑出土遺物(9) ……253
第198図 土坑実測図および出土遺物(10) ……254
第199図 土坑実測図および出土遺物(11) ……255
第200図 土坑実測図および出土遺物(12) ……256
第201図 土坑実測図および出土遺物(13) ……257
第202図 土坑実測図および出土遺物(14) ……258
第203図 土坑実測図および出土遺物(15) ……259
第204図 土坑実測図および出土遺物(16) ……260
第205図 土坑実測図および出土遺物(17) ……261
第206図 土坑実測図および出土遺物(18) ……262
第207図 土坑実測図および出土遺物(19) ……263
第208図 土坑実測図および出土遺物(20) ……264
第209図 土坑実測図および出土遺物(21) ……265
第210図 土坑実測図および出土遺物(22) ……266
第211図 土坑実測図および出土遺物(23) ……267
第212図 土坑実測図および出土遺物(24) ……268
第213図 土坑実測図および出土遺物(25) ……269
第214図 土坑実測図および出土遺物(26) ……270
第215図 土坑実測図および出土遺物(27) ……271
第216図 土坑実測図および出土遺物(28) ……272
第217図 土坑実測図および出土遺物(29) ……273
第218図 土坑実測図および出土遺物(30) ……274
第219図 土坑実測図および出土遺物(31) ……275
第220図 土坑出土遺物(32) ……276
第221図 土坑実測図および出土遺物(33) ……277
第222図 土坑実測図および出土遺物(34) ……278
第223図 土坑実測図および出土遺物(35) ……279
第224図 土坑実測図および出土遺物(36) ……280
第225図 土坑実測図および出土遺物(37) ……281
第226図 土坑実測図および出土遺物(38) ……282
第227図 土坑実測図および出土遺物(39) ……283
第228図 土坑実測図および出土遺物(40) ……284
第229図 土坑出土遺物(41) ……285
第230図 土坑実測図および出土遺物(42) ……286
第231図 土坑出土遺物(43) ……287
第232図 土坑出土遺物(44) ……288
第233図 土坑実測図および出土遺物(45) ……289
第234図 土坑実測図および出土遺物(46) ……290
第235図 土坑実測図および出土遺物(47) ……291
第236図 土坑実測図および出土遺物(48) ……292
第237図 土坑出土遺物(49) ……293
第238図 土坑出土遺物(50) ……294
第239図 土坑実測図および出土遺物(51) ……295

第240図 土坑出土遺物(52) ……296
第241図 土坑出土遺物(53) ……297
第242図 土坑実測図および出土遺物(54) ……298
第243図 土坑実測図および出土遺物(55) ……299
第244図 土坑出土遺物(56) ……300
第245図 土坑実測図および出土遺物(57) ……301
第246図 土坑実測図および出土遺物(58) ……302
第247図 土坑実測図および出土遺物(59) ……303
第248図 土坑出土遺物(60) ……304
第249図 土坑実測図および出土遺物(61) ……305
第250図 土坑実測図および出土遺物(62) ……306
第251図 土坑実測図および出土遺物(63) ……307
第252図 土坑実測図および出土遺物(64) ……308
第253図 土坑実測図および出土遺物(65) ……309
第254図 土坑実測図および出土遺物(66) ……310
第255図 土坑実測図および出土遺物(67) ……311
第256図 埋葬人骨分布図 ……316
第257図 埋葬人骨配置および検出状況図 ……317・318
第258図 埋葬人骨配置および埋葬様式模式図 ……319・320
第259図 埋葬人骨実測図(1) ……321
第260図 埋葬人骨実測図(2) ……322
第261図 埋葬人骨実測図(3) ……323
第262図 埋葬人骨実測図(4) ……324
第263図 埋葬人骨実測図(5) ……325
第264図 埋葬人骨実測図(6) ……326
第265図 埋葬人骨実測図(7) ……327
第266図 埋葬人骨実測図(8) ……328
第267図 埋葬人骨実測図(9) ……329
第268図 埋葬人骨実測図(10) ……330
第269図 埋葬人骨実測図(11) ……331
第270図 埋葬人骨実測図(12) ……332
第271図 埋葬人骨実測図(13)および1号埋葬犬実測図、埋葬人骨供伴遺物(1) ……333
第272図 埋葬人骨供伴遺物(2) ……334
第273図 埋葬人骨供伴遺物(3) ……335
第274図 埋葬人骨供伴遺物(4) ……336
第275図 埋葬人骨供伴遺物(5) ……337
第276図 埋葬人骨供伴遺物(6) ……338
第277図 埋設土器実測図(1) ……340
第278図 埋設土器実測図(2) ……341
第279図 埋設土器実測図(3) ……342
第280図 埋設土器実測図(4) ……343
第281図 埋設土器実測図(5) ……344
第282図 埋設土器実測図(6) ……345
第283図 埋設土器実測図(7) ……346
第284図 埋設土器実測図(8) ……347
第285図 埋設土器実測図(9) ……348
第286図 埋設土器実測図(10) ……349
第287図 道路状遺構実測図および出土遺物 ……351
第288図 発泡土器・焼獣骨分布状況 ……358
第289図 発泡土器実測図 ……359
第290図 熱分析結果(1) ……368
第291図 熱分析結果(2) ……369
第292図 分析資料および採取地点 ……371
第293図 植物珪酸体組成 ……372
第294図 石器・石製品器種別石材組成 ……406・407
第295A図 関東地方における中・古生界の分布図……408
第295B図 石材産地露頭調査・試料採取地点 ……409
第296図 弥生・古墳時代遺構配置図 ……429・430
第297図 1・5・8号住居実測図および出土遺物 ……431
第298図 2号住居実測図 ……432
第299図 2号住居出土遺物 ……433
第300図 3号住居実測図および出土遺物(1) ……434
第301図 3号住居出土遺物(2) ……435
第302図 3号住居出土遺物(3) ……436
第303図 4号住居実測図および出土遺物(1) ……437
第304図 4号住居出土遺物(2) ……438
第305図 4号住居出土遺物(3) ……439
第306図 6号住居実測図 ……440
第307図 6号住居出土遺物(1) ……441
第308図 6号住居出土遺物(2) ……442
第309図 7号住居実測図および出土遺物 ……443
第310図 9号住居実測図 ……444
第311図 9号住居出土遺物 ……445
第312図 10号住居実測図 ……446
第313図 11号住居実測図 ……446
第314図 10号住居出土遺物 ……447
第315図 11号住居出土遺物 ……447
第316図 12・13号住居、奈良・平安6号住居実測図および12号住居出土遺物(1) ……448
第317図 12号住居出土遺物(2) ……449
第318図 14号住居実測図および出土遺物(1) ……450
第319図 14号住居出土遺物(2) ……451
第320図 14号住居出土遺物(3) ……449
第321図 15号住居実測図および出土遺物 ……452
第322図 16号住居実測図および出土遺物 ……453
第323図 17号住居実測図および出土遺物 ……454
第324図 18・19号住居、奈良・平安5号住居実測図 ……455
第325図 19号住居出土遺物 ……456
第326図 18号住居出土遺物 ……456
第327図 20号住居実測図および出土遺物(1) ……457
第328図 20号住居出土遺物(2) ……458
第329図 E3-13・23グリッド出土遺物……458
第330図 21号住居実測図 ……459
第331図 21号住居実測図および出土遺物(1) ……460
第332図 21号住居出土遺物(2) ……461
第333図 21号住居出土遺物(3) ……462
第334図 21号住居出土遺物(4) ……463
第335図 21号住居出土遺物(5) ……464
第336図 21号住居出土遺物(6) ……465
第337図 出土位置不明分 ……465
第338図 22号住居実測図 ……466
第339図 22号住居出土遺物 ……467
第340図 23号住居実測図および出土遺物 ……468
第341図 24・25・26号住居実測図 ……469・470
第342図 24号住居出土遺物(1) ……471
第343図 24号住居出土遺物(2) ……472
第344図 25号住居出土遺物(1) ……472
第345図 25号住居出土遺物(2) ……473
第346図 25号住居出土遺物(3) ……474
第347図 26号住居出土遺物(1) ……475
第348図 26号住居出土遺物(2) ……476
第349図 28号住居実測図 ……477
第350図 28号住居出土遺物(1) ……478
第351図 28号住居出土遺物(2) ……479
第352図 28号住居出土遺物(3) ……480
第353図 29・30号住居実測図 ……481
第354図 29号住居出土遺物 ……482
第355図 30号住居出土遺物(1) ……482
第356図 30号住居出土遺物(2) ……483
第357図 31・32・33号住居実測図 ……485・486
第358図 33号住居出土遺物 ……487

第359図 31号住居出土遺物 ……487
第360図 32号住居出土遺物(1)……488
第361図 32号住居出土遺物(2)……489
第362図 32号住居出土遺物(3)……490
第363図 32号住居出土遺物(4)……491
第364図 32号住居出土遺物(5)……492
第365図 32号住居出土遺物(6)……493
第366図 34号住居実測図 ……494
第367図 35号住居実測図 ……494
第368図 34号住居出土遺物(1)……495
第369図 34号住居出土遺物(2)……496
第370図 35号住居出土遺物 ……496
第371図 36号住居実測図および出土遺物(1)……497
第372図 36号住居出土遺物(2)……498
第373図 37号住居実測図および出土遺物 ……499
第374図 38号住居実測図 ……500
第375図 38号住居出土遺物 ……501
第376図 39号住居実測図および出土遺物(1)……502
第377図 39号住居出土遺物(2)……503
第378図 40号土坑実測図および出土遺物 ……504
第379図 41号溝実測図および出土遺物 ……504
第380図 42号土坑実測図および出土遺物 ……505
第381図 43号土坑実測図および出土遺物 ……505
第382図 奈良・平安時代遺構配置図 ……513・514
第383図 1号住居実測図および出土遺物(1)……516
第384図 1号住居出土遺物(2)……517
第385図 3号住居実測図および出土遺物(1)……517
第386図 3号住居出土遺物(2)……518
第387図 3号住居出土遺物(3)……519
第388図 3号住居出土遺物(4)……520
第389図 2号住居実測図および出土遺物(1)……521
第390図 2号住居出土遺物(2)……522
第391図 4号住居実測図 ……523
第392図 4号住居出土遺物(1)……524
第393図 4号住居出土遺物(2)……525
第394図 4号住居出土遺物(3)……526
第395図 4号住居出土遺物(4)……527
第396図 4号住居出土遺物(5)……528
第397図 7号住居実測図 ……529
第398図 7号住居出土遺物(1)……530
第399図 7号住居出土遺物(2)……531
第400図 7号住居出土遺物(3)……532
第401図 7号住居出土遺物(4)……533
第402図 7号住居出土遺物(5)……534
第403図 7号住居出土遺物(6)……535
第404図 7号住居出土遺物(7)……536
第405図 8号住居実測図および出土遺物(1)……537
第406図 8号住居出土遺物(2)……538
第407図 9号住居実測図 ……539
第408図 9号住居出土遺物(1)……540
第409図 9号住居出土遺物(2)……541
第410図 9号住居出土遺物(3)……542
第411図 9号住居出土遺物(4)……543
第412図 10号住居実測図および出土遺物(1)……544
第413図 10号住居出土遺物(2)……545
第414図 11号遺構実測図および出土遺物 ……546
第415図 12号遺構実測図 ……547
第416図 12号遺構出土遺物 ……548
第417図 13号遺構出土遺物 ……549
第418図 14号遺構出土遺物 ……550

表 目 次

第１表　市原市内縄文時代主要遺跡一覧 ……7
第２表　市原市内縄文時代遺跡関係文献一覧 ……8
第３表　市原市内縄文時代主要遺跡の分類 ……9
第４表　縄文住居リスト……41
第５表　縄文土坑リスト……239～241
第６表　縄文時代土坑時期別形態分類表 ……241
第７表　人骨リスト ……314
第８表　埋葬様式一覧 ……315
第９表　合葬人骨の内訳 ……315
第10表　埋設土器リスト ……339
第11表　50号住居出土土器の分析結果（粘土関係） ……367
第12表　耐火度試験結果 ……367
第13表　ゼーゲルコーン温度比較表 ……367
第14表　分析試料一覧 ……372
第15表　炭化物の樹種・種実同定結果 ……374
第16表　植物珪酸体分析結果 ……375
第17表　出土人骨の所見……380～384
第18表　出土人骨の性別と年齢 ……385
第19表　成人骨の性別と年齢別 ……385
第20表　大腿骨の偏平性 ……385
第21表　大腿骨の付柱形成 ……385
第22表　脛骨の偏平性 ……385
第23表　石器石材組成表（包含層） ……396
第24表　遺構石器石材組成表（称名寺） ……397
第25表　遺構石器石材組成表（堀之内） ……398
第26表　遺構石器石材組成表（加曽利Ｂ） ……399
第27表　遺構石器石材組成表（曽谷・安行） ……400
第28表　遺構石器石材組成表（後～晩期） ……401
第29表　遺構石器石材組成表（不明） ……402
第30表　遺構石器石材組成表（弥生） ……403
第31表　遺構石器石材組成表（古墳） ……404
第32表　遺構石器石材組成表（奈良・平安） ……405
第33表　弥生・古墳遺構リスト ……428
第34表　弥生・古墳土器表……506～508
第35表　奈良・平安遺構リスト ……515
第36表　奈良・平安土器表 ……515

写真図版目次

巻頭カラー１　遺跡遠景（南より）、２次調査区全景（北西より）
巻頭カラー２　３次調査区全景（貝層分布状況）、３・４次調査区全景（北東より）
巻頭カラー３　８号住居、40号住居
巻頭カラー４　21号住居とその上部に堆積した16号貝層、19号住居内に堆積した11号貝層・手前は13号人骨
巻頭カラー５　34号土坑内に堆積した２号貝層、107号土坑内に堆積した13号貝層、１号埋設土器、14号人骨
巻頭カラー６　３号人骨、弥生２号住居土器出土状況、奈良・平安12号遺構（瓦窯）
巻頭カラー７　包含層出土の土偶、43号住居検出の石冠
カラー図版１　50号住居出土の発泡土器（分析試料）１・２……361
カラー図版２　50号住居出土の発泡土器（分析試料）３・４……362
カラー図版３　50号住居出土の発泡土器（分析試料）５・６……363
カラー図版４　50号住居出土の発泡土器（分析試料）７ ……364
カラー図版５　顕微鏡写真　分析試料１～４ ……365
カラー図版６　顕微鏡写真　分析試料５～７ ……366
カラー図版７　石材産地露頭調査 ……411

Ⅰ 序　　説

1　調査に至る経緯と経過

市原市の沿革

市原市は、昭和38年５月１日に、市原町・五井町・三和町・姉崎町・市津町の五つの町が合併し、県下19番目の市として誕生し、更に、昭和42年10月１日に南総町・加茂村の一町一村が加わり、現在の市域となったもので、北は千葉市、東に茂原市・長柄町・長南町、南は大多喜町・君津市に、そして西は木更津市・袖ヶ浦市の五市三町に隣接する、南北36km・東西22km・面積約368km²と広大な市域を形成している。

この地は、古代房総において上総・下総・安房と分割された三国中、中心的な上総国の市原郡にあたる地域であり、国分寺や国府が置かれ最も繁栄していた所である。特に、養老川河口付近の右岸台地上は国分寺の設置された地として“国分寺台地”の愛称で親しまれ、国分寺に関連する遺跡をはじめ旧石器時代から現代に至る多くの遺跡が存在している。

国分寺台埋蔵文化財調査団

こうした国分寺台地の中心地に現市庁舎が建設され、庁舎を取り巻く3,800,000m²におよぶ地域を対象として区画整理事業が実施されることとなり、事業の開始に伴い、昭和46年12月27日付けで、市原市国分寺台土地区画整理事業区域内に存在する埋蔵文化財を保護調査するため、市原市文化財審議会切替尊文会長を理事長とする市原市国分寺台埋蔵文化財調査会が組織され、実際の調査を担当・実施する機関として調査会の下に、早稲田大学滝口宏教授を団長に迎え、平野元三郎千葉県知事文化財顧問、市毛勲早稲田実業学校教諭を副団長とした調査団が結成された。

翌昭和47年６月24日には、市原市長と市原市国分寺台埋蔵文化財調査会理事長との間に、「市原市国分寺台埋蔵文化財発掘調査委託契約（昭和47年度）」が締結され、７月23日に国分寺境内において市原市国分寺台埋蔵文化財調査会の主催による国分寺台埋蔵文化財調査地鎮祭が挙行され、東間部多古墳群発掘調査を皮切りに国分寺台遺跡群の発掘調査が開始された。

国分寺台埋蔵文化財発掘調査は、当初、昭和47年・48年・49年の３か年で実施する計画によりはじめられたが、調査の進捗に伴い当初見込まれていた遺跡数が大幅に増加することが明らかとなり、計画が大幅に変更され、昭和63年度にいたるまで、長期間にわたり調査が実施されることとなった。

その結果、調査団が解散する昭和60年３月までの間、国分寺台地区の埋蔵文化財にかかる発掘調査は当調査団によりおこなわれたが、調査団の解散後は昭和63年まで㈶市原市文化財センターが調査を引き継いで実施した。

この結果、発掘調査を実施した遺跡は、上総国分僧・尼寺跡、貝塚、集落跡、古墳など43遺跡、調査面積は、537,270m²にのぼっている。

祇園原貝塚の調査

国分寺台遺跡群は、旧石器時代から鎌倉時代におよぶ多種多様な遺跡により構成されているが、縄文時代の遺跡では、市内屈指の大規模貝塚である西広貝塚（昭和47年度から７次にわたる調査により、

中期末～晩期にいたる遺構・遺物を多く検出している）をはじめ、今回報告する祇園原貝塚や南中台遺跡（昭和47年度～48年度の調査で、後期の地点貝塚を調査）、早期の貝塚として諏訪台貝塚（昭和60年度～61年度の調査で条痕文期の貝塚を調査）などがある。

市原市根田祇園原に貝塚の存在することは今回の調査によるまでもなく、すでに学界には知られていたことである。昭和24年の「千葉縣史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯」は市原遺蹟発掘調査概報であるが、その中に市原村根田所在として「根田祇園貝塚」を報告している。当時の状況をみると、貝塚は「半月状侵蝕谷の最奥端の北岸にあって、その傾斜から平坦な臺上の畑地一帯に貝殻が散布しているが、主要部は北岸斜面寄りの二百坪内外のところと、天王祠附近に在ると思われる。」と書かれている。これは、今回の調査以前にボーリングにより貝層散布範囲を推定したのとほぼ同様である。当時の調査は北斜面より平坦な芋畑に３箇所トレンチを掘っているが、西寄りの地点において貝層を発見している。そこでは「表土三〇糎、貝層三〇～四〇糎、黒土層二〇糎で、土器破片が多数出土」している。また、「天王祠側の試掘では混乱した貝交りの黒土層が一五、六糎あったのみで純貝層を検出し得なかった。」となっている。この時の発掘では堀之内式、加曽利Ｂ式に該当する土器を検出している。この調査の後は祇園原貝塚に調査の手が入れられることなく昭和52年度の第１次調査に至る。この間、当貝塚には建物の建築もなく、畑地として遺跡はその全貌を良く保存してきたのである。

祇園原貝塚は、東京湾東岸地域一帯に多くみられる馬蹄形貝塚であるが、開発が激進し、次々と貝塚が破壊されていく東京湾東岸地域においては、遺跡全体の形状を良く保存する貝塚として貴重な存在となっていた。しかし、市原地域も開発の手から逃れることはできず、昭和47年から当国分寺台地にも国分寺台土地区画整理事業に伴い宅地造成が行なわれることになった。この造成では、祇園原貝塚と並んで市原を代表する西広貝塚もすでに大部分がその対象とされ、昭和52年度より祇園原貝塚においても造成対象部分についての調査を開始せざるを得なくなったものである。

昭和52年度の第１次調査は、区画整理事業の一環である行政センター外周道路工事に先立ち貝塚のほぼ中央部を南北に貫通する形で道路が通るため、この部分を対象に調査が行われた。調査の結果、貝塚中央部の所謂中央広場と呼称されている凹地をとりまく様に住居が検出された。検出された住居は、縄文時代・弥生時代・歴史時代など30数軒にのぼったが、中でも縄文時代に位置づけられる住居は、後期堀之内式、曽谷式、安行１・２式期など時期的にはさまざまなものがあり、いずれも入口部を付設するといった特色を有したものであった。また、この入口部は中央広場方向に向って付設されるといった共通性も認められ、縄文時代後期中葉以降における集落構造の解明にも一石を投ずる成果を得ることができた。また、国分尼寺の西門ならびに西限の溝を検出している（上総国分寺台発掘調査団　祇園原貝塚　上総国分寺台発掘調査概要Ｖ　1978）。

昭和53年度の第2次調査は、１次調査区の北西に隣接する区域の調査で、西側部の貝層及びその外周部が対象となった。第1次調査とは貝塚における区域をまったく別にしているため、前回の調査結果とどのような関わりをみせることになるかが注目された。この調査では、堀之内・加曽利Ｂ期を主体とする貝層、縄文時代・弥生時代・歴史時代の住居20数軒および縄文時代後期の埋葬人骨多数を検出した（上総国分寺台発掘調査団　祇園原貝塚II　上総国分寺台発掘調査概要VI　1979）。

第３・４次調査は昭和57・58年度におこなわれた。調査対象となったのは、第1次調査区の外周道路の東側隣接地にあたり、もともと宅造予定地となっていたものが先の調査結果にもとづき一旦国分尼

寺々域内の一部として保存計画地内に組み入れられていた。しかし当該地区に予定されていた宅地の換地変更が既に事業地内で処理できなくなってしまったとの事情がおき、このため県文化課、市教育委員会および土地区画整理組合の三者は、当該遺跡の取扱いについて協議を重ね、その結果遺跡の重要性を鑑み、より完全な調査を行うことを条件に事前調査の実施の判断が下りた。この調査では、堀之内・加曽利B期を主体とする貝層、縄文時代・弥生時代・歴史時代の住居20数軒および縄文時代後期の埋葬人骨多数を検出した（上総国分寺台発掘調査団　祇園原貝塚Ⅲ　上総国分寺台発掘調査概要Ⅺ 1983)。

これら4回にわたる大規模な発掘調査によって、貝層サンプル分析による生業活動・自然環境の復元、検出された遺構・遺物・埋葬人骨などによる集落の変遷など、東京湾東岸の縄文後期貝塚の一端が明らかにされる可能性が示唆された。さらに、弥生時代の集落および古墳時代以降の集落、そして検出された遺構によってその西限が確認され占地状況が明確となった上総国分尼寺など、単なる縄文貝塚だけの問題にとどまらず、かなり重要な性格をもつ遺跡であることが指摘された。そして、全ては発掘調査後の整理・報告書刊行作業へと委ねられた。

なお、上総国分寺台発掘調査団のおこなったこれらの調査の8年後の平成3年度に、第1次調査区の西、第2次調査区の南に隣接する地域を、国分寺中央公園整備に伴う埋蔵文化財調査として、財団法人市原市文化財センターが確認・一部本調査した(第3図)。この結果、奈良・平安時代の住居6軒、弥生時代の環濠の一部・住居9軒・人骨を伴う土壙墓1基、縄文時代早期の炉穴7基・後期の住居17軒・埋葬人骨6体・埋葬犬1体・堀之内・加曽利B期の貝層が検出されている（忍澤成視　根田祇園原貝塚第5次調査　市原市文化財センター年報　平成3年度　1995)。当地区は現在国分寺中央公園となり、遺跡の一部は地中に保存されている。

国分寺台遺跡群の整理報告作業については、現場での調査を国庫補助事業によりおこなった部分を対象として、同じく文化庁の国庫補助事業として進められることとなり、平成6年度から平成13年度の8か年にわたる計画で実施している。

祇園原貝塚の整理報告作業は、平成6年度から平成9年度の4か年にわたる継続事業として実施してきたもので、㈶市原市文化財センターの受託事業として実施した。

平成10年度には、これの印刷製本作業を実施し、祇園原貝塚調査報告書として刊行することとなったものである。

2　遺跡の立地と環境

房総半島は、北部地域に広がる平坦な洪積台地と南部地域の安房・上総に見られる山間部との2種類の異なった地形により形成されており、そのほぼ中間地域に房総半島を横断二分するかのように全長75kmの養老川の雄大な流れを見ることができる。

養老川河口付近の右岸（北岸）に広がる洪積世台地いわゆる市原台地は、その北側を東西に流れる村田川とに挟まれ多くの開析谷が樹支状に入り込み、複雑な地形を作り出しているため、それらの各谷の周囲には多くの遺跡が存在し、とくに国分寺台を中心とした地域には各時代の重要な遺跡が集中して存在する。今回報告する祇園原貝塚もこれらの遺跡群の一角を占めている。第1図に市原市内の

主要な縄文時代の遺跡の分布を示し、第1・2表にその一覧と文献を示した。整理・報告の成されているものを中心とし、さらに確実な遺構の存在が明らかな遺跡を選んだ。したがって、未報告であったり、遺物のみ検出されている遺跡で一覧に掲載されていないものが他にもあることを断っておきたい。さらにこれらの遺跡を時期別、流域・地区別に分類したのが第3表である。一覧に掲げた遺跡は55箇所を数える。時期的には、草創期の遺跡として知られているのは中高根所在の南原遺跡のみである。早期撚糸文系・沈線文系の時期の遺跡はまだ散見する程度であるが、条痕文系の時期の遺跡は各地区検出遺跡数が増加する。前期は概して遺跡数は少ないが、村上所在の諏訪台遺跡は早期末・前期前葉の大規模な集落遺跡として注目に値する。早期末の遺構には市内で唯一の小規模な貝塚が認められた。中期後葉には各地区検出遺跡数が増加するが、中期前・中葉の時期の遺跡は少ない。姉崎所在の妙経寺貝塚は、中期前～後葉まで続く大規模な貝塚を伴う低地砂堆上に形成された遺跡として注目される。後期の遺跡は各地区でみられ、とくに市原台地上には中期末から晩期の前葉まで継続的に続くような貝塚を伴う大規模な集落遺跡がみられる。晩期中葉以降になると遺跡数は減少し、一部の地区にわずかに知られる程度となる。

55箇所の遺跡のうち、小規模なものを含めて貝塚を伴うものが全体の60％の33箇所あり、市原市においては貝塚を伴う縄文時代の遺跡の割合が高いことがうかがえる。またこのうちの約半数の17箇所がかなり広範な貝層の分布域をもつ大規模貝塚に分類できるものである。国分寺台とその周辺域には、21箇所の遺跡が知られこのうちの16箇所が何らかの貝塚を伴い、7箇所の大規模貝塚があり、市内では最も遺跡・貝塚の多い地域といえる。

祇園原貝塚は、市原市の中央を流れる養老川に沿って南東から東京湾に向かって張り出す標高27m前後の舌状台地の一つで、谷入口部から約1.2kmほど奥まった台地西側縁辺部に形成されている(第2図)。この谷筋より1本村田川寄りの谷筋には、祇園原貝塚の東約0.8kmに後期前葉の山田橋・亥の海道貝塚(20)・南東約1.3kmに中期末～晩期の西広貝塚(22)・南東約1.8kmに中～後期の山倉貝塚(23)・南東約2.7kmに中・後期の山倉・堂谷、天王貝塚（28・29）が、さらに数本村田川寄りの谷筋には東約2.6kmに中期末～晩期の能満・上小貝塚（13)・東約3kmに中期後葉の小田部・烏掘込貝塚（16)・南東約4.2kmに後期の勝間・武士遺跡（12）がある。

また、弥生時代以降の遺跡例では、祇園原貝塚の南西0.8kmには五領式期の住居跡100軒余りが検出された蛇谷遺跡（上総国分寺台遺跡調査団　蛇谷遺跡　上総国分寺台遺跡調査報告Ⅳ　1977）や、同じく西方1kmの台遺跡では弥生・土師合せておよそ600軒にのぼる住居跡が検出されるなど大規模な遺跡もある。また、宮ノ台式期の豊富な資料の発見された遺跡として祇園原貝塚の北東4kmには大厩遺跡（千葉県都市公社　市原市大厩遺跡　1974）あるいはその西側には菊間遺跡（千葉県都市公社　市原市菊間遺跡　1974）などをみることができる。

第１表　市原市内縄文時代主要遺跡一覧

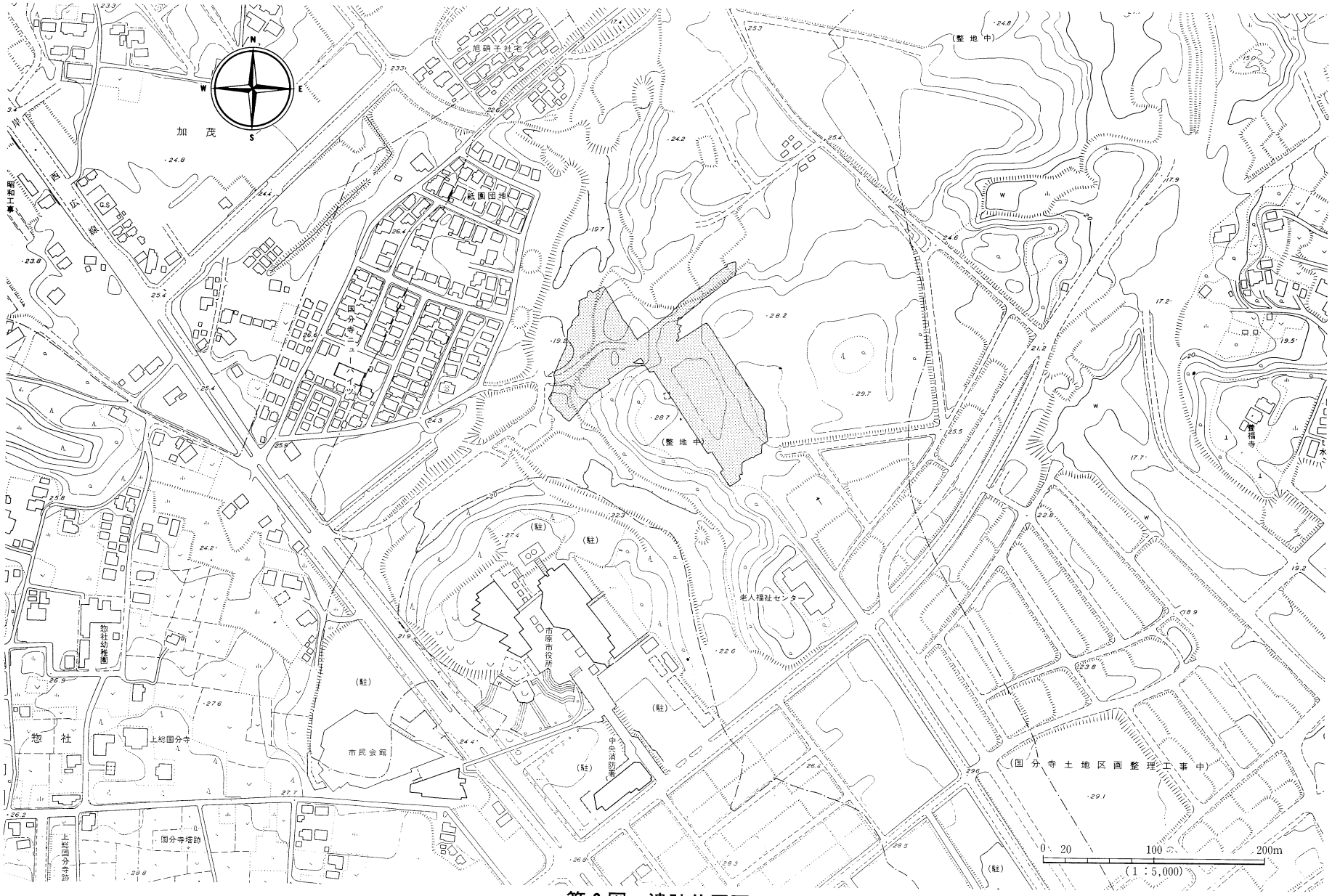
No.	遺跡名	よみがな	所在地	時期	貝塚の有無・時期・規模			市遺跡台帳番号	調査年度	文献	備考
1	実信	さねのぶ	菊間字実信860	中～後	○	中～後	大	―	H2	1	
2	手永	てなが	菊間字北野谷貝塚台2162番地	後～晩	○	後	大	918	S46・58	2	
3	草刈	くさかり	草刈字下切付	中	○	中	大	979	S55・56	3・4	別名「下切付貝塚」
4	中横峰・鎌之助	なかよこみね・かまのすけ	潤井戸143-3他	後	○	後	小	841	H8～10	5	
5	下鈴野	しもすずの	潤井戸字清水谷1684他	早・中	○	中	小	831	S60	6	
6	多竜台	たりゅうだい	喜多字多竜台	中～後？	○	中～後?	大	850	―		
7	西鹿ノ原	にしかんはら	番場字鹿ノ原	中?	○	中	小	974	―		貝塚2地点
8	大仏台	だいぶつだい	奈良字屋敷台586番地他	中	×			888	H1	7	
9	新地	あらち	小田部208・荻作967他	早・中	×			783	S58	8	
10	小谷吹上	こやつふきあげ	小田部字小谷吹上	中	○	中	小	638	S52		
11	文作	ぶんさく	葉木字分作325番地	前・中	×			651-1	S62	9	
12	武士	たけし	勝間字土器石	後	○	後	小	592	S62～H1	10	別名「土器石貝塚」
13	上小貝塚	かみこかいづか	能満字上小貝塚1926-15他	中～晩	○	中～後	小	780	H1・H4	11・12	
14	分区	ぶんく	能満2106他	中～後？	○	中～後？	大	781	H1	13	
15	小田部	おだっぺ	小田部字打越台	中～後？	○	中～後？	小	782	―		畑内に貝塚2地点
16	鳥掘込	からすほっこみ	能満字上味噌棚2133-1地先他	中	○	中	小	981	S60	14	貝塚5地点
17	門前	もんぜん	門前一丁目	中～後？	○	中～後？	大	811	―		社宅裏　馬蹄形貝塚ほぼ消滅
18	千草山	ちぐさやま	能満字東千草山1476地先他	早・中	×			775	S50・51・60	15・16	
19	上大堀	かみおおぼり	能満字上大堀1531-171他	中～後	×			777	S59	17	
20	亥の海道	いのかいどう	山田橋字表通173-1番地	後	○	後	小	737	H3	18	国道を挟んで貝塚2地点
21	大塚台・大山台	おおつかだい・おおやまだい	山田橋字大田365番地他・340-1他・336他、山田橋332他	早・中	○	中	小	769	H5・7～9	19・20	
22	西広	さいひろ	西広字上ノ原	中～晩	○	後～晩	大	759	S47～48・55～59・61	21	1～7次調査
23	山倉	やまくら	山倉字南貝塚	中～後	○	中～後	大	625	S43	22	「こどもの国」内
24	祇園原	ぎおんばら	根田字祇園原	早・後～晩	○	後	大	732	S52・53・57・58・H4		1～5次調査
25	南中台	みなみなかだい	惣社字南中ノ台	後？	○	後？	小	754	―		
26	諏訪台	すわだい	村上字諏訪台	早・前	○	早	小	760	S60～63	23	
27	東間部多	とうかんべた	西広字東間部多	早	×			756	S47	24	
28	堂谷	どうやつ	山倉字堂谷	中	○	中	大	624	H1	25	
29	天王	てんのう	山倉字西猿子谷	後	○	後	大	623	H1	25	
30	山ノ神	やまのかみ	福増字山ノ神261番地他	早	×			586	S63	26	
31	北旭台	きたあさひだい	磯ヶ谷字北旭台87-2番地他	早・前	×			553	S63	27	
32	南障子	みなみしょうじ	川在字南障子	後	×			491	H3	28	
33	上原台	うえはらだい	奉免字上原台1130地先他	早・前・中	×			162	S62	29	
34	向ノ岱	むこうのたい	安久谷字向ノ岱174-1・180	前	×			188	H2	30	
35	南総中学	なんそうちゅうがく	江子田字上原台	前・中	×			188	S46・47	31	
36	下中台	しもなかだい	椎津字下中台	早？	○	早？	小	295	―		貝塚2地点
37	茶ノ木	ちゃのき	椎津545	後	×			312	H2	32	
38	妙経寺	みょうきょうじ	姉崎453・454番地1	中	○	中	大	324	H7・9	33	
39	台	だい	姉崎字台	後？	○	後	大	978	―		別名「鬼子母神貝塚」 貝塚12地点
40	小谷	こやつ	畑木字小谷・向・他	早	×			352	H9	34	
41	片又木	かたまたぎ	不入斗地先	早	×			255	S58	35	
42	諸久蔵	もろくぞう	海保字諸久蔵	中～晩？	○	中～晩？	大	270	―		
43	大道	だいどう	今富大道1055-1他	早	×			275	S61	36	
44	分目	わんめ	宮原字布谷台・分目字堂谷	後？	○	後？	大	436	H4	37	貝塚2地点
45	瓜ヶ岱	うりがたい	高坂字北瓜岱	後？	○	後？	大	505	―		貝塚3地点
46	山見塚	やまみづか	立野字山見塚306-1番地他	後	○	後	小	279	S60	38	別名「太田法師貝塚」
47	外迎山	そとむかいやま	風戸字入口ノ沢1163番地他	早	×			283	S60	38	
48	瀬戸崎	せとざき	深城字瀬戸崎他	後？	○	後？	大	214	―		別名「深城貝塚」 貝塚5地点
49	南原	みなみはら	中高根字南原1382-10	草創	×			220	S53	39・40	
50	南名山	ななやま	中高根字南名山	早・前	×			221	H9	41	
51	上高根	かみたかね	上高根字塚越	中～後？	○	中～後？	小	225	―		貝塚3地点
52	荻原野	おぎわらの	新生荻原野	早・中	○	中		286	H1	42	
53	花和田	はなわだ	新井733・731	早～前	×			59	H1	43・44	
54	道生堀	どうじょうぼり	飯給字原157-1他	後	×			33	H1	45	
55	寺の台	てらのだい	月崎寺の台1096-2	中	×			20	H6	46	

第２表　市原市内縄文時代遺跡関係文献一覧

No.	著者名	書名	収録機関誌名	発行年
1	(財)千葉県文化財センター	市原市条里制遺跡(実信地区)	千葉県文化財センター年報No.16―平成2年度―	1991
2	近藤　敏	菊間手永貝塚	市原市文化財センター年報　昭和57・58年度	1985
3	高橋康男	草刈遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第6集	1985
4	(財)千葉県文化財センター	千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡(B区)		1986
5	小川浩一	潤井戸中横峰遺跡	第12回市原市文化財センター遺跡発表会要旨　平成8年度	1997
6	大村　直	下鈴野遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第16集	1987
7	大村　直	奈良大仏台遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第47集	1992
8	山口直樹	小田部新地遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第4集	1984
9	大村　直	文作遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第30集	1989
10	加納　実	武士遺跡２	(財)千葉県文化財センター調査報告　第322集	1998
11	忍澤成視	能満分区遺跡群	市原市文化財センター年報　平成元年度	1994
12	忍澤成視	市原市能満上小貝塚	(財)市原市文化財センター調査報告書　第55集	1995
13	忍澤成視	能満分区貝塚	市原市文化財センター年報　平成元年度	1994
14	高橋康男	烏掘込貝塚	市原市文化財センター年報　昭和60年度	1986
15	平野元三郎	千草山遺跡		1979
16	田中清美	千草山遺跡・東千草山遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第29集	1989
17	米田耕之助	上大堀遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第17集	1987
18	忍澤成視	市原市亥の海道貝塚	(財)市原市文化財センター調査報告書　第48集	1992
19	半田堅三	山田橋大塚台遺跡	市原市文化財センター年報　平5年度	1997
20	近藤　敏	山田橋大山台遺跡	第13回市原市文化財センター遺跡発表会要旨　平成9年度	1998
21	忍澤成視	縄文時代後・晩期の装飾観念―市原市西広貝塚出土の骨角貝製装身具を中心として―	市原市文化財センター研究紀要Ⅱ	1993
22	山倉貝塚調査団	市原市山倉貝塚調査報告(住居址・遺構編)　―付・山倉貝塚人骨所見概報		1969
23	浅利幸一	諏訪台遺跡	市原市文化財センター年報　昭和63年度	1994
24	上総国分寺遺跡調査団	東間部多古墳群	上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ	1974
25	忍澤成視	山倉天王・堂谷貝塚	市原市文化財センター年報　平成元年度	1994
26	浅利幸一	福増山ノ上遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第33集	1989
27	木對和紀	市原市北旭台遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第39集	1990
28	高橋康男	川在南障子遺跡B地点	平成3年度市原市内遺跡発掘調査報告書	1992
29	田中清美	奉免上原台遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第43集	1992
30	忍澤成視	安久谷向ノ岱遺跡	平成2年度市原市内遺跡発掘調査報告書	1991
31	市原市教育委員会	千葉・南総中学遺跡		1978
32	木對和紀	椎津茶ノ木遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第49集	1992
33	忍澤成視	姉崎妙経寺貝塚	市原市文化財センター年報　平成7年度	1998
34	北見一弘	畑木小谷遺跡	平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告書	1999
35	寺島　博	片又木遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第3集	1984
36	米田耕之助	今富大道遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第26集	1988
37	米田耕之助	宮原布谷台貝塚	市原市文化財センター年報　平成4年度	1996
38	木對和紀	外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第20集	1987
39	大塚達朗・小川静夫・田村隆	市原市南原遺跡第１次調査抄報	伊知波良１	1979
40	大塚達朗・小川静夫・田村隆	市原市南原遺跡第２次調査抄報	伊知波良４	1980
41	小川浩一	中高根南名山遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第61集	1998
42	田中清美	新生荻原野遺跡	(財)市原市文化財センター調査報告書　第59集	1998
43	鈴木英啓	新井花和田遺跡	市原市文化財センター年報　昭和59年度	1985
44	忍澤成視	花和田遺跡(第２次調査)	市原市文化財センター年報　平成元年度	1994
45	大村　直	道生堀遺跡	市原市文化財センター年報　平成元年度	1994
46	半田堅三	月崎寺の台遺跡	市原市文化財センター年報　平成6年度	1997

第3表　市原市内縄文時代主要遺跡の分類

時期	型式名	村田川流域	養老川下流右岸(市原台地上)	養老川下流左岸(姉崎地区)	養老川中流左岸	養老川中流右岸	養老川上流域
草創期	豆粒文土器 隆線文系土器 爪形文土器 多縄文系土器 表裏縄文土器(大谷寺Ⅲ)				49 中高根・南原遺跡		
早期	(撚糸文系土器) 井草Ⅰ 井草Ⅱ 夏島 稲荷台 花輪台	5 潤井戸・下飯野遺跡			52 新生・荻原野遺跡		
	(沈線文系土器) 三戸 田戸下層 田戸上層		18 能満・千草山遺跡		52 新生・荻原野遺跡	33 拳免・上原台遺跡	
	(条痕文系土器) 子母口 野島 鵜ヶ島台 茅山下層 茅山上層		9 小田部・新地遺跡　18 能満・千草山遺跡　27 西広・東間部多遺跡　30 福増・山ノ神遺跡 26 村上・諏訪台遺跡	40 畑木・小谷遺跡　41 不入斗・片又木遺跡	43 今富・大道遺跡　47 風戸・外迎山遺跡　50 南高根・南名山遺跡　52 新生・荻原野遺跡	33 拳免・上原台遺跡 31 磯ヶ谷・北旭台遺跡	53 新井・花和田遺跡
前期	花積下層 関山Ⅰ(二ツ木) 関山Ⅱ 黒浜(植房) 諸磯a　浮島Ⅰ 諸磯b　浮島Ⅱ 諸磯c　浮島Ⅲ 十三菩提　興津		26 村上・諏訪台遺跡 11 葉木・文作遺跡		50 南高根・南名山遺跡	31 磯ヶ谷・北旭台遺跡 33 拳免・上原台遺跡　35 南総中学遺跡 34 安久谷・向ノ岱遺跡 31 磯ヶ谷・北旭台遺跡	
中期	五領ヶ台Ⅰ　下小野 五領ヶ台Ⅱ 勝坂1　阿玉台Ⅰa　阿玉台Ⅰb　阿玉台Ⅱ 勝坂2　阿玉台Ⅲ 勝坂3　阿玉台Ⅳ 中峠 加曽利EⅠ 加曽利EⅡ 加曽利EⅢ 加曽利EⅣ	3 草刈遺跡　5 潤井戸・下飯野遺跡　8 奈良・大仏台遺跡	9 小田部・新地遺跡　(28 山倉・堂谷貝塚) 11 葉木・文作遺跡　16 小田部・小谷吹上遺跡　18 能満・千草山遺跡 16 小田部・鳥獲込貝塚　19 能満・上大堀遺跡 23 山倉貝塚	38 姉崎・妙経寺貝塚	52 新生・荻原野遺跡	35 南総中学遺跡 33 拳免・上原台遺跡	55 月崎・寺の台遺跡
後期	称名寺 堀之内1 堀之内2 加曽利B1 加曽利B2 加曽利B3 曽谷 安行1 安行2	4 潤井戸・中横峰遺跡・鍋之助遺跡 2 菊間・手永貝塚	12 勝間・武士遺跡　20 山田橋・玄の海道貝塚 13 能満・上小貝塚　22 西広貝塚　24 根田・祇園原貝塚　(29 山倉・天王貝塚)	37 椎津・茶ノ木遺跡	46 立野・山見塚貝塚	32 川在・南障子遺跡	54 飯給・道生堀遺跡
晩期	安行3a 安行3b(姥山2式) 安行3c 前浦・安行3d 千網 荒海		13 能満・上小貝塚　22 西広貝塚 12 勝間・武士遺跡　22 西広貝塚				


N
W
E
S
加茂
旭硝子社宅
(整地中)
祇園団地
国分寺ニュータウン
(整地中)
(駐)
市原市役所
老人福祉センター
惣社幼稚園
惣社
上総国分寺
市民会館
中央消防署
国分寺塔跡
上総国分寺跡
(国分寺土地区画整理工事中)
0 20 100 200m
(1:5,000)

第2図　遺跡位置図

3　調査の方法と概要

調査方法

1・2次調査と3・4次調査では方眼線の基準の設定方法に違いがある。すなわち3・4次調査では国土方眼座標を基準とするが、1・2次調査ではこれに従っていない。また最小グリッドも、1・2次調査では4m、3・4次調査では3mとしている。本報告に際してこれらを統一することは、色々な面で不都合が生ずるとみられたため、各調査次の方法を踏襲することとした（第4図）。

1・2次調査では、方眼線の基準については、予定される道路の中央線に合わせることにした。方眼は、大区画として40mを一辺とすることにし、更に40m四方を縦・横10等分して、4mを一辺とする100小区画に分割した。区画名称は、道路に沿った軸を北側からA～Fとし、これに直交する軸を西から1～5とし、最小区画は西北の隅を「01」として平行式に02・03・04…とし最後の南東隅の100を「00」とすることにした。最小区画の名称は例えば、B3－64といった記号で表現することになる。層位発掘を行い、各層の最下面の水準高を出す。最小の4m区画の四周は全て壁として残し、断面図を作成する。出土遺物のうち、土器口縁部・底部、石器、土製品は全て実測し、出土地点と水準高を明確にする。

3次調査では、調査区は、貝層を伴うという特殊な性格をもつ遺跡のため緻密な調査方法が要求されている。したがって貝層部の調査と貝層の伴わない地点における調査方法を若干変えた。

まず調査区の設定にあたっては、対象区域が南北に細長く、長軸が約45°西に傾いているため、当初第1次調査で実施した調査区に沿ったグリッド設定を策定した。しかし、少なくとも国分尼寺々域内に占地し、すでに尼寺調査時において国土方眼座標を基準とする30×30m方眼の大地区割りが設定されており、精度の高さの点からも新たにポイントを打ち直す必要はないと考え、30m方眼をそのまま踏襲することとした。なお当該地区は尼寺の南西部にあたり、東西軸であるR・S・T・U・V区ならびに南北軸であるH・I・J区が区域に入る。この30m平方の方眼の中をさらに3×3mの小区に分割した。これを基本グリッドにして北西隅を基点に南北軸に沿って番号を表示した。すなわち、北西隅を01としてここから南へ02・03・04と呼称し、最後の南東隅を00とした。最小区画の名称は例えば、TI－64といった記号で表現することになる。

貝層の伴わないグリッドについては、この3m小区を各層ごとに掘りすすめた。そして表土層より小片に至るすべての人工遺物・自然遺物・遺構を記録にとどめた。まず出土遺物の表示は、1/20を基本にその位置を図示し、必要に応じ縮尺を変え実測していくこととした。さらに出土地点の標高測定（遺物台帳に記載）、写真撮影を実施する。これらの作業は、単に包含層にとどまらず遺構内における出土遺物に対しても行うことにした（但し、51号住居については別項にて説明してある）。

貝層部については、3m小区をさらに50×50cmの小グリッドに分割し、必要に応じ25×25cmの極小グリッドを設け、層位ごとに掘りすすめると同時に1/10を基本に平面図を作成し、遺物・貝の位置を図示する。なお掘り上げた貝類についてはすべて採集することとした。

また一般のグリッドについては、3mの東西・南北のセクションを実測し、写真撮影を行い、貝層部については50cmごとにセクションを実測する。

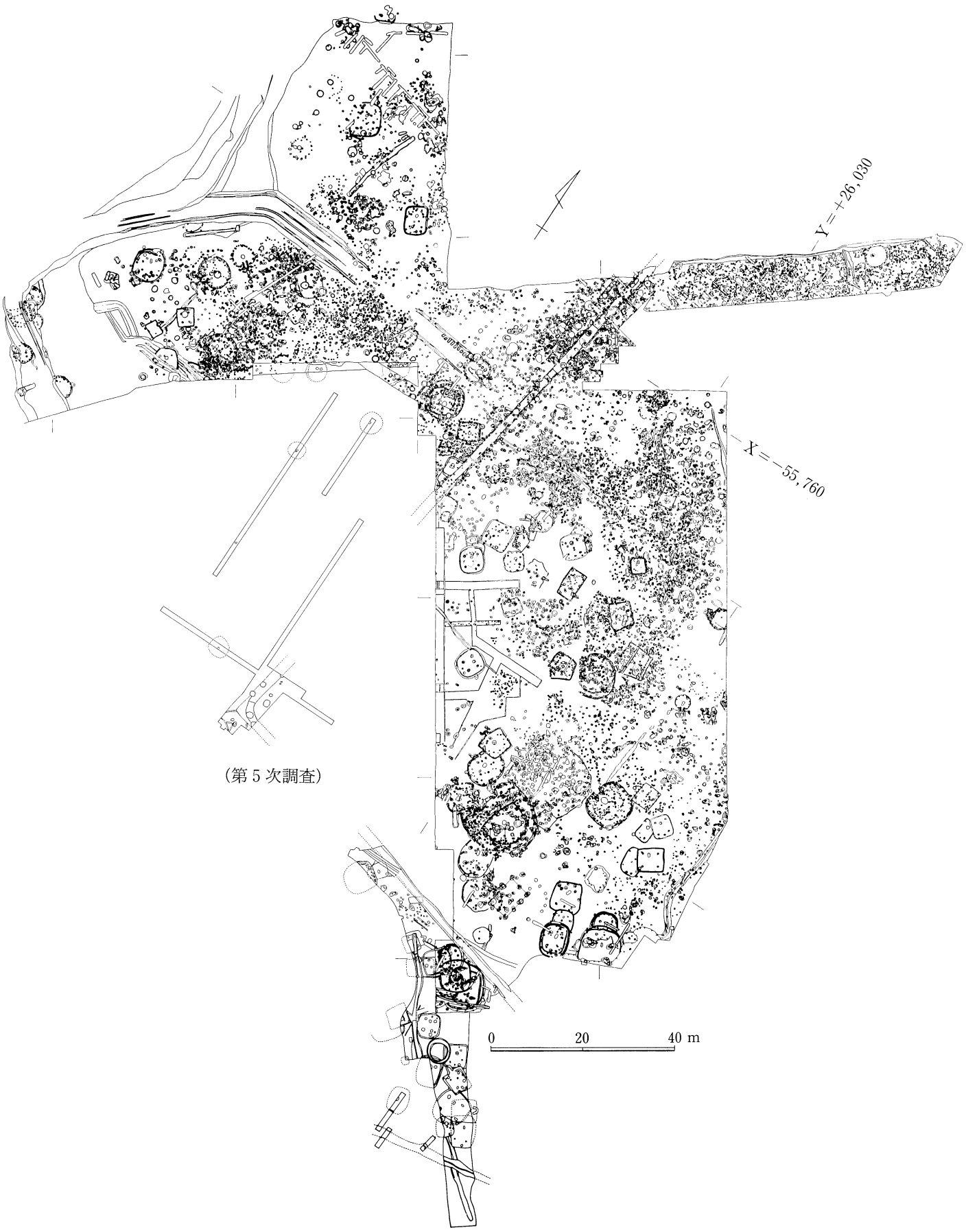
4次調査では、国土方眼座標を基準とする30×30m方眼の大地区割りの中をさらに3×3mの小区

に分割した。これを基本グリッドにして北西隅を基点に東西軸に沿って番号を表示した。すなわち、北西隅を01としてここから東へ02・03・04と呼称し、最後の南東隅を00とした。最小区画の名称は例えば、ＱＩ－64といった記号で表現することになる。

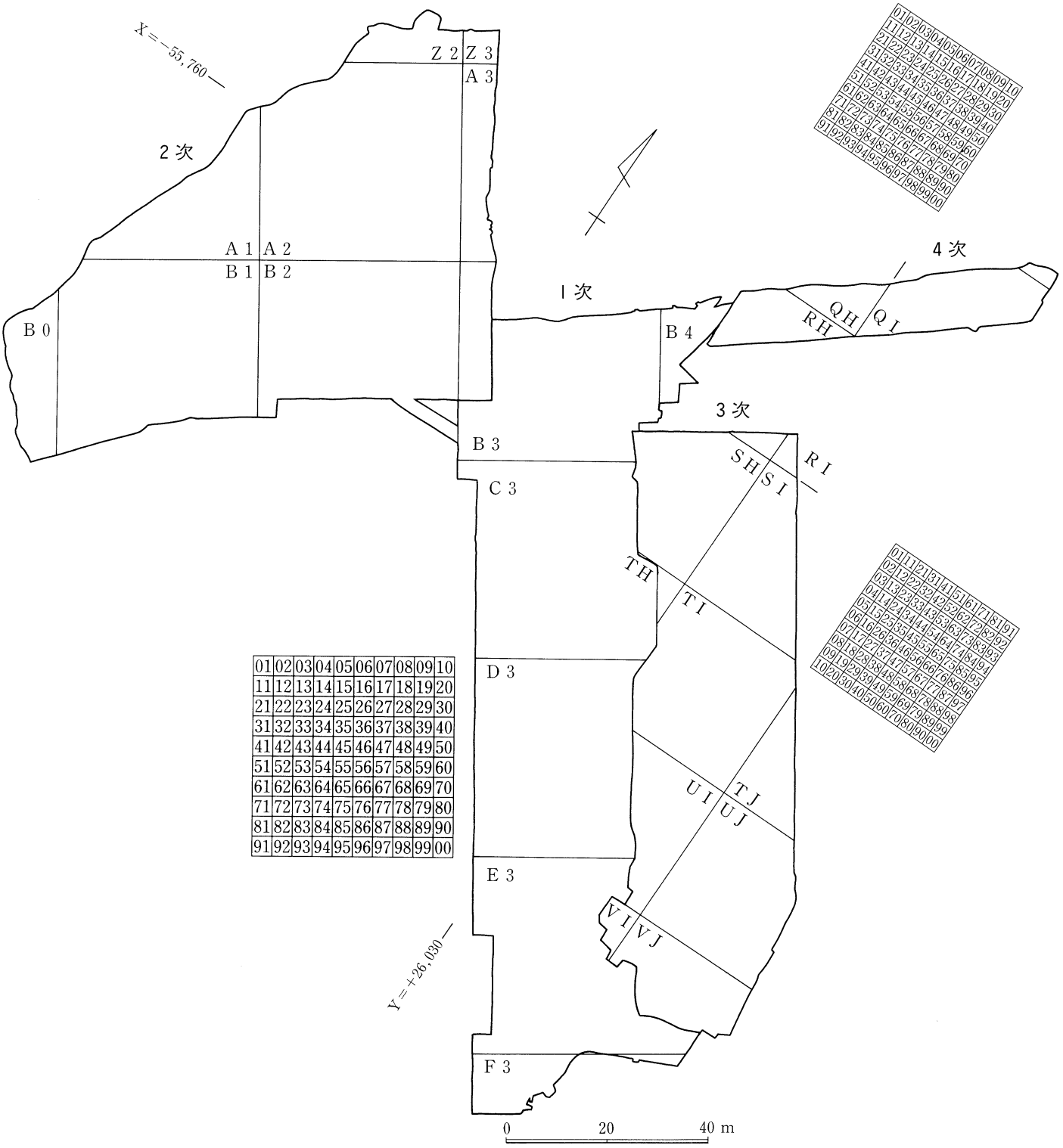
調査概要

調査の結果検出された遺構は、縄文時代後～晩期の住居51軒・土坑369基（早期の炉穴を含む）・埋設土器18・道路状遺構１・その他の遺構４、弥生時代中期を主とする住居40軒・土坑３基・溝１条、古墳時代前期の住居３軒、奈良・平安時代の住居10軒・掘立柱建物１棟・瓦窯１基・上総国分尼寺関連の溝・門などである。遺物としては、遺構や包含層中より各時代の多量な土器、縄文時代を中心とする土製品890点・石器8,642点が出土している。遺物総量は、テンバコ約3,600箱分に及ぶ。

貝塚は、住居や土坑の覆土中に形成された比較的密度の高い貝層と、遺構外に分布する密度の低い貝層とで構成されるが、概して厚い堆積ではない。弥生時代以降とくに上総国分尼寺造営に際して、部分的に移動ないしは除去されている可能性が高く、全体の形状としては、遺跡中央付近に位置する凹地状の地形（いわゆる中央広場）をとりまくように展開する、集落の周辺に環状ないし馬蹄形に形成された大規模貝塚の様相を呈していたとみられる。貝塚の形成時期は、縄文時代後期全般にわたるもので、このうち形成時期が明確で堆積状況の良好な79箇所532地点の貝層サンプルを分析した（フルイ水洗後の貝層サンプル総量は、テンバコ約1,650箱分に及ぶ）。この結果、貝類・魚類・獣類・植物などの遺存体を多量に検出し、これらの時期・地点による相違点を明らかにした。また、貝層中からは294点の骨角貝製品を検出し、貝層中・貝層下からは75地点（このうち土坑内複数人骨埋葬が４例、土器棺内幼児埋葬が６例みられる）・112体の埋葬人骨、埋葬犬１体が検出された。



第3図　遺跡全体図



第 4 図　調査区グリッド配置図

II　縄文時代の遺構と遺物

1　住　居

本遺跡から検出された縄文時代の住居は、第４表に示すように51軒を数える。このうち、発掘調査時点では住居として認識されていなかったが、炉の存在や柱穴の配列から住居と認定したものが４軒（４・16・17・18号）含まれている。また、形態や規模から住居には分類できず、土坑ともみなせない遺構が４基ある。覆土内には縄文時代の貝層が形成されているので当該期のものとみなし本章で扱うこととする（52・53・54・55号）。

時期と分布状況

第５図に検出された縄文時代の住居の分布を時期別にトーンで区別し示した。出土遺物からみた住居の時期は、称名寺期３・堀之内期17・加曽利Ｂ期12・曽谷期１・安行１・２期５・後～晩期４・不明10である。時期別の分布状況はつぎのとおりである。称名寺期は２次調査Ａ２区の標高25.75mの台地縁辺部に１軒・１次調査Ｂ３区標高25.5～25.75mの台地縁辺部に１軒・３次調査ＳＩ・ＴＩ区の標高26.75mの台地縁辺部に１軒みられるのみで散在的なありかたである。堀之内１・２期は、２次調査Ｂ０区の標高20.5～21.0mの斜面部に６軒・Ｂ１・Ｂ２区の標高24.5～25.5mの緩斜面部に６軒・１次調査Ｂ３区の標高26.0mの台地縁辺部に１軒・４次調査QI区の標高25.5～25.75mの台地平坦部に１軒・３次調査ＳＩ区の標高26.5mの台地緩斜面部に１軒・ＴＩ・ＴＪ区の標高26.75mの台地平坦部に２軒みられ、調査区のほぼ中央に位置する凹状の地形に対しかなり距離をおいた外周に分布する。加曽利Ｂ期は、１次調査Ｄ３・Ｄ４区の標高26.5～26.75mの台地縁辺部から緩斜面部に２軒・３次調査ＳＨ・ＳＩ・ＴＩ・ＵＩ区の標高26.25～26.75mの台地縁辺部から緩斜面部に９軒・ＵＩ・ＵＪ区の標高26.75mの台地平坦部に１軒みられ、調査区のほぼ中央に位置する凹状の地形に対し堀之内期よりも内側に近づく分布状況を示す。曽谷・安行１・２期は、１次調査Ｄ３区の標高25.75～26.5mの緩斜面部に３軒・３次調査ＴＩ区の標高26.5～26.75mの台地縁辺部から緩斜面部に２軒みられ、加曽利Ｂ期よりもさらに凹状の地形に近づく分布状況を示す。後期末～晩期初頭の時期は、１次調査Ｂ３・Ｃ３区の標高26.0mの台地縁辺部に２軒・３次調査ＴＩ区の標高26.5mの緩斜面部に１軒みられ、安行１・２期と同レベルかさらに凹状の地形に近づく分布状況を示す。

規　模

住居規模が計測可能な遺構の、時期別の長軸の計測値をみると、称名寺期は最小4.7m（２号）・最大6.7m（24号）・平均5.7m、堀之内期は最小3.8m（45号）・最大8.6m（19号）・平均5.4m、加曽利Ｂ期は最小4.4m（31号）・最大18.2m（50号）・平均8.3m（50号を除いた平均値は6.8m）、安行期は最小5.5m（44号）・最大7.6m（43号）・平均6.4m、後～晩期は最小5.2m（26号）・最大9.8m（25号）・平均7.6mとなる。

住居付属施設

住居付属施設として出入口部に土坑を有するものが９例あり、時期的には称名寺期２・堀之内期７となる。

覆　土

住居覆土中に貝層の形成が認められるものが小規模なものを含め住居総数の41％にあたる21例ある。柱穴・炉・土坑覆土中に貝層を形成するものがあり、住居本体の覆土に形成されるものはほとんどが床面直上ではなく何らかの間層を挟んで上部に形成されたものである。

床面直上から炭化物もしくは焼土が検出されたものが２例(40・43号)、また壁際を中心に焼土ブロックが検出されたものが３例（47・49Ａ・51Ａ号）みられるが、いずれも加曽利Ｂから安行１・２期の事例である。

特徴的な遺物

住居から出土した遺物のうち注目すべき出土状況を示すものをあげる。住居の付属施設とみられる出入口部土坑覆土中よりイノシシの下顎骨左右１対が検出された例（２号）・３点の同形態の滑石製垂飾が検出された例（７号）・ミニチュア形土器が検出された例（８号)、床面付近から異形土器が検出された例（49Ａ・49Ｂ号）・香炉形土器が検出された例（41号）・器形復元可能な多量の土器が検出された例（50号)、柱穴内から完形の台付土器が検出された例（25号)、覆土中から多量のコア・フレークがまとまって出土した例（46号)、覆土中から多量の焼獣骨が検出された例（50・51Ｂ)、覆土中から２次焼成を受け発泡した土器片が検出された例（50号）などである。

第４表に示せなかった情報、とくに発掘所見に関わるものなどについて以下番号順に記していくが、住居の残存状況が悪く、覆土や壁面が失われていたりして出土遺物などもなく、表記した以上の情報の得られなかったものについては割愛する。なお、住居の時期を決定する根拠となりうる床面直上もしくは床面付近（床面上10cm以内）の遺物については、住居平面図中に出土地点を示し、実測図中に○を付した数字で区別して示した。土製品、石器・石製品の個別データは、第Ⅵ章２節ｂ・ｃの包含層出土遺物の前に器種ごと遺構ごとに表にまとめ、特徴的な遺物についてはこの章の本文中に触れた。

２号住居（第７図）

本住居は、２次調査区Ａ２－66・75・76より検出されたもので、その北西10mには１号住居がある。後世の削平により、すでに壁部を失っているもので、削平は床面部にまで及んでいる。しかし、ピット及び炉は残されており、住居の形状及びピット内に残された土器などにより、おおよその時期は把握されるものと思う。本住居は図示するように壁下に沿って掘られたピット列により、住居の平面形態は円形を呈していたことが窺われるもので、円形に連なるピット列のピットは、ほとんどが直径20cm、深さ40cm前後を有している。ピット列の南東部には、１対の左右に開くピットが認められるが、これは本住居の入口部におけるピットとして把握されるものであろう。この入口部のピットの外側には、楕円形のピットＢ及びそれに連なる土坑Ｃがある。７号及び８号住居の入口部外側にも土坑が確認されているが、２号住居の場合この土坑は、住居中軸線と若干の傾きを示しているため、住居には伴わない可能性もある。住居の大きさは、短軸すなわち円形ピット列の直径は4.1m、長軸すなわち入口部から炉を結んで住居を左右に二分する線は4.7mである。入口部の土坑までを含めると5.9mを測る。炉は、円形ピット列の中央部より若干入口部に寄っているが、Ｂのピットまでを全体として捉えるならば、住居の真中に位置しているといえよう。大きさは、85cm×75cmほどの楕円形を呈し、床面下に摺り鉢状に掘って作られている。本住居は前述してあるように、床面に至るまで削平されている

ため、住居内充満土壌あるいは床面上にあったであろう遺物は消失しており、住居に伴うと思われる遺物はピット内から検出されたもののみである。第７図に示した４点の土器片の内、１は、住居入口部ピットの内側の楕円形のピットＡの底面より検出されたものであり、他の２～４に示した３点の土器片はＣの土坑よりイノシシの下顎骨左右一対とともに検出されたものである(図版４)。１は、胴部の破片であり、磨消縄文により文様を構成している。３は、口縁部破片であり口唇部に平行して一線を配し、その下に直線な沈線による格子目文を施文している。２・４は同一個体と思われる胴部破片で表面には篦描状沈線による文様が施されている。土器以外には、耳飾１点（５）がある。

以上のように、２号住居は上面部を削り取られているため、ピットのみが残された形となっているが、全体的な形状などは知ることができた。本住居は祇園原貝塚で検出されている他の入口部付住居跡に比較すると小型の部類に属するもので入口部も極めて小さく付設されている。時期的把握についてみると、土器が検出されているのは、Ａのピット及びＣの土坑からであるが、この土坑は当住居とは無関係の可能性もあるので、Ａのピットから出土した土器片１点が重視される。とはいえ、１・２・４いずれも称名寺式期の所産として捉えることができるため、本住居は称名寺式期に位置づけることができる。

６号住居（第12図）

２次調査区Ｂ２－02・03・12・13から検出された。この周辺は削平が激しく、住居覆土および壁面は全て失われていた。ただし柱穴の配列から形態と規模は推定できる。長軸5.0m(入口部土坑を含めると6.2m)・短軸4.8mを測り、東側に入口施設とみられるＬ字および逆Ｌ字形の溝が一対付される。さらにこの入口施設の前面には土坑が付設されている。炉は入口部土坑を含めた中心軸のほぼ中央に位置する。長軸60cmの楕円形を呈し、深さ32cm、覆土には灰が充満している。遺物は住居本体の覆土がほとんどなかった為、１に示す土器片のみであるが、入口部土坑覆土からは２～５の土器片が出土した。住居形態や炉の様子、および出土遺物より堀之内１期の所産と見なしたい。また、コア・フレーク１点も出土している。

７号住居（第13図）

本住居は、２次調査区Ｂ２－01・11より検出されたもので、その北東方には６号住居が、また、南西方には８号住居が本住居と接するようにして存在する。ローム面に対する掘り込みが浅いため、削平により壁面をほとんど残していない現状にあるが、ピットが多く掘られているため、住居の形状を把握することはできる。ほとんどの壁面は残されていないが、住居の東側部においてわずかに13cmほど床面からの立ち上がりをみることができる。この部分においては住居内充満土壌が一部残されていたが、それは茶褐色土層であった。図示するごとく、当住居は壁直下に掘られたと思われるピット列をみることができるものであり、それらは30～50cmの間隔をもって掘り込まれているものであり、ピットは、掘り込み面で25～30cmほどの直径を有し、50～70cmほどの深さが大部分を占めている。これらのピット列をみると、円形に連なったものではなく、北側部においてわずかに直線的となっている。ピット列の南東部には、1対の対称的な左右に開く入口部と思われるピット列がみられる。入口部におけるこれらのピットは図中ｄ～ｄ'、ｅ～ｅ'の断面図にみるように、住居内側より外側に向けて徐々に浅くなるように掘られている。この入口部の更に外側には、細長な土坑がみられる。この土坑は、60cm×130cmほどの長方形の形態を呈するもので、深さ74cmを測る。炉は、入口部の末端と住居最奥部の

ピットとを結ぶ線の中央部に位置している。大きさは94cm×88cm、ほぼ円形を呈し、床面を摺り鉢状に掘り窪めて作られている。覆土上部には貝層を形成する。住居の全体的な大きさは、長軸すなわち奥壁から入口部ピットまでが5.7m、入口部の前に位置する土坑をも含めると７m、短軸すなわち、炉の部分において長軸に直交する線は５mを有している。本住居は前述したように、住居の充満土壌はほとんど残されていないため、これに伴う遺物もほとんど検出されていない状態である。しかし、入口部の前に掘られている土坑からは、４に示した土器が、覆土の上方部から出土している。この土坑覆土には、その中頃に貝層が堆積し、この貝層に被されるように検出されたものである（図版５左上の写真)。土器は底部を欠損し、また上部においても半分ほどを失っているが、残された部分より全体の形状をおおよそ窺うことができる。大きさは、現存部で高さ26cmほどを有するもので、口縁部の直径は30cmほどを測る。形態的には上方に向かって開く深鉢形であるが、口唇部には残存するものと同様の突起が幾つか付されるとみられる。突起の下には、図示するように上下2段に渦巻文をそれぞれに施し、渦巻文の左右、渦巻文との間には三角形を基本とする直線な沈線が施されている。これら沈線文の下には地文として縄文が底部近くまで施文されている。全体的に黒色味の強い色調を呈している。この他には、わずかに残存した覆土中より図示したような数点の土器片が出土したのみである。また、入口部土坑覆土上層中より、滑石製の偏平な小型の垂飾３点（１～３）が検出された。

本住居は、上面部をほとんど消失しており、住居内の充満土壌がほとんど残されていなかったため、出土遺物は非常に少量であった。しかし、住居自体の形状などについては、残されたピットの配置等により窺うことは容易であった。当住居は全体的なバランスからすると入口部が非常に大きく目立っている。炉は、床面を深く摺り鉢状に掘り窪めて作られており、縄文時代後期初頭の炉形態をみせている。時間的な把握については、入口部前方に位置する土坑内より検出された土器（４）をもって堀之内１式としたい。柱穴覆土内には見られなかったが、炉と入口部土坑の覆土中には貝層（４号）の形成があり、覆土本体が削平されていなければこの部分にも貝層が存在した可能性はある。

８号住居（第14・15図）

本住居は、２次調査区Ｂ１－19・20・28・29・30から検出されたもので、その北東側には接するようにして７号住居がある。また、南東部で９号住居と一部重複している。大きさは、長軸8.1m(入口部土坑を含めると9.5m）・短軸7.2mほどを有している。形状を見ると、入口部を付設している辺は直線的になり、他の部分すなわち側壁から奥壁にかけては曲線的、円形に近い形状を呈している。本住居は、この周辺の同時期の住居がほとんど住居内充満土壌を残していないのに比べ、掘り込みも深く、住居内には充満土壌の堆積をみることができる。土壌の堆積状態は、まず、壁から床面にかけてローム粒子を混入する暗褐色土層（１）が最厚部で30cmほど堆積した後に、同じくローム粒子を混入する褐色土層（２）が住居内を充填する形となっている。壁は、奥壁で高さ30cmを有し、側壁部では右側において38cmほどを測るが、左側では削平されほとんど残されていない。また、前壁部は20cm前後をみる。壁面は、住居がハードローム層を掘り込んで形成されているため、良く残され、垂直的な立ち上がりをみせている。壁下には、壁に沿って直径15～35cm、深さ15～90cmほどのピットが列状に並んでいる。このピットは深さにかなりの差がみられるが、50cm前後が多くある。また、所謂主柱穴と呼ばれるピットはみることができないが、居住区のほぼ中央、すなわち炉より奥壁方へ70cmほどの所に、掘り込み部で45cm×35cm、深さ90cmを有するピットがあるが、このピットが居住区のほぼ中央

部に位置し、大きく、深さも十分にあるところから、１本柱による主柱穴と考えて良いものと思われる。入口部は図を見ても明らかなように非常に大きく作られ、最大幅は、居住区の幅に近いほどの広がりをみせている。また、入口部の掘り込みは、他の住居においても同様であるが、溝状に掘られたものではなく、小ピットを連続させ溝状にしたものである。入口部の掘り込みは、ｆ～ｆ’、ｃ～ｃ’、ｄ～ｄ’、ｅ～ｅ’の断面図で示した。図示するように明らかに左右対称的に掘られていることがわかる。入口部の前には、２・７号住居にみられたと同様に一つの土坑が付設されている。この土坑は住居に対して横長な長方形であり、大きさは195cm×122cmを有し、深さ90cmを計る。この土坑中からは、北西の壁際の底面直上よりミニチュア土器が１点出土している(第14図－１)。胴部に若干の括れを有する深鉢形で、口径推定5.7cm・胴部最大幅6.0cm・底径3.0cm・高さ8.6cmを測る。黒味の強い色調を呈す。炉は、中軸線上の入口部から奥壁までの中央部に位置し、94×88cmのほぼ円形を呈している。床面部は全体に良く踏み固められ平坦であるが、奥壁部から入口部にかけて若干の傾斜を持って入口部の方が下がっている。また、炉の東側部に直径1.5m、深さ20cmほどの71号土坑があるが、これはその充満土壌上に当住居の床面が乗っていることから、時間的には住居より古く位置づけられる。また、本住居には、図版20に見るように入口部上に８号人骨が検出されている。この人骨は入口部のピットが埋没した後に安置されたもので、頭部を東方に向けた伸展葬によるものである。全体的に保存状態は良好であり形状を良く留めている。本住居は非常に大きく、また住居内充満土壌も多く残されていたが、出土遺物は決して多くなく、第15図に掲げたような土器片がほとんどであった。図示した土器片は総て堀之内１式期の所産として把握されるものであろう。いずれも深鉢形土器の破片であるが、全体的に橙褐色を呈したものが多く、器壁は0.7～1.3cmと比較的に厚く、また、胎土内には微石などの混入が顕著であり、ザラつく感じのものが多い。文様的には、地文としての縄文を施し、その上から篦状工具による沈線を直線的あるいは曲線として蕨手状にしたものなど（６・14）が見られる。また、突起状に突出した口縁より懸垂する隆起帯の上に斜めに刻目を付け加えたものがあるが(５)、これは、口縁部から胴部にかけてある文様部と底部との区画にも用いられている（17・20・21)。

本住居は、今回の調査において検出された同時期に位置づけられる入口を付設した住居に比較すると、大型の部類に入る住居であり、入口部においてもその規模の大きさが目につくものである。それに伴って入口部前に作られた土坑も大きくなっている。入口部の形態では、他の住居と比べると、断面図ｆ～ｆ’で示した部分のピットが他には見られないものである。また本住居の時期は、第15図に示した土器をもって堀之内１式期として把握される。

９号住居（第14・15図）

８号住居の南東部分と一部重複するかたちで検出されている。壁や床はなく、柱穴の配列と炉の存在から住居と認定した。住居南側に入口部分とみられるややハの字形に開く一対のピットを有し、この間に小規模な土坑が付設される。大きさは、長軸が4.9m（入口部土坑を含めると5.2m）・短軸が4.7mである。１次調査以前の上総国分尼寺の確認調査の際に、８・９号住居の南半部に東西方向のトレンチがいれられ、９号住居の炉の一部が確認されている。炉は８号住居の南東部壁上にのる位置で検出されているので、９号住居の方が時期が新しくなる。遺物はこの調査の際炉覆土中から第15図－25～31が出土しており、堀之内１式期の所産とみられ、また奥壁から入口部を通る中心軸が、８号住居とほぼ同一方向を示すことからも、あまり時間差のないうちに作られたものとみられる。

西側斜面部より検出された10～15号住居（第16～22図）

今回の調査では、あまり発掘の行なわれていない斜面部の調査も発掘調査区域内にあるため、斜面を下面の水田部分に至るまで掘り下げることとなったが、それら斜面の内、西側斜面部において、第16・20～22図にみるように住居が検出されている。当地点は、後世によるものと思われる削平により、従来の斜面部がテラス状に変形しているが、一部以前の地形をかろうじて留めている部分もあり、そこに住居が検出されている。本地点では、住居が6軒検出されているが、図をみても明らかなように、住居東側部は壁面が残されているものの、西側部においては、全ての住居において、壁面及び床面を消失している。これらの住居の内、15号住居は単独で存在するが、他の住居はいずれも重複関係を示しているものであり、同一時に6軒の住居が存在した可能性はなく、1～2軒の単位で生活が営まれていたものであろう。住居は、残された部分よりみて、おそらく総てが円形の平面形を有する住居であったと思われ、ほとんどが壁直下にピット列を有している。住居内の覆土はほとんど失われていたが、10号住居では10～30cmほどの厚さで茶褐色土（1）・褐色土（2）の堆積がみられた。また、15号住居では床面上20cmほどの間層を挟み上面に貝層（17号）の堆積をみている。出土遺物は各々あまり多くないが(第17～22図)、堀之内式期の所産として把握される土器片が検出されていることや、壁直下に壁に沿ってピット列の掘り込まれているといった特徴などからみて、これら6軒の住居はいずれも堀之内式期に位置づけることができる。なお、今回の発掘調査において検出された堀之内式期に位置づけられる住居にはほとんど入口部が付設されていたが、このような入口部的施設は、これら10～15号住居には残されていなかった。当然、これらの住居にも入口部の付設されていた可能性は強く残るものであり、もし入口部があったとすれば、それは西側つまり谷面に向かって付けられていたものと想像される。また、15号住居の西側、水田面との比高3.5mの地点に瓦窯（12号遺構）が検出されている。

19号住居（第24～27図）

2次調査区B1－59・60・69・70から検出された。長軸8.6m（推定）・短軸7.4mを測る。出入口部ピットを南側の斜面方向に向ける(第24図)。ただし、この部分はピットの重複が最も激しく、明確にその構造を把握できない。炉は3ないし4箇所存在するので、微妙に出入口部の方向を変えたものが幾つか存在するとみられる。また、出入口部付近で後述する20号住居と重複しているため、壁面は北側のみで検出される。覆土中には10cmほどの間層を挟んで上部に貝層（11号）が形成される。炉の覆土中には灰の堆積が顕著である。東の壁際床面直上から13号人骨が検出されているが、貝層の外部ということもあり保存状態は悪い。第25～27図に示すように堀之内1式を主体とする土器片が出土しており、当該期の所産とみられる。また、土器片錘1（74）・有溝土錘1（76）・コア・フレーク1・打製石斧1（75）が出土している。

20号住居（第24・28・29図）

2次調査区B1－69・70・79・80から検出された。出入口方向が調査区外になるため、長軸方向が計測できないが、短軸は6.7mを測る。壁面は北側の一部のみ検出された。この部分で19号住居を切り込んでいる（第24図)。床面は暗褐色土（0）上にロームを貼床してつくられており、この上にローム粒を含む暗褐色土（1）・ローム粒を含む褐色土（2）が堆積する。覆土中には若干の破砕貝が含まれており、部分的に小規模なブロック状の貝層（12号）もみられる。炉は大小数基存在し、多くが重複

しており、また柱穴も床面があまり見えない程に数多くあり、何度かの建て替えが予想される。炉の覆土中には灰の堆積が顕著である。第28・29図に示すように堀之内１式を主体とする土器片が出土しており、当該期の所産とみられる。また、土製円盤２(39・40)・コア・フレーク１・打製石斧１(41)・石皿２（42・43）が出土している。

21号住居（第９図）

２次調査区Ｂ２－63より検出された。南東側半分は調査区外となる。壁際の柱穴の並びから、直径4.5mほどの円形の形態を想定できる。中央部にロームによる貼床が認められる。この箇所は、南北に入る幅の狭い谷状地形の斜面部にあたり、堆積土層と遺構との関係が注目される。遺構は、谷部包含層の調査後に確認されたもので、遺物からは遺構の時期を確定できなかった。第９図の断面によると、本住居は基本層序Ⅴ層の黒褐色土中に作られているが掘り込み面は明らかでない。この上部には基本層序Ⅳ層の茶褐色土層を掘り込んでもう１軒の住居があるようで、覆土中層には貝層が形成される。さらに上部には面的に広がる安行期の16号貝層が形成される。

24号住居（第32図）

１次調査Ｂ３－63・64・73・74・84から検出された。この付近は削平が激しく、覆土の堆積はほとんどなく壁面も失われ、床面が露呈する状態であった。しかし、柱穴の配列から住居形態の推定は容易である。住居規模は、長軸6.7m（入口土坑を含めると7.8m）・短軸6.2mを測る。入口部に略円形の土坑が２基連結するように付設される。土坑の規模は、住居寄りのものが径164cm（推定）・深さ40cm、もう１基が長軸130cm・短軸100cmの楕円形・深さ92cmで、いずれの覆土にも貝層（20号）が形成される。住居寄りの土坑覆土の最上部には４cmほどの焼土・灰の堆積がみられる。炉は大型で長軸138cmにおよぶ楕円形を呈し、深さ36cm、灰の堆積が顕著である。位置的には、入口部土坑を含めると中心軸のほぼ中央にあたる。柱穴は壁際に径15cmほどのものと径40cmほどのものが混在してめぐる。出入口部にはハの字状に開く連結するピットがみられる。住居本体に覆土の堆積がなかったため、この部分からの出土遺物はないが、入口部土坑覆土からは２～５に示す土器片・磨石（１）が出土した。出土土器より本住居の時期は称名寺期とみなされる。

25号住居（第33～36図）

１次調査区Ｂ３－81・82・83・91・92・93・Ｃ３－02から検出された。住居規模は長軸9.8m・短軸8.7mとやや大型である。壁面は住居の東側と南側ではわずかに残る。柱穴はこの壁際に小型のものがあまり間隔をあけずに並ぶ。住居の南側に出入口施設とみられる100～120cmほどの溝が平行に２列作られる。また、この住居の内側に一回り小規模な長軸8.0m・短軸6.5mを測る方形の平面形を呈するものがみられ、同様に壁際に小型のピットがめぐり同形態の出入口施設とみられる溝がつくられている。２軒の住居は中心軸を変えていない。壁際のピットの内側にも複数の柱穴があり、なかには直径50cm前後・深さ100cmを越える規模の大きなものがある（ａ－ａ’断面)。主柱穴とみられる。遺物は、第34～36図に示したものが出土している。土器は、後期初頭から晩期の前葉までのものがみられるが、後期後葉から晩期前葉のものを主体とする。このうち、58は住居西壁付近のやや大型のピット中から出土した完形の台付土器である。口径16.2cm・底径8.5cm・高さ12.5cmを測る。口唇部には４箇所にＢ突起があり、このうちの一つの下に耳が付いていて横に孔があけられている。口縁部には玉抱き三叉文が８対めぐっており、この下側には沈線に区画された細かい縄文の帯がある。胴の括れ部にも沈線

に区画された細かい縄文の帯がある。さらにその下、胴部下半にも玉抱き三叉文が５対ある。全体に光沢のある黒色を呈し、焼成も良好で薄く焼き上げられている。60は、口径推定5.8cm・胴部径推定16.7cmを測る注口土器の破片である。色調は黒色を呈する。土器以外では、耳飾２(66・67)・土偶１(65)・石鏃２（69・70)・コア・フレーク24・磨石３（74・75・76)・小型磨石１（72・73)・砥石１（77)・石棒・石剣１（71）がみられる。土偶は、内側の住居の西壁際から出土した。

26号住居（第37～40図）

本住居は１次調査に先行する上総国分尼寺寺域確認調査の際に確認され、調査されたものである(第37図)。Ｃ３－03・04・13・14に所在し、25号住居の東に位置する。覆土は全体として竪穴が掘り込んでいる暗黄褐色土と類似しており識別が難しかったが、住居壁際に暗褐色土（２）が、中央部では暗黄褐色土（１）が堆積する。最下部では床面を直接覆う厚さ２～３cm程の薄い黒色土（３）を認めた。これは炉を中心にして径約３ｍの、炉を除く範囲にあったが性格不明。平面形は、4.6×5.0ｍの隅丸方形を呈すが、南東側の一辺は外側に脹れ、入口様の張り出し部を有す。この部分を含めた長軸は5.2ｍを測る。張り出し部は、20～30cmの間を置いて並行に配された長さ約80cm、深さ約40cmの溝とそれに直交する長さ約130cm、深さ約10cmの浅い溝からなる。張り出し部では床面は緩やかに立ち上がる。壁は、ロームを約20cm程掘り込んでいる。床面は、あまり硬化していなかった。炉を周る55～70cmの深さを有す5つのピットが主柱穴を構成するものと見られる。この他、10～30cmの小ピットが壁沿いに並ぶ。特に張り出し部の反対側の壁沿いでは規則的な配置を見ることができる。炉は、張り出し部を含めた中軸線上ほぼ中央に位置する。68cm×64cm、15cm程掘り込んでいる。底面は良く焼けていた。遺物出土状況は、床面密着の遺物は無く、覆土の土器も小片が多かった。

１は口縁部破片。縦位の降帯上端に小孔が見られる。裏面にも小孔を挟んで各２本の弧線が施される。13は帯縄文があまり肥厚していない。17は口縁部に薄く縄文が見える。18は三角区画帯が縄文に変化し、その中に沈線が入り込んでいる。20は突起の頂部から裏面にかけて沈線が施される。21は括れ部の推定径約10cmの小形のもの。突起の裏面及びそれに巻き付く隆帯にも沈線が施されている。22も波状を呈す。24は口縁部にも繊細な刻み列が施される。27は口縁がかなり肥厚している。28は刻み列上の貼り瘤が一つ剝落している。29は器面が磨耗している。32は無文の浅鉢。36は下端に三叉文の一部が見られる。磨り消し縄文中の点列状に見えるのは括れ部の屈曲によって生じたものである。37は晩期に主体となるＬＲの縄文を施す。第39図－38は左端に補修孔を有す。39は口縁の内傾する深鉢。推定口径約23cm。40は小形の深鉢、推定口径約14cm。隆帯部に刻み列を施す。縦位の条線状の調整痕が著しい。41は推定口径約21cm、器高9.5cmの浅鉢。黒色を呈し、滑らかな器面を有す。縄文はＲＬ。42～52は紐線文系の粗製土器。51は太い沈線文を有す。土器片以外の遺物としては、土製円盤５（53～57)・耳飾１（58)・コア・フレーク35（59～61)・小型磨石４（62～65)・石皿１（69)・石棒・石剣３（66～68)・結晶片岩系コア・フレーク１がみられる。

以上に示した如く、本住居出土の主体をなす土器は安行２から３ｂ式期に亘るものであり、本住居の時期は安行２式前後と見て差し支えあるまい。従って、本遺跡において検出された入口様の張り出し部を有する住居中では最も新しい一群に位置づけることができよう。

27号住居（第41～43図）

４次調査区ＱＩ－24・25・34・35から検出された。出入口と考えられる張出部を西に向け、長軸5.6

m（入口部土坑を含めると5.9m）・短軸5.3mの規模をもつ。入口部には小規模な土坑が付設される。壁高は南側で25cm程、東側で30～37cm程であり、西側の出入口とみなされる張出部は、外側へ向って高まっていく。竪穴の北西隅はすでに削平されていたが、壁に沿って廻る柱穴がカットされた面にかろうじて検出できた。柱穴の深さは36.7cm～60.3cmで、竪穴の内側へ向って傾斜しているものがいくつかあった。炉は中軸線上やや入口寄り（西側寄り）にある。直径100cm前後、深さは50cm以上ある。下へいくほどロート状にすぼまり、上半部には白色の灰がつまっていたが、底近くには炭化材が検出された。床面は堅くしまっていて、検出しやすかった。覆土中には貝層（44号）が形成されている。この貝層は大きく上下２層に分かれ、上部貝層と下部貝層の間には、５層とした黒褐色土を主体とした混貝土層が入り、その直下には細かく破砕された貝の層がみられる。上部貝層はハマグリやシオフキなどの二枚貝を主体とする貝層が多く占めたが、下部貝層には8層や10層のようなキサゴの純貝層が目立った。貝層中や上下の貝層の間の黒褐色土層中より出土した土器は堀之内１式がほとんどであった。貝層は上下を合わせるとおおむねレンズ状の堆積状態を示し、住居の中央部では貝層の直下に床面が検出され、竪穴の廃棄と貝層の堆積の始まりの間にはそれほど時間差のないことが考えられる。貝層以外の覆土は、ローム粒を混じえた黒褐色土で、住居の存在を確認できた時点では、住居外の土よりは若干黒っぽい、という程度であった。住居の東側の覆土中から、33の堀之内１式の口縁部の大部分と胴部の 1/3 程を欠く深鉢形土器が出土した。口径推定26.4cm・底径7.5cm・高さ37.0cmを測り、口唇部下2.5cmほどの空白部をおいて横位の連続する条線が、その下胴部上半部に縦位･斜位の連続する条線がみられる。土器の他には、土器片錘１(34)・コア･フレーク１・磨石２(35・36)・凹石(37)・砥石１（38）が出土している。床面上からは住居の時期を明示する遺物は出土していないが、上にのっていた貝層が堀之内1式期であったこと、また住居の形態や炉の状況などからみて、本住居も堀之内１式期のものであると判断できる。

28号住居（第44・51図）

３次調査ＳＨ－42付近から検出された。炉とその周辺の硬化した床面の検出により住居と認定したものである。炉は径90cmほどの円形を呈し、覆土には灰が充満し上部には貝層（49号）の堆積が認められた。住居本体の覆土は全て失われていたが、炉覆土からは第51図１～11に示す土器が出土しており、この遺物からみて加曽利Ｂ期の所産と考えられる。

29号住居（第44～50図）

３次調査区ＳＨ－51・61・71・52・62・72・63から検出された。南側に壁面がわずかに残存するほかは全て失われているが、壁際にめぐるとみられる柱穴から判断して、径7.6mほどの円形の形態を想定できる。住居覆土は、北側では暗褐色土（１）が堆積し、南側では貝層（50号）で満たされている。炉は住居の大きさに比して小さく、長軸60cmほどの楕円形を呈し、覆土には若干の灰と炭化物をみる。遺物は第45～50図に示すように、後期初頭から後期後葉の土器片が出土しているが、加曽利Ｂ期のものが主体を占める。また、炉周辺の床面付近から出土した土器（58・59・61・68・71・75・83・88・89）もいずれもこの時期のものである。土器以外の遺物としては、土器片錘３（102～104）・土製円盤１（105）・コア･フレーク１（106）・軽石製品２（108）・磨製石斧１（107）・磨石･敲石５（109･111～113・115）・凹石１（110）・小型磨石１（114）・石皿２（116・117）がみられる。

3次調査区北半ＳＩ・ＴＩ区検出の住居群（第52～67図）

この区域は第52・58図の広域の遺構分布図を見て判るように、多数のピット群の検出された箇所であり、また貝層や埋葬人骨群の分布域とも重なり遺構の検出は困難を極めた。そのような状況下において、発掘調査時点で検出できた住居は８軒（30～37号）であるが、この他にも柱穴の配列などから住居の可能性が指摘できるものもあると思われるが、確証がないので今回は扱わない。８軒の住居のうち壁面が残されていたものは31号・33号住居である。ただし31号住居は炉が検出されていない。34号住居は壁面が明かにできなかったが、柱穴の配列からおよその形態は推定できた。これ以外の５軒（30・32・35・36・37号）については、炉は検出しているが柱穴の配列からは形態を推定することができなかった。覆土中には31号住居を除く全てに何らかの貝層が形成されていたが、33・34号住居は床面上間層を挟んで上部に比較的規模の大きな貝層が形成されていた。34・35・37号住居の炉の覆土中には顕著な灰の堆積が認められた。つぎに出土遺物について記す。30号住居からは、第53・54図に示すように後期初頭から後葉までの土器を出土しているが、主体は加曽利Ｂ期のものである。土器以外には、コア・フレーク１・軽石製品１（81）・磨石１（80）がみられる。31号住居からは、第55～57図に示すように後期前葉から後葉までの土器を出土しているが、主体は加曽利Ｂ期のものである。土器以外には、土偶１（65）・コア・フレーク３（66）・軽石製品１・打製石斧１（67）・磨石３（68・69・71）・砥石１（70）・結晶片岩系コア・フレーク１がみられる。33号住居からは、第59・60図に示すように後期前葉から中葉までの土器を出土しているが、主体は加曽利Ｂ期のものである。土器以外には、コア・フレーク１・軽石製品１（23）・磨石１（24）がみられる。34号住居からは、第62～64図に示すように後期前葉から中葉までの土器を出土しているが、主体は加曽利Ｂ期のものである。土器以外には、赤彩された耳栓状の耳飾１（51）・コア・フレーク５・磨石３（46・47・49）・小型磨石１（50）・砥石１（48）がみられる。35号住居からは、第65図に示すような土器が出土している。このうち１は炉の南約２ｍの地点から検出された埋設土器である。口径推定21.2cm・底径推定7.0cm・高さ28.7cmを測る。口縁部直下より胴部下半まで、縦位に蛇行する条線文が施される。この土器内部からは２点の同形態のチャート製のコア（８・９）が出土した。37号住居からは、第67図に示すような土器が出土している。このうち８は口径25.4cm・底径8.2cm・高さ28.2cmを測る。口唇部直下より底部付近まで前面に縄文を施す。６は炉覆土中から出土した粗製土器の口縁部破片である。土器以外には、赤彩された耳飾１（９）・軽石製品１・磨製石斧１（10）がみられる。

38号住居（第68図）

３次調査区ＴＩ－91・82・92・83・93から検出された。住居の東端部は調査区外となるため、長軸は計測不能。短軸は4.8ｍを測る。壁面はローム上面では殆ど遺存していないが、貝層の遺存状況から考えて、旧地表面から45cm程の掘り方が存在していたと考えられる。壁際には壁柱穴が連続し西側の出入口部施設へと続き、横長の長方形の土坑を伴う。壁柱穴と出入口施設の状況から僅かに軸をずらしながら数回にわたって建て直しが行われたと考えられる。炉は中心軸よりやや北にずれる位置にみられるが規模は小さい。住居覆土中には床面上間層を挟んで上部に貝層（67号）が形成される。本住居からは１～８に示すような土器が出土している。このうち床面付近から検出されたものは４・６であり、１・３・８が壁際から検出された。６は口径推定34cmを測る、浅い鉢形土器の大型の破片である。

39号住居（第69図）

３次調査区ＴＩ－26・17・27から検出された。後述する40号住居の南西部に位置し、東側壁面が一部重複する。覆土および壁面は全て失われているが、壁際のピット列によって住居形態の推定は可能である。南西方向に出入口施設をもつとみられ、40号住居のそれと同形態の溝状のピットが残存している。長軸5.5m・短軸5.1m、40号よりやや小振りの同形態の平面形を想定している。主軸方向はほぼ同じである。炉は住居のほぼ中央に位置する。遺物としては、炉覆土中からわずかに１に示す土器片が１点出土した。安行１期のものとみられる。

40号住居（第70～72図）

３次調査区のほぼ中央西寄り緩斜面のＴＩ－25・26・27・35・36・37・45・46・47で発見された。南東約３ｍには43号住居が位置している。付近の土層は傾斜面にしては比較的厚く、第Ｉ・II層以下黒褐色土層（第III層）・茶褐色土層（第IV層）の堆積が認められる。調査の経緯は、ＴＩ－25・26・27・67の調査時において第IV層除去後ローム面が露出し、一部薄く焼土・炭化物を混入した黒色土（２）を検出、その広がりが限定されていることから遺構の存在が予想された。しかし該層中からは加曽利B式から安行３ａ式の各型式に亘る土器片が出土しており、しかも周辺グリッドからも多量の土器が検出されていたため、主体となる土器型式やその範囲を捉えられないでいた。しかし住居としての決め手に欠けていたとはいえ、西側のローム面を露出する一方で東側を重点に精査を重ねた。その結果ＴＩ－35・37・45・46・47において暗褐色土（１）の落込みが確認され、この広がりがちょうど四角形を呈し、ここにはじめて住居と判断された。そこで覆土の薄いＴＩ－26を避け、比較的厚いＴＩ－36を中心とする北西－南東向のセクションベルトを設定し、暗褐色土以下を掘り下げ床面および壁・柱穴の検出にとりかかった。同時に西側に露出していたローム面を精査し、改めて壁柱ならびに出入口部の落込みを発掘した。なお出入口部は住居の主軸に沿って二本のセクションベルトを設け調査をすすめた。本住居は奥壁5.2m・左右の壁4.8m・出入口部の付く前面の壁6.4m、出入口部先端から奥壁まで7.5mを測る。正面が若干外側に脹れる、五角形に近い台形の平面形を有する。壁は、ソフトローム上面からの掘り込みが、奥壁部で約20cmの高さで検出された。しかし、ローム層の堆積の傾斜に従い、出入口部付近では検出されていない。主柱穴は四本であり、口径40～50cm・深さ120～140cmの規模を有する。主柱穴の間隔は、奥壁側の二本は約3.1m、出入口側の二本は2.7mで、出入口側が若干狭い。壁柱穴は、床面よりの深さ20～40cmを測り、相互に切り合い、溝状をなす。各辺の中央や、各コーナー付近には若干大きめの柱穴の存在が認められるが、一定の規則性を認めるに至らなかった。出入口部は大小のピットによって構成されており、居住区との接合部が最も深く、外側に向かうに従い浅くなる。接合部では100cm、先端では30cmを測る。また、この出入口部のつけね付近で深さ10～15cmのピット列を検出した。当初間仕切り的な性格を考えたが、39号住居の壁柱穴列の一部であることが後に判明した。当住居に伴う他の柱穴とは覆土の締まりが明らかに異なっていた。炉は地床炉で、ナベ底状を呈し、長径100cm、短径90cm、床面からの掘り込み27cmを測り、中央より若干出入口部寄りに位置する。炉覆土を切開したところ、底面の上に殆ど混入物のない純粋な灰の厚い堆積（13層）があり、これを覆うように焼土粒子を交える灰の層（５層）と、火熱のために炉壁部から崩落したと思われる褐色土に焼土と灰が混入した層（９層）が堆積していることを確認した。撹乱の可能性のある３層は５層上面で止まっており、５層・９層の上面と13層の上面で撹乱が全く無いことを確認してい

る。後述の46・47の注口土器破片は13層中から出土しており、本住居の時期決定資料として申し分無いと考えられた。また炉の灰のサンプルは、以上を確認した際に採取している。床面は全体的に堅固であるが、特に主柱穴を結ぶ線の内側と出入口方向にその傾向が強い。また壁際に比べ炉を中心とした部分は若干窪んでいる。

遺物は、覆土中からは安行２式から安行３ａ式に比定し得る土器が出土している。第71図－39は、平縁の深鉢型土器の口縁部で、帯縄文が三本作出され、原体ＲＬの縄文が横位に施文されている。各段の帯縄文部には瘤が付くが、一段目の瘤と二段目、三段目の瘤とは、明らかな相異を示している。二つの縄文帯の間には枠状の区割が作出されている。38は、平縁の浅鉢で、口唇上には両端に縦長の瘤を持つ、浅く窪めた横位の瘤がつけられ、縦位の刻みを持つ、口唇部の縄文帯の下には縦の刻みを持つ隆帯があり、この二つの間を、二本の弧状線で区画する。37は、大波状縁深鉢の波底部で、隆起帯刻文による三角状区画が見える。以上に挙げた土器は、いずれも縦の刻みを持つ貼瘤や、隆起帯刻文等安行２式の特徴を備えている。40は、口径18.4cmを測る平縁の深鉢で、口唇をはさみこむかのような形で、横長の瘤が五単位貼りつけられる。口縁から頸部にかけては、横方向の浅い条線が施され、陵がけずり出された頸部以下では縦方向の条線となる。安行３ａ式か？。第72図－46・47は、炉覆土内の出土である。いずれも縄文部に、三叉文が刻まれている。おそらくは同一個体と思われる。安行３ａ式であろう。土器以外の遺物としては、土製円盤１（55）・耳飾３（57・58・59）・コア・フレーク35（56）・磨製石斧１（60）・磨石２（63・64）・小型磨石２（61・62）・石皿１（65）がみられる。このうち57は、住居床面付近出土の耳飾で、直径5.3cm、三本一組の沈線が二組ずつ向き合って施文される。58は住居覆土中出土の耳飾で、推定直径7cm前後、直径1mm前後の円形の刺突が円周にそってめぐり、その内側に二つ巴の沈線文様が配される。いずれも安行３ａ式前後の所産と思われる。60の磨製石斧は床面直上より出土している。

本住居からは、安行２式から、安行３ａ式にかけての土器が検出されている。このうち、46・47の土器をもって、本住居の時期を安行３ａ式期としたい。

41号住居（第73～77図）

１次調査区Ｄ３－38・39・48・49から検出された。奥壁4.1m・左右の壁4.5m・出入口部の付く前面の壁6.2m、出入口部先端から奥壁まで6.2mを測る。正面が若干外側に脹れる、五角形に近い台形の平面形を呈する。長軸80cmほどのピットが西側に出入口施設として付設される。壁面は最大40cmほどの高さで残存するが、出入口部施設の南側の辺は失われている。この部分で、主軸の向きを90度ほど南側へ向けた住居が存在し、その壁面の一辺が重複している可能性がある(図版９左上の写真)。炉は住居中心軸のほぼ中央に位置する。柱穴は、壁際にほとんど間隔をあけずに連続する径10～15cm・深さ30cmほどの小型のものと、それより内側住居中心部にみられる径40cm・深さ70cmほどのものとがある（ａ－ａ'・ｂ－ｂ'・ｄ－ｄ'）。覆土は床面上にやや明るい色調の黒褐色土（１）が10～20cmほど堆積し、その上に基本層序III層の黒褐色土・II層の黒色土・Ｉ層の表土が重なる。

遺物は第74～76図に示すように後期中葉から後葉の土器が出土するが、後期後葉安行1・2期のものを主体とする。このうち54は、住居北側コーナーの長軸50cmほどの楕円形の柱穴中より斜めに横たわって検出された土器で（図版８左下の写真)、口径33.0cm・底径4.4cm・高さ43.2cmを測る粗製土器である。57は、東側壁際の床面付近より検出された香炉形土器で(図版８右下写真)、台の部分を欠くが

その他は残存している。胴部最大径が13.9cm・残存部の高さ12.5cmを測る。頂部に径4.2cm（内径3.1cm）・高さ2.1cmの口が付き、この部分から４つのアーチが出て器体と連結される。したがって窓は４箇所あく。アーチ部分中央には、外径2.0・内径1.5cmの孔が付され、その上下に縦長で中央が窪む貼付文が、これ以外の部分は横位もしくは斜位方向の短い沈線文が施される。また、胴部下半部には２本の細い帯縄文がみられる。土器以外の遺物としては、炉近くの床面付近から土偶２点(55・56)、コア・フレーク76・軽石製品１（60）・磨石３（64・65・67）・小型磨石３（61～63）・石皿（66）がみられる。

42Ａ・Ｂ号住居（第78～90図）

本住居は、３次調査区のほぼ中央西隅にあたり、広場に向って緩傾斜するＴＩ－39・40・49・50・59・60、ＶＩ－31・32・41・42・51・52で発見された。なお北東隅には43号住居が、北方約６ｍには40号住居が位置している。調査の経緯は、本住居関連グリッド調査時において第Ｉ層除去後、直径10ｍの円形の黒色土の広がりが確認され住居の存在が予想された。しかもグリッドのうちＴＩ－40・50・60東西セクションとＴＩ－39・40、ＶＩ－31・32南北セクションの二本が黒色土の中央を直交していたため、このセクションをベルトとして表土層より残し床面露呈作業を行った。なお床面の検出は、確認面の覆土が薄いため比較的容易であったが、土層断面の観察によると本住居は第Ⅳ層茶褐色土を切り込んで構築されており、本来の覆土は床面上より約35cmあり、かなり層厚であることが確認されている。なお覆土は六層に分かれたが、基本的には黒褐色土の上層（1)、暗褐色土の中層（2)、濃褐色土層の下層（3）の三層に分けられ、いずれも中央部が窪むレンズ状堆積を示す。なお床面上には薄く炭化物を含む黒色土（4）が広がっている。また当初落ち込みの状態から単一の住居を考えていた。しかし東側床面を検索しているうち、一段高くなった壁を確認さらに東壁から南壁にかけて約１ｍ内側をめぐる壁柱穴列を検出、そして数多い柱穴も形態は別にして埋土の状態がやはり二種類以上あることが確認された。つまり床面上に薄く堆積していた黒色土と同じ覆土をもつ柱穴と全く異なる暗褐色土を包含した柱穴である。この二者は少なくとも前者を新期に、後者を古期の柱穴として捉えられ、これによって複雑な柱穴群の所属を分けることが可能であった。そこで古期を42Ａ号住居、新期を42Ｂ号住居として説明する。なお、柱穴の配列や炉の規模などからさらに重複している可能性もある。42Ａ号（古期）住居は、42Ｂ号（新期）よりも約１ｍ南東へずれ、当初の東－南壁確認面に相当する。東－南壁の立ち上がりは明瞭で、重複している北・西壁は柱穴列によって確認した。規模は長軸8.5m（推定)、短軸7.8mの北東－南西軸がやや長くなる楕円形である。また出入口部を通る主軸方位はＮ－65°－Ｗで西に向く。壁は約半分確認されたにすぎず、東－南壁でも高さ15cmしかなく、ほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は先にのべた暗褐色土の状態からみて、壁から約2m内側に位置する深さ50～70cmを測る八本が主柱穴と考えられ、また壁に沿って深さ50cm前後の柱穴が壁柱穴とは別に配されている。壁柱穴は床面より10～50cmの深さをもつ。その内20cm前後が最も多いが、一定の間隔をもたず、南壁付近では相互に切り合い溝状を形成している。出入口部は北西に位置し、幅3.1m、奥行1.8mで大小のピットが複雑に配されてΨ形を呈している。炉は地床炉で入口部寄りの径1.2×1.1mの円形のものと思われる。床面は大半が42Ｂ号住居によって切られ不詳であるが、わずかに残る東－南辺付近では堅緻でほぼ平坦を呈している。42Ｂ（新期）号住居は、北西に約2.5m移動し、42Ａ号住居を約５cmほど掘り窪めて構築している。規模は径8.4mのほぼ円形を呈するものと考える。出入口部の位置は不詳で

あるが、西南部に複雑なピット群が配されこれを出入口部とすれば主軸の方位はＳ－70°－Ｗで南西に向ける。壁は北－北東部において確認されたのみで高さ15cmを測る。主柱穴は黒色土の埋土状態から炉の周囲をめぐる深さ１ｍを越す五本が主柱穴と考える。さらに外側には50～60cmの柱穴が配されている。壁柱穴の深さは床面から20～60cmと幅広いが、大半は30～40cmの範囲に納まり、径も25～30cmと42Ａ号住居よりも規則正しい配列を示している。出入口部の検出が不十分なため形態は不詳であるが南西辺の複雑なピット群がそれに相当するものと思れる。炉は地床炉で直径1.5mを越す大きい規模をもつ。床面はローム層を切って構築され、堅緻で平坦である。なお両者は時期的な差がほとんど認められず、覆土の遺物から加曽利Ｂ２式から曽谷式土器が纏って出土しており、新期の42Ｂ号住居は加曽利Ｂ３式期、古期の42Ａ号住居は加曽利Ｂ２式後半～加曽利Ｂ３式期に比定できる。

遺物としては、床面直上から約５cm前後浮いた状態で多量に出土している 第79～88図に示したように後期中葉から後葉までの土器がみられる。11～13は胴の張る鉢形で、口縁部を無文とし13は刻み目、他は沈線により区画し縄文帯をもうける。52は口縁に縄文帯をもち、以下無文帯となる。79・81は４～５単位の波状口縁をもつ深鉢で、79は沈線による幾何学文状、81は斜沈線を施し、口縁は無文としている。115は胴部でくびれる波状口縁の深鉢で、４単位の波頂部に小突起が付く、口縁部及びくびれ部に刻み目を施し磨消縄文をもつ。125は胴部でくびれる波状口縁の深鉢で、口縁は刻み目を施し、口唇下に縄文帯がみられる。なお波頂部より垂下した無文帯が存在するらしい。口縁内面に沈線がめぐる。くびれ部に刻み目をもち曲線による磨消縄文がみられる。140は口径推定24.4cmを測る胴部でくびれる平縁の深鉢で、口縁に沿って刻み目を施し、口唇下に縄文帯をもちさらにくびれ部まで無文とする。胴下半部は縄文地文に斜条線が施される。142・143は口縁が内傾し屈曲した胴部が大きくふくらむ深鉢で口縁部とくびれ部に刻み目をもち、口縁部は縄文帯と無文帯、胴部は弧状の区画文がみられる。161は台付の鉢形で口縁部を欠失している。胴部くびれ部に刻み目を施し、胴部下位は曲線による磨消縄文がみられる。脚部は沈線による区画された縄文帯と無文帯をもつ。底縁にも刻み目がある。253は紐線文系の深鉢で、縄文地文に条線を施す。口径推定25.8cm・底径5.0cm・高さ42.9cmを測る。283は格子目状の施文された深鉢で、頸部に無文帯をもつ。290は縄文地文に口縁部では左下り、無文帯をはさみ胴部では右下りの斜沈線が施される。口径推定22.0cmを測る。305～307は、釣手土器の釣手部分の破片である。土器以外の遺物としては、土製円盤11（308～318）・土偶２（319・320）・コア・フレーク28（321～326）・軽石製品１・磨石７（334～340）・凹石２（329・330）砥石３（327・328・333）・石皿２（331・332）などがみられる。

43号住居（第91～94図）

本住居は、３次調査区のほぼ中央西寄りで、緩傾斜するＴＩ－48・49・57・58・59・60・67・68・69・77・78・79で発見された。北西に40号住居が、南に42号住居が隣接している。付近の土層は比較的薄く表土層よりローム面までの平均層厚は30cmに満たず第Ⅰ・Ⅱ層以下茶褐色土層が１層堆積しているのみである。調査の経緯は、まずＴＩ－58の調査時において第Ⅰ・Ⅱ層除去後床面の一部が露出している。そしてＴＩ－78においてもソフトローム面を約３cmほど掘り込んだ面が確認され、さらにＴＩ－68では床面上に堆積していた焼土混りの黒褐色土が検出されている。そのほかＴＩ－57をはじめとして各関連グリッド内において遺物量は多くないものの一括土器が纏って出土している。しかしこれら本住居の覆土所見は、調査時におけるグリッドセクションの観察結果によるものであり、遺構の

存在を予想しながら床面の広がりを十分捉えることはできなかった。これはローム層への掘り込みが非常に浅かったことに大きな原因があったものと考える。とくに傾斜面にかかる西半分ではローム層の掘り込みはなく、むしろローム面上に貼床した可能性が大きい（調査時において確認しながら削平してしまっている）し、セクションでもそれは観察されている。事実後の床面精査の段階でＴＩ－69付近に狭い範囲ながら貼床面の一部を確認している。なお遺構の調査は、こうした調査経過を踏まえてセクションベルト除去後、高位にあたる東側の壁柱穴の検出よりはじめ、各辺の壁柱穴、および出入口部を探索する一方、床面の露出作業をすすめた。また出入口部調査にあたっては、住居主軸に沿ってセクションベルトを設けて行った。形態は、奥壁5.8m、左右の壁6.2mで、出入口部の付く前面の壁7.2m（推定）の規模を有し、五角形に近い台形を呈すると思われる。出入口部から、炉、奥壁を結ぶラインは、ほぼグリッドの東西ラインに平行し、7.6mを測る。主柱穴は四本が、ほぼ平面形の各辺に平行し、正方形に近い形で配置されると思われる。しかし、主軸線奥壁に向かって右側の二本は、本住居に前後する時期の土坑（273・274号）と重複しており、正確な平面形や、深さは確認し得なかった。比較的遺存状態の良い、左側の二本は、直径30～40cm、深さ60～80cmを有する（ｂ～ｂ’・ｃ～ｃ’）。壁は南東側コーナー部に一部、数cmの高さで検出できたが、他の部分では確認できなかった。壁際には、272号土坑との重複でプランのつかめない南東側コーナー部を除いて壁柱穴が列をなして配される。壁柱穴は、直径15～20cm、深さ10～30cmを測り、多くは互いに切り合い溝状を呈する。奥壁側では70cmほど内側で、壁柱穴列が、もう一列検出された。この壁柱穴列の上には第92図－41・42・43、第93図－44に示した一括遺物が重っており、当初は内側の柱穴列が奥壁であったのが、後に奥壁側へ70cm拡張されたものと考えられる。出入口部は西側の辺のほぼ中央に位置し、複数の互いに切り合うピットから成る。これまでの祇園原貝塚の調査で明らかになった出入口部の形態からすれば、向かって左側の部分で右側と対になるべきピットが確認されなかった。炉は、中央やや出入口部寄りに位置する。残存部の最大長95cm・深さ24cmを測る地床炉である。西側約半分を後世の撹乱によって破壊されている。底面焼土の上に焼土粒子や骨片を含む灰層が堆積する。床面はソフトローム上面につくられており、また前述のように前後する時期の縄文時代の土坑との重複や、後世の撹乱により、非常に軟弱である。また、本住居の床面上には、焼土や炭化物が部分的に集中して検出され、南東側コーナー付近壁際より第94図－62の、北西側コーナー付近からは63の石冠が、周囲に炭化物を伴ない、床面に踏み込まれたかのような状態で出土した。また、二つの石冠はいずれも火熱を受けたらしく、特に62は非常に脆い状態であった。さらに、64の石冠が南西コーナー付近壁際の床面上より検出されたが、これは被熱していなかった。本住居の廃絶時、またはその直後に行なわれた、何らかの行為の痕跡を止めたもの、ということが考えられる。また、住居内から検出された炭化物は、全て粉末状であり、柱穴やその付近に顕著であるとは言えず、消失住居である可能性はない。

43号住居からは、第92・93図に示すように加曽利Ｂから安行１期の遺物が発見されたが、質・量ともに安行１式が中心である。このうち、前述のように、41～44に挙げた四個体の土器は、奥壁部の内側の壁柱穴列の上に乗り、各個体毎にまとまりを持って検出された。本住居の覆土は、床面直上の焼土を大量に含む土層と、その上に重る黒褐色土とにわけられるが、特に焼土を含む土層は、前述の廃絶時の行為の結果形成された土層と考えられる。次に述べる四個体の土器は、この焼土混じりの土層に含まれ、床面からは、いずれも１cm前後浮いた状態であった。この事から、住居廃絶時の行為の途

中に、一括して投げこまれたものと考えられる。41は、台付浅鉢形土器の台部である。底径は9.1cm、現高6.6cmを測り、沈線により区画された隆起帯に、原体RLの縄文を、横位に施文している。この隆起帯は、粘土紐の貼り付けと、隆起帯間の若干のケズリによって作り出されている。42は、口径19.2cm、器高9.5cmを測る浅鉢形土器である。約1/2を欠く。文様はほぼ2と同様であるが、若干隆起帯の作り出しが弱い。43は、口径14.8cm、胴部最大径22.0cm、器高22.5cmを測る瓢形土器である。口縁部には段を有し、横位の縄文と縦の刻みとが施される。胴上部には三本の縄文帯が見られるが、上二本はそれぞれ沈線によって上下に区画されている。縄文は、原体ＲＬの横位の充填である。縄文帯には縦長の瘤が配されるが、欠落したものが多くある。おそらくは八単位となると思われる。胴括れ部には、上下二つの段が削り出され、縦位の刻みが密に配される。胴部には、上下の円弧文が沈線によって描かれ、その内部には原体ＲＬの縄文が、縦横に充填され、上の円弧文の接合部に小形の瘤が貼付けられる。瘤・円弧文ともに十二単位となろう。胴下半の沈線区画以下は、前記の原体の縄文が、ほぼ横位から、斜めに施文され、底部付近ではその上から倒位にして、縦のヘラケズリを行っている。44は、口径24.4cm・胴部最大径20.5cm・器高23.8cmを測る。外反した、幅広い無文の口縁部が特徴的な平縁の深鉢形土器である。文様は、胴下半部の条痕を施文した後に、胴最大径を有する部分に二本の沈線・頸部には一本の沈線と、その直上のケズリを行う。次いで、頸部のケズリを施した部分には縦の刻目を施し、胴部の二本の沈線の間には、原体RLの単節の縄文が横位に充填される。この帯縄文の上には、十二単位をなす円弧文があり、その外側に同様の縄文が、やはり横位に充填される。ついで円弧文の接合部と、これに対応する位置の頸部に縦長の瘤が貼り付けられる。さらに、土器を倒位にし、底部より胴下半へ縦のヘラケズリは行われる。口縁部約1/4・胴部約1/5を欠く、ほぼ完形の土器である。以上述べた4個体の土器は、縦長の貼瘤文や、帯縄文など、いずれも安行１式の特徴を備えており、同期の良好な一括資料であると思われる。特に注目されるのは、44に挙げた土器である。これに類似した土器は、祇園原貝塚にほど近い西広貝塚ＳＳ１区・N204遺構（小竪穴）からの出土資料に見られる（米田耕之助ほか　西広貝塚第2次調査　上総国分寺台調査概報　1981）。他に共通した器種はないが、本例との対比では、本例がより新しい。なお、西広貝塚からは同様の器種が他に二個体検出されており、安行１式期において、本器種が顕著な型式的変遷を示すことが看取される。また、埼玉県岩槻市黒谷田端前遺跡（遠山一正　黒谷田端前遺跡　岩槻市遺跡調査会　1976）の小竪穴からも類似した土器が、さらに千葉県四街道町千代田遺跡Ⅳ区の、Ｊ－６号住居跡からは、口縁部および頸部に装飾の加えられた、本例に類似した土器が出土している（宮入和博ほか　千代田遺跡　四街道千代田遺跡調査会　1972）。47は炉の西側に位置するピットより出土した土器である。口径24.1cm・底径9.1cm・高さ18.5cmを測る完形土器である。前述の床面出土の4個体の土器より時期的に新しく、本住居とは直接は関係ないものと思われるが、本遺構内から出土したことから一緒に扱うことにした。土器以外の遺物としては、前述した石冠3点のほか、コア・フレーク２・磨製石斧１（65）・磨石・敲石１（67）・小型磨石１（66）がみられる。

以上のように、本住居からは、従来検出例の少ない深鉢を含む、安行１式の良好な資料を出土している。これをもって、本住居の時期を安行１式期と考えたい。

45号住居（第96～98図）

３次調査区ＴＪ－08・18・09・19・10・19より検出された。長軸3.8m（入口部土坑を含めると5.1

m）・短軸3.5mを測り、南東方向に出入口施設をもちさらにこの外側に土坑が付設される。壁面は最大50cm残存し、壁際には70～100cmほどの間隔をあけて、径20cm・深さ30～40cmほどの柱穴がめぐる。出入口部は円形の小ピットと楕円形のピットが連結して貼り出し部をつくる。この出入口部とその外部の土坑とは、床面と同じ高さで連結され、土坑の部分までを含めて全体の形態が柄鏡状を呈する。炉は長軸100cm・短軸54cm・深さ34cmを測り、内部は灰が充満している。覆土下部には30～50cmほど暗褐色土層（１～３）が堆積し、その上部にハマグリを主体とする純貝層（74号）が最大40cmほどの厚さでレンズ状に堆積する。断面図（A－A'・B－B'）を見て明らかなように、貝層は住居壁面の高さよりさらに上に盛り上がるように堆積している。貝層は住居の本体と出入口施設を中心に分布し、出入口施設外部の土坑には最上面にわずかに分布するにすぎない。貝層中からは、発掘調査時に魚骨層として認定できる程に多量の魚骨が検出された。

遺物としては、第96～98図に示したように堀之内１期の土器が出土し、土器以外の遺物をとしては、土器片錘１（30）がみられるにすぎない。

46号住居（第95～105図）

１次調査区Ｄ３－74・75・84・85区にかけて検出された住居で、その南側コーナー部は47号住居と重複している。奥壁5.0m・左右の壁5.0m・出入口部の付く前面の壁6.4m・出入口部から奥壁まで7.2mを測る。出入口部の付く側が若干外側に膨れる五角形に近い台形を呈する。出入口部は西側に向けられ、円形および楕円形のピットを連結させた溝状のものが、住居の中心軸に対し垂直・水平方向に組み合わせてつくられる。壁高は最高70cmを有し、入口部付近の壁高は30cmほどである。西側コーナー部は、47号住居と重複しているため、壁高は明確ではない。各辺の壁は、本住居がハードロームを掘り込んで構築しているため、残存状態は非常に良い。ハードローム内に築造されているため、床面の状態も良く、断面図（A－A'）に見るようにほとんど平坦となっている。ただ、入口部の床面はなだらかな傾斜をもっている。壁に沿って深さ10cm前後、径6～30cmほどの小ピットが見られる。主柱穴は住居中央部に在る炉を囲むように５本みられ、それらの配置状態は、各ピットを結ぶ線が住居の各辺と併行するように位置している。炉は住居のほぼ中央部に位置し1.0×0.8mほどの大きさを有している。床面を20cmほど掘り窪めて作られ、使用の頻繁さを物語るように非常に良く焼けていた。本住居の覆土の状態を観察すると、第99図をみても明らかなように第1層の表土以下に七層の堆積があり、図中７層とした暗褐色土層が、まず住居の南側より堆積し、その後、６層（黒褐色土層）・５層（黒色土層）・４層（ローム粒子を含入する黒褐色土層）・３層（褐色土層）・２層（茶褐色土層）の順序で堆積する。そして住居東側では、床面直上に堆積する６層の上に10cmほどの厚さで５ｂ層（ロームブロック）の堆積が認められ、またこの部分では４層の上に最大45cmほどの厚さでハマグリを主体とする貝層（23号）の堆積がみられた。

本住居から検出された遺物を第100～105図に示した。これらのほとんどは覆土中より検出されたものであり、時期的には安行１～２式にかけての土器が主体をなしている。このうち、８は口径推定12.9cm・底径4.4cm・高さ11.8cmを測る小型の深鉢形土器、26は口径22.6cm・底径9.1cm・高さ9.8cmを測る浅鉢形土器、27も口径19.8cm・底径6.5cm・高さ8.4cmを測る浅鉢形土器である。土器以外の遺物としては、土製円盤８（84～91）・異形土器１（92）・耳飾２（94・95）・垂飾１（93）・コア・フレーク291（96～105）・磨製石斧３（106～108）・磨石・敲石３（117～119）・小型磨石４（112～115）・砥石１

（109）・石皿２（110・116）・石棒・石剣１（111）がみられる。このうち、チャートを主体とするコア・フレーク291点は、炉の南70cmほどの地点で５ｂ層の直上より纏まって検出されたものである。

本住居は、47号住居を切って構築されているため、47号住居が加曽利B式末～曽谷式に位置づけられているのでそれ以降に、また、住居より検出された土器も安行１～２式期の所産であるので、本住居を安行１～２式に位置づけることができる。

47号住居（第106～109図）

１次調査区Ｄ３－84・94・95、Ｅ３－04・05から検出された住居で、その北側の一部は46号住居の南側コーナー部により切られ破壊されている。長軸8.3m、短軸8.3mを有し、西側辺に溝とピットを連結して作られた出入口部施設が付く。出入口部施設を除いた住居本体の平面形は横長の楕円形を呈する。壁高は30～55cmほどを有している。本住居はハードロームを掘り込んで構築されているので壁の残存状態も良好である。ただ、本住居の北側の一部は、46号住居により破壊されているため明確ではない。床面は非常に硬く良くしまった状態であり凸凹はほとんどなく平坦となっている。床面上には壁直下に最厚部で10cmほどの厚さを有する焼土層が東側部・南側部それに西側部に部分的に堆積していた。ピットには主柱穴・壁柱穴、その他の用途不明のものがある。壁柱穴は、壁面直下に深さ10cm前後、直径10～30cmほどの大きさをもって並んでいる。主柱穴は炉を囲むように５本みられ、それらを結んだ形態は正五角形に近い形状となっている。主柱穴はその掘り込み面で直径40cm前後、深さは1mほどである。炉は住居の中央部より若干入口部に寄った所に在る（出入口部を含めると中心軸上ほぼ中央に位置する）。1.2×1.0mほどの大きさを有し、炉内には多量の灰が残されていた。本住居の覆土は厚さ50cmほどあるが、その中には第Ｉ層（表土）下に第１～６層の堆積が見られる。それらの堆積状態は第106図にみられる如くである（１：茶褐色土・２：黒褐色土・３：ロームブロック・４：暗褐色土・５：少量のロームブロック・６：多量のロームブロック）。これらの中で特異なのは、３層としたロームブロックによる層であり、厚さ10cmほどで、４層（暗褐色土）の上に部分的に堆積していた。これは、ロームブロックといった性格上、自然堆積によるものとは思われず、人為的な層として理解されるものであろう。また、壁際床面直上に堆積する６層も、ロームブロックを多量に混入する土層である。

本住居から出土した遺物を第107～109図に示した。これらの内で、17・20・40の土器は、住居東側壁際の床面直上部より検出されたもので、また15・18・19は床面直上ではないが床付近より検出されている。59の石棒は、床面より若干浮いた状態で住居奥壁寄りから出土している。本住居では、図示したようにこの他にも堀之内１～安行２期までの土器片が覆土中より検出されているが、住居の時期決定となるのは、前述した17・20・40の土器をもって充分であろう。17は、上部を欠失しているが、残存部は高さ7.2cm、底部径5.8cm、器壁の厚さ0.5cm、底部の厚さ１cmを有している。残存部の上端には刻目分が施され、それ以下は、斜行する箆描沈線分が施文されている。色調は黒褐色を呈し、胎土中には微石の含入が顕著である。20は高さ14.5cm、口唇部直径17cm、底部直径6cm、器壁の厚さ0.5cmを有し、口縁部の内彎する深鉢形土器である。表面は、口唇直下0.8cmに幅４mmほどの箆状工具による一条の沈線が口唇と併行して口縁部を一巡する他は、目の荒い縄文が口唇部より底部から６cmの所まで充填されている。40は、底部を欠損しているが、他の部分は良く保存されていた。残存部は高さ30cm、口唇部直径27cmを有している。器壁の厚さは0.6cmほどを有し、裏面の口唇直下には口唇にそって

一巡する幅0.9cmの溝が見られる。表面部には、口唇部下6.5cmの部分に幅2cmの無文帯を有し、その上・下には地文に縄文を施した後、斜格子目文を図に見るように施文している。全体的に橙色を呈し、胎土中には多量の微石が混入している。土器以外の遺物としては、土器片錘1(53)・土製円盤2(54・55)・土偶1 (56)・コア・フレーク6・磨石1 (58)・石皿1 (57)・石棒1 (59) がみられる。

本住居は、床面直上に完形に近い土器が残されていたため、これらをもって加曽利B式末～曽谷式期の所産として把握されよう。

48号住居（第110～113図）

1次調査区E3－02・03・04・12・13・14から検出された。長軸7.6m・短軸6.9mを測り、出入口部はピットや溝を連結したもので北西側に付けられる。壁面は厚いところで30cmほど残されているが、土坑などの別の遺構や後世の撹乱により壊され、部分的に検出されない。柱穴は壁際をめぐる径20～30cm・深さ20～40cmほどのもの、炉の周辺に位置する径40～50cm・深さ100cm前後のものとがみられる。炉は出入口部を含めた中心軸上のほぼ中央に位置するが、炉の中心軸は南側に若干ずれる。長径166cmを測る楕円形を呈する。

出土遺物を第111～113図に示した。後期中葉から晩期前葉までの土器が出土しているが、後期後葉から晩期前葉のものを主体とする。このうち9・19・27・30・34・41・45・47・49・56は床面付近から検出されている。土器以外の遺物としては、土製円盤1(65)・異形土器1(63)・耳飾4(67～70)・土偶1 (66) ・コア・フレーク137 (71・72) ・磨石2 (76・79) ・小型磨石3 (77・78・80) ・砥石2 (73・74)・石皿1 (75)・結晶片岩系コア・フレーク2がみられる。

49A号住居（第114～117図）

1次調査区E3－03～06・13～17・23～27と広範囲にかけて検出された。47・48号住居の東側に隣接する。長軸17.8m・短軸14.8m、ピットや溝を連結して作られた出入口部施設が西側につけられる。出入口部の付く辺は直線的で7mを測り、奥壁部分は曲線を成し全体の形状がDの字形を呈する。壁面は最大で30cmほど残されているが、部分的に検出できない箇所もある。床面は、中央部において後述する49B号住居が壊しているため、その周囲にのみ残存するが概して平坦である。柱穴は、壁際に小規模なピットが連続し、これより内側の床面にも同様の小ピットや大きめのピットが多数存在する。覆土は壁際の周辺に残存するが、ロームブロック・ローム粒・焼土粒を含む褐色土で、北側の壁際を中心に最大15cmの厚さで焼土が堆積している。第116図－70の台付異形土器は床面より出土している(図版10左下の写真)。他はいずれも覆土中より得られた。

出土遺物を第115～117図に示した。覆土中から出土したものは、後期中葉から後葉の土器が主体である。このうち70は、後述する49B号住居の第119図－35と同様の時期と考えられる台付異形土器である。北側の壁際の柱穴上床面レベルから検出された(図版10左下の写真)。この種の土器としては珍しくも全く文様がない。49B号住居のものとは胎土や焼成・器面の調整などが全く異なり、一見粗雑な感じを与える。器高12.2cm、口径9.1cm、台部の下端は径7.2cmを測る。49B号住居のものよりも一廻り小型である。胴部についたラッパ状の突出部は少しずれた方向を向いている。全面にヘラ状の器具による削り痕が顕著にみられ、口縁部・台部では縦方向に、胴部は横に削られ、器面が調整されている。土器以外の遺物としては、土製円盤1(71)・コア・フレーク2・浮子2(73・74)・軽石製品2(75)・磨石2 (78・79)・凹石1 (80)・砥石2 (81・82)・石棒・石剣2 (76・77) がみられる。

49Ｂ号住居（第114・118・119図）

１次調査区Ｅ３－14～16・24～26・34～36区にわたって検出された。長軸9.8m・短軸9.0m、ピットや溝を連結して作られた出入口部施設が西側につけられる。出入口部の付く辺は直線的で8.9mを測り、奥壁部分は曲線を成し全体の形状がＤの字形を呈する。前述の49Ａ号住居の内側に存在し、時期的にこれよりも新しいものとみられる。床面は地表より80～85cmの深さにあり、壁高は高いところで42cmを測り、北側の一部では壁は明らかにできず、ピットの配列によって住居の形を確認した。炉は、床面の中央部やや入口寄りにあり、径96cmの円形に近い形である。床面は、炉のまわりがやや低まり、南側が若干高いが、ほぼ平坦といえよう。床面には、多くのピットがあけられていたが、このうち主柱穴とみなされる６個のピットはいずれも70～80cm、深さ70cm前後で、これらを結ぶと５角形を呈する。壁の内側には小ピットが廻るが、この中でやや大きいピットが一定の間隔（約2.15m）を保って存在している。これらの深さは、一・二の例外を除いて70～80cmである。なお、炉をはさんで東西に土坑が1基ずつ検出されたが(301・303号土坑)、これらはいずれも住居より新しいもので、曽谷式～安行Ｉ式の土器が出土している。本住居の上面には宮ノ台式期の20号住居が存在し、土器を伴う炉と、多量の焼土がある。この面は本住居の床面上40cmほど上である。覆土は、床面上に15cmほどの厚さで部分的にローム粒・焼土粒を混入する黒色土（１層）が堆積し、この上にロームブロックを含む暗黄褐色土（２層）が15～20cmの厚さで部分的に、さらにローム粒・焼土粒を混入する褐色土（３層）が20～40cmほどの厚さで全体に堆積する。

出土遺物を第118～119図に示した。このうち、第119図－35の台付異形土器が土層断面図作成用のベルト内の床面上に倒れた状態で出土した(図版11左上の写真)。これ以外の遺物はどれも覆土中より出土したものである。覆土中から出土したものは、後期中葉から後葉の土器が主体である。35の台付異形土器は、口縁部と台部の一部、及び貼瘤の1個が欠けている。全面が赤彩されており、口縁部の内側やラッパ状突出部の内面にも及ぶ。器高17.1cm、胴部の最大径17.2cm、台部の下端の径は8.4cmを測る。胴部は偏平な算盤玉に近い形で、相対する位置に孔があってここにはラッパ状の突出部がつけられる。孔と直交する位置には大きな瘤が貼りつけられる。瘤は両側面に孔があるが貫通していない。全面に横走する浅くて細い2本で1組の平行沈線が廻っているが、胴部ではこの途中に小さな貼り瘤がつけられる。沈線は上下の小さな貼り瘤の間で途切れ、一見工字文風の効果を出している。頸部の下側の沈線間には細かい刺突文がある。大きな貼瘤の上にも刻み目風の沈線が施されている。ラッパ状の突出部は大きく外へ向かって開く。東北地方の新地式と関連する文様で、西広貝塚で出土した注口付土器と瘤の状態や沈線などの文様の手法、及び胎土・焼成などが極めて類似している。土器以外の遺物としては、土偶１（36）・浮子１（39）・磨石１（41）・凹石（42）・小型磨石１（40）・石棒・石剣２（37・38）などがみられる。

50号住居（第120～159・288・289図）

１次調査区Ｄ３－77・86～89・96～00・Ｅ３－06～09・17～19・27・28さらに３次調査区ＵＩ－77・87～89の一部から検出された。本遺跡検出の住居中最大のものである。長軸18.2m・短軸17.6mを測る。出入口部は西側に付けられる。南側の一部が49Ａ号住居と重複するため、壁面がこの部分では失われているが、これ以外の部分では30cmほど残存する。柱穴は住居範囲内に床面がなくなるほど無数に存在し、特に出入口部付近は顕著である。建て替えを複数回繰り返した結果と見られるため、第

121図に示すようにこれらのピットの深度による分類を試みたが、これらのピット群を分解し組み合わせを明らかにするまでには至らなかった。炉は出入口部を含めた中軸線上ほぼ中央に位置する。長軸272cmを測る楕円形を呈する。さらに燃焼面を有する小規模な炉状のものが10数ヶ所認められる。覆土は、床面上に5cmほどの厚さで部分的にロームブロック・ローム粒・焼土を混入する黒褐色土（1層）が堆積し、この上にローム粒を含む黄褐色土（2層）が20cmほどの厚さで部分的に堆積し、さらにロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を混入する暗褐色土（3層）が20～40cmほどの厚さで全体に堆積する。壁際には20cmほどの厚さで焼土が堆積している。また、覆土中に4箇所小規模な貝層（24号）が形成されている。

出土遺物を第123～159図に示した。本住居からは土器を主体とした多量の遺物が出土している。これらは出土状況により、床面直上を含め床付近から出土したもの・柱穴覆土中から出土したもの・住居本体の覆土中から出土したものに分けられる。挿図は、大まかに土器を時期別に分類したうえで、前述した出土状況別にまとめてある。また第122図に、床付近から出土した本住居の主要土器の分布状況を示した。器復元可能な個体がおよそ50個体ある。時期的には後期前葉から中葉のものがみられるが、主体は加曽利B期のものである。631は胴の一部と台の部分を欠損する釣手土器である。覆土中から置かれたような状態で検出された(図版11)。上面観の現存する最大長11.8cm・現存する最大幅10.0cm・残存する高さ9.6cmを測る。頂部には直径4cm・高さ1.5cmほどの円形の把手が付され、釣手部分と同じ方向に2箇所の穿孔が施される。釣手の付け根部分には横方向に橋状の把手が付される。釣手部・橋状の把手部・胴部の最上部には、縦方向の連続する刻み目が付され、胴部下半には横位もしくは斜位に条線が施される。この他に釣手土器の破片が16点出土している(611・630・632～645)。土器以外の遺物としては、土器片錘4（612・646～648）・土製円盤4（613・649～651)・耳飾3（615・652・653)・土偶2(598・599)・土版1(616)・石鏃3(600・601・614)・コア・フレーク39(654～657)・浮子5（602・603・619・620・659)・軽石製品3（617・618・658)・磨石・敲石14（609・610・629・667)・凹石3（604・660・661)・小型磨石6（623～626・662・663)・砥石5（606・607・627・664・665・）石皿3（608・628・666)・石棒・石剣3（605・621・622)・結晶片岩系コア・フレーク2がみられる。また本住居覆土中からは、2次的な焼成を受けたとみられる土器が炉や焼土付近を中心に多数検出されている。これらは、床面付近・柱穴覆土中・住居本体覆土中いずれからも検出されているが、第288図には床面付近・柱穴覆土から検出されたものの分布を示した。2次的な焼成を受けたとみられる土器とは、視覚的には色調が灰褐色から灰色で須恵器のそれに近く、土器表面には亀裂や気泡がみられ、第289図の実測図に示したもののように器体が変形し屈曲するものもある。質感は硬質な感を受け、これらの土器同士を接触させると須恵器でそれをした時のような乾いた音がする。土器自体の重さが軽くなっているものもあり、本来土器内にあった成分が加熱によって失われていることが想像できる。ただし、各資料によって色調や土器表面の状況、質感には違いがみられこれらは加熱の程度の差からくるものとみなされる。これらの土器の最大の特徴はそれらの多くの表面にみられる気泡すなわち発泡の跡で、このことから以下当該資料を発泡土器と称することにする。発泡土器はほとんどが破片の状態で検出されたが、第289図のようにある程度器形を復元できる大型の破片や第137図－243のような完形土器もある。ただし243は、色調が灰色化し器面に亀裂がみられるがさほど発泡はしていない。住居の側東の壁際から出土した台付浅鉢で、この周辺からは第122図に示すように完形に近い土器

が焼土付近から多数出土している（176・208・218・243・385）。しかし、243以外の資料は、視覚的には２次的焼成の痕跡を見ることはできず、252の台付浅鉢も柱穴覆土最上部の焼土の上から検出されているが２次的焼成の痕跡はない。また、熱を受けたために白色または灰色に変色した焼獣骨が柱穴覆土中から10数ヶ所で検出されている（第288図）。このように、本住居からは床面付近を中心に焼土・発泡土器・焼獣骨・完形に近い多量の土器が検出され、住居廃絶直後の何らかの行為の痕跡である可能性がある。特に、発泡土器については類例もあまり多くなく、その成因が未だに不明である（忍澤成視　市原市能満上小貝塚　財団法人市原市文化財センター調査報告書　第55集　1995）。したがって、遺構に伴う資料としての本遺跡例の果たす役割は大きいと考え、発泡した土器の一部について自然科学的な視野で、発泡の度合い・胎土の状況・加熱の状態などについて分析をおこなった。なお比較資料として、本住居出土の通常の土器の一部を使用した（第132図－176・第135図－219）。分析結果についての詳細は第Ⅲ章１節にまとめてある。土器にみられる発泡の状態は1,200度を越える熱を長時間受けた際に生じると考えられ、この温度を生ずるためにはある程度密閉した状態をつくり常に燃料と酸素の供給が不可欠であり、これは偶発的な住居の火災程度では説明できる状況・温度ではない。その背景には、長時間しかも一定の度合いで火を絶やさないようにした人間の意図が見受けられる。住居廃絶にあたり、火を媒介とした何らかの行為がおこなわれ、その副産物として、焼土・発泡した土器・焼獣骨が残され、その後多量の土器が廃棄されたものとみられる。

なお、本住居の主体を占める床面付近から出土した加曽利Ｂ期の土器群についてここでは個々に詳述しなかったが、第Ⅶ章のまとめのなかで「加曽利Ｂ３式土器の覚え書き」と題して菅谷通保氏が本住居の資料を中心に論じられているので参照頂きたい。

51Ａ・Ｂ号住居（第160～180図）

51号住居は、ＵＩ－97～99・ＵＪ－06～09・17～19・28より検出された。当初、耕作土を除去した段階で、ＵＪ－18を中心に貝層が確認され、次いで、耕作土下の遺物包含層を茶褐色土上面まで除去した段階で、南側約半分の輪郭が黒色の落ち込みとして確認された。つづいて本住居の平面プランの確認を進めたが、ＵＪ－17で古墳時代前期35号住居の南西側コーナー部と重複しており、その付近での確認はできなかった。またその南側では、遺物の散布状態から、本住居に先行すると思われる遺構の存在が予想された。その為古墳時代前期35号住居完掘の後、本住居の調査を開始した。

51号住居の調査にあたっては、住居の時期決定に正確さを期す事、並びに、住居廃絶後の埋没過程を明らかにする事を目的として、実験的な方法で調査を行った。そこで今回の調査方法について若干の説明を行いたい。一般に住居の時期決定については、炉の内部や、住居内埋甕として検出された土器による事が多い。そうした土器が検出されない場合には、床面に密着した状態で検出された土器がこれに当てられる。しかし、その場合にも壁際の、いわゆる三角堆積土の下から検出された土器と、床面中央付近から検出された土器では、三角堆積土の下から検出された土器を用いる事が一般であろう。こうして時期決定された住居の覆土から、前後する時期の遺物が出土する事は、多々あることであるし、また、住居の時期についても、数型式に亘る時代幅でとらえられる事例も、決して少くはない。いきおい、住居廃絶の時期決定は曖昧にならざるを得ない。しかし、上下に累積する住居内覆土の、各土層の時期を正確に把握して行けば、すくなくとも、廃絶の時期の下限はとらえる事ができるはずであり、それは同時に住居の埋没過程の再現をも可能にし得るだろう。こうした各土層の時期を

決定する為には、住居内の遺物が正しくどの層に帰属するかを確定しなければならない。そのためには従来行なわれてきたような、遺物のマッピング・レベリングと、直行する二本の土層断面図との対比では、正確を期す事はできないだろう。

今回の51号住居の調査は、特に上記の点に留意して行った。その具体的な方法としては、住居内に東西、南北で幅１mのトレンチを設定し、これによって基本的な層序をとらえる。その他の住居の覆土は、東西南北、各50cmの正方形の小ブロックに分割し、各小ブロック毎にそれぞれの土層に含まれる遺物を一括して取り上げた。調査は中央から壁に向かい、小ブロックをひとつひとつ取り外す、という形で進め、小ブロックをひとつ取り去る毎に、その土層断面の実測を行った。本住居の層序を、最も良くあらわしていると思われる土層断面図を第160図に挙げた。これは、本住居のほぼ中央を、東西に切断した面である（D－D'）。貝層を除く覆土は、大略五層に分層が可能であり、また貝層部については、数ヶ所のブロックの集合としてとらえられ、各ブロックは上層の混土貝層と、下層の混貝土層とに分層し得る。貝層も含め土層の堆積状態は断面図に見るように特異な状態を示しており、自然堆積とは思われない。第１層は、ロームの小ブロックを含む黒色土であり、南側から西側にかけての住居壁際、並びに住居中央部南西側の第２層の上に堆積する。これらは視覚的には分層不可能であるが、壁際で床面までの堆積を示す部分と、第２層の上に乗る部分とでは、その出土遺物の時期に明らかな時期差をもつので、実際には別々の土層である可能性が強い。第１層のうち床面に直接重る部分（第１Ａ層とする）では、第162図－47の深鉢形土器をはじめとし、第162図－54、第173図－７、第174図－40など堀之内2式、加曽利B1式土器を出土する。第２層に重る部分（第1B層とする）では、第167図－96、第175図－45･48～50に見られるように、加曽利Ｂ２式から加曽利Ｂ３式期にかけての土器が検出される。第２層は住居中央から北半にかけて分布し、北半部では所々床面直上に乗る。明褐色から暗褐色へと、住居中央に向かうに従い漸移的に変化する土層である。色調の変化は横に顕著であり、上下ではほとんど変化しない。遺物としては第162図－50、第169図－139、第174図－33・35をはじめとし、加曽利Ｂ１式から加曽利Ｂ２式の土器が検出される。第３層は住居のほぼ中央で、床面直上に薄く堆積する。炭化物を含み、濡れたような黒色を呈し、ロームの小ブロックを含む。遺物は土器の小破片が小量検出されたが、形式的な帰属を明らかにし得るものはない。第４層は黒色を呈し、ロームの小ブロックを比較的大量に含む。第１層とはローム小ブロックを含む割合で区別され、第３層とは炭化物を含まない事で区別し得るが、この二つに近似した様相を示す土層である。住居の東側で床面直上から検出面まで堆積し、第１Ａ層の分布範囲にもブロック状に床面に密着して存在する。遺物としては第162図－54に見られるように、加曽利Ｂ１式土器の破片を出土する。図には見られないが第５層は南側壁際に見出される三角堆積土で、第１層中にローム粒子の混入したものと言える。遺物は加曽利Ｂ１式と思われる小破片が数片検出されたのみである。以上の各土層に共通した特徴としては、いずれも非常にしまりがあり、第５層を除けば均質な土層である。また、第３層と第５層を除けばいずれも厚い堆積であり、すべての土層には、部分的な量の多少はあるが、ロームの小ブロックと焼けた骨片とが多量に含まれている。また、後にのべる第４貝層と第２層においては層の上面と下面から検出された土器片が互いに接合する例がある。これらの事を考え合わせると各土層は比較的短期間の内に大量に堆積したものである可能性がある。層のしまりが非常に強い事と考えあわせれば、住居廃絶後の埋めもどしと、それに伴ない埋めもどした土を踏み固めるといった「整地行為」を推定する事

ができる。

以上述べた土層の他に、本住居にはブロック状の貝層が数ヶ所存在し、切り合い関係をもつものもある。最大規模を有する第４貝層は出土遺物からその形成時期がある程度確定できた。76号貝層第４61図－11の土器は、その下層からの出土と、上面からの出土の土器が接合したものである。第３貝層下層より第462図－19・第461図－12が出土している。これ等の貝層の上には黒色の第０層が薄く堆積しており、この土層中から第175図－56の土器が出土した。この第０層は他の土層と違い、しまり、粘性ともにない、サラサラした土層であって、自然堆積の可能性が強い。これ等の事実から住居内の貝層の時期は、加曽利Ｂ２式から加曽利Ｂ３式にかけて形成されたものと言えるが、断面図に見るとおり、貝層はいずれもレンズ状の堆積を示しておらず、ほぼ垂直に立ち上がる。各貝層は第１Ａ層や第２層を掘り込んだかのような堆積を示し、また第１Ａ層、第２層に比べ時期的に新しい。こうした事は本住居が埋めもどされた後、再度小竪穴が掘りこまれ、そこに貝が捨てられた結果であると考えざるをえない。

以上から本住居の性格を考えると、本住居は加曽利Ｂ１式の時点において廃絶され、第５層・第４層・第３層・第１Ａ層がこれを埋めもどした。第２層の堆積はこれより若干後になると思われるが、床面に段差を持つ事等から、第１Ａ層と第２層との不自然な堆積状態は反復縮少の行われた結果である、とも考えることができるだろう。次いで第１Ｂ層の堆積があり、それとほぼ同時に小竪穴が掘り込まれ、貝が投棄される。前にも述べたように、この貝層の投棄は短期間に行われ、最後に貝層・第１Ｂ層の表面の窪みに加曽利Ｂ３期に第０層が堆積した。という一連の過程と、本住居ならびにその跡地の、祇園原集落内に占めた機能の変遷がうかがえる。

本住居は出入口部の向き（西側）・中心軸を同じくする大小２時期の住居が重複しており、外側の大規模な住居（長軸9.7m・短軸9.4m）が古く、内側の小規模な住居（長軸7.1m・短軸6.4m）が新しい時期のものとみられる。炉は出入口部よりに位置している。長軸166cmの楕円形を呈し、切開した結果燃焼面を二面検出した。炉の断面図の１層から６層迄を除去した時点で７層の表面が硬く焼き締まった状態で明らかな燃焼面と確認できたが、Ａ－Ａ'セクションに見られるように床面との間に９層が嵌入する状態が認められ、念のためセクション面に合わせて７層を断ち割ったところ、やはり硬く焼き締まったもう一枚の燃焼面を検出した。この際７層の断面を観察すると、３層・４層と接する面が硬化・赤化ともに著しく、下の燃焼面に接する範囲では、被熱による硬化はあるものの、色調は本来のロームに近い状態であった。以上の状況は古い段階の炉にロームを貼って一回り浅く作り直して再び使用したものと考えられる。尚炉の覆土には半ば埋もれる状態で第170図－144がまとまって出土した。そこで、前者を51Ａ号、後者を51Ｂ号と呼ぶことにする。51Ｂ号住居は、51Ａ号住居の覆土を掘り直し床面は同じ面を使用している。したがって51Ａ号住居の遺物は、51Ｂ号住居プランの外側のみに限定されることになる。本住居は前述のとおり、最小50cmのグリッド・層ごとに遺物の回収がおこなわれているので、この単位を使って51Ａ・51Ｂ号に属する遺物を分離することが可能である。そこで、この方法で遺物を分けて図示することにした(51Ａ号は第161～164・177図、51Ｂ号は第165～172・178図)。ただし、両住居の境界にあたりどちらに属するかが不明確なグリッドから回収された遺物については、51Ａ・51Ｂ号として図示した（第173～176・179図)。図中には遺物番号の下にグリッドと層位を記載した。グリッドの呼称は第180図に示すように、３×３ｍのグリッドを13に大別し、さらにそ

の中を50cmの小グリッドに分け、Ａ１～Ｆ６の36に細別し、たとえば１Ｇ－Ｆ６というように示した。なお、貝層中から検出した遺物については、第Ｖ章の貝塚のなかで76号貝層として扱った。

本住居の覆土中からは土器などの人工遺物とともに、獣骨が多量に検出された（第160表）。これらは、炉覆土中に最も多く4,557ｇ、次いで２層の1,637ｇ・１層の1,093ｇで、この他量は少なくなるものの０層・３層・４層・７層と各層にみられる。また、貝層中からは1,702ｇの獣骨が検出されている。検出された獣骨のうち炉覆土ではその全てが、住居本体覆土では約半分のものが、貝層では28％のものが焼けて白もしくは灰色化していた。このことから、本住居では炉内で獣骨が焼かれ、住居廃絶後覆土中にも土器などの人工遺物とともに焼けた獣骨が投棄されたとみられる。覆土検出の焼獣骨の主体はシカであった。なおこれらについての詳細なデータは第Ｖ章３節ｃに示した。土器以外の人工遺物としては、土器片錘１（第179図－90）・耳飾１（第177図－90）・土偶２（第178図－174・175）・コア・フレーク16（第177図－91）・浮子１（第177図－92）・軽石製品８（第177図－93・94）・磨石４（第178図－176・178・181、第179図－92）・凹石１（第177図－96）・小型磨石１（第177図－97）・砥石３（第177図－95、第178図-179・180）、石皿３（第178図－177、第179図－93・94）・石棒・石剣１（第178図－182）がみられる。

以上の住居や２節の土坑と比較すると、形態や大きさの点からこれらとは区別される遺構がある。住居とはできないので、52・53・54・55号遺構として扱う。

52・53号遺構（第182図）

52号遺構は、３次調査区ＳＨ－73～75・83～85より検出された。長軸5.5mを測る。53号遺構は、３次調査区ＴＪ－28・29・38・39より検出された。長軸4.6mを測る。ともにアメーバー状の不定形で、覆土中には遺構基底面上に間層を挟んで上部に厚さ50cmほどの貝層が形成されている。平面形はいわゆる風倒木痕状であるが、貝層は純貝層や混土貝層を主体とし貝の密度が高く、堆積に乱れはみられない。53号遺構からは、貝層・貝層下の土層ともに堀之内１・２期の遺物が出土している。掘りかたの形状が不定形であるので、人為的に掘られたものかどうかは判定できないが、仮に風倒木痕としても貝層が形成される以前のもので、それを利用して貝殻等の投棄場所にしたとみられる。

54号遺構（第183～185図）

本跡は調査区の南端にあたるＶＪ－22～24・32～34で検出された。この付近の土層は表土層下に薄く茶褐色土層（第Ⅳ層）が堆積しており、この土層を切って黒褐色土、暗褐色土の落込みが確認された。遺構の中央東西に走る後世の撹乱溝（芋穴）が壁、床面の一部を破壊しているものの掘り込みが深いため全容を把握し得た。調査の経緯は、まずＶＪ－23・33の東西セクションベルトならびにＶＪ－22～24の南北セクションを残しＶＪ－32・33より掘りはじめた。表土層（１）以下比較的単純な土壌堆積を示し、暗褐色土層（２）と黒褐色土層（３）が覆土の大部分を占め、床面直上並びに壁際に沿って薄く褐色土（４）が認められるのみである。一方ＶＪ－24・34にあたる住居南側には、ハマグリ、シオフキを主体とする貝層（77号）が表土層下において検出された。この貝層は小規模（112×65cm、層厚18cm）でありながら黒褐色粘質土中に純貝層に近い堆積状態を呈していた。遺物の出土状態は各層比較的多く包含されとくに床面直上の黒褐色土層中には、本遺構の所属時期を決定すると思われる堀之内２式土器の半完形品を含めて多量に出土している。他に堀之内1式および加曽利Ｂ１式の土器片

ならび獣骨類の検出がある。形態はローム層を掘り込んでいて明瞭である。長軸5.5m、短軸4.9mを測り、各辺が緩やかなカーブを描く不正隅丸方形を呈している。東壁を除く各壁の立ち上がりは湾曲的な傾斜を示しとくに南壁から西壁にかけてより緩やかとなり、床面と壁との境を明確に区別しえない。また南壁の中央は内側に突出している。周溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦で全体的にかなり堅緻であるが凸凹が激しく表面上は粗い。なお特別な踏固部を認めることはできない。また壁際に沿って、12本のピットが検出されているが、東壁も南壁に偏在している。その形状はすべて均一ではなくおよそ柱穴とは認めがたいものも存在しているものの、ピット内の埋土の状態から本遺構に伴う柱穴と考えて大過なかろう。また炉は存在しない。しかし住居中央部のちょうど炉の位置する地点に新しい溝があり、これによって消滅した可能性もある。

遺物の出土は、覆土より比較的多く、とくに3層黒褐色土層より纏って出土している。平面図中には床面から5cm以内のほぼ床直のものと、床面から5～10cm以内の床面付近のものに分けて示した。21は、口径推定10cm・底径5.6cm・高さ9.6cmのほぼ復元可能な小形の深鉢で、口縁から外反気味に底部へすぼまる。文様は口縁上部を幅狭な無文帯として残し、以下胴上半部まで沈線による幾何学的な文様帯を構成する。施文順序は上下二本の沈線により文様区画しその中に四角形を基調とする文様を描き、さらにその内に縄文施文する。後に無文部を磨き、沈線をなぞる。また口唇内面に沈線をめぐらしている。3・7は平縁の口縁部をもつ深鉢で、沈線を直線的に垂下させている。24・43は口縁上部を無文とし、胴上部に平行する二条の沈線を横位・斜位に施し、沈線間に縄文を施文する。24は、口唇内面に沈線をめぐらしている。43は、細い沈線により三角形を基調とする文様区画を施し、区画内に縄文を充填している。また胴下半部に紐線を一条めぐらせ、その下に細い沈線により楕円形を基調とする文様区画を施し、区画内に縄文を充填している。32・40は沈線と縄文施文の深鉢の胴部破片である。32は幾何学的な文様帯をもつ。細い沈線により三角形を基調とする文様区画を施し、区画外に縄文を施文している。40は「8」の字状の貼付文がつけられ曲線による二本の沈線間を縄文施文している。20は口唇部に刻目をもつ平縁の深鉢で、半截竹管状工具による平行沈線でややくずれた幾何学的な文様を描く。また内面には二条の沈線がめぐっている。土器以外の遺物としては、軽石製品1点(56)・石皿1点（55）がみられる。

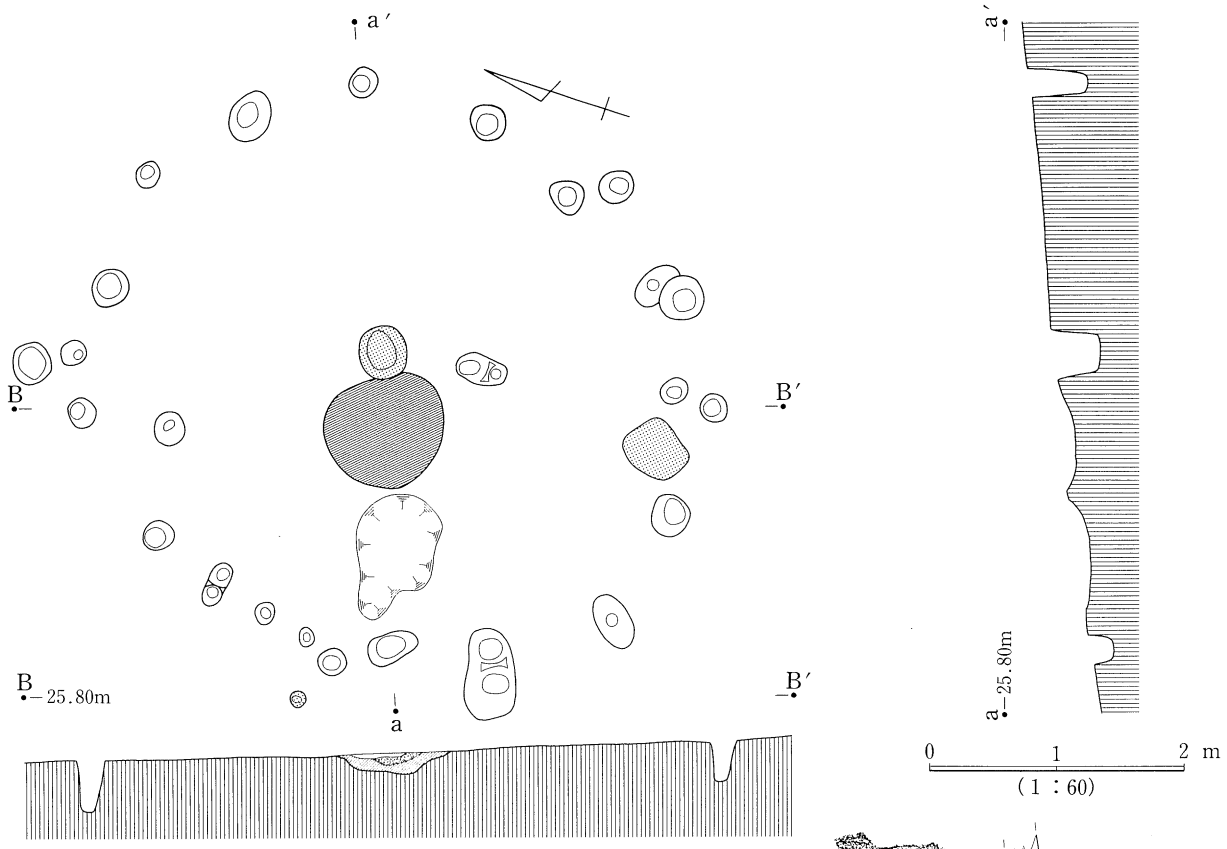
55号遺構（第186図）

1次調査区E3－99より検出された。覆土内には貝層（28号）が形成されていた。遺構の東半分は宮ノ台期の32号住居によって壊されており、この住居は一部で貝層を壁とした部分もあった。現存する最大長は2.4mを測る。壁は最大20cmほど残存する。覆土および貝層中からは堀之内1式を主体とする土器が出土している。土器以外の遺物としては、土偶1（14）・未詳土製品1（15）がみられる。

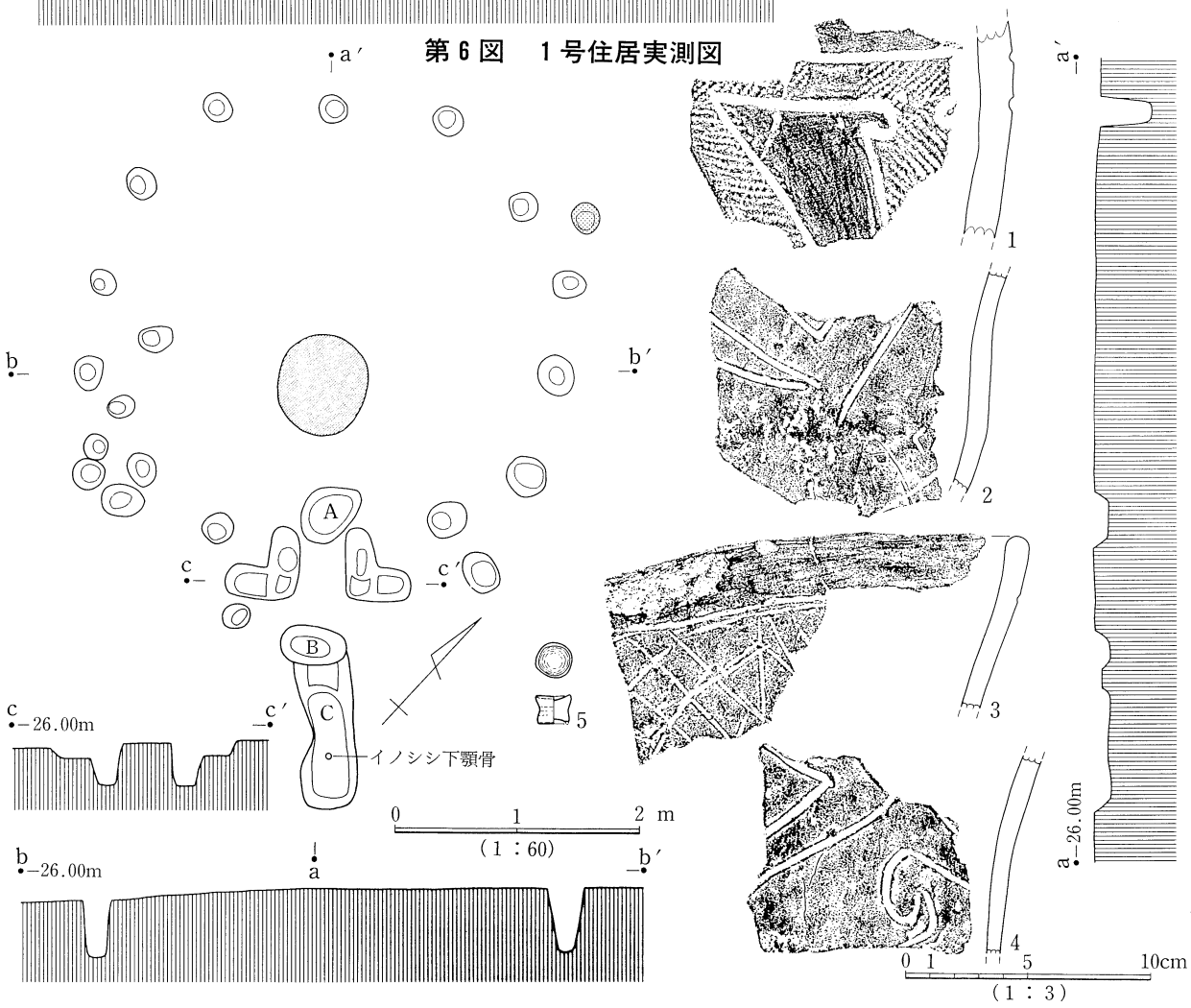
なお、この遺構の西側に隣接する宮ノ台期の30号住居覆土中には多量の堀之内1式の土器片を含む混土貝層（27号）が堆積し、一部床面にまで達した部分もあった。おそらく30号住居の廃棄直後に32号住居が構築され、その際に破壊された55号遺構から排土された貝層を30号住居内に投棄したものであろう（本来55号遺構内にあった28号貝層の一部が、宮ノ台期の30号住居構築時に排土として移動され2次堆積して27号貝層となったものと推定される)。投棄の時期はまだ30号住居の床面が露出していた頃とみられる。

第4表　縄文住居リスト

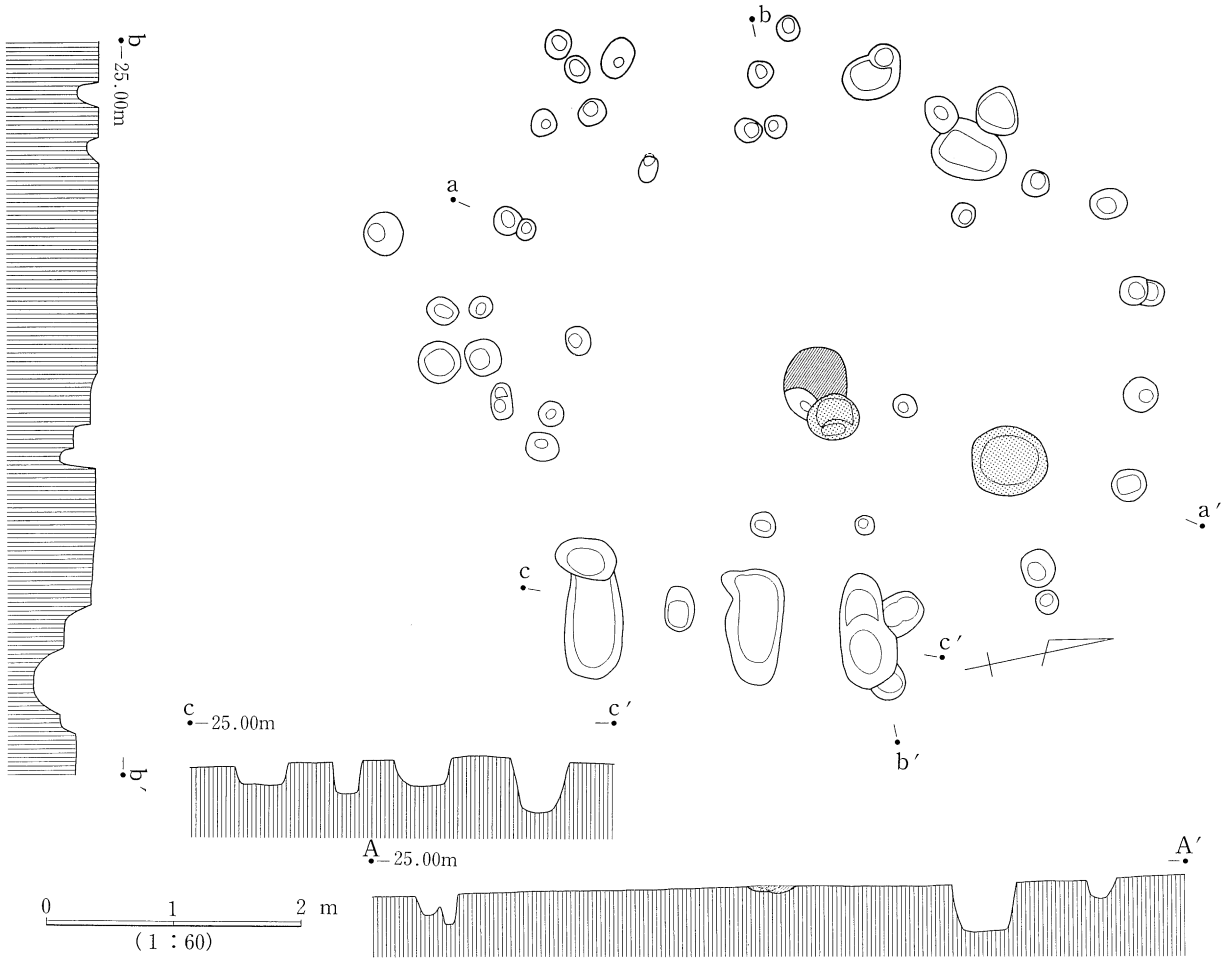
No.	調査次	発掘調査時No.	グリッド	時期	規模（m）		炉の規模（cm）			入口土坑（cm）			覆土の特徴	特徴的な遺物	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ			
1	2	GN157	A2	――	5.2	4.7	96	88	16				柱穴内貝層(No.3)あり。		
2	2	GN158	A2	称名寺	4.7	4.1	85	75	――	100	46	15	――	出入口土坑内よりｲﾉｼｼ下顎骨	
3	2	GN161	A2	――	5.9	5.2	50	(40)	――				――		
4	2	――	A2	――			140	128	30				――		範囲不明確
5	2	GN165	B2	――	4.5	4.5	70(52)	68(44)	18(10)				――		3軒重複。範囲不明確
6	2	GN146	B2	堀之内1	5.0	4.8	120	60	32	122	116	34	――		
7	2	GN144	B1・B2	堀之内1	5.7	5.0	90	86	50	130	60	74	東側壁際茶褐色土残存。出入口土坑・炉内覆土中に貝層(No.4)を形成。	出入口土坑内より石製垂飾3点	
8	2	GN138	B1	堀之内1	8.1	7.2	94	88	58	195	122	90	2層から成る自然堆積土。	出入口土坑内よりﾐﾆﾁｭｱ土器	
9	2	GN164	B1	堀之内1	4.9	4.7	54	48	――	54	54	20	――		
10	2	GN153	B0	堀之内1	(3.5)	4.4	72	42	――				2層程から成る自然堆積土。		
11	2	GN154	B0	堀之内1	(5.0)	(5.1)	36	32	――				――		
12	2	GN152	B0	堀之内1	(2.3)	(3.2)	(6)	22	――				――		
13	2	GN159	B0	堀之内1	4.5	4.4	46	38	――				――		
14	2	GN155	B0	堀之内1	(2.6)	(0.8)							――		
15	2	GN151	B1	堀之内1	(2.9)	5.3							床面上暗褐色土を介し純貝層(No.17)を形成。		
16	2	――	B1	――			56	(44)	――				――		範囲不明確
17	2	――	B1	――			72	52	――				――		範囲不明確
18	2	――	B1	――			100	72	――				――		範囲不明確
19	2	GN148	B1	堀之内1	8.6	7.4	164	78	32				床面上土層を介し貝層(No.11)を形成。	有溝土錘	
20	2	GN149	B1	堀之内1	(5.1)	6.7	62	58	24				ロームによる貼り床上に貝片をわずかに混入する土層が堆積。部分的に混貝土層ブロック(No.12)あり。		
21	2	GN166	B2	――	(1.9)	4.5							ロームによる貼り床上貝片をわずかに含む暗茶褐色土を介し貝層を形成。		
22	2	GN163	B2	――	7.5	7.1	64	54	――				――		
23	1	GN132	B3	堀之内1？	(4.2)	5.3	68	54	――				――		
24	1	GN133	B3	称名寺？	6.7	6.2	138	120	36	234	164	92	出入口土坑内に貝層(No.20)を形成。		
25A	1	GN123A	B3	安行1～3a	9.8	8.7	134	102	――				――	台付土器・土偶・石棒	
25B					8.0	6.5									
26	1	SB515	C3	安行2～3b	5.2	5.0	68	64	15				床面上黒色土を介し暗黄褐色土が堆積。5層程から成る自然堆積土。		
27	4	101	QI	堀之内1	5.6	5.3	104	94	66	68	38	52	床面上ローム粒・ブロックを含む黒褐色土を介しレンズ状に貝層(No.44)を形成。		
28	3	J7	SH	加曽利B			90	84	25				炉覆土内に貝層(No.49)を形成。		範囲不明確
29	3	J22	SH	加曽利B	(6.5)	7.6	60	44	19				床面直上より貝層(No.50)を形成。		
30	3	J24	SI	加曽利B			50	50	――				貝層(No.52)を形成。		範囲不明確
31	3	J23	SI	加曽利B	4.4	4.0							――		
32	3	J15	SI	堀之内2？			40	40	――				ブロック状に貝層(No.59)を形成。		範囲不明確
33	3	J13	SI	加曽利B	4.6	4.0	78	64	――				床面上暗褐色土を介し貝層(No.60)がレンズ状に堆積。		
34	3	J8	SI・TI	加曽利B	5.6	5.4	72	60	50				床面上暗褐色土を介し上部に貝層(No.63)を形成。		
35	3	J16	SI・TI	称名寺			50	40	――				床面上黒褐色土を介し上部に部分的に貝層を形成。		範囲不明確
36	3	J19	TI	加曽利B？			82	64	――				貝層(No.65)を形成。		範囲不明確
37	3	J12	TI	加曽利B			80	70	32				炉覆土内に貝層(No.66)形成。		範囲不明確
38	3	J11	TI・TJ	堀之内1	(5.0)	4.8	26	26	――	100	80	55	床面上黒褐色土を介し全面に貝層(No.67)を形成。		
39	3	J5西	TI	安行1	5.5	5.1	60	56	――				――		
40	3	J5	TI	安行2～3a	7.5	6.5	100	90	27				床面上に焼土・ローム粒子を含む炭化物層が堆積。		炉覆土内灰分析
41	1	GN121	D3	安行1・2	6.3	6.2	104	68	――				黒褐色土	香炉形土器	西脇にもう1軒重複
42A	3	J3A(古)	TI・UI	加曽利B	8.5	7.8	120	110	18						
42B	3	J3B(新)	TI・UI	加曽利B	(8.4)	(8.0)	160	130	18				床面上にローム粒子をわずかに含む炭化物層が堆積。3層から成る自然堆積土。		
43	3	J4	TI	安行1	7.6	7.2	(54)	95	24				床面上に焼土・炭化物層。	石冠3点　同時期土器一括出土	
44	1	GN137	D3	安行1・2	5.5	5.0	52	48	――				――		範囲不明確
45	3	J9	TJ	堀之内1	3.8	3.5	100	54	34	88	78	98	床面上ローム粒子を多量に含む暗褐色土を介し上部にレンズ状に貝層(No.74)を形成。		炉覆土内灰分析
46	1	GN120	D3	安行1・2	7.2	6.4	98	84	20				6層から成る自然堆積土。奥壁寄りに貝層(No.23)を形成。	異形土器・チャート製ｺｱ・ﾌﾚｰｸ	
47	1	GN119	D3・E3	加曽利B	8.3	8.3	122	102	32				6層から成る堆積土。中位に人為的なロームブロック層あり。壁際に焼土ブロックが堆積。		
48	1	GN116	E3	安行1～3a	7.6	6.9	166	84	28				――	異形土器	
49A	1	GN111・115・117	E3	曽谷	17.8	14.8							ロームブロック・ローム粒・焼土粒を含む褐色土。壁際に最大15cm厚の焼土が堆積。	異形土器	
49B	1	GN114	E3	曽谷	9.8	9.0	96	96	――				床面上にローム粒・焼土を含む黒色土が堆積。主体はローム粒・焼土粒を含む褐色土。	異形土器	
50	1	GN113	E3	加曽利B	18.2	17.6	272	228	――				壁際に焼土が堆積。主体はロームブロック・粒・焼土粒を含む暗褐色土。覆土中に貝層(No.24)をブロック状に形成。	発泡土器・焼獣骨　多量の土器	発泡土器熱分析
51A	3	J1(古)	UI・UJ	加曽利B	9.7	9.4									
51B	3	J1(新)	UI・UJ	加曽利B	7.1	6.4	166	136	38				しまりの非常に強いロームの小ブロック・獣骨を含む人為的堆積土。覆土上部に貝層(No.76)を形成。	焼獣骨	炉覆土内灰分析
52	3	――	SH	――	5.5	5.4							貝層を形成。		否住居・風倒木痕？
53	3	J17	TJ	堀之内2	4.6	4.0							ローム粒を含む土層堆積後、貝層(No.75)がレンズ状に堆積。		否住居・風倒木痕？
54	3	J2	VJ	堀之内2	5.5	4.9							3層から成る自然堆積土。上部に小規模なブロック状貝層(No.77)が形成。		否住居
55	1	GN109B	E3	堀之内1	(1.7)	2.4							遺構中央に基底面上から貝層(No.28)を形成。		否住居



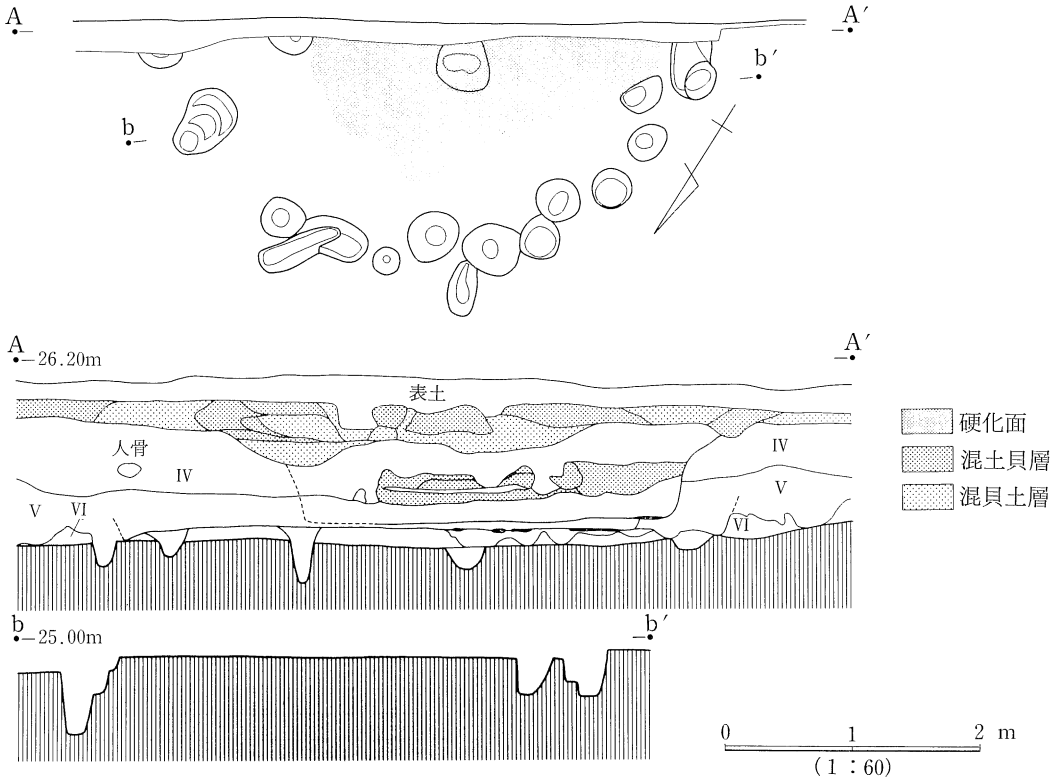
第6図　1号住居実測図



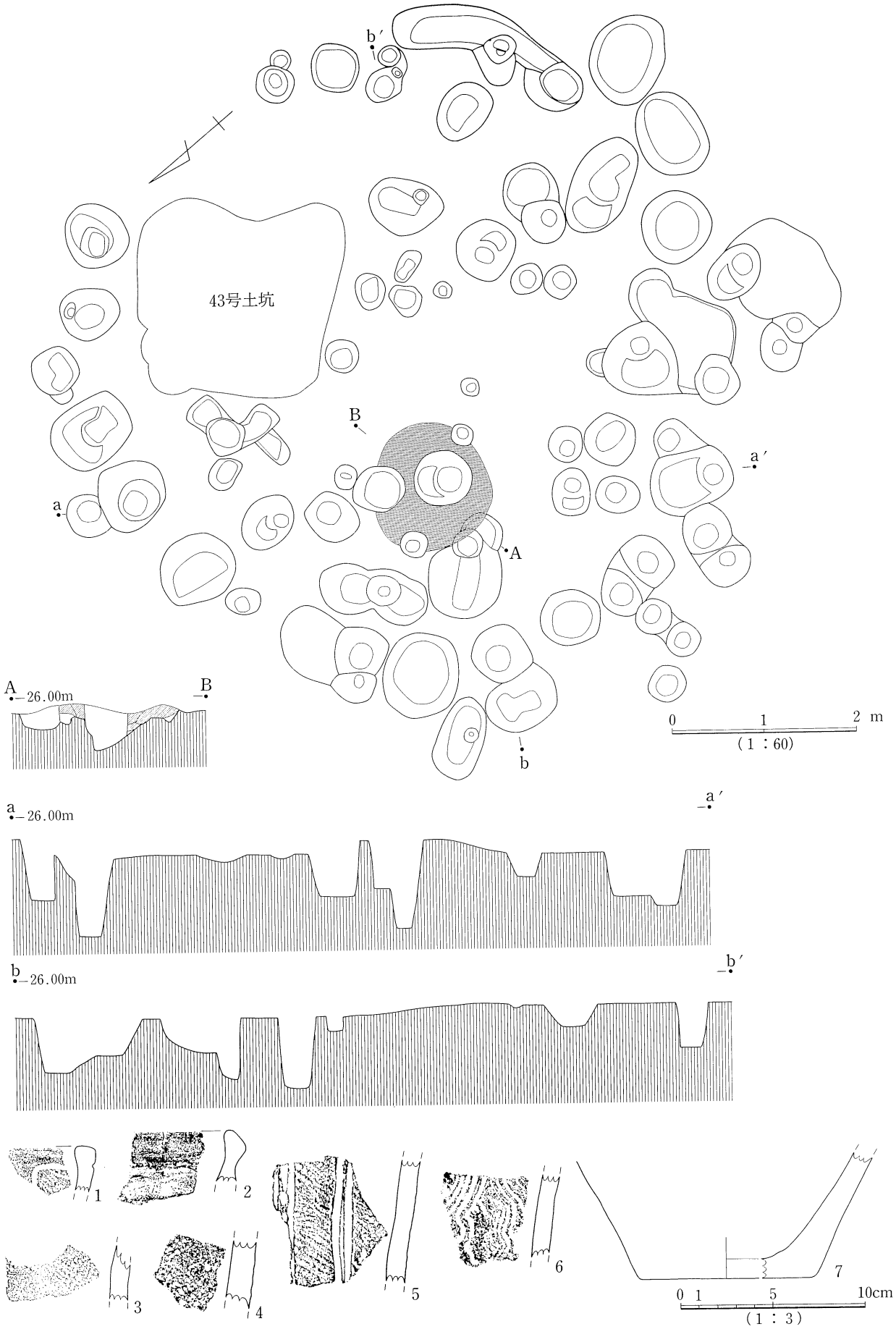
第7図　2号住居実測図および出土遺物



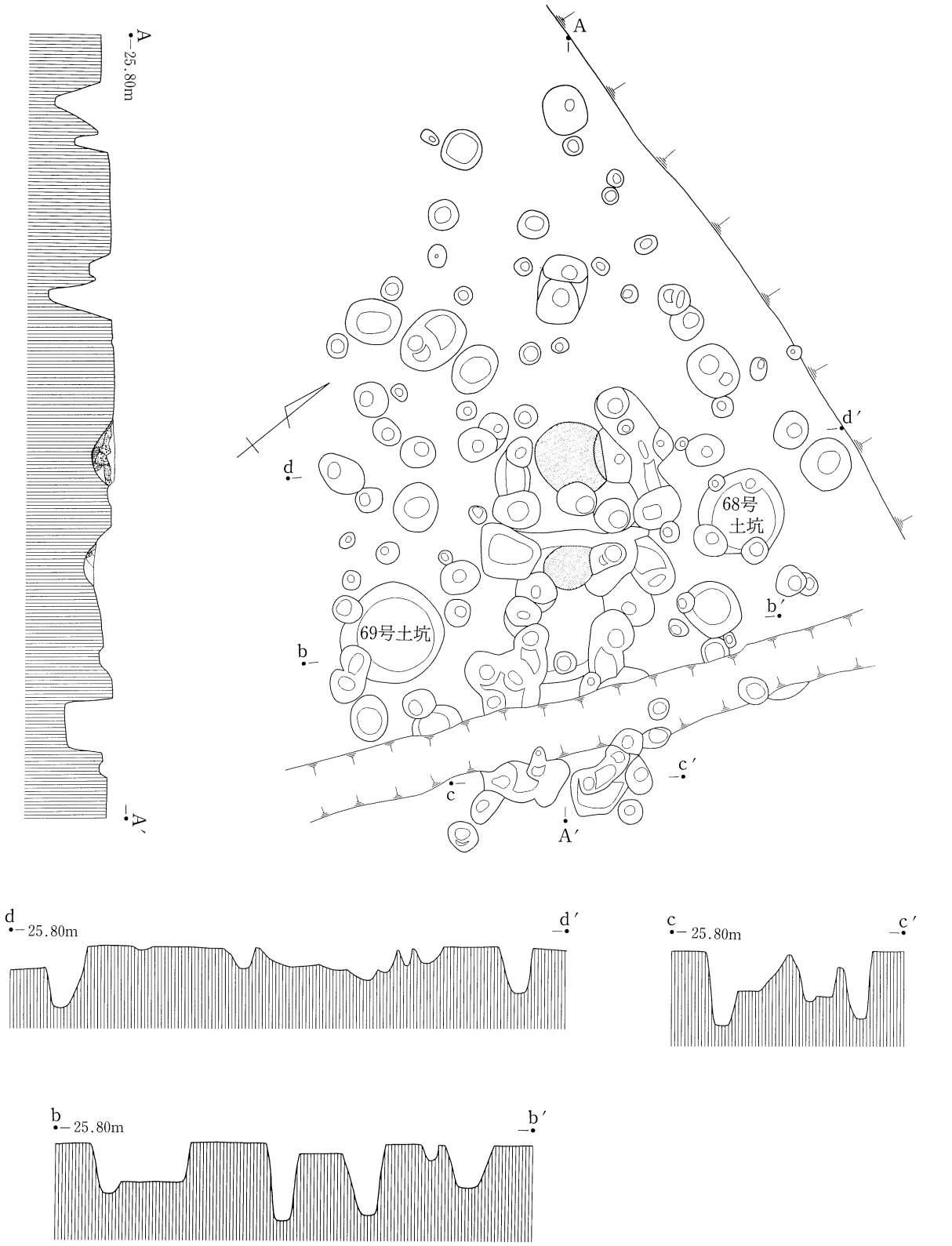
第 8 図　3 号住居実測図



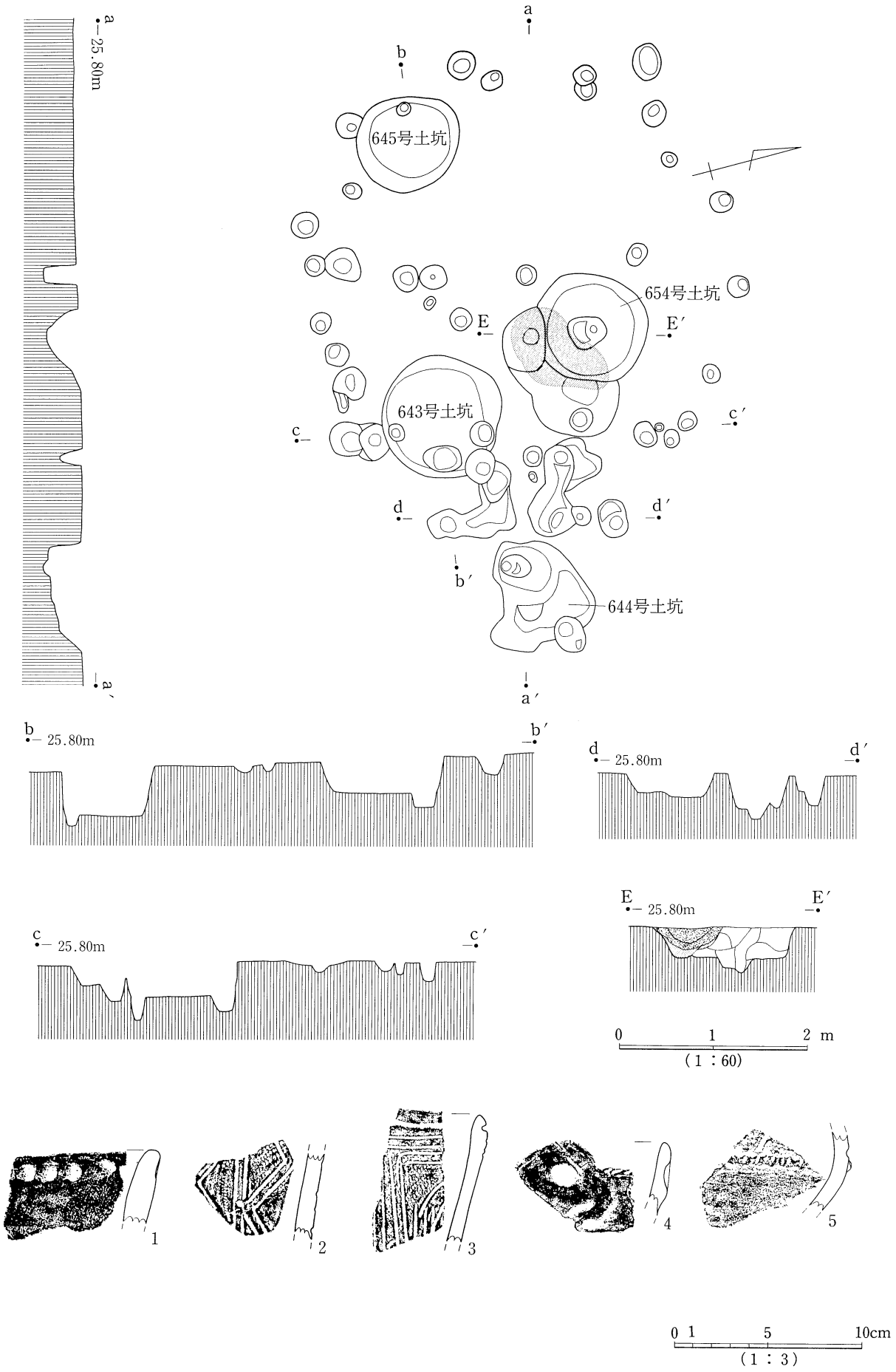
第 9 図　21号住居実測図



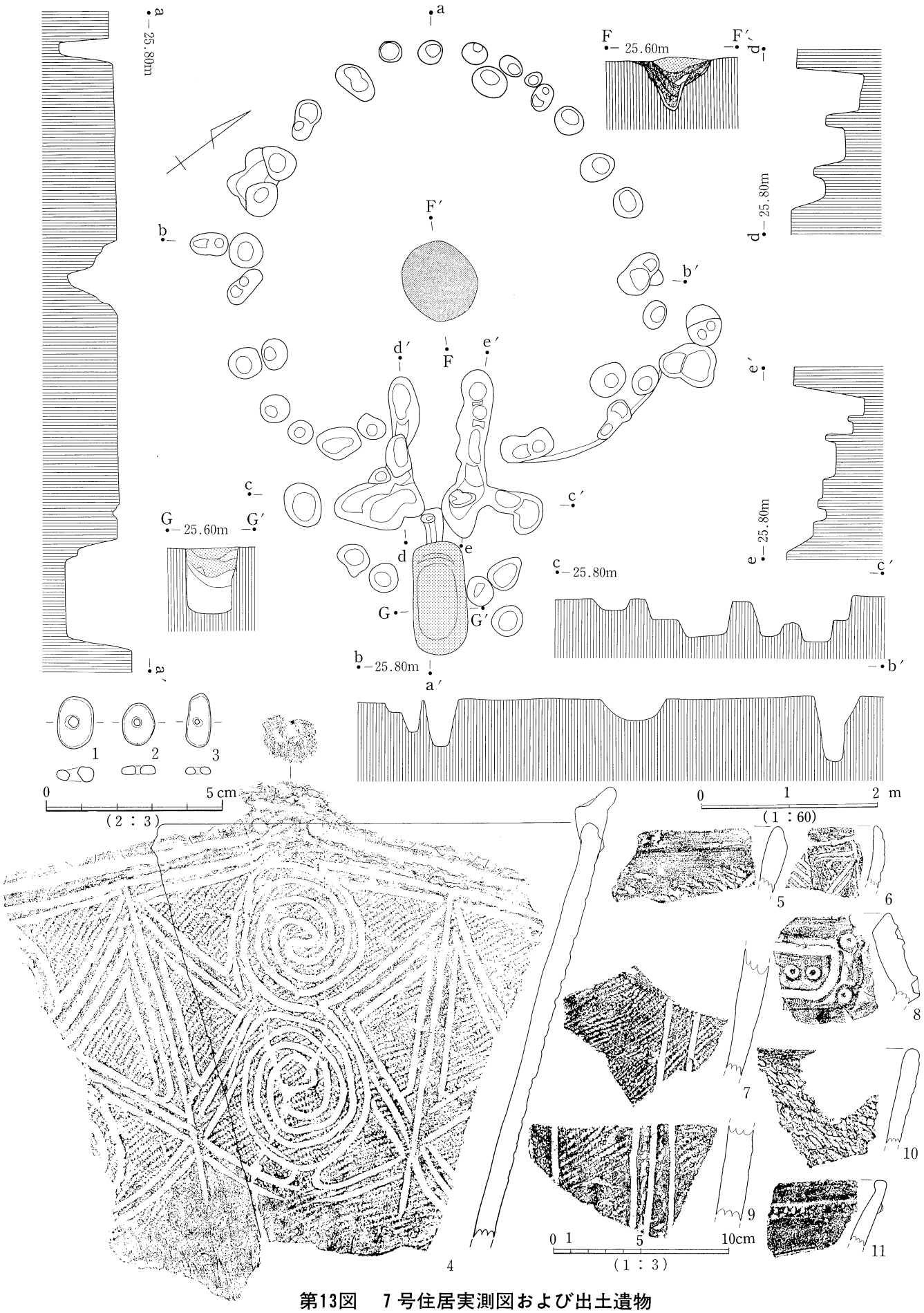
第10図　4号住居実測図および出土遺物



第11図　5号住居実測図

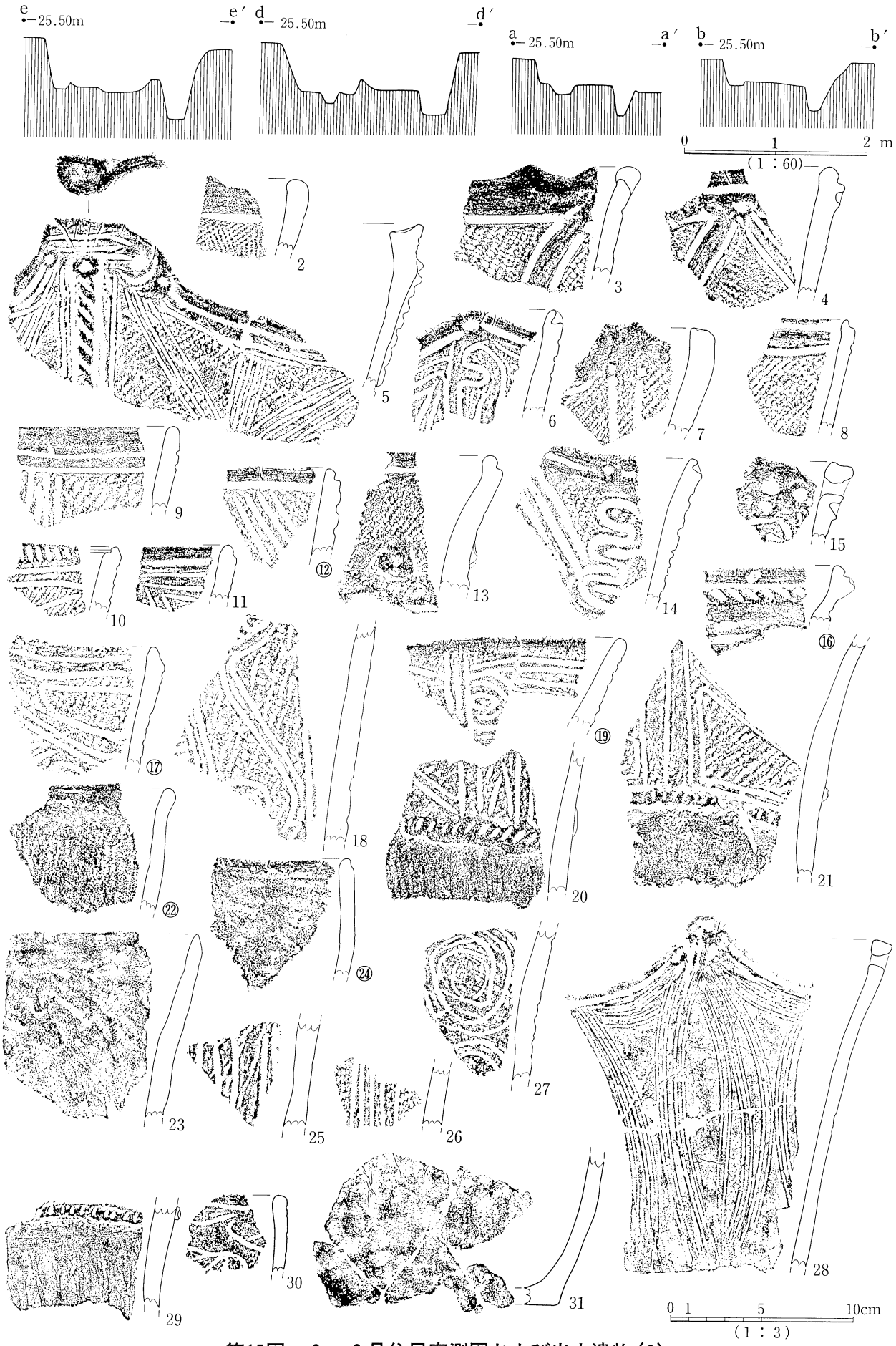


第12図　6号住居実測図および出土遺物

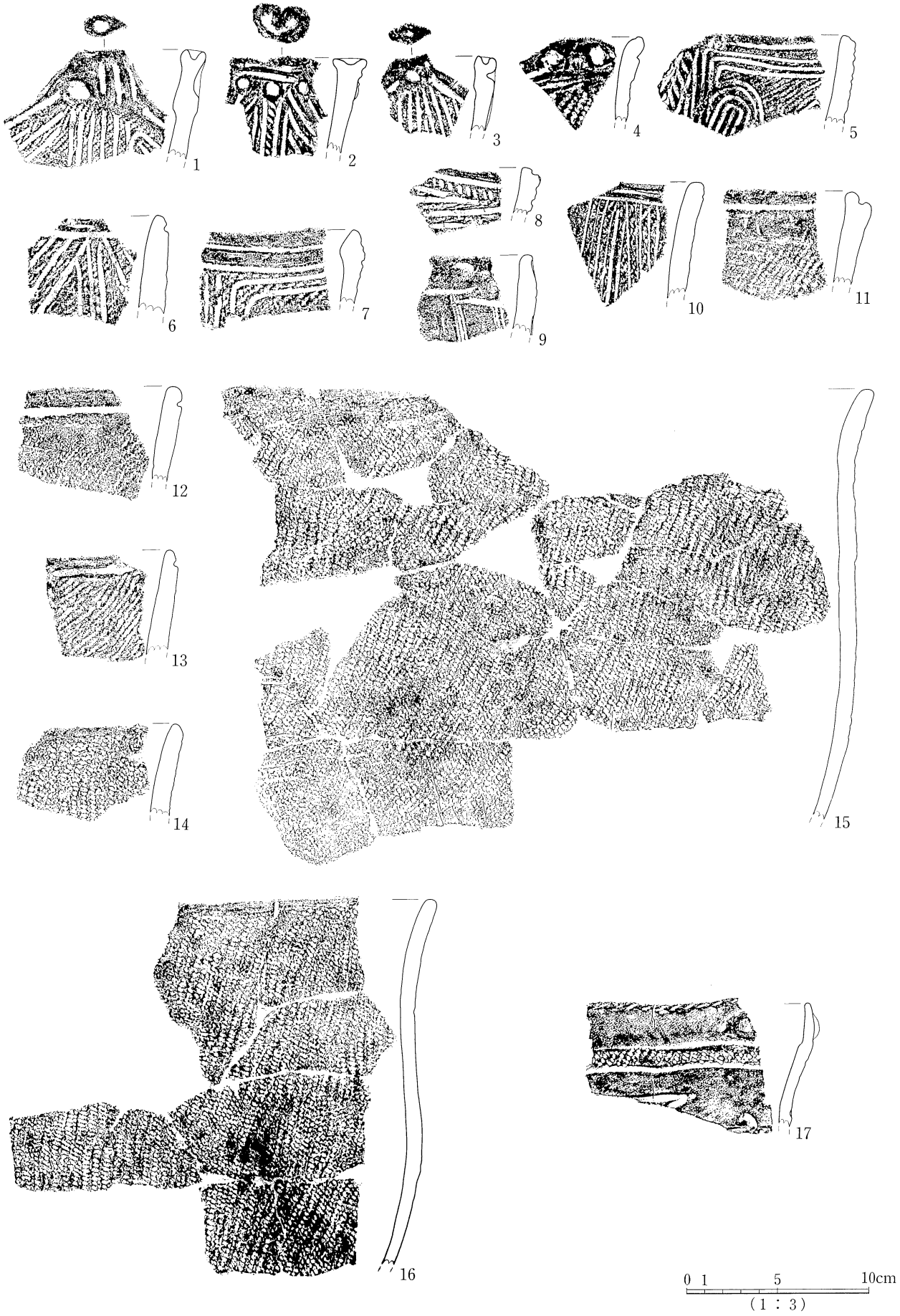


第13図　7号住居実測図および出土遺物

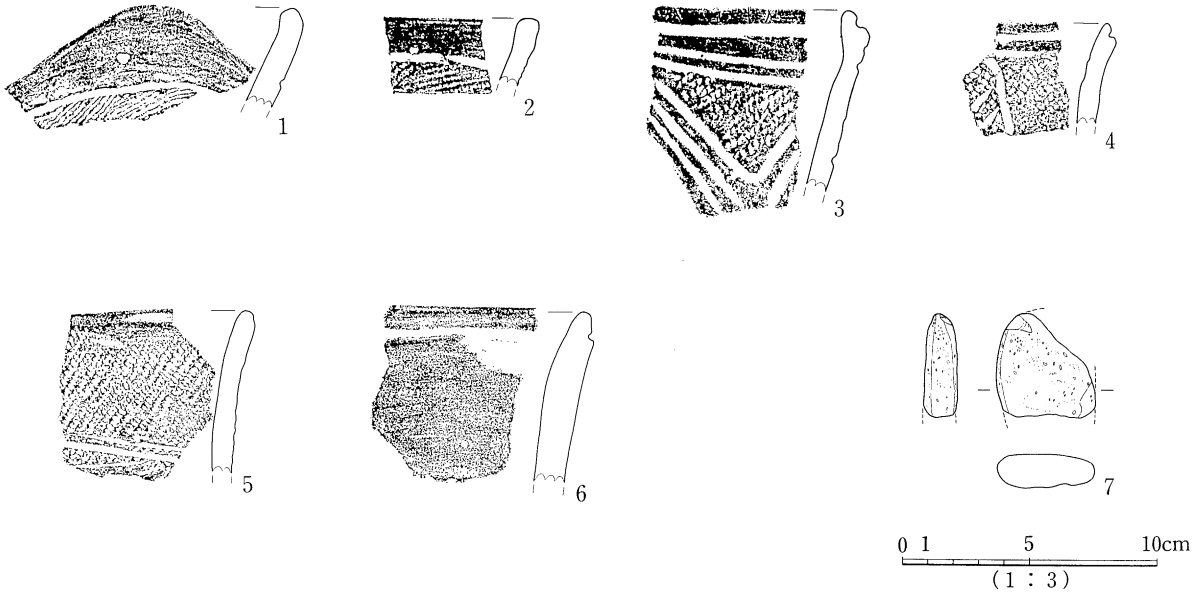
第14図　8・9号住居実測図および出土遺物(1)



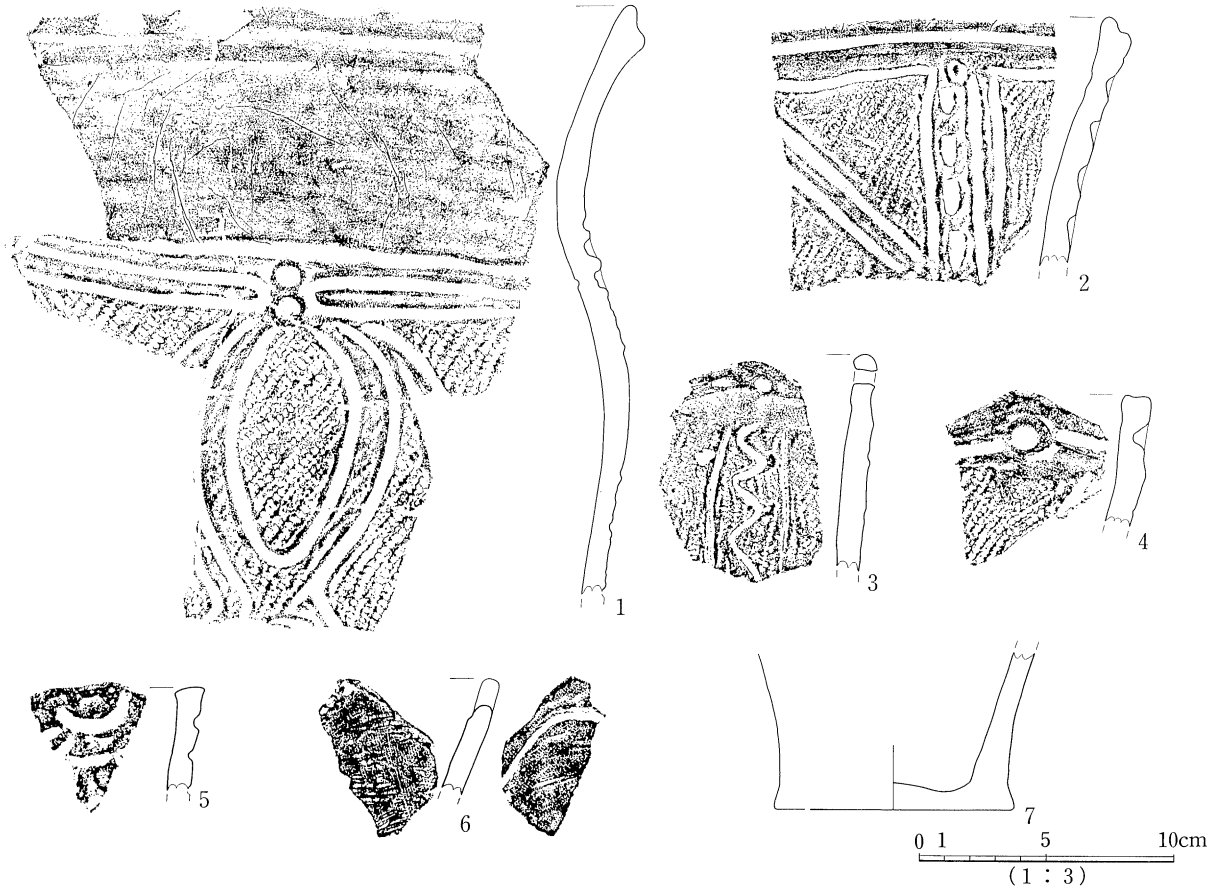
第15図　8・9号住居実測図および出土遺物(2)



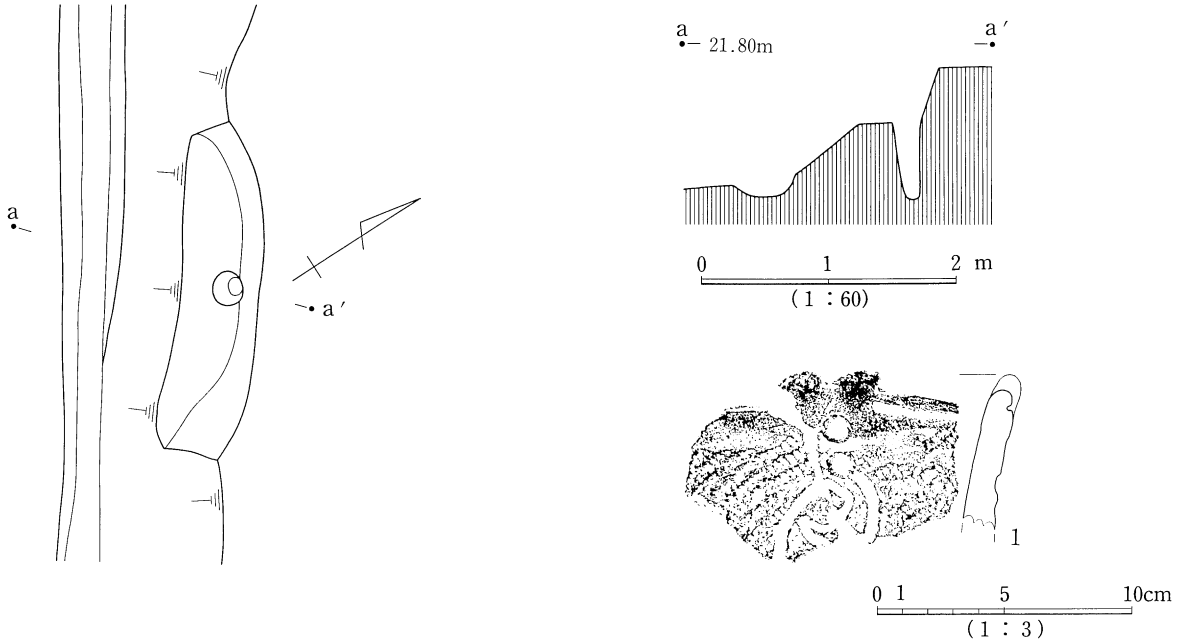
第17図　10号住居出土遺物



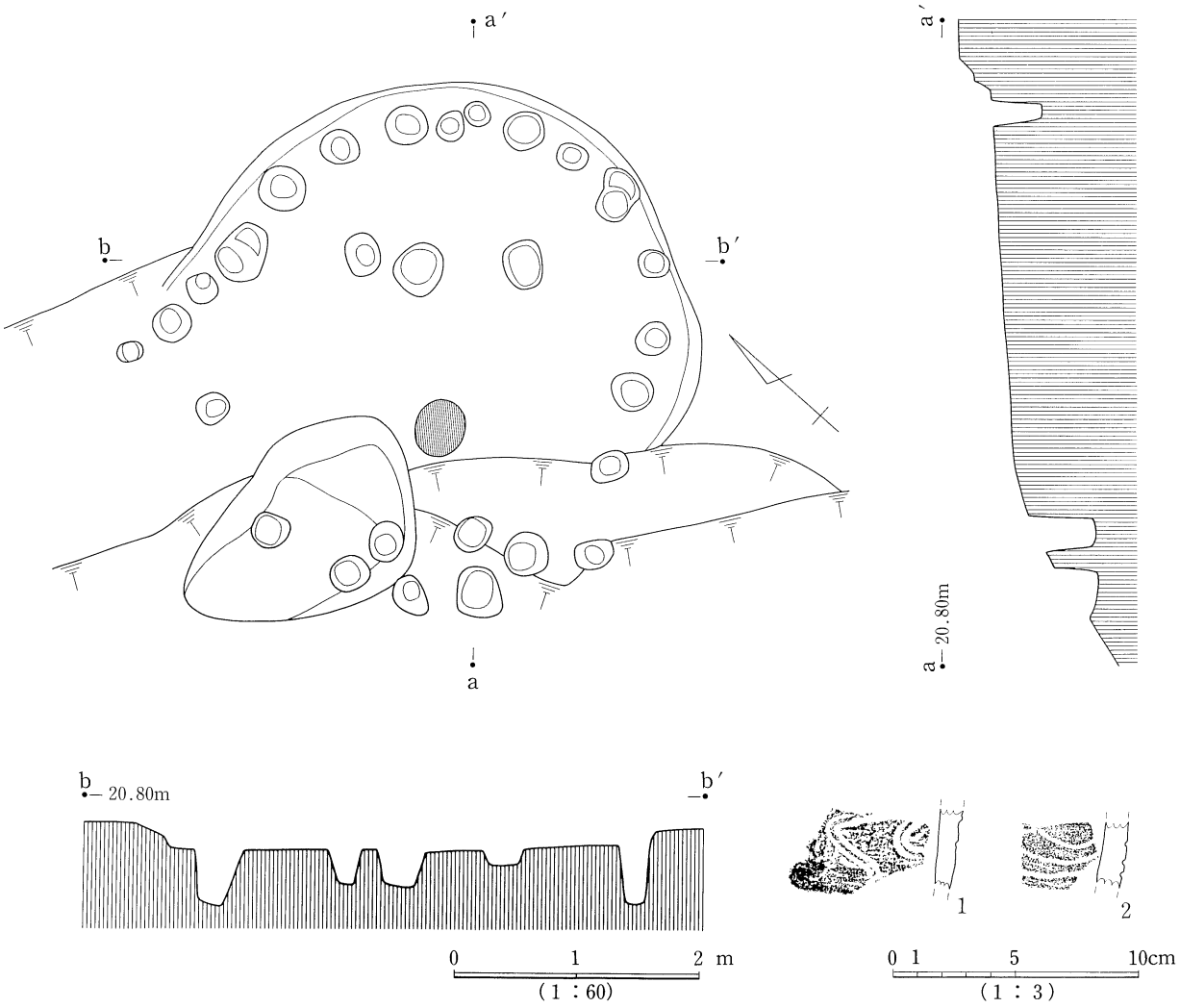
第18図　11号住居出土遺物



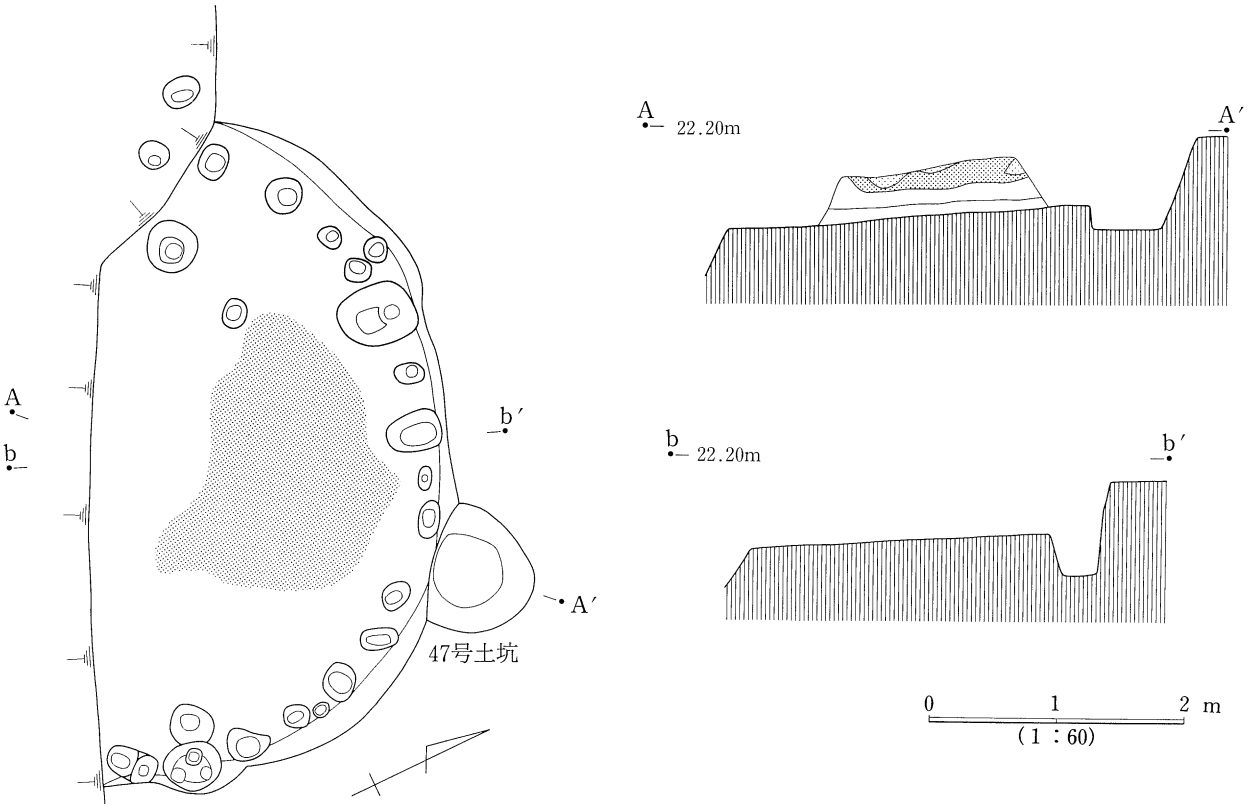
第19図　12号住居出土遺物

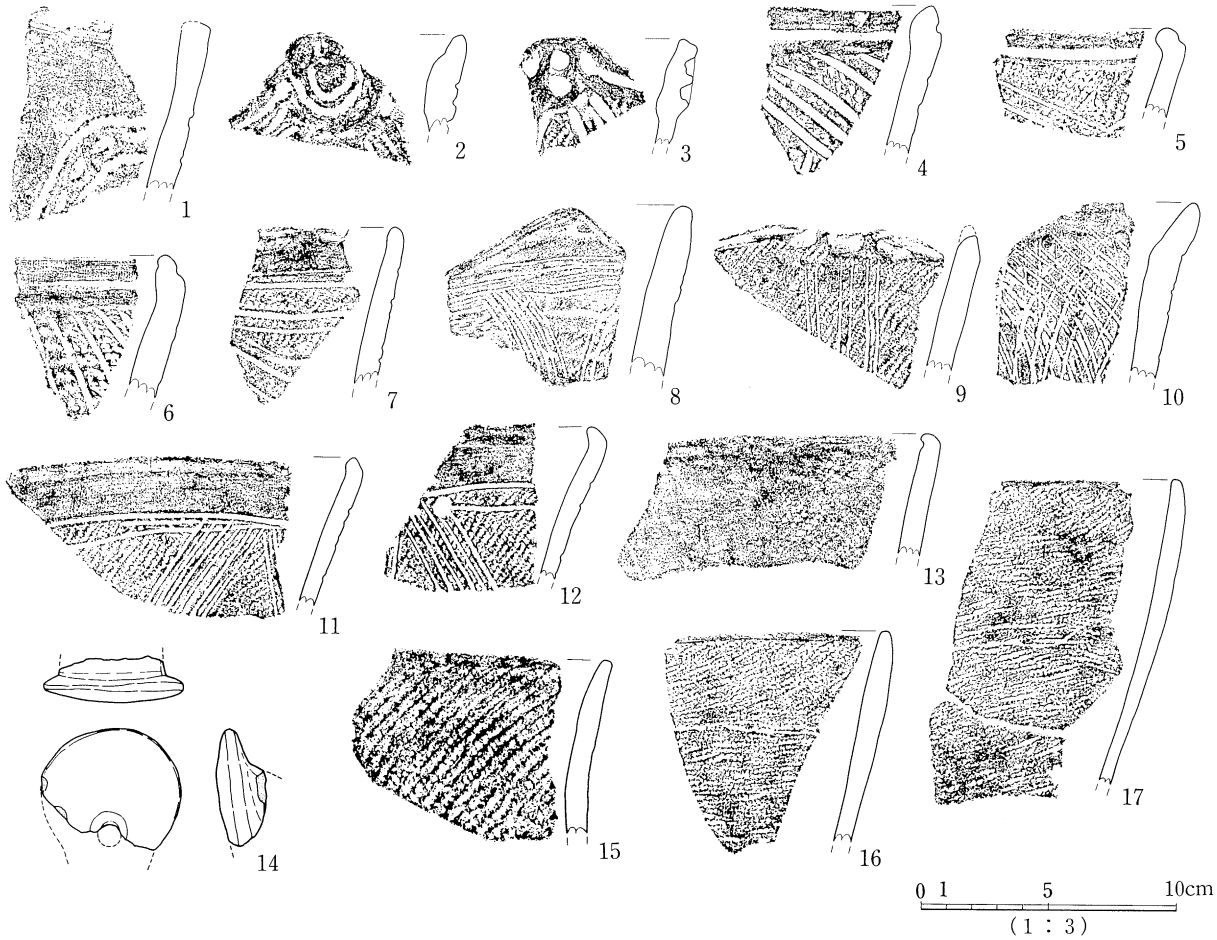


第20図　14号住居実測図および出土遺物

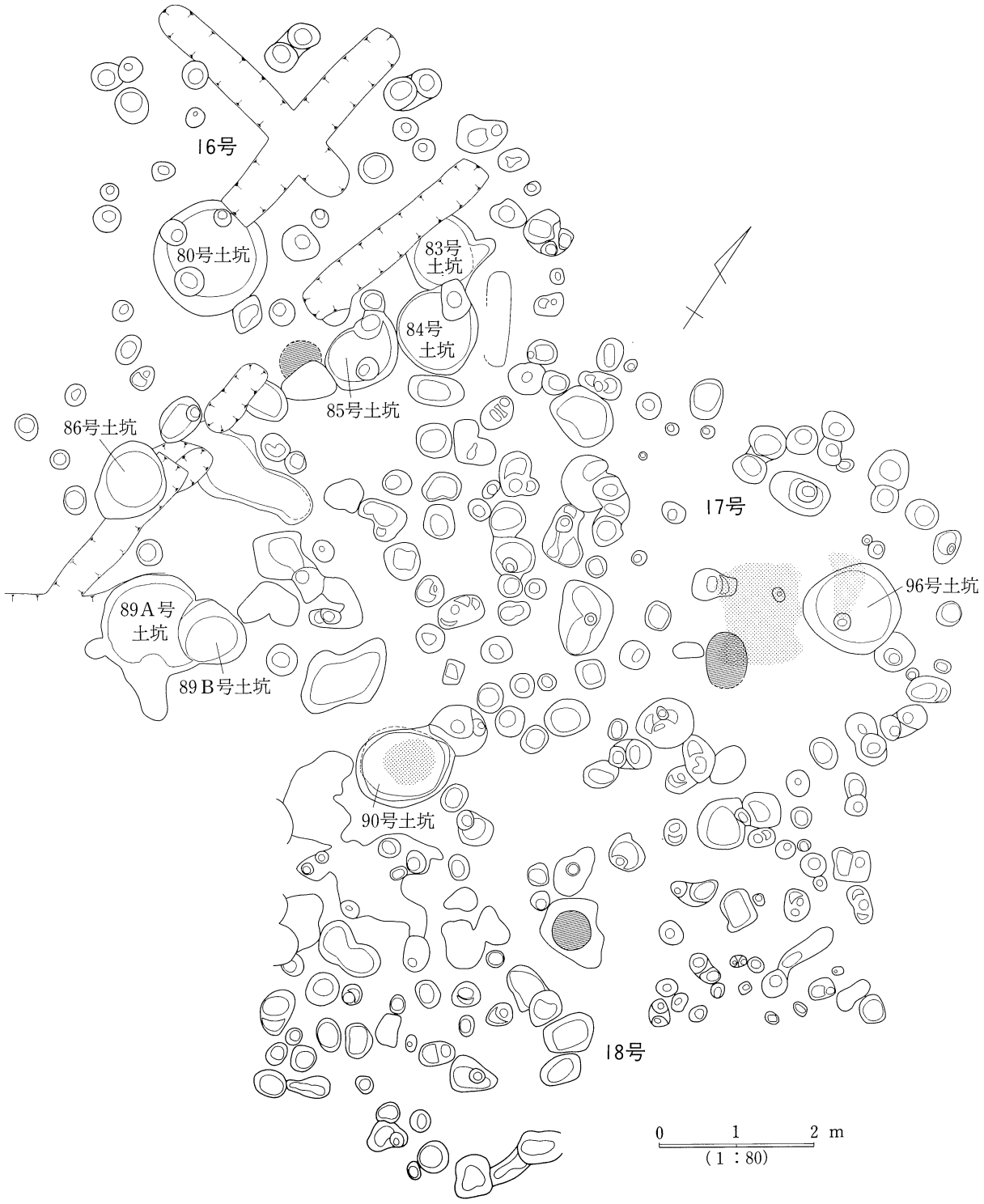


第21図　13号住居実測図および出土遺物

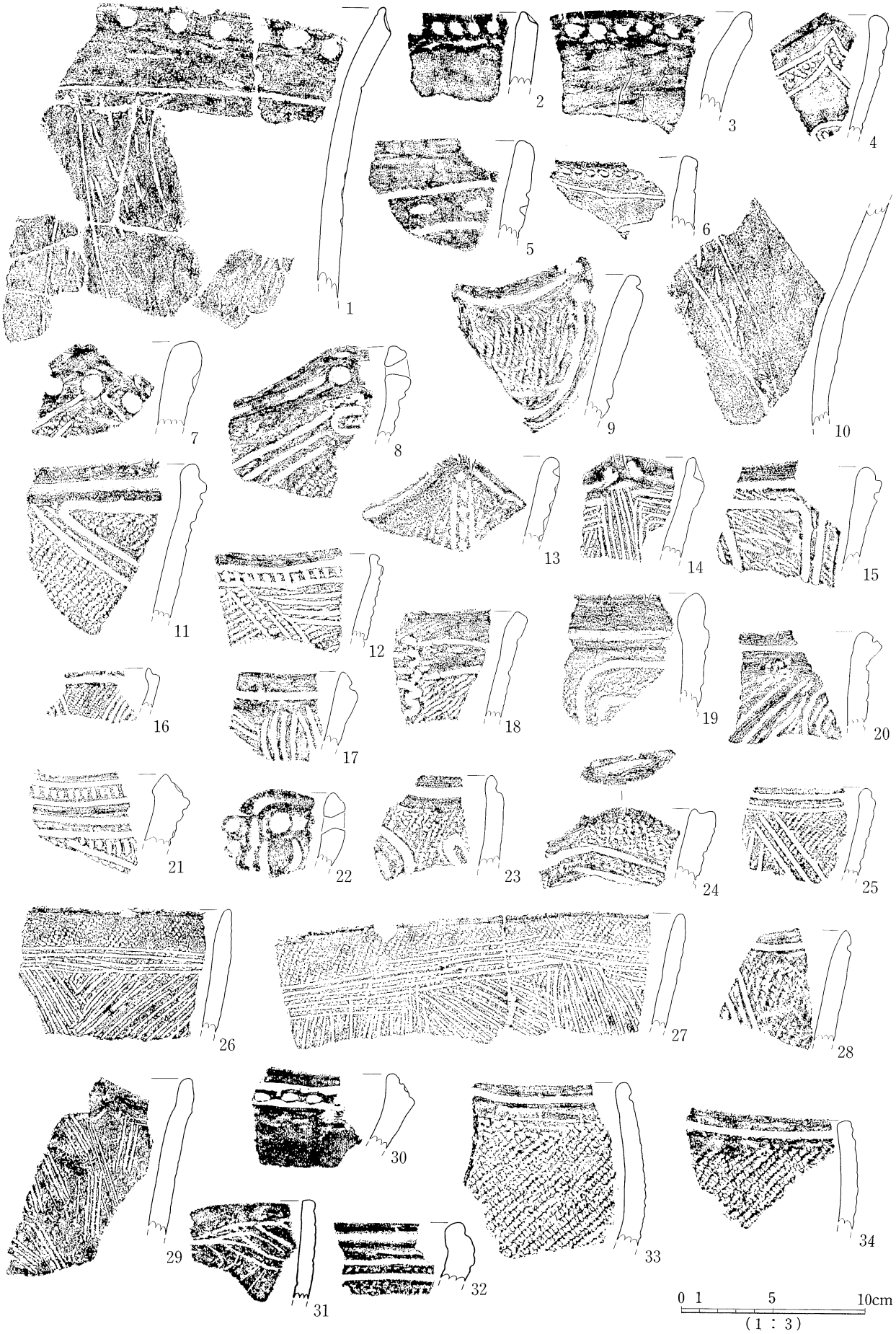




第22図　15号住居実測図および出土遺物

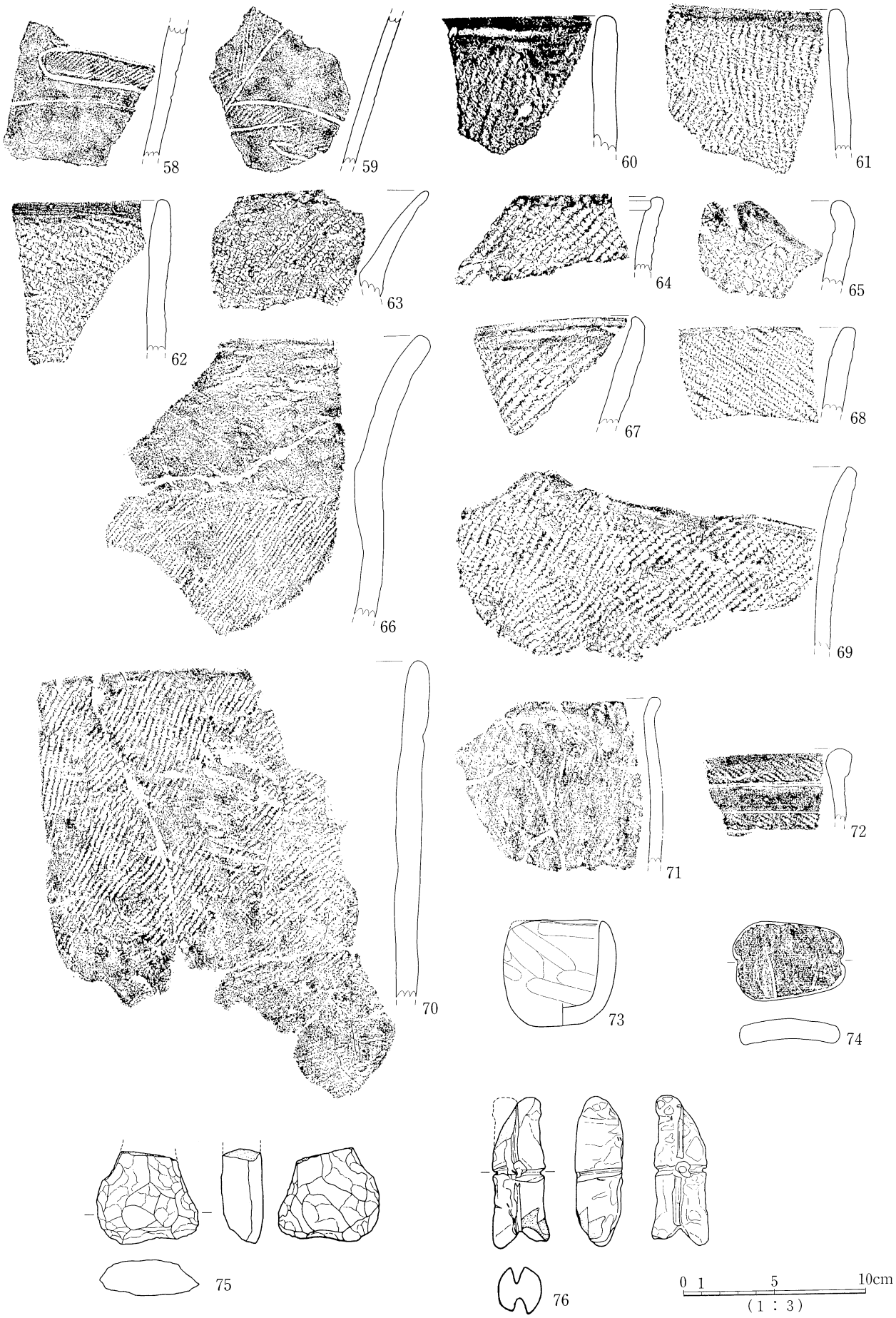


第23図　16・17・18号住居実測図

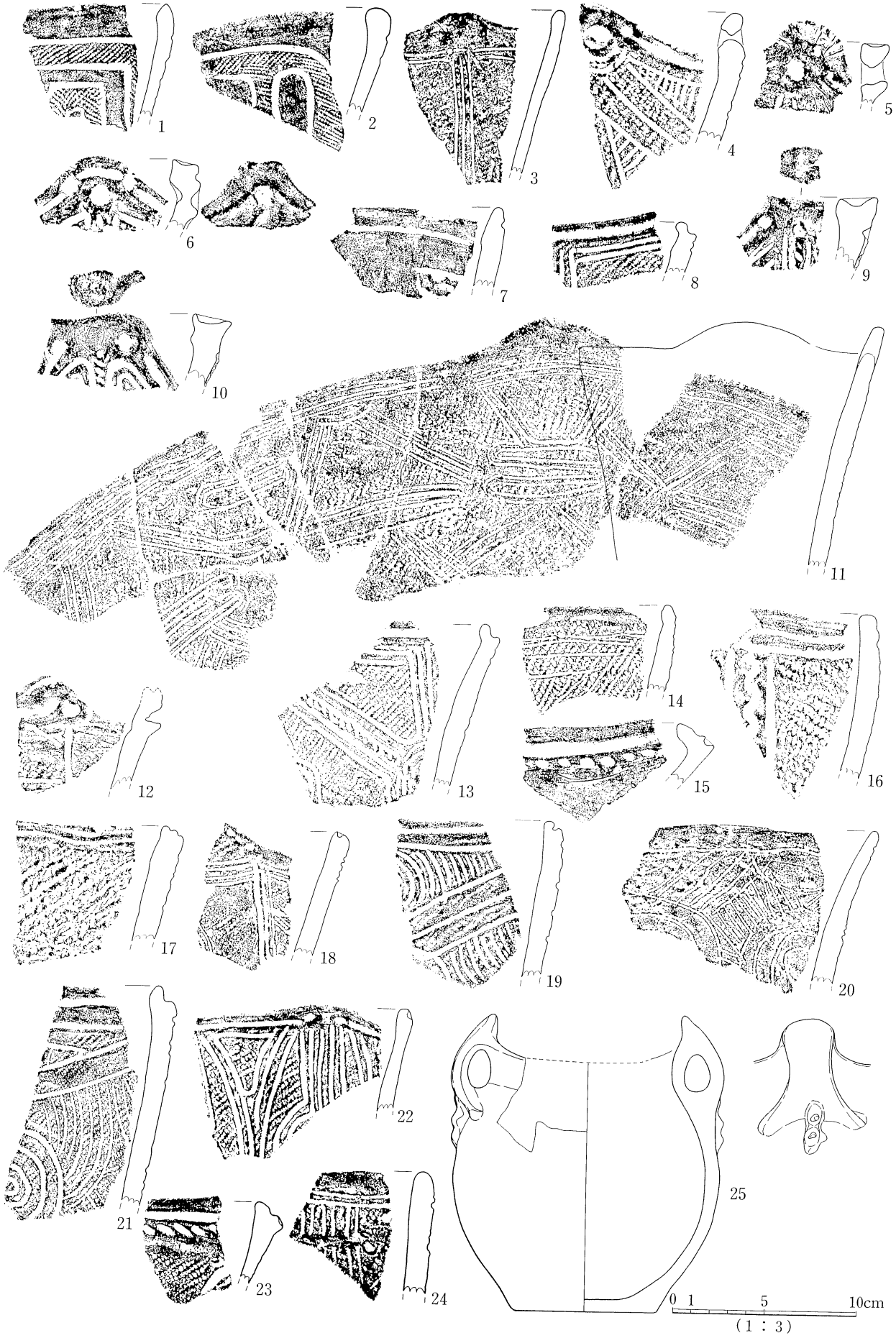


第25図　19号住居出土遺物(1)

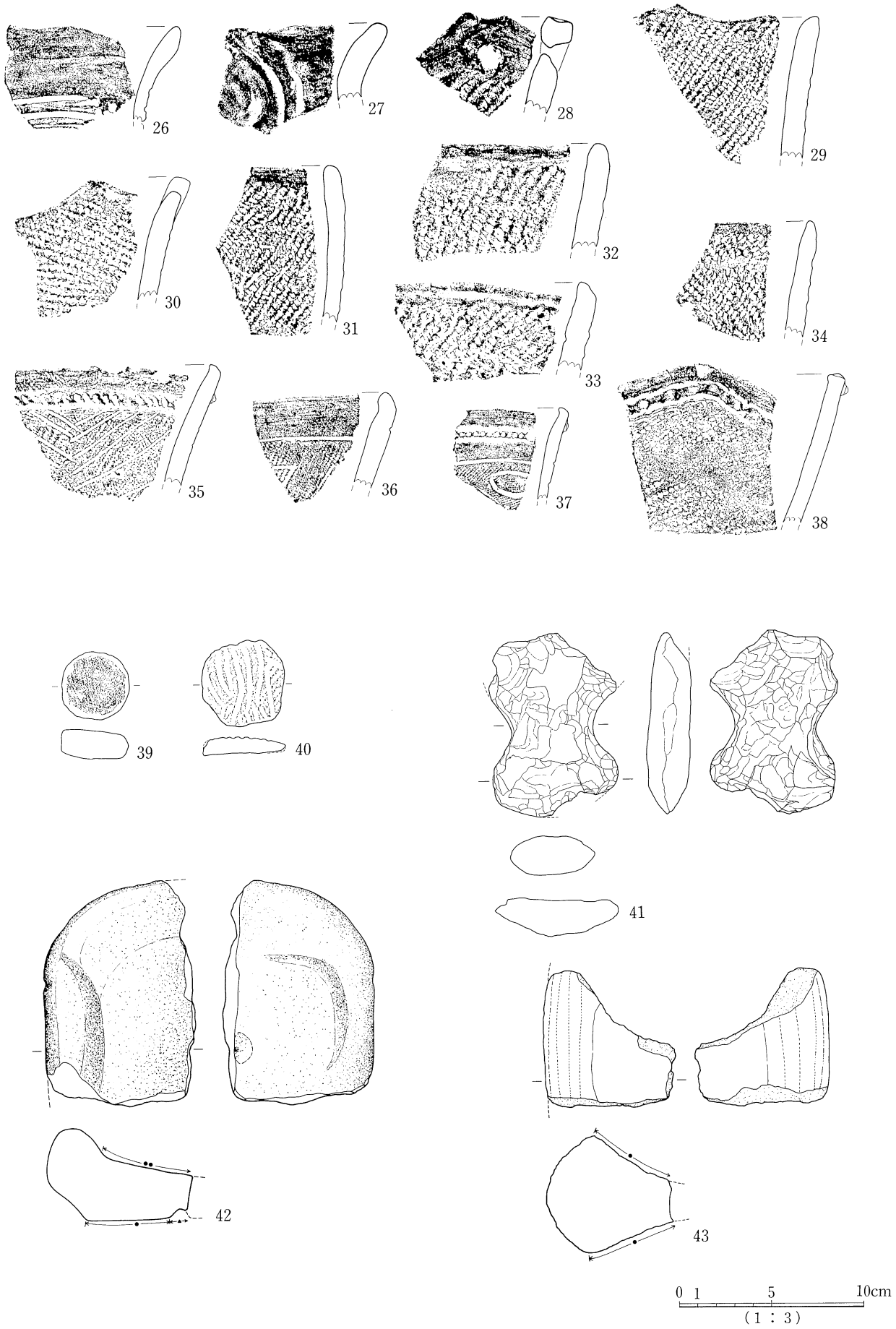
第26図　19号住居出土遺物(2)



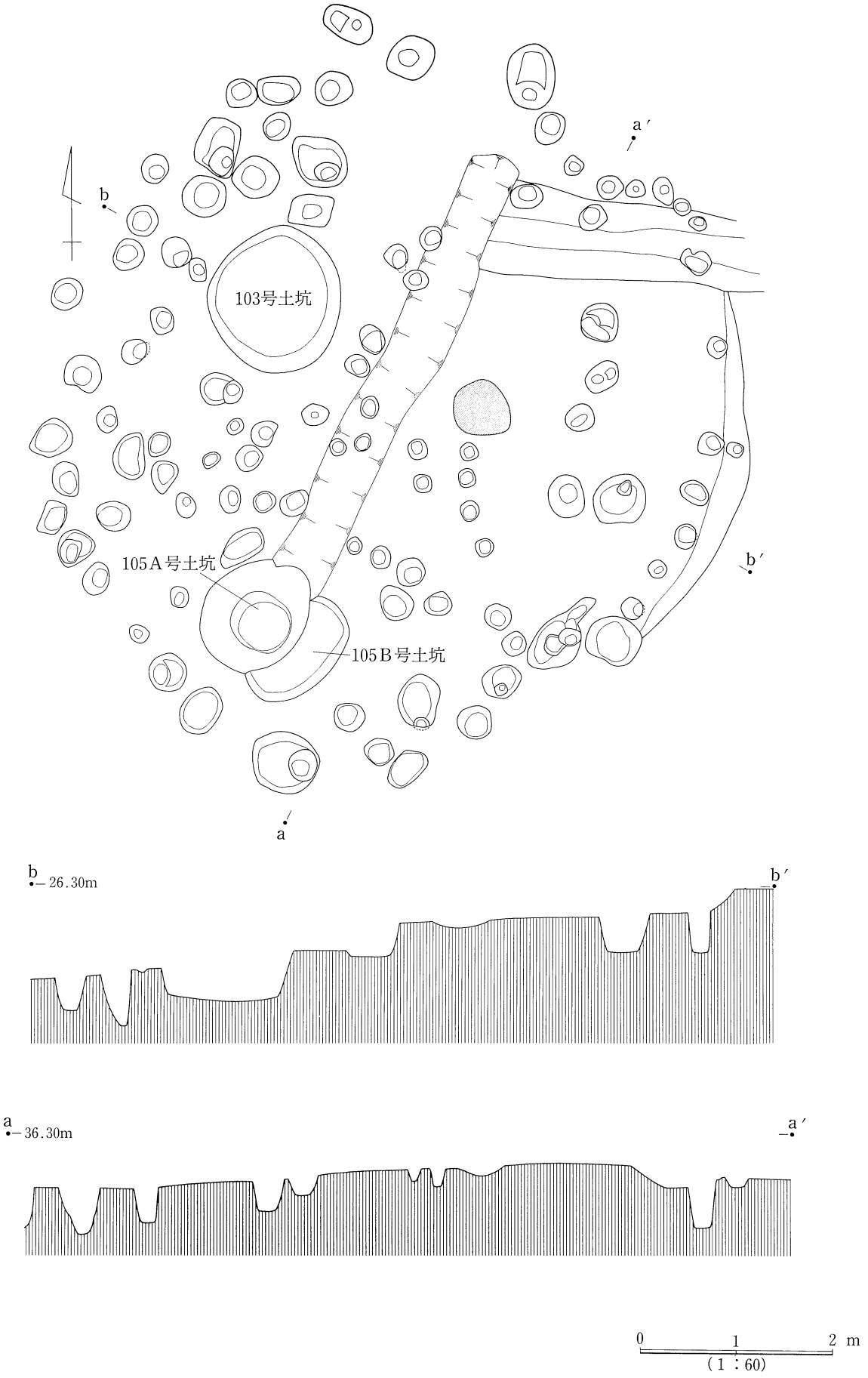
第27図　19号住居出土遺物(3)



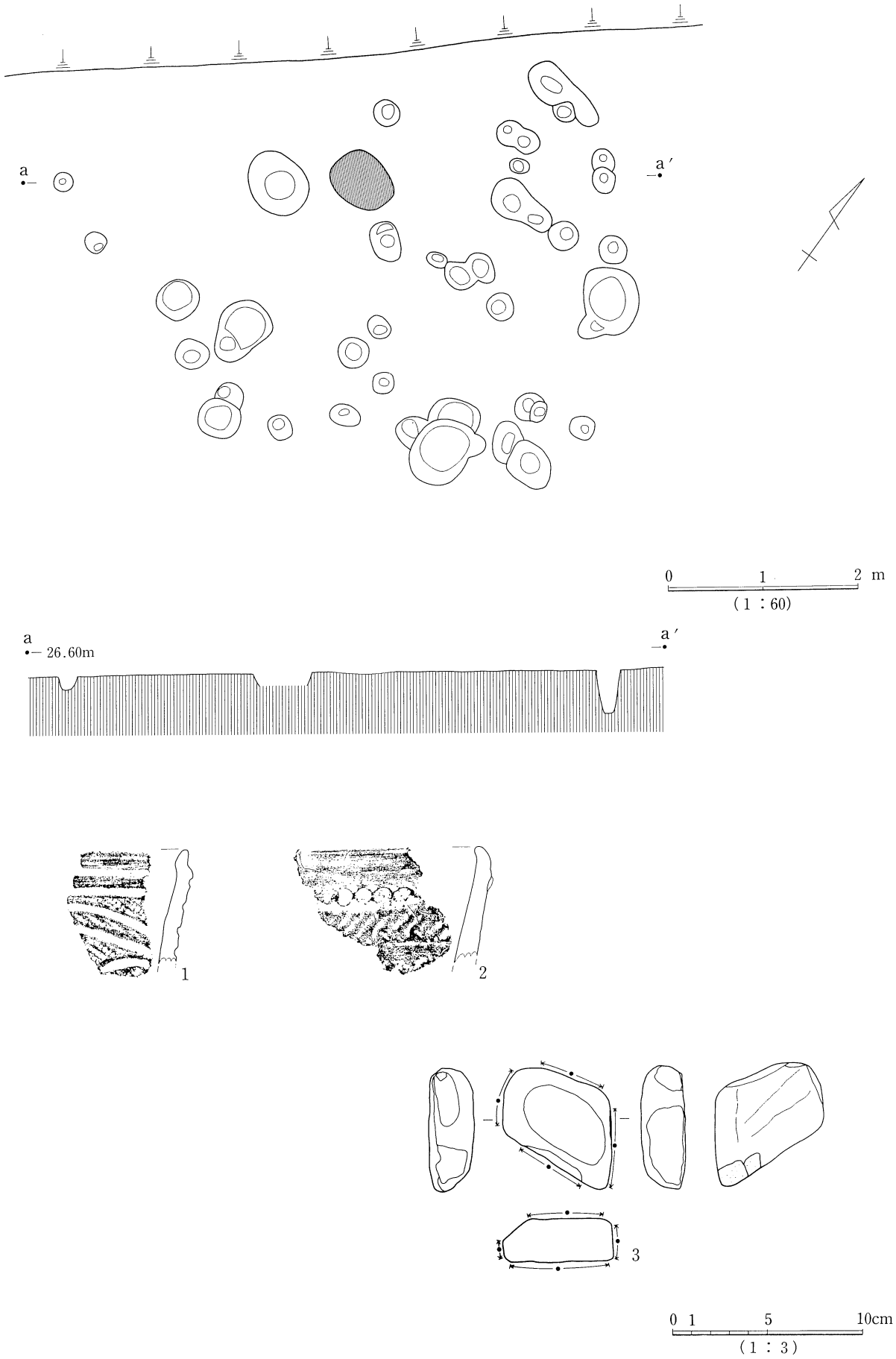
第28図　20号住居出土遺物(1)



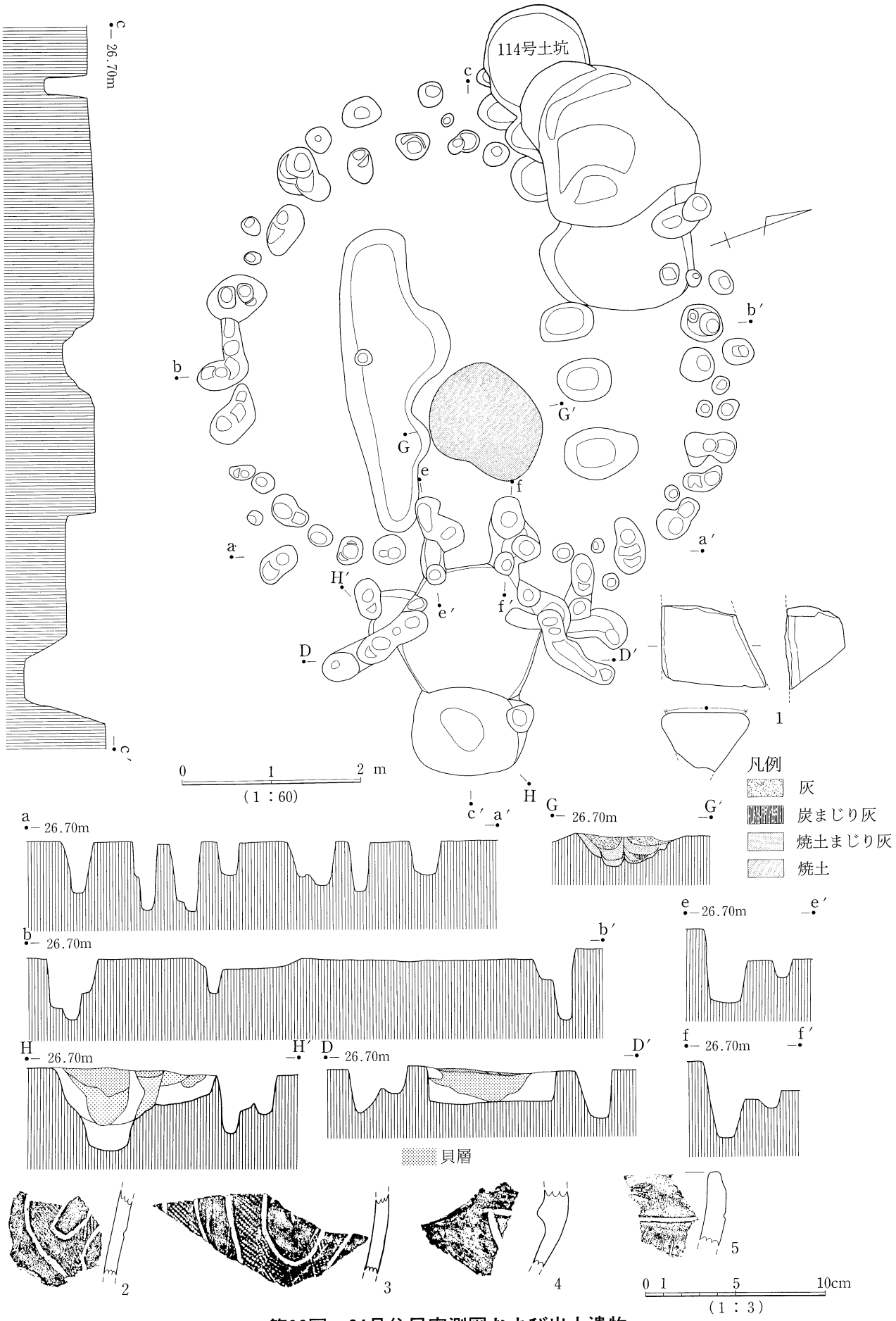
第29図　20号住居出土遺物(2)



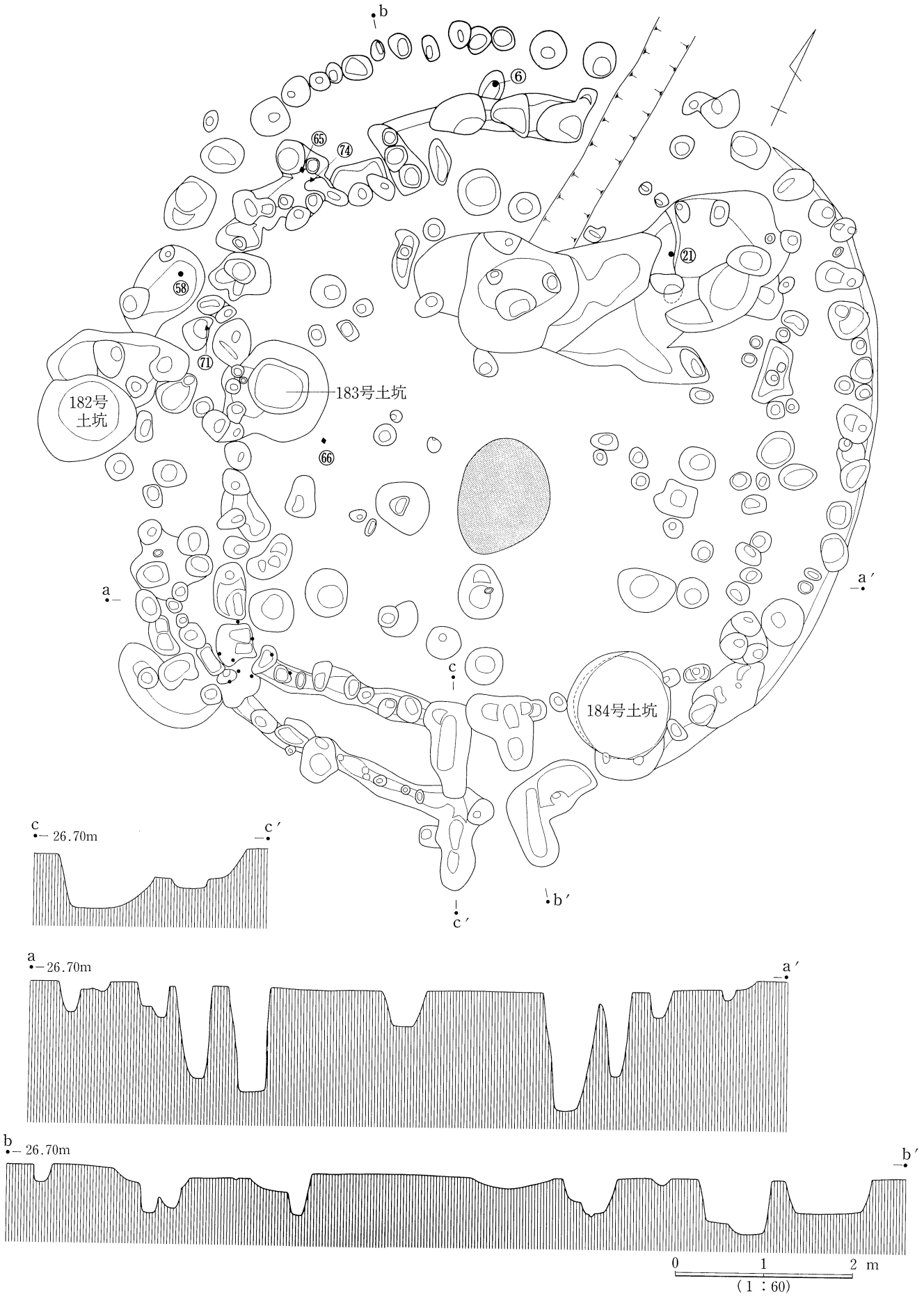
第30図　22号住居実測図



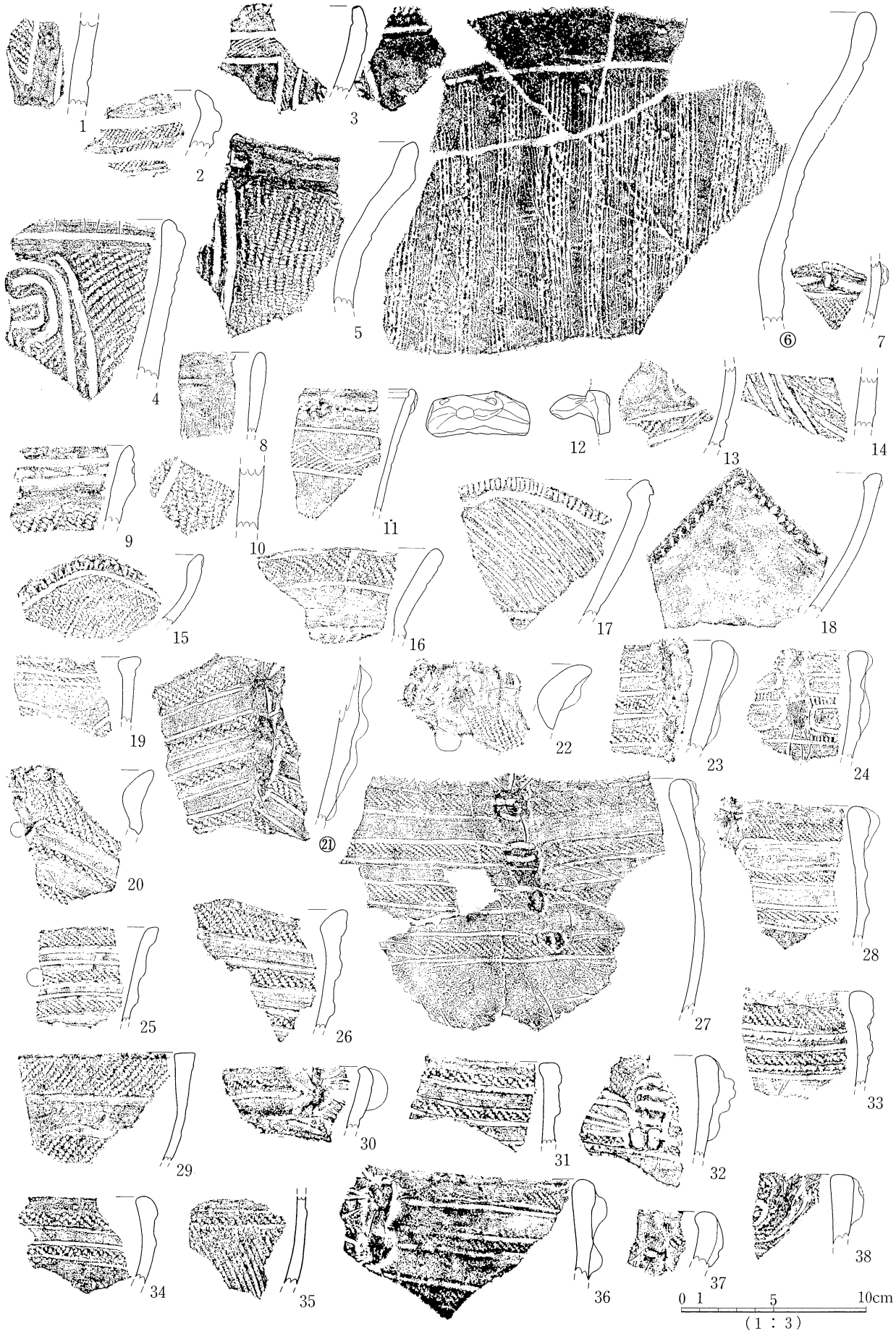
第31図　23号住居実測図および出土遺物



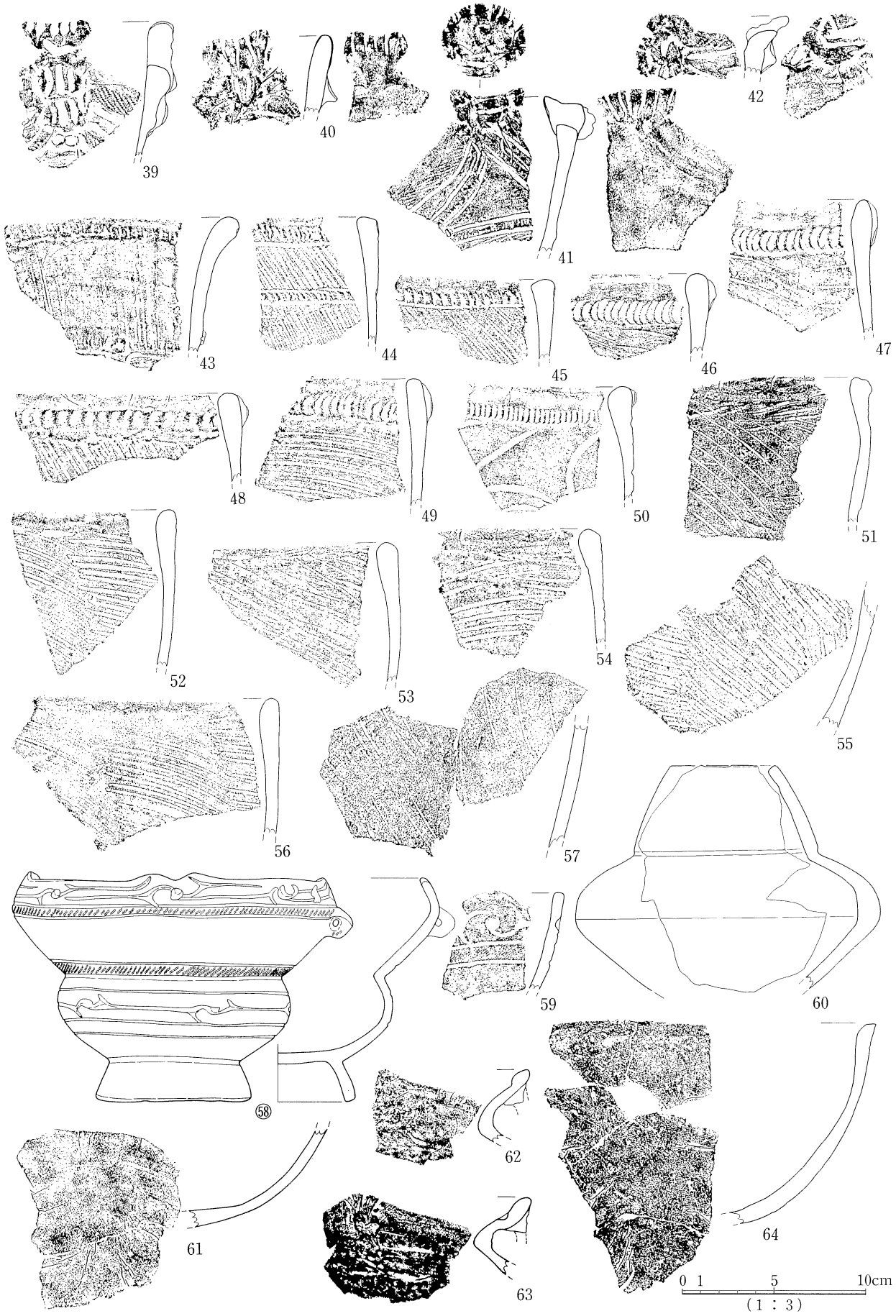
第32図　24号住居実測図および出土遺物



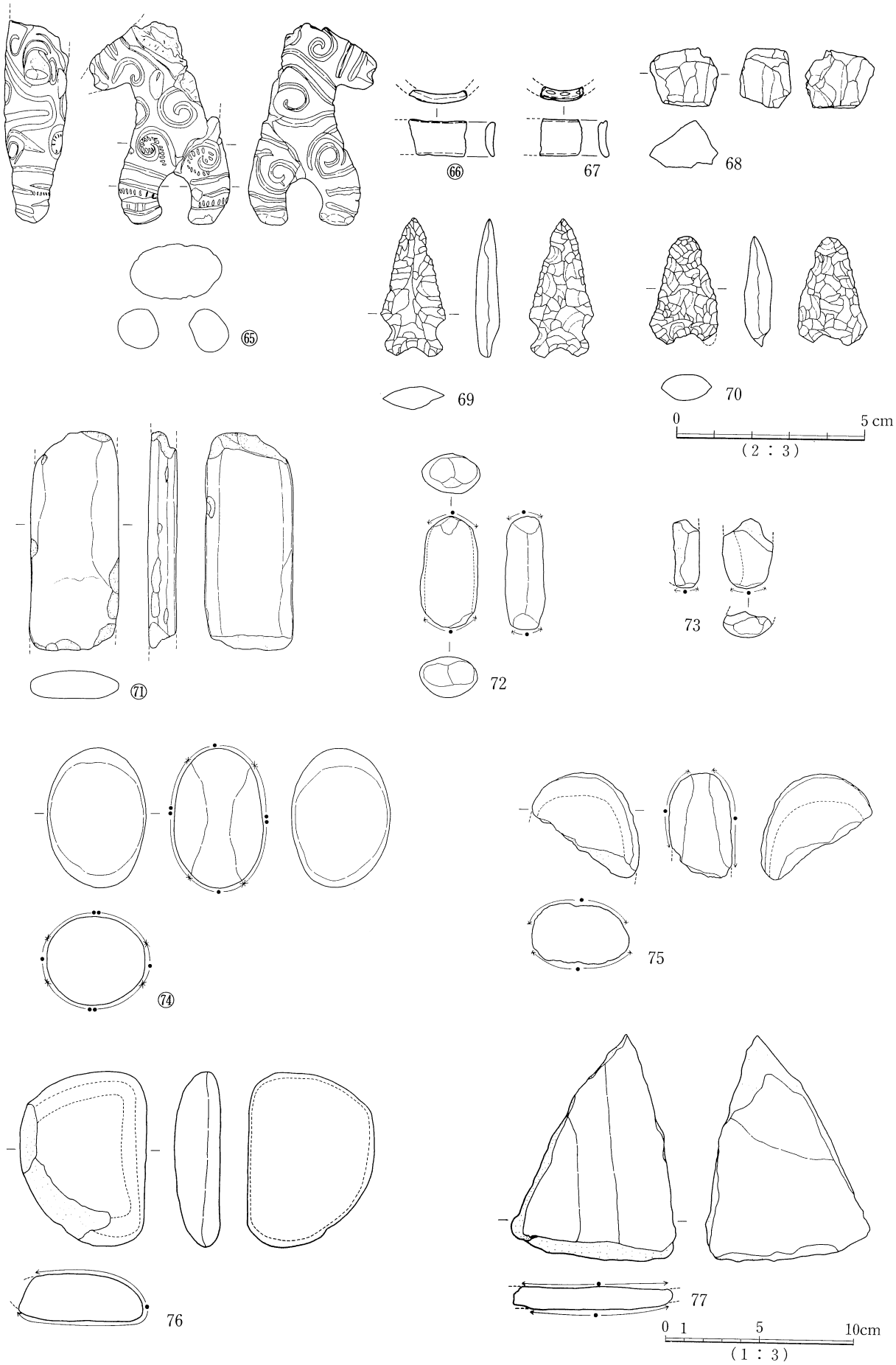
第33図　25号住居実測図



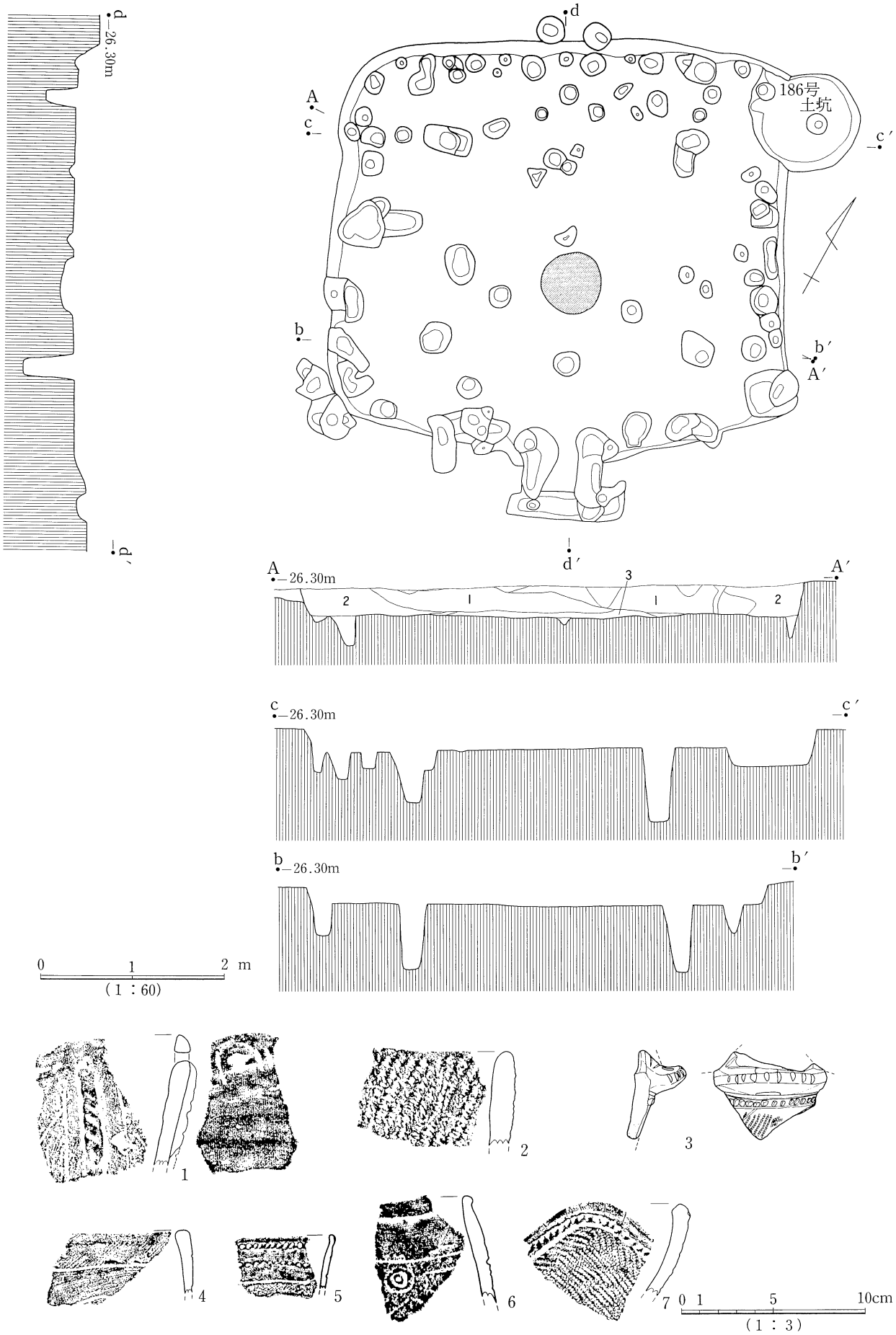
第34図　25号住居出土遺物(1)



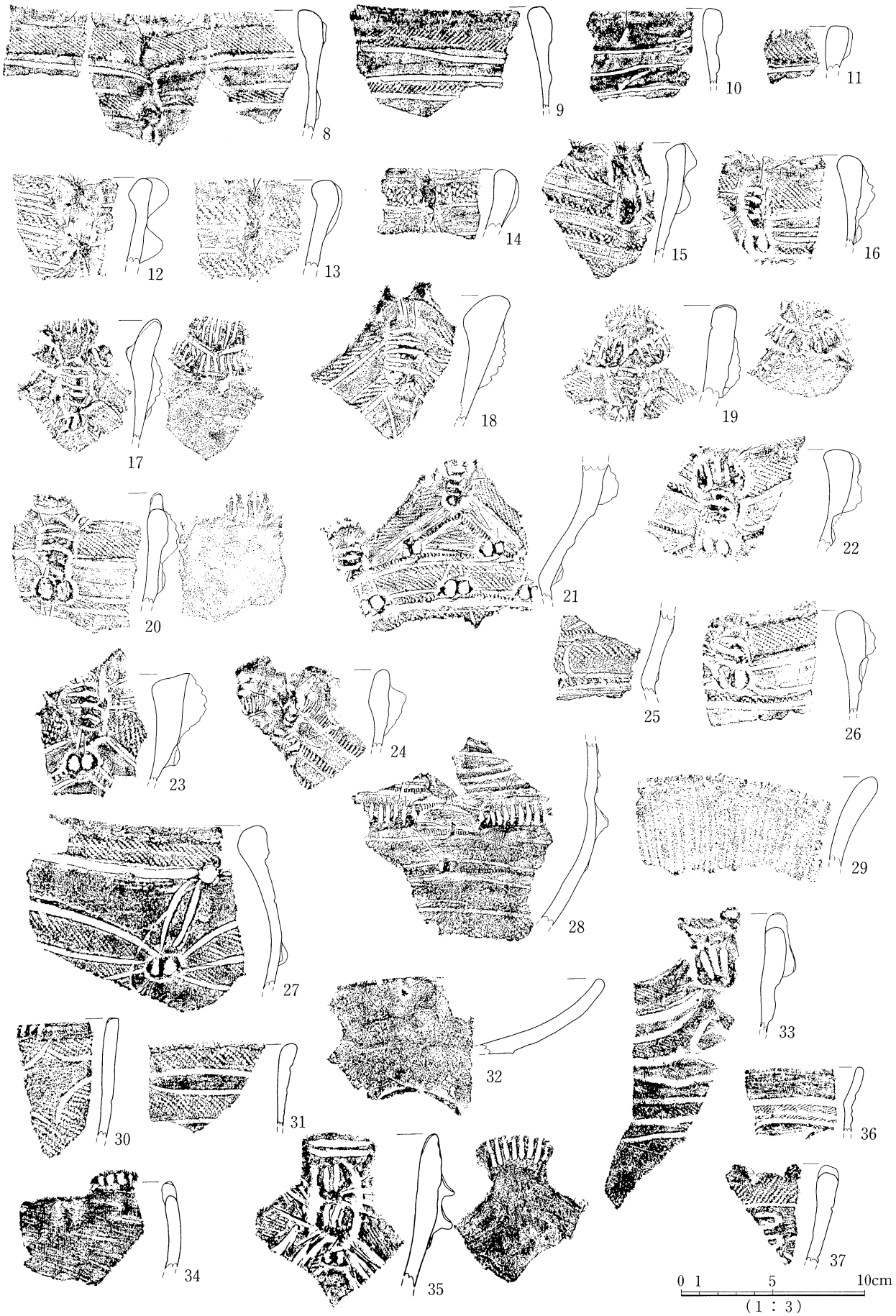
第35図　25号住居出土遺物(2)



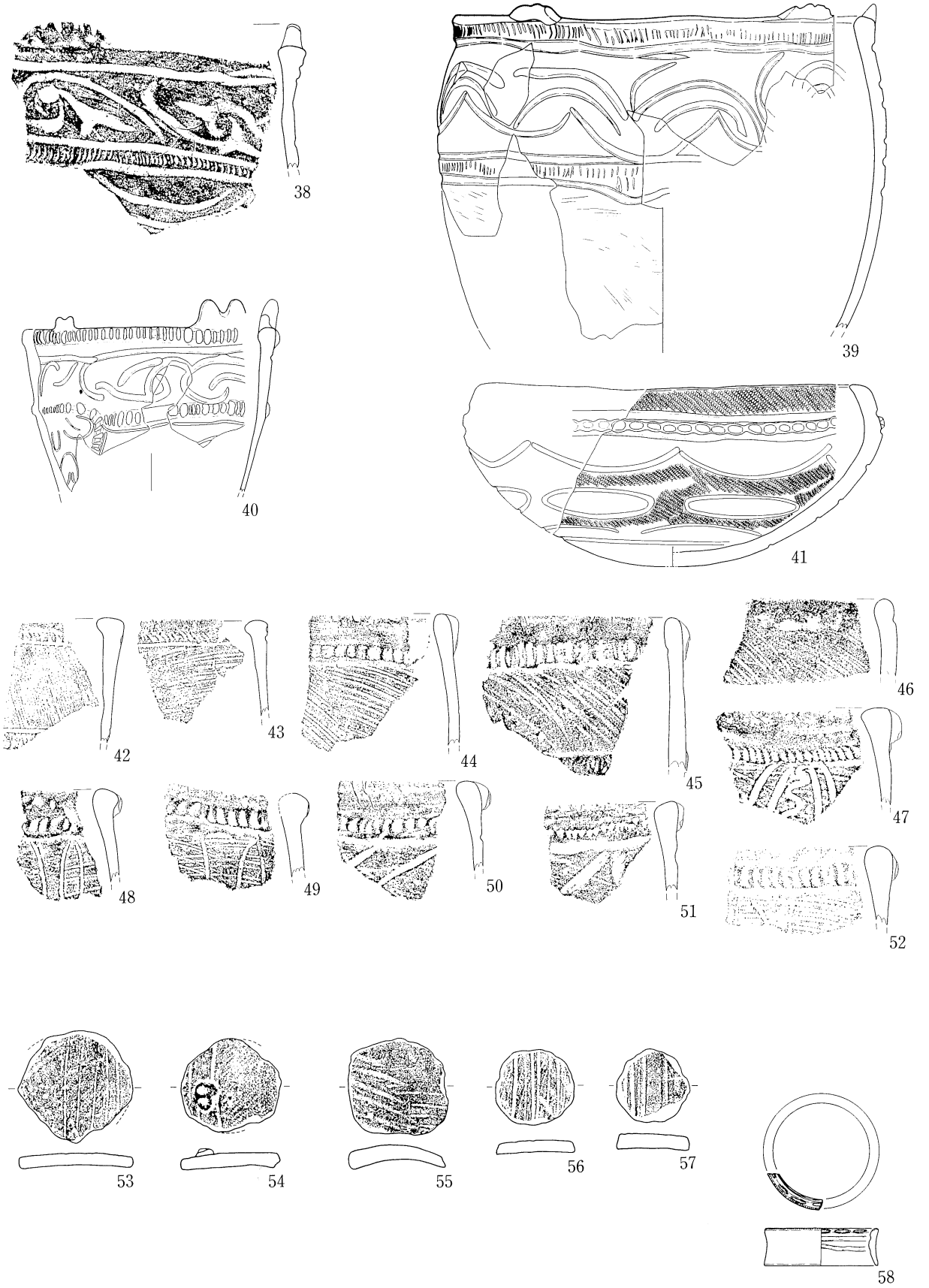
第36図　25号住居出土遺物(3)



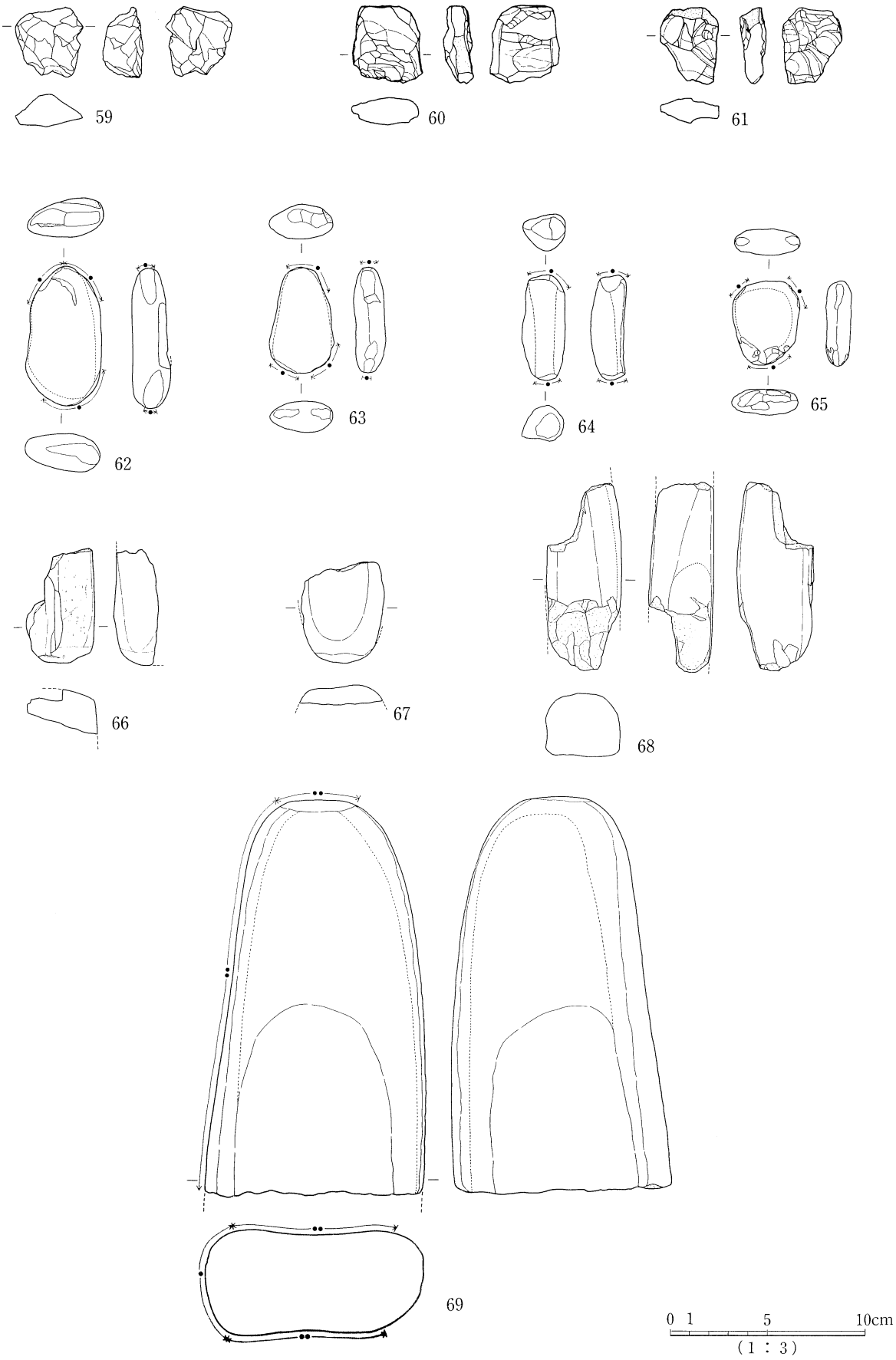
第37図　26号住居実測図および出土遺物(1)



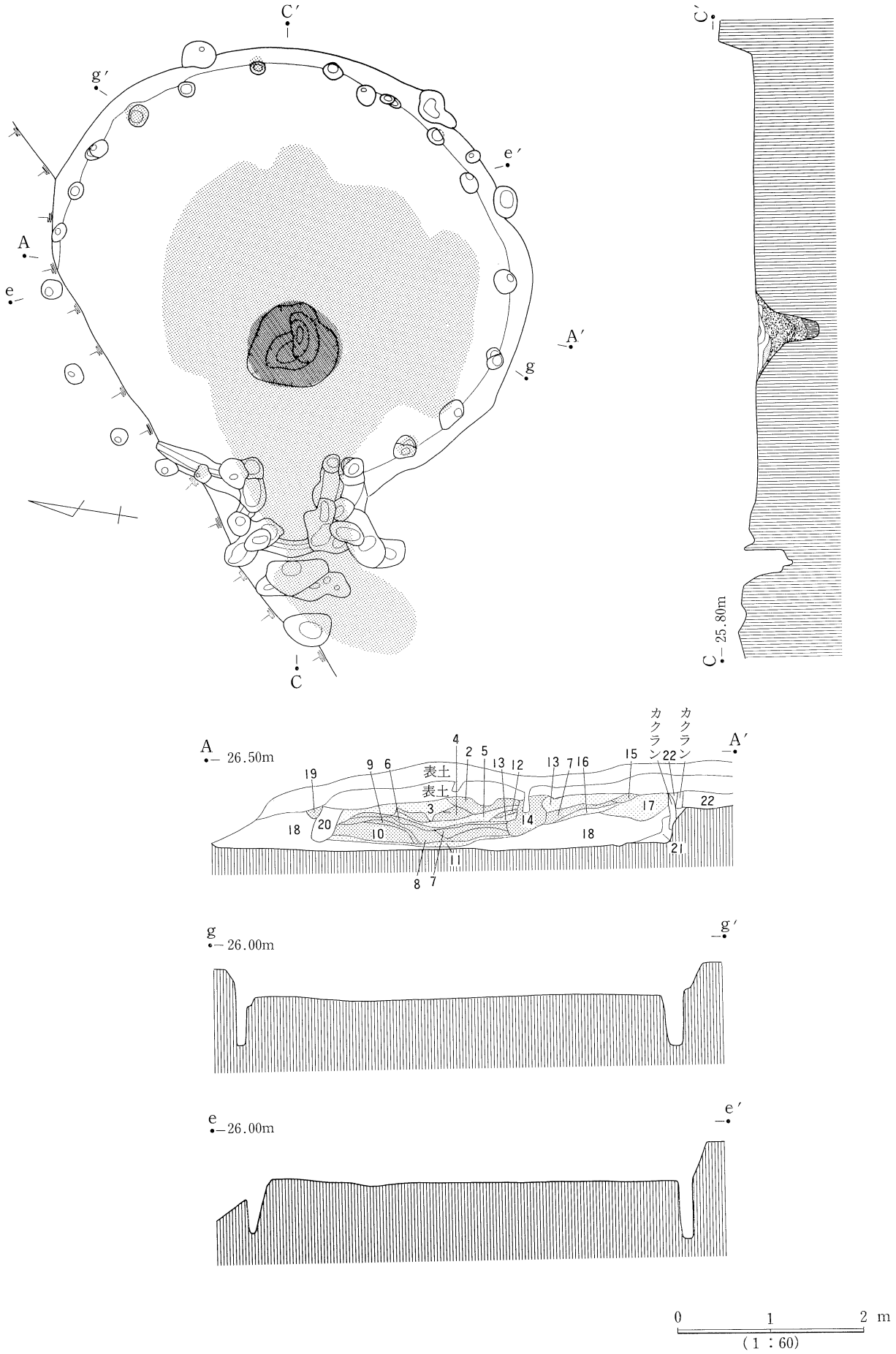
第38図　26号住居出土遺物(2)



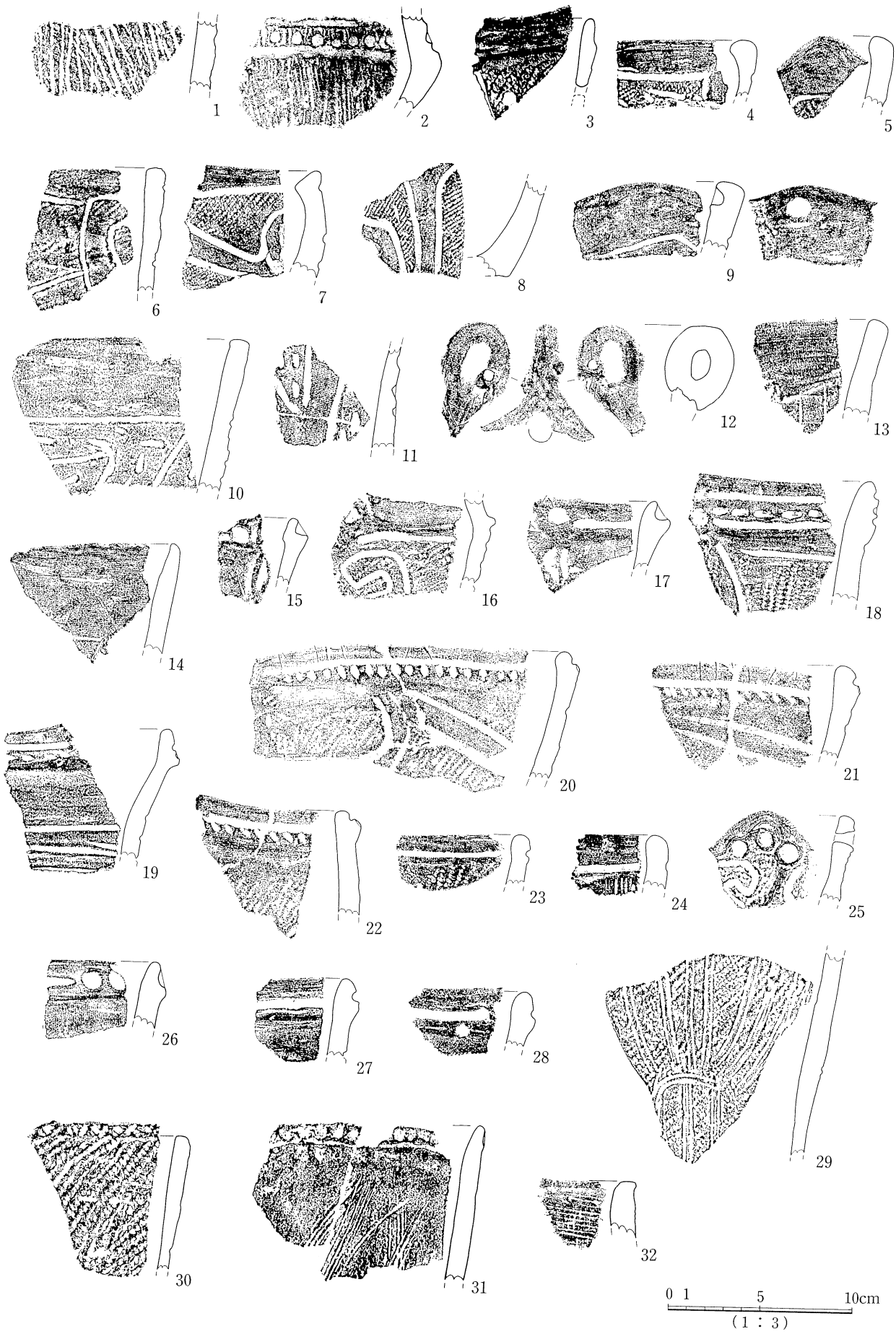
第39図　26号住居出土遺物(3)



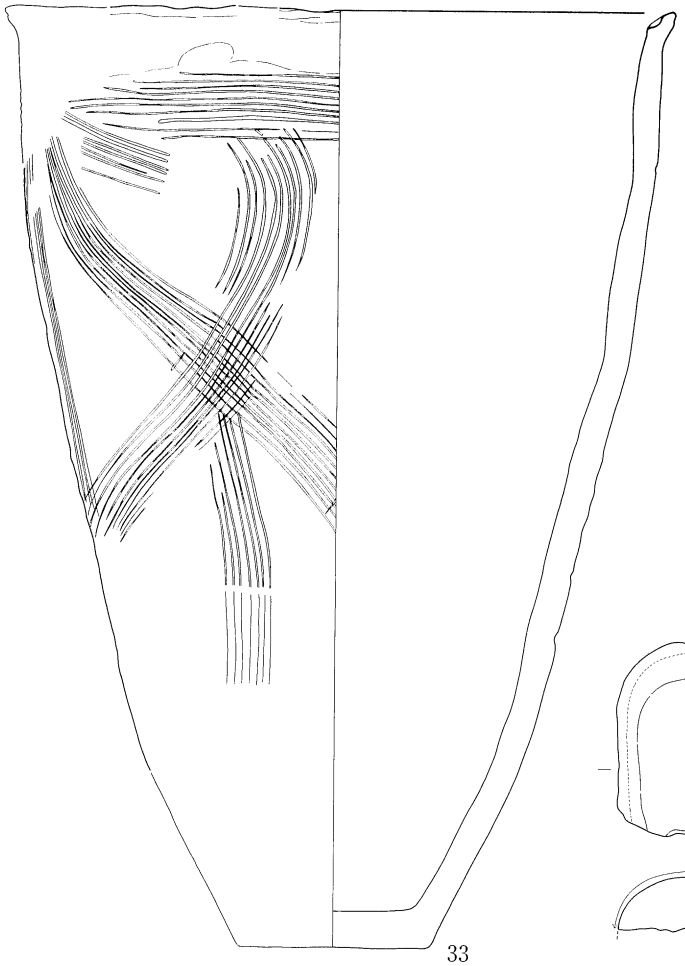
第40図　26号住居出土遺物(4)

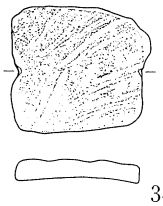


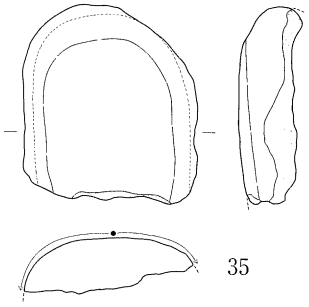
第41図　27号住居実測図

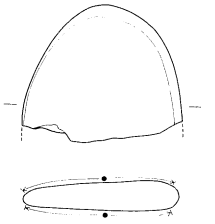


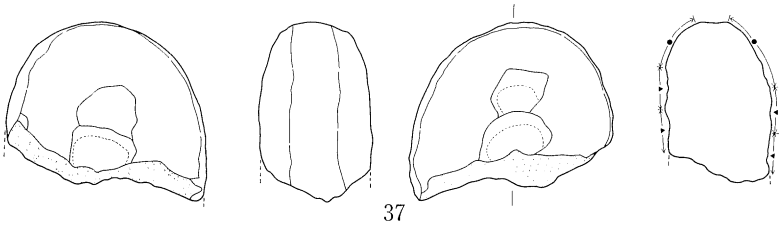
第42図　27号住居出土遺物(1)

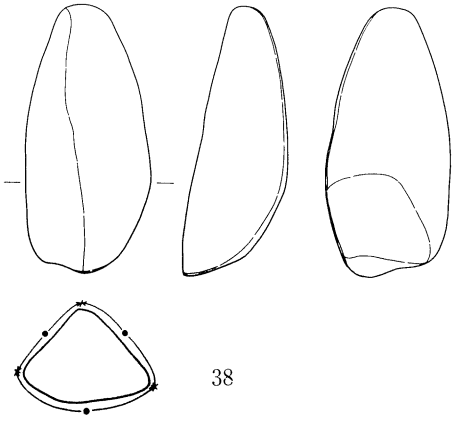


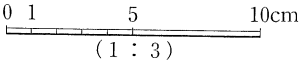






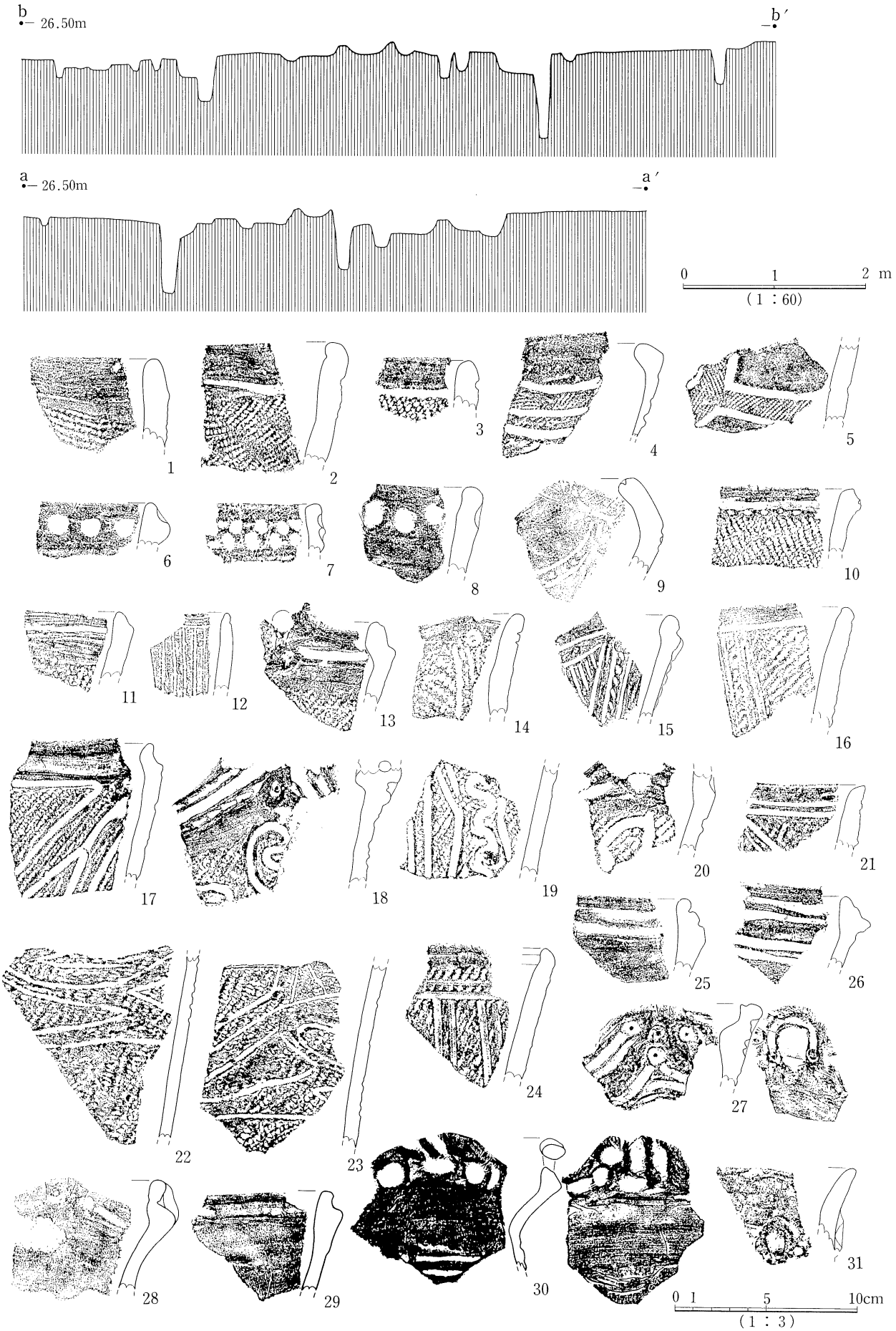




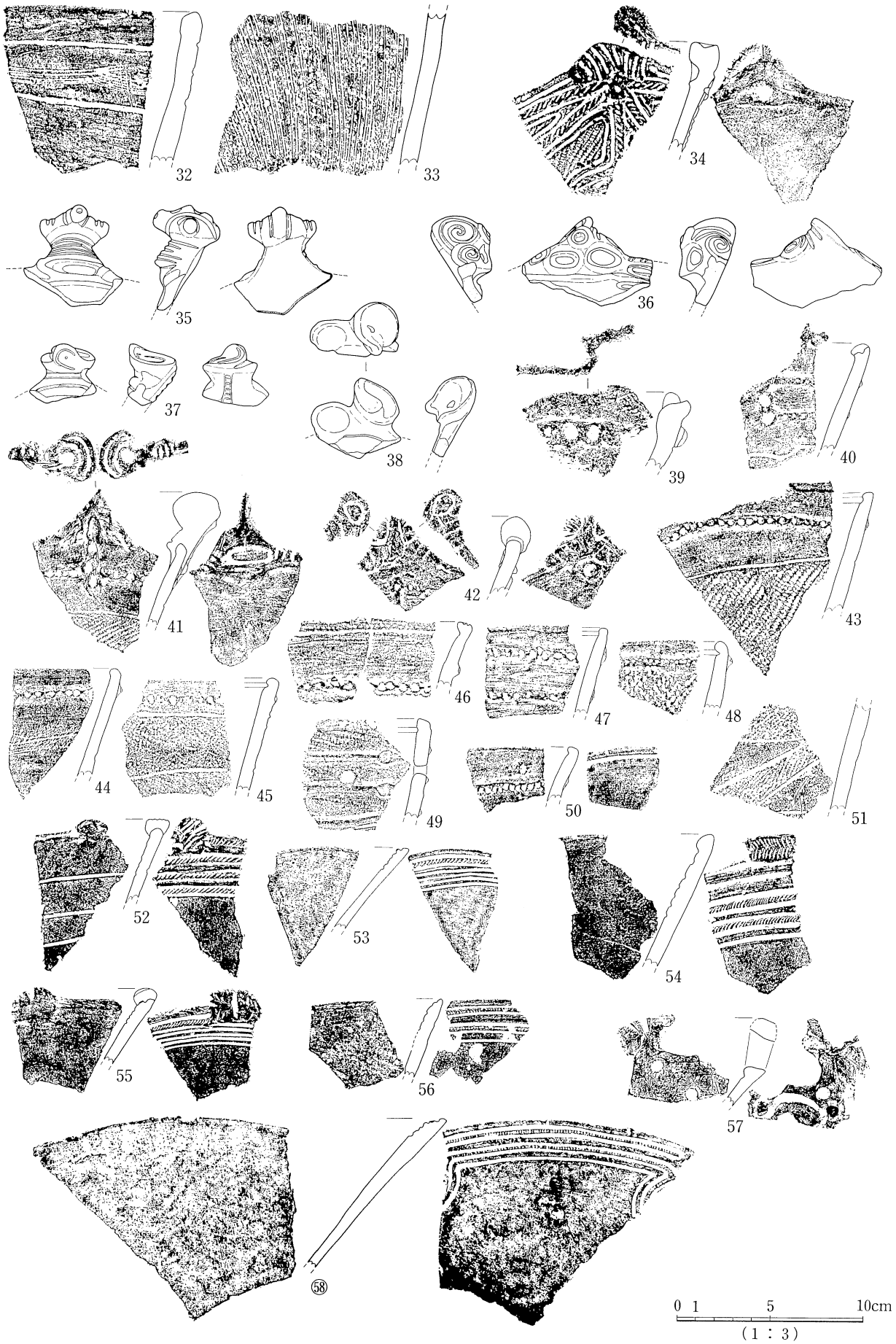


第43図　27号住居出土遺物(2)

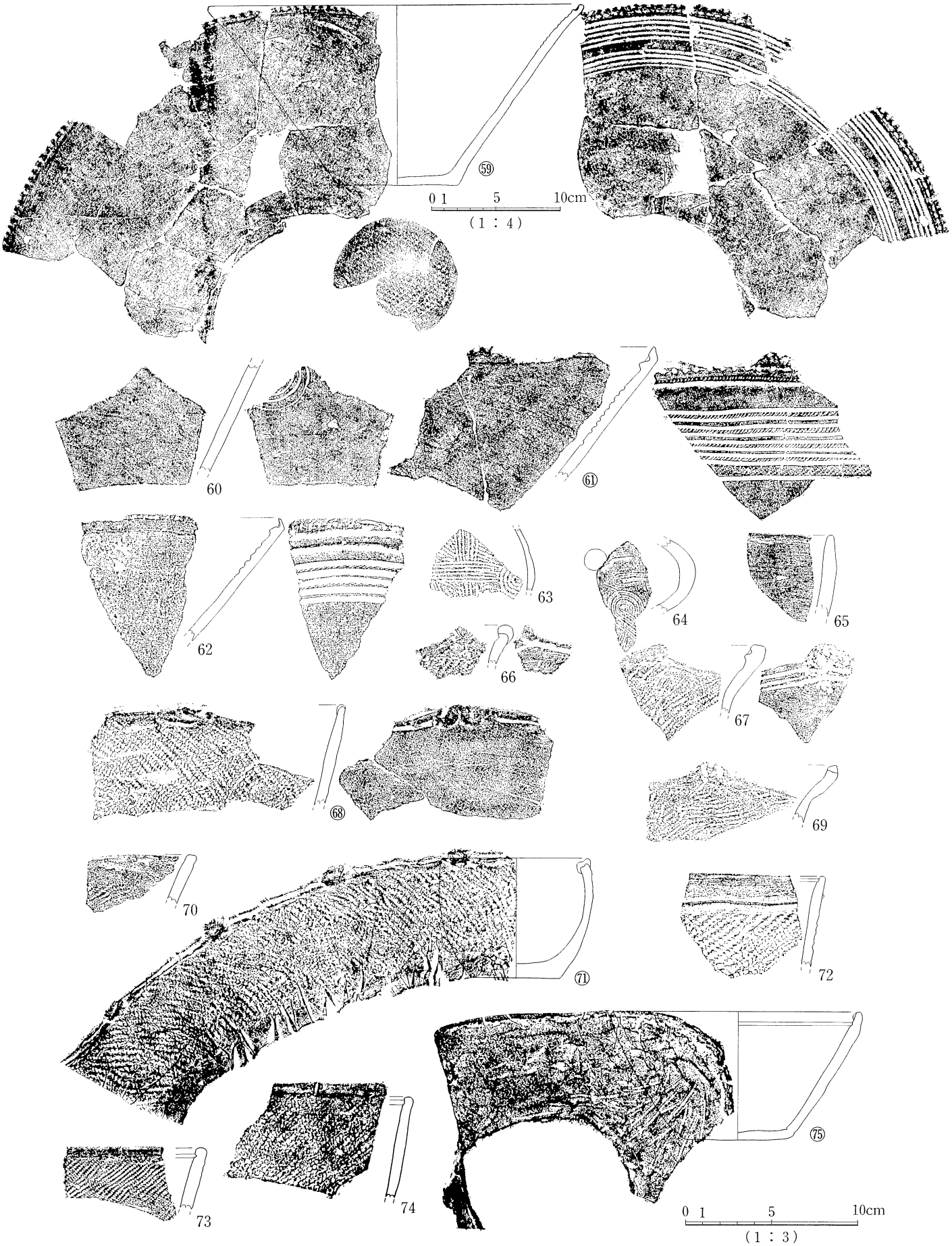
第44図　28・29号住居実測図



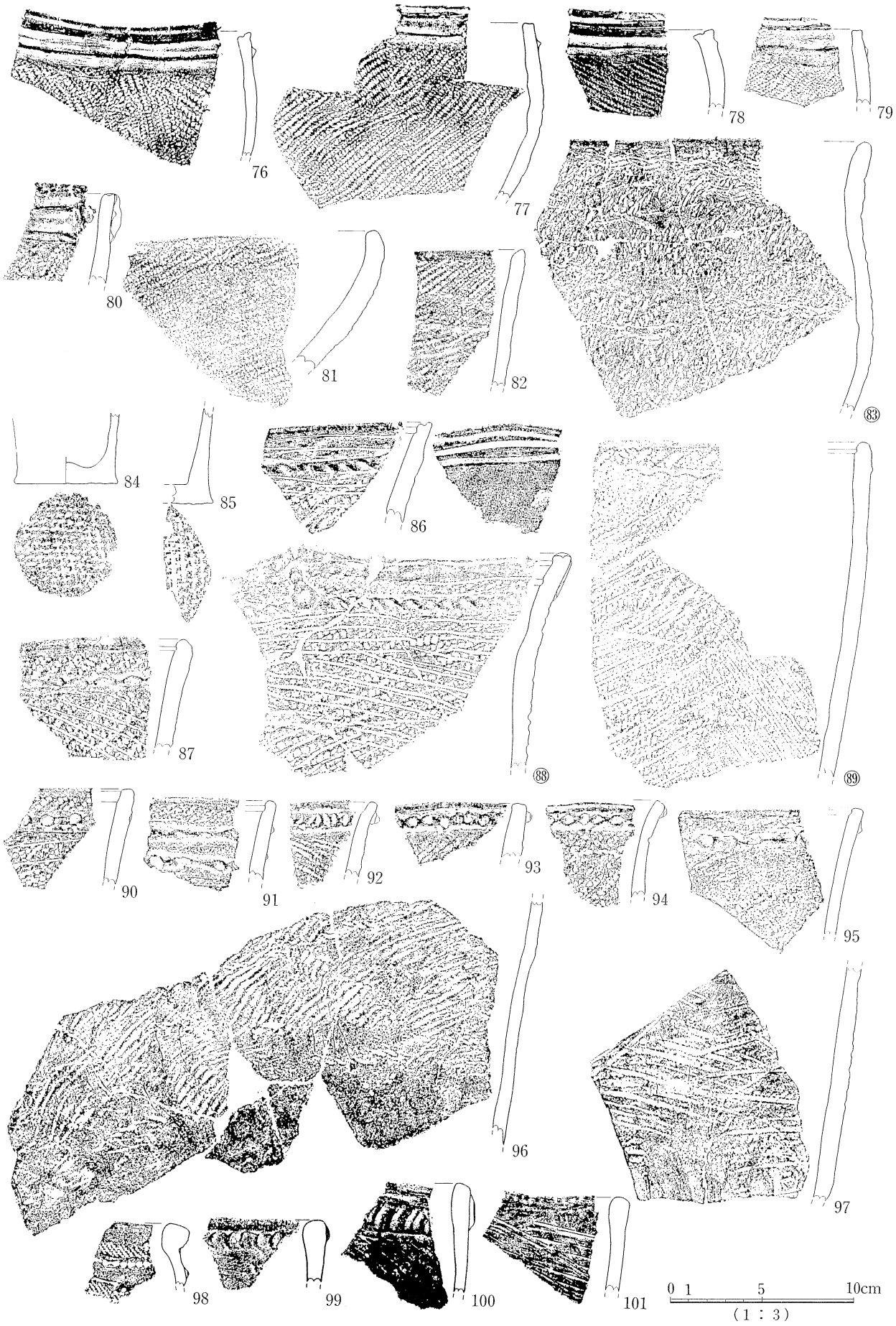
第45図　29号住居実測図および出土遺物(1)



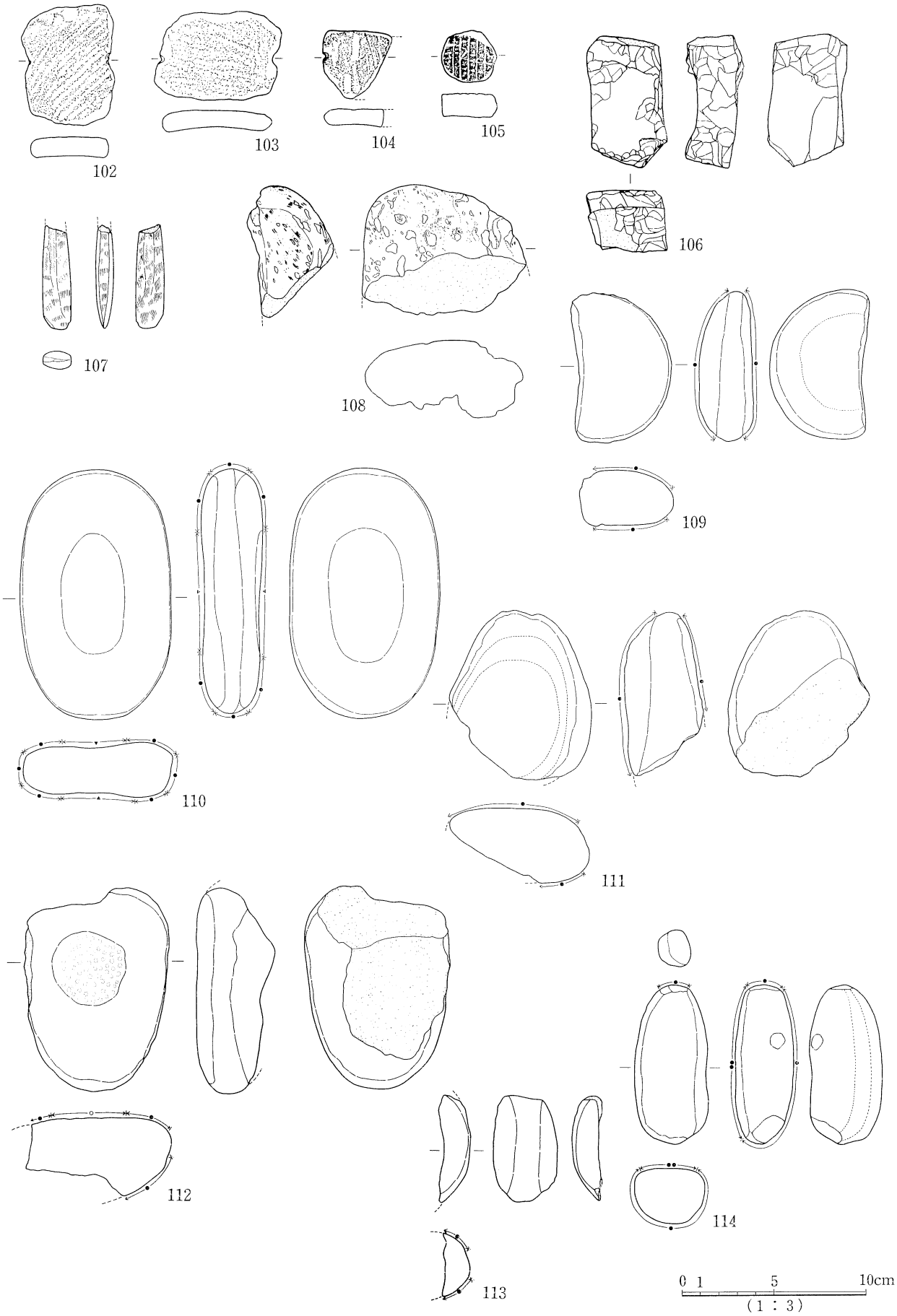
第46図　29号住居出土遺物(2)



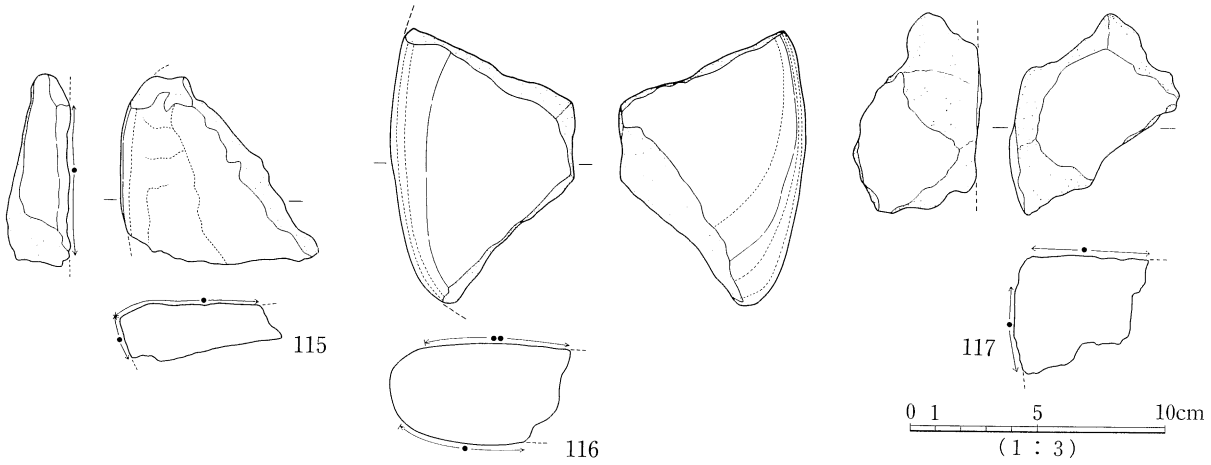
第47図　29号住居出土遺物(3)



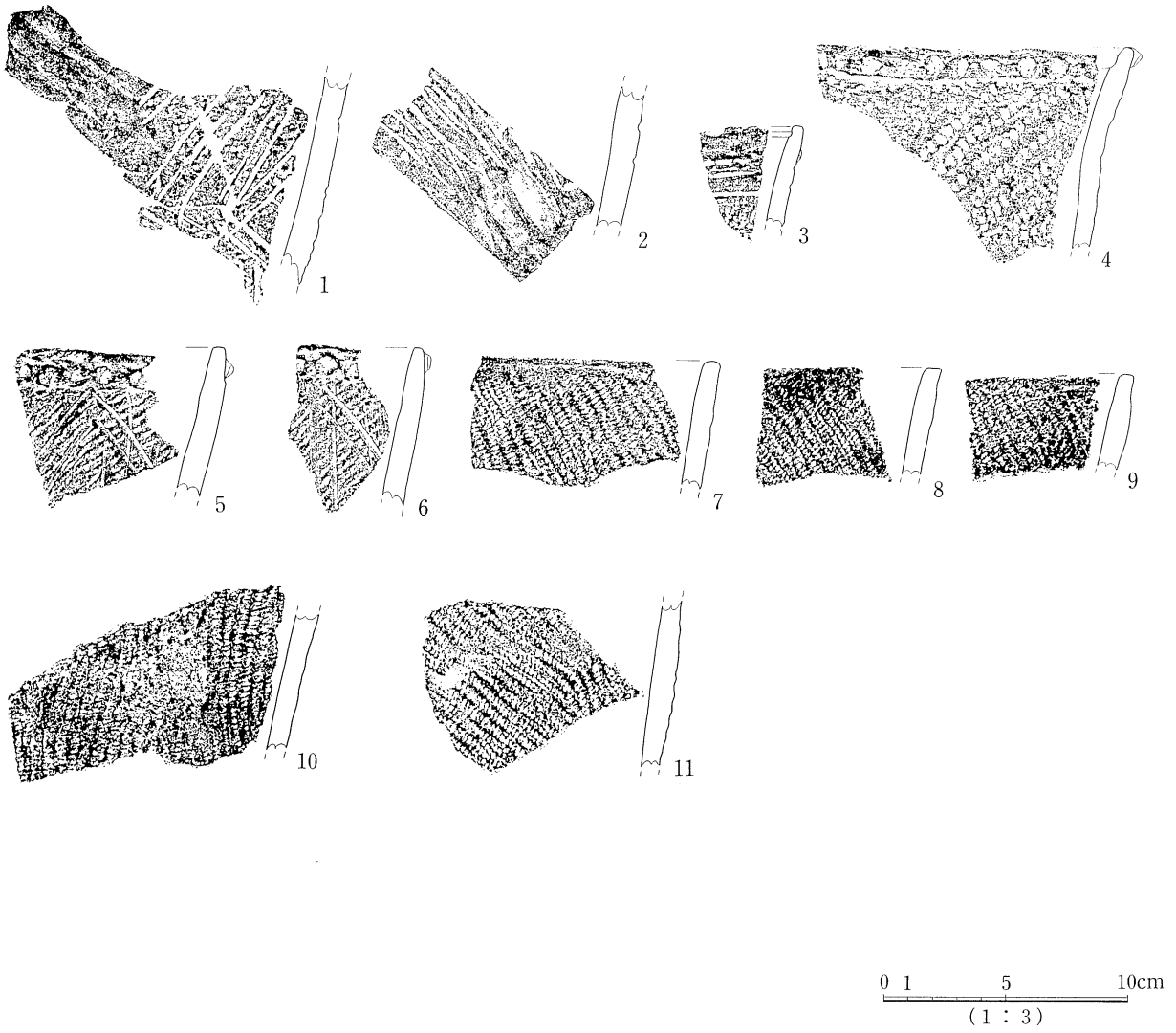
第48図　29号住居出土遺物(4)



第49図　29号住居出土遺物(5)

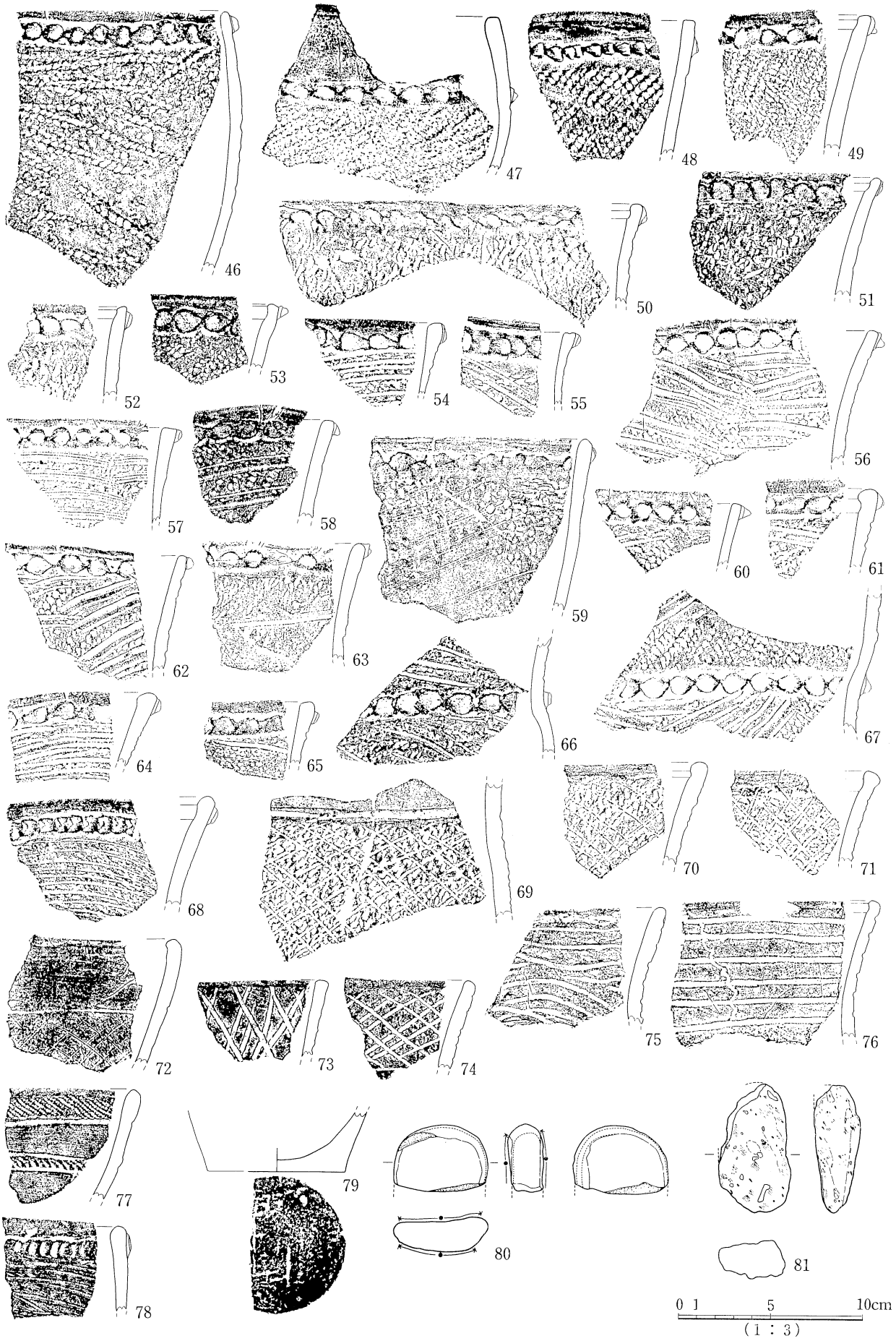


第50図　29号住居出土遺物(6)



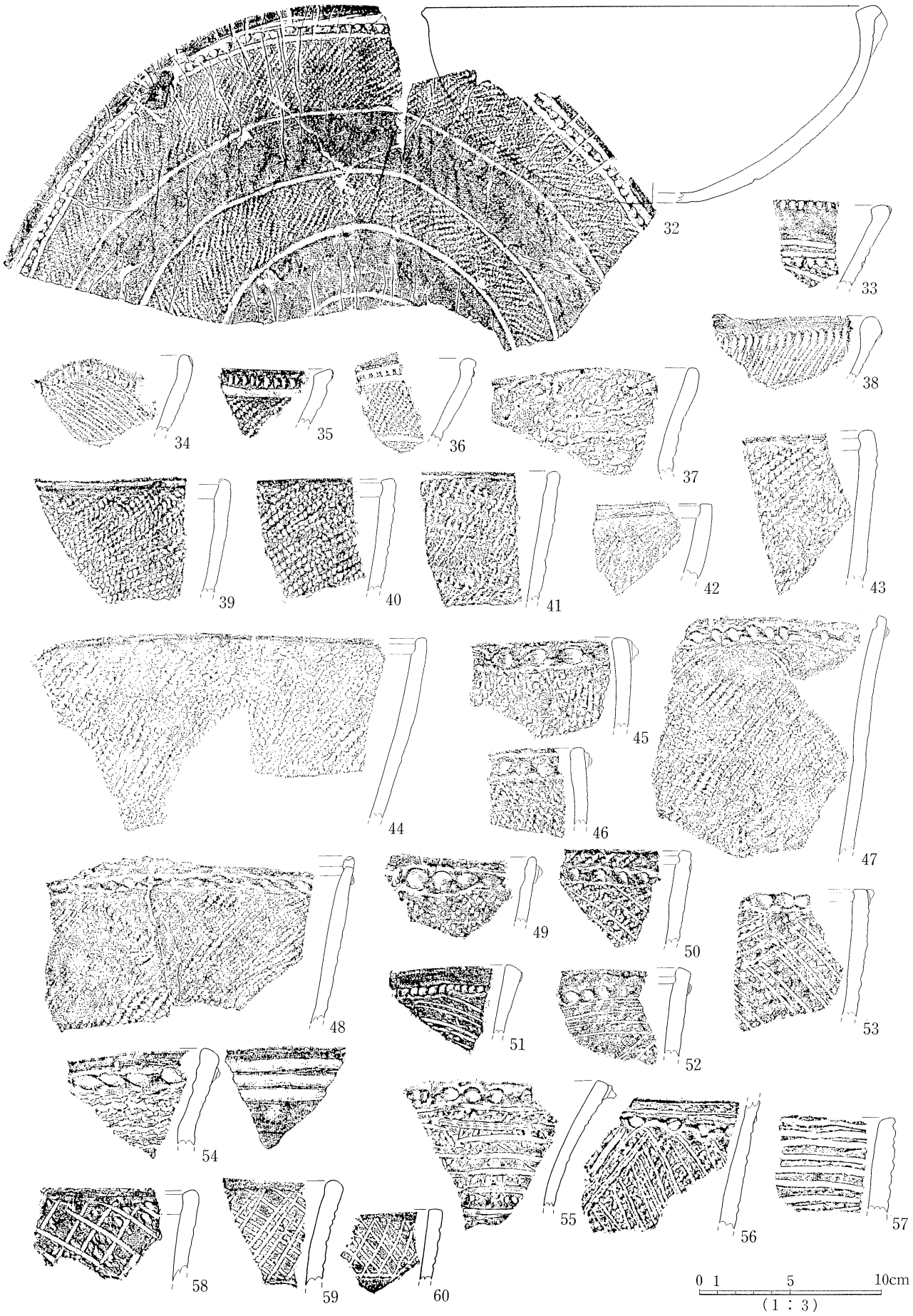
第51図　28号住居出土遺物

第53図　30号住居出土遺物(1)

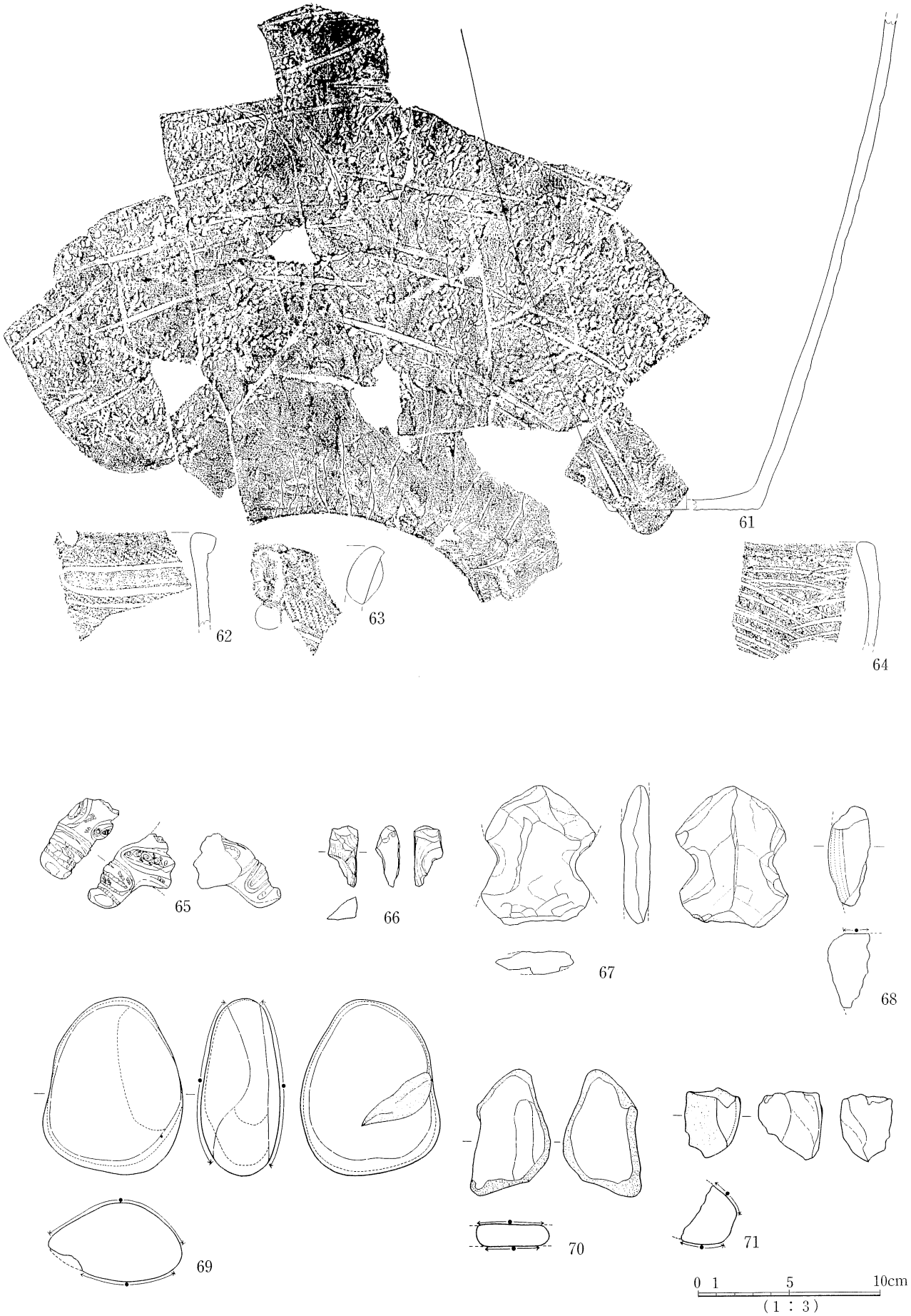


第54図　30号住居出土遺物(2)

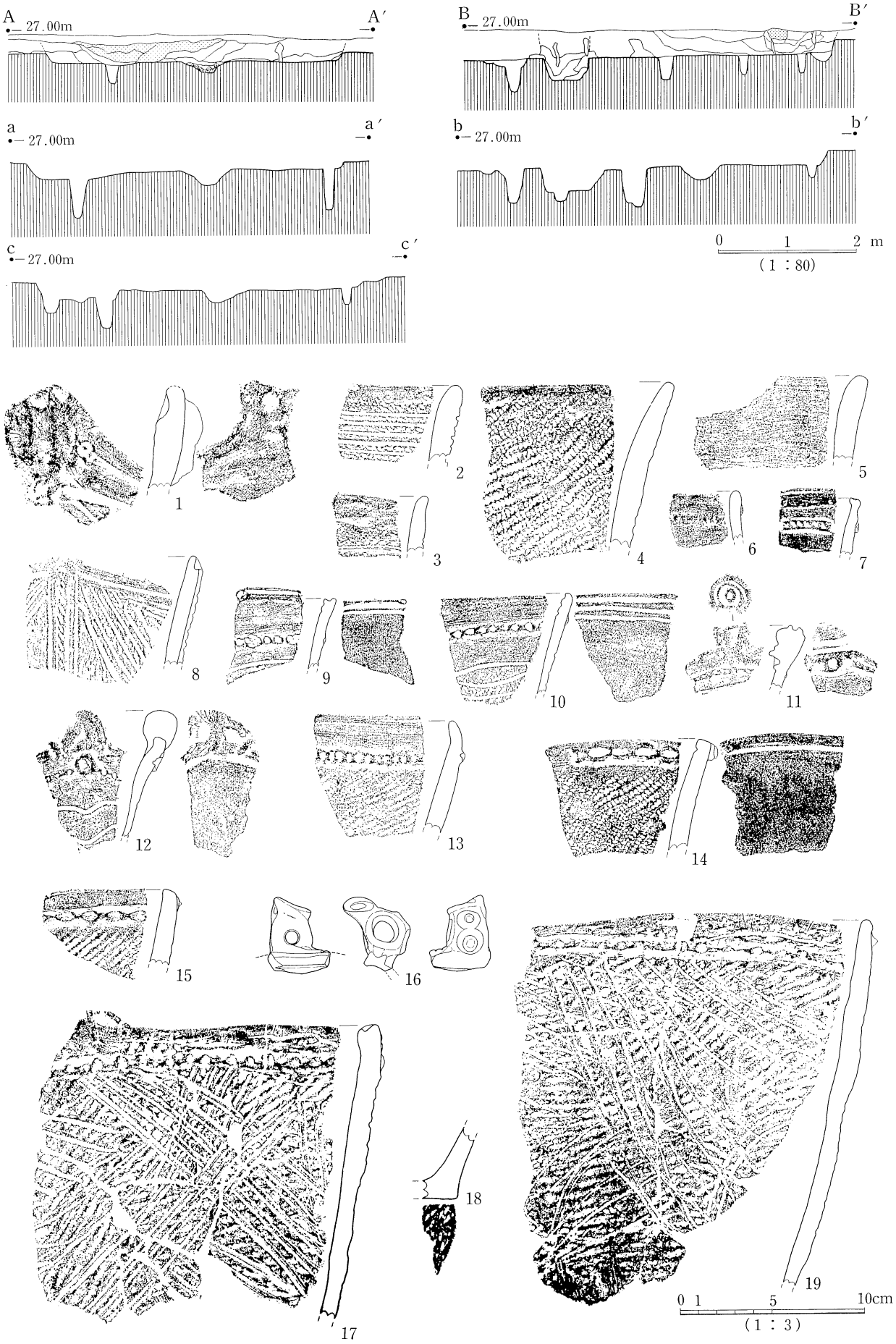
第55図　31号住居出土遺物(1)



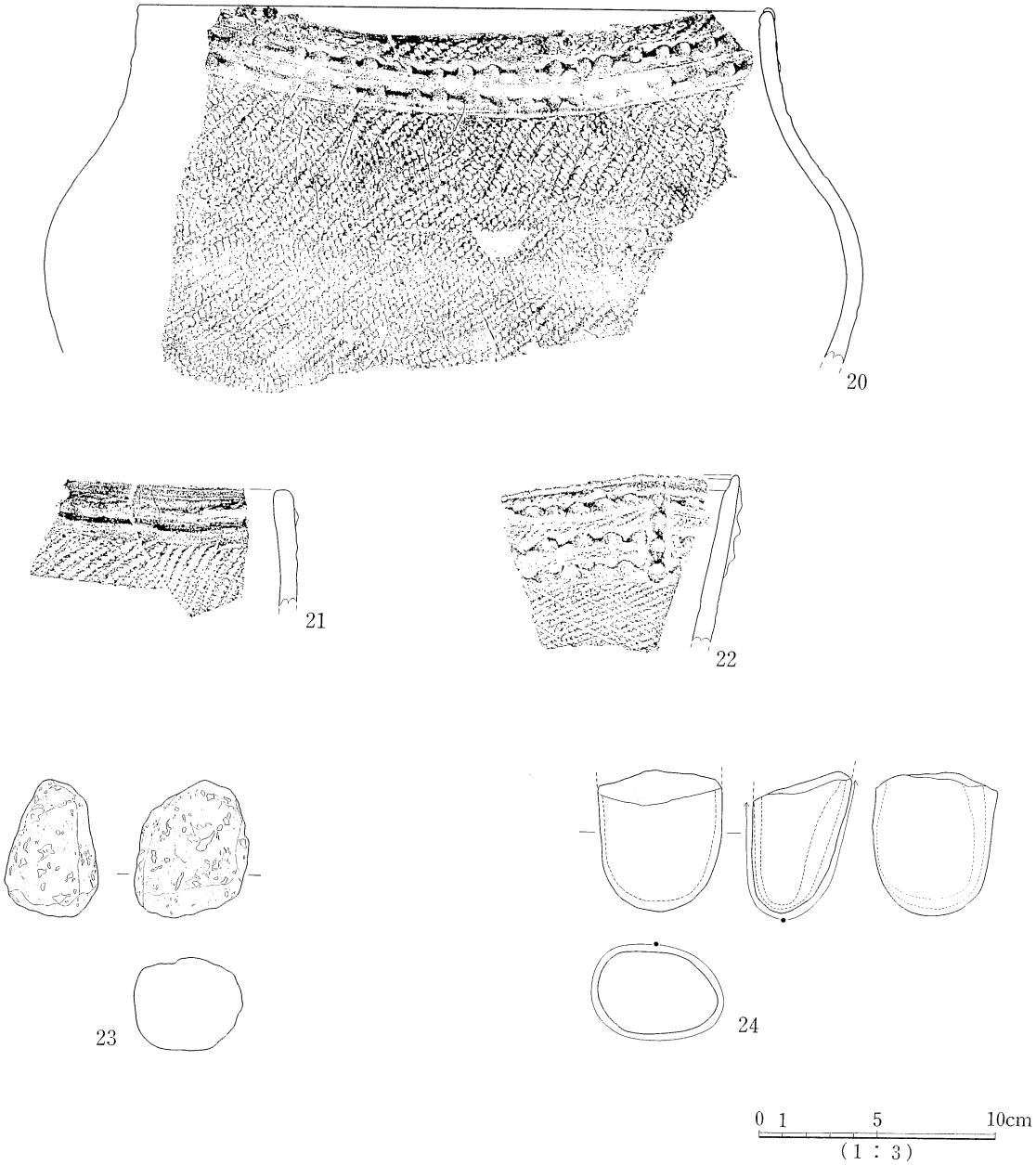
第56図　31号住居出土遺物(2)



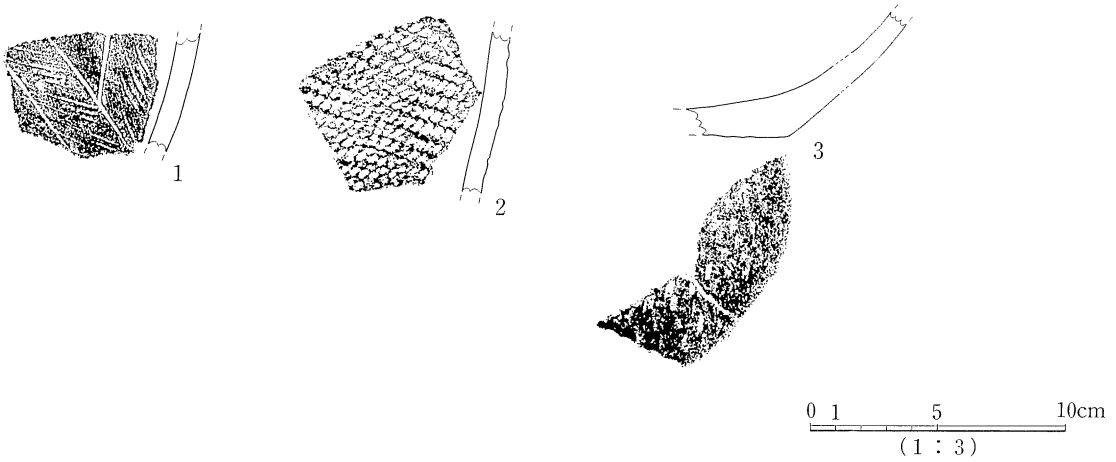
第57図　31号住居出土遺物(3)



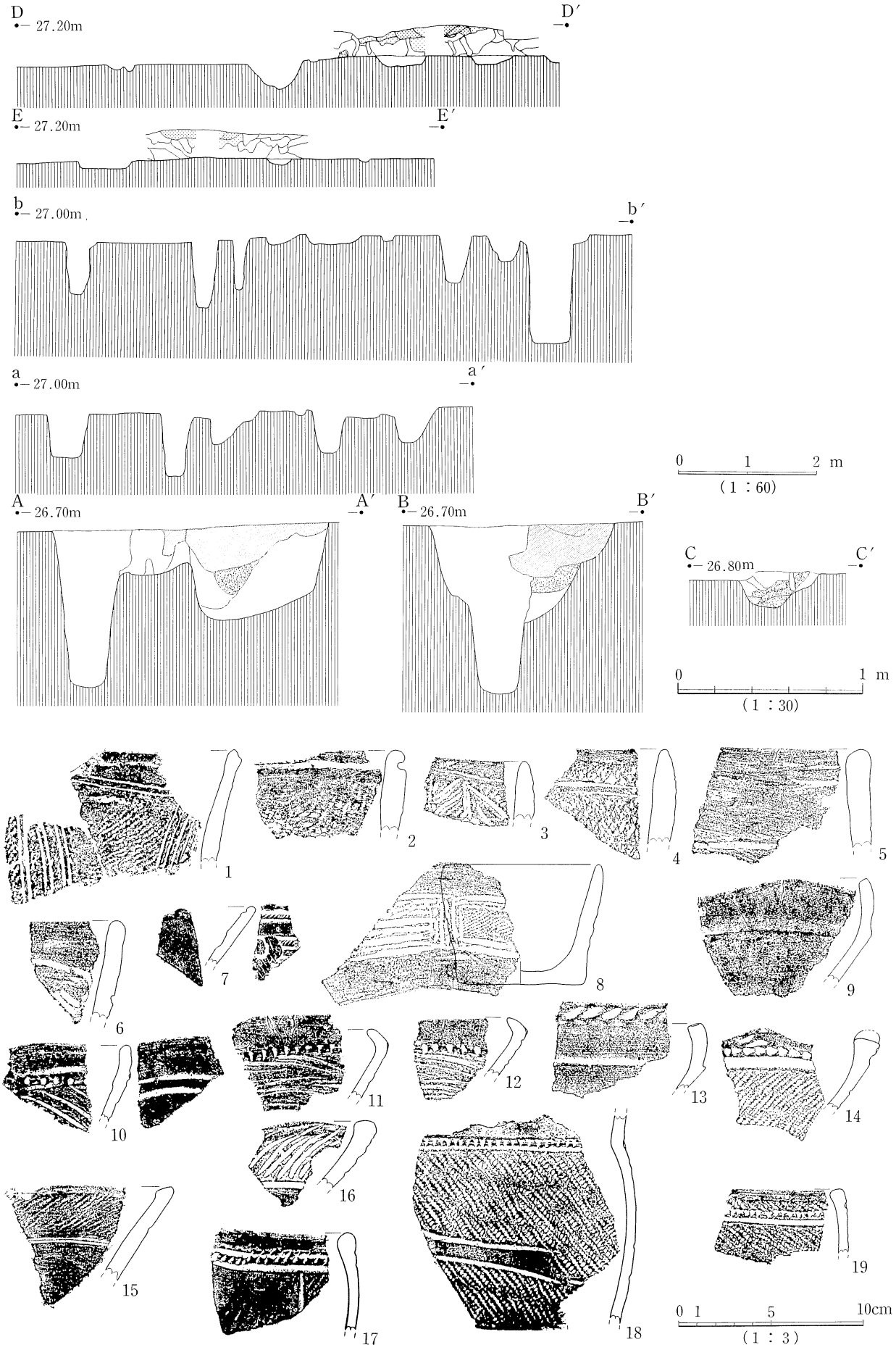
第59図　33号住居実測図および出土遺物(1)



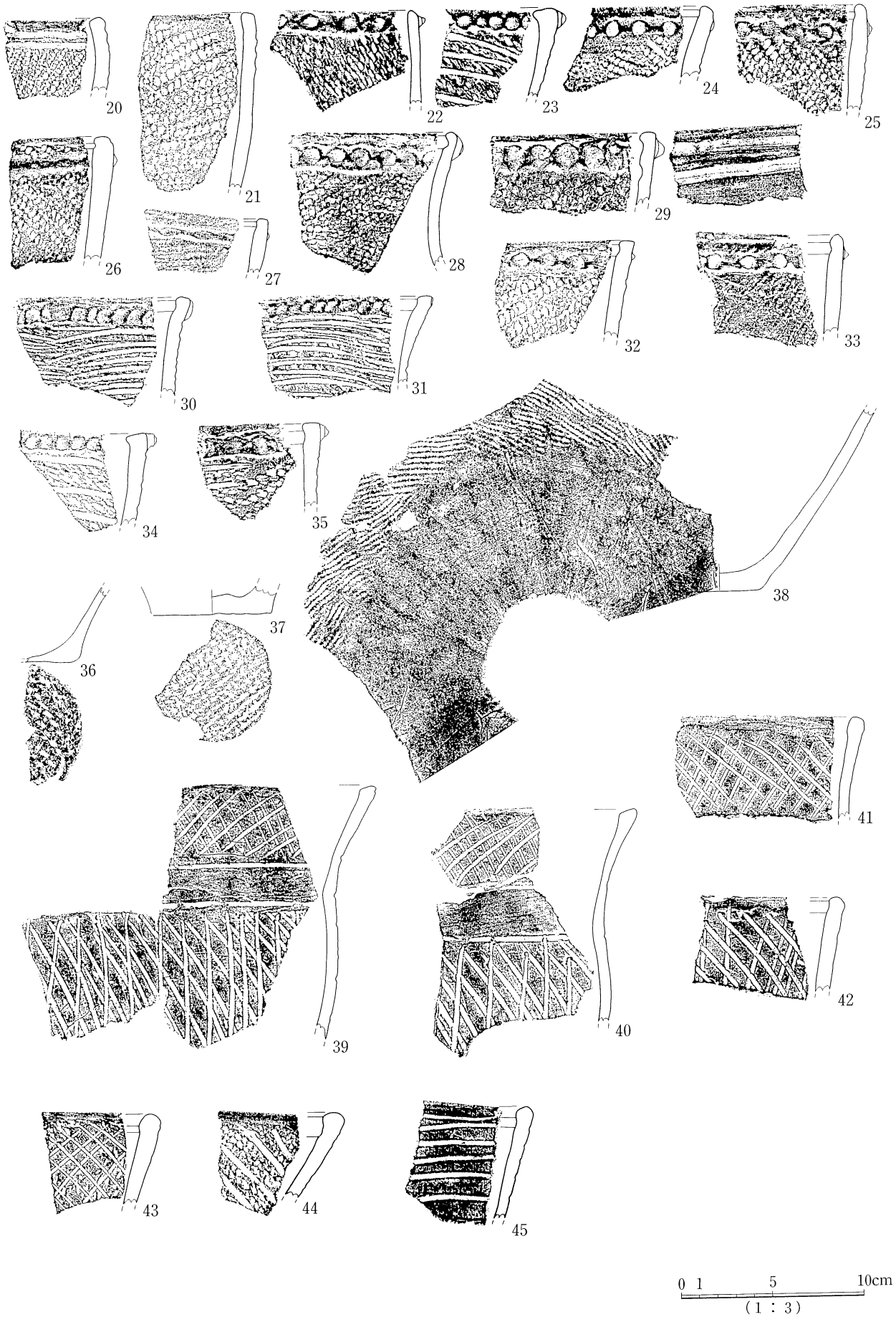
第60図　33号住居出土遺物(2)



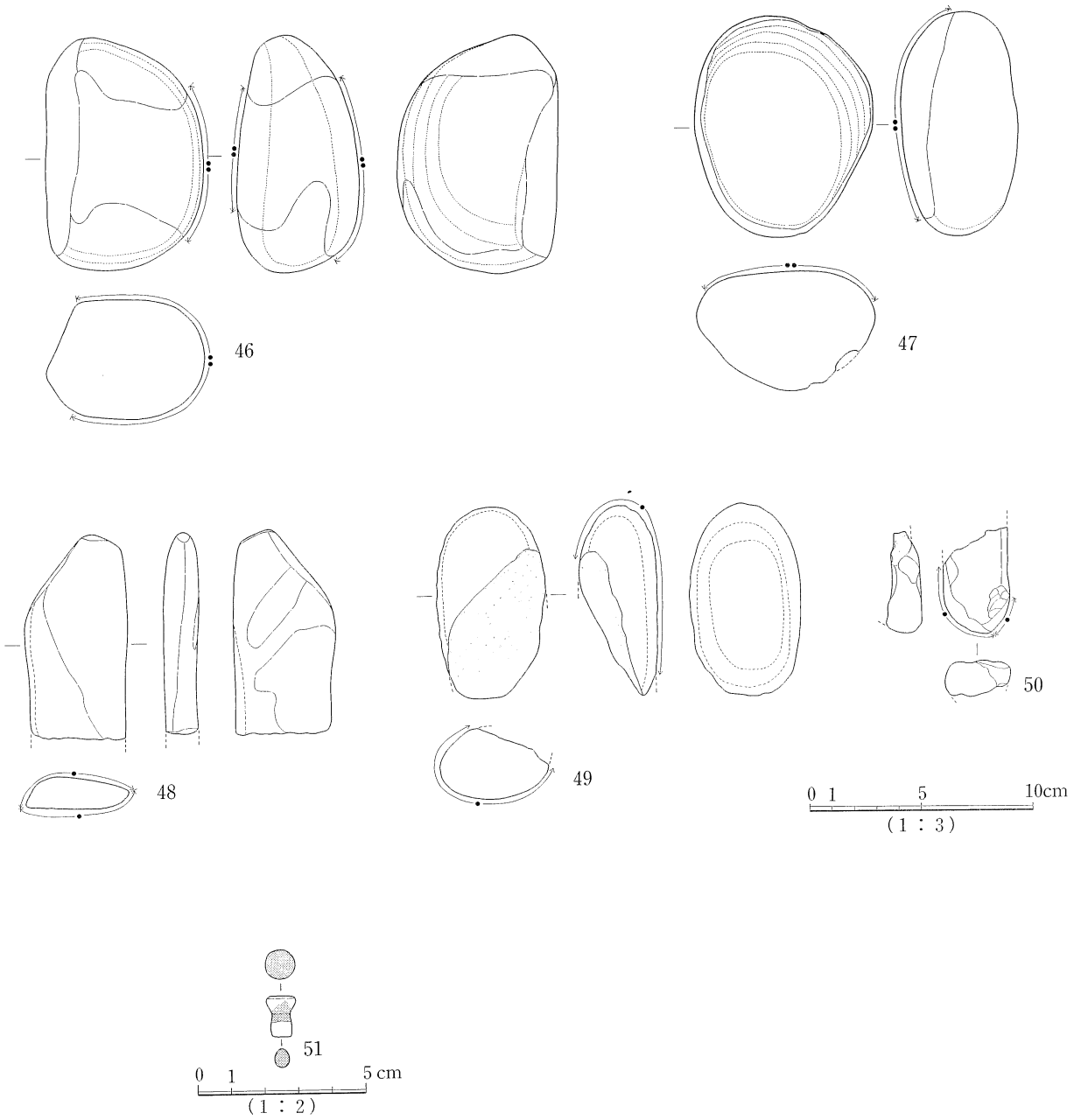
第61図　32号住居出土遺物



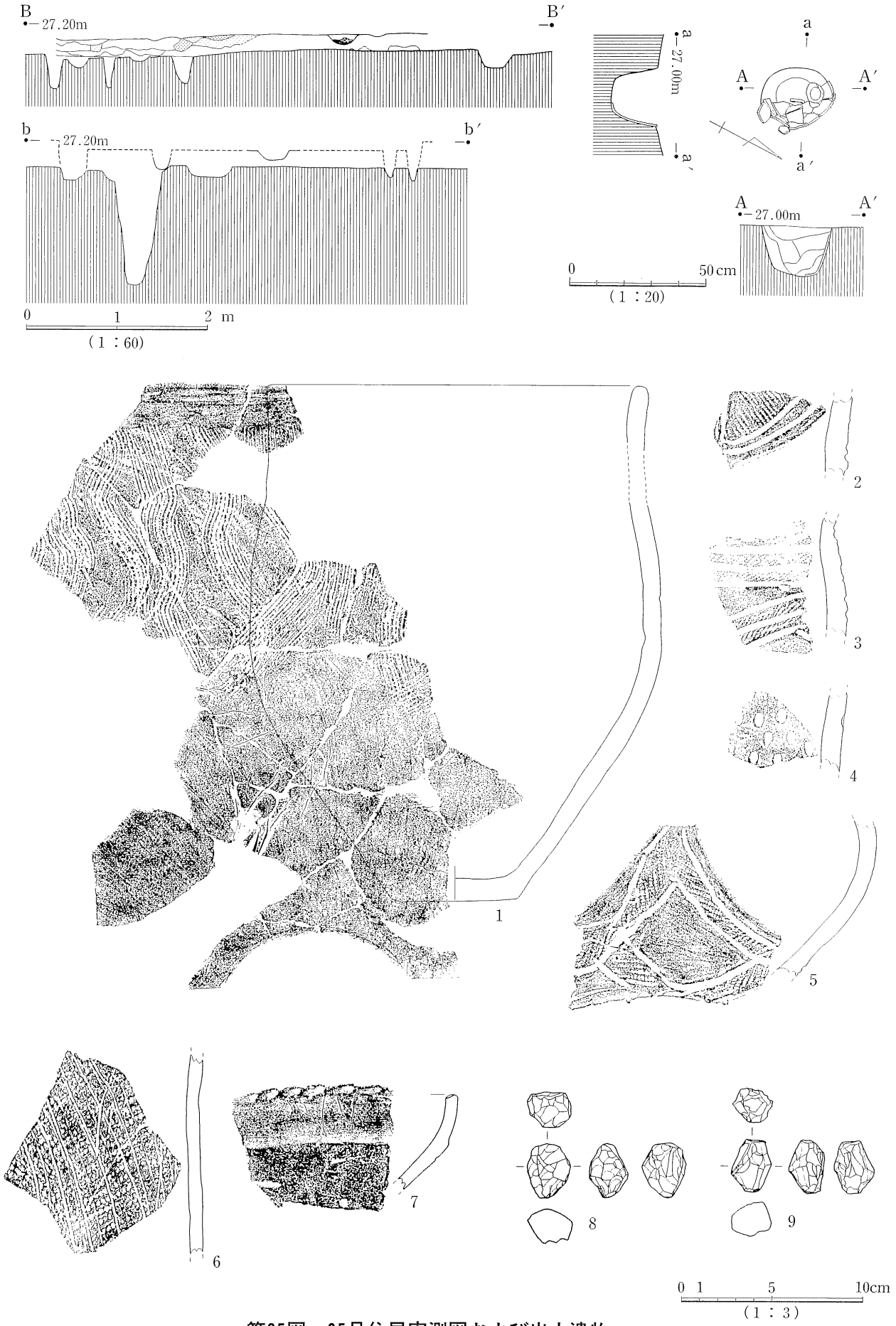
第62図　34号住居実測図および出土遺物(1)



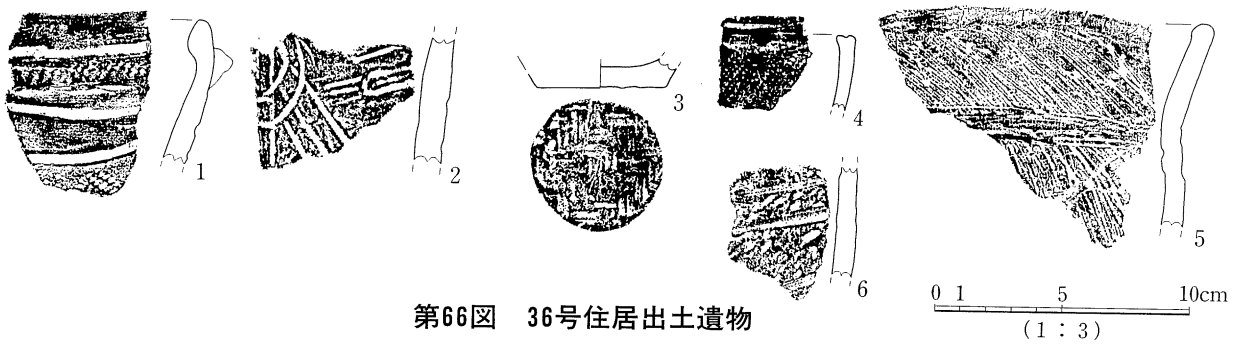
第63図　34号住居出土遺物(2)



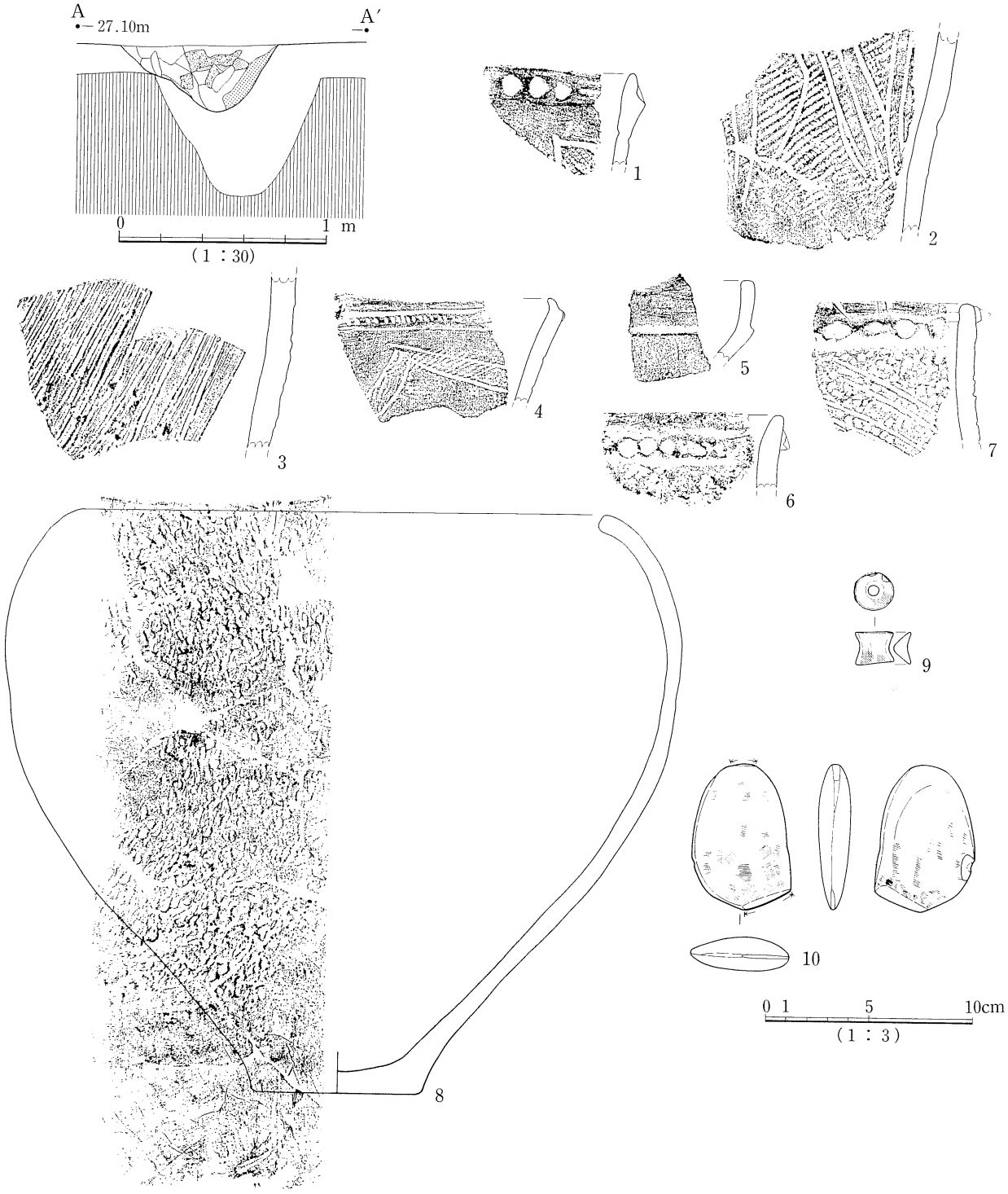
第64図　34号住居出土遺物(3)



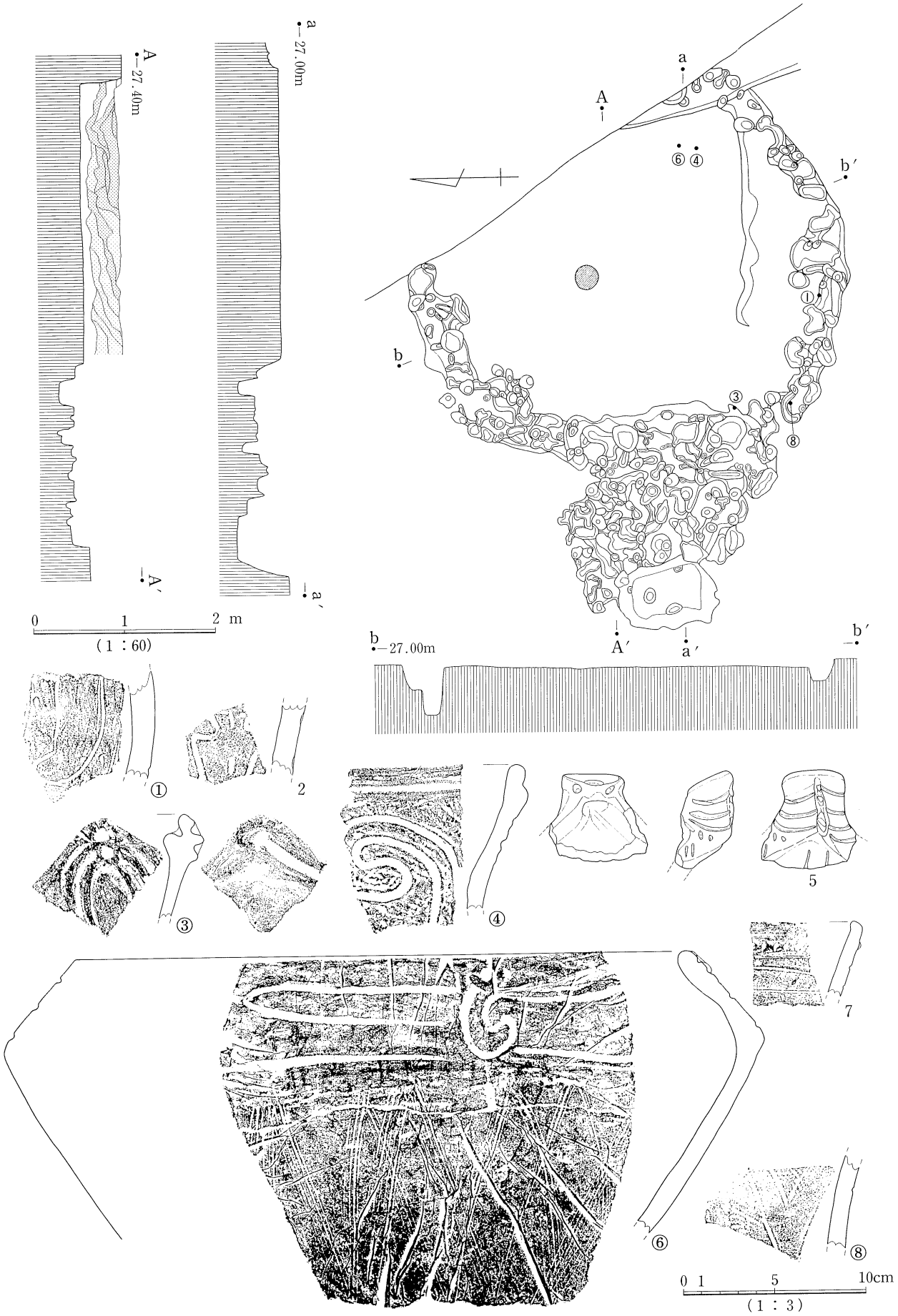
第65図　35号住居実測図および出土遺物



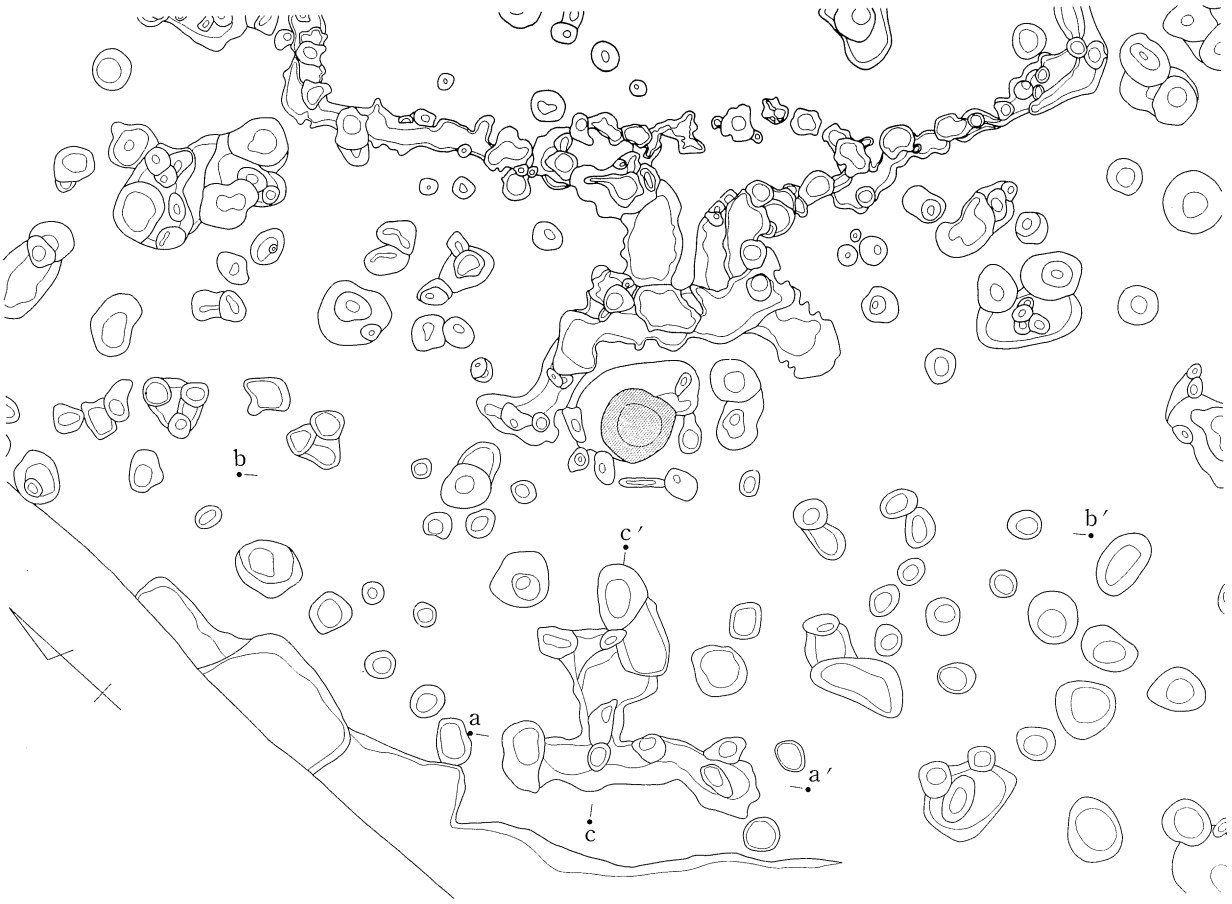
第66図　36号住居出土遺物

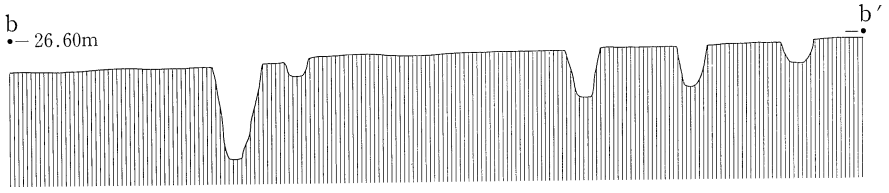


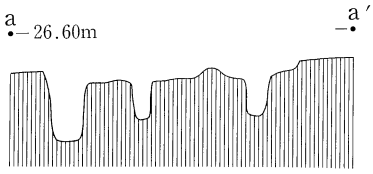
第67図　37号住居実測図および出土遺物

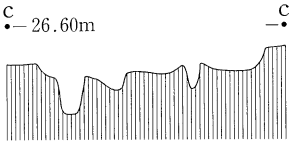


第68図　38号住居実測図および出土遺物







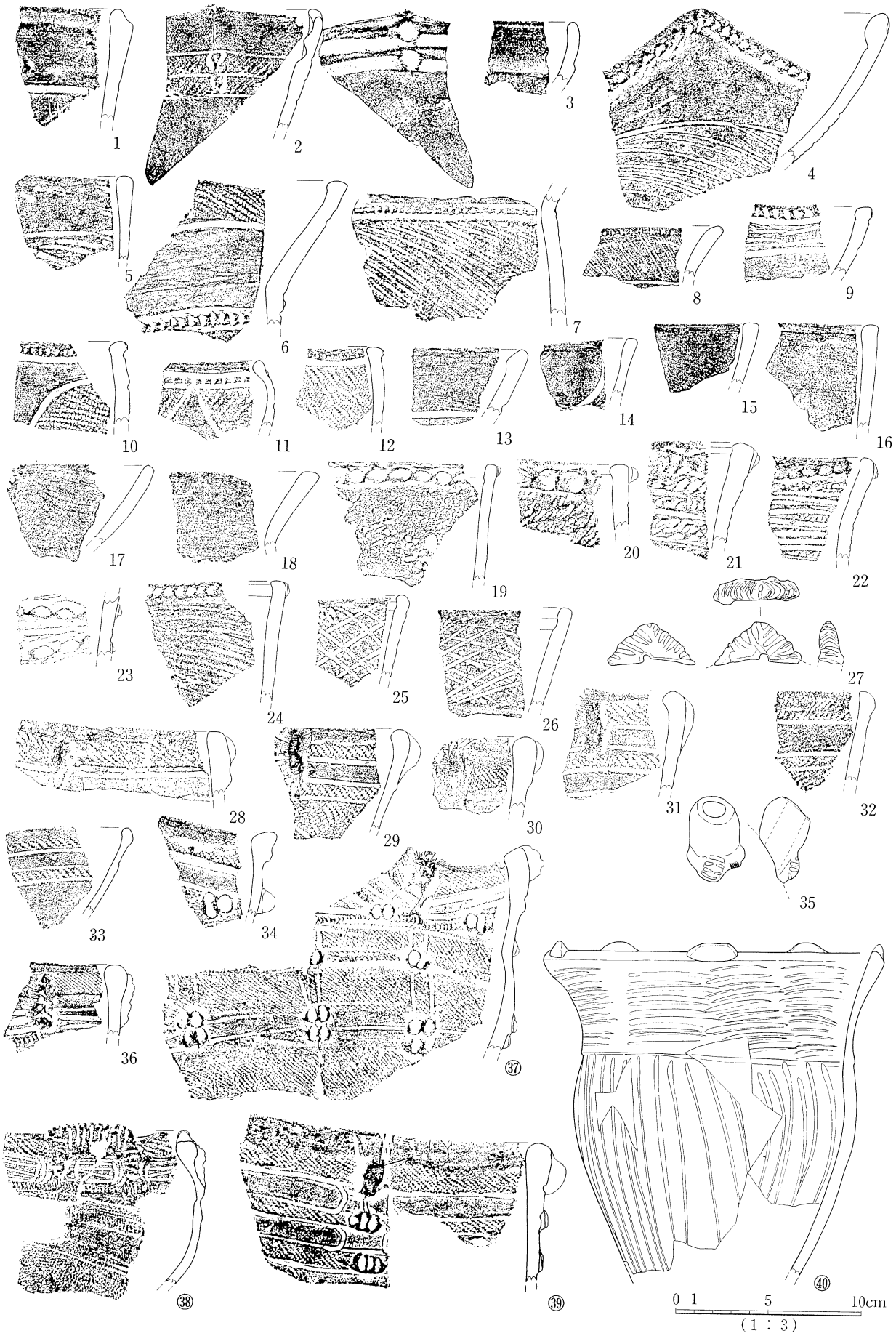


0 1 2 m
(1：60)

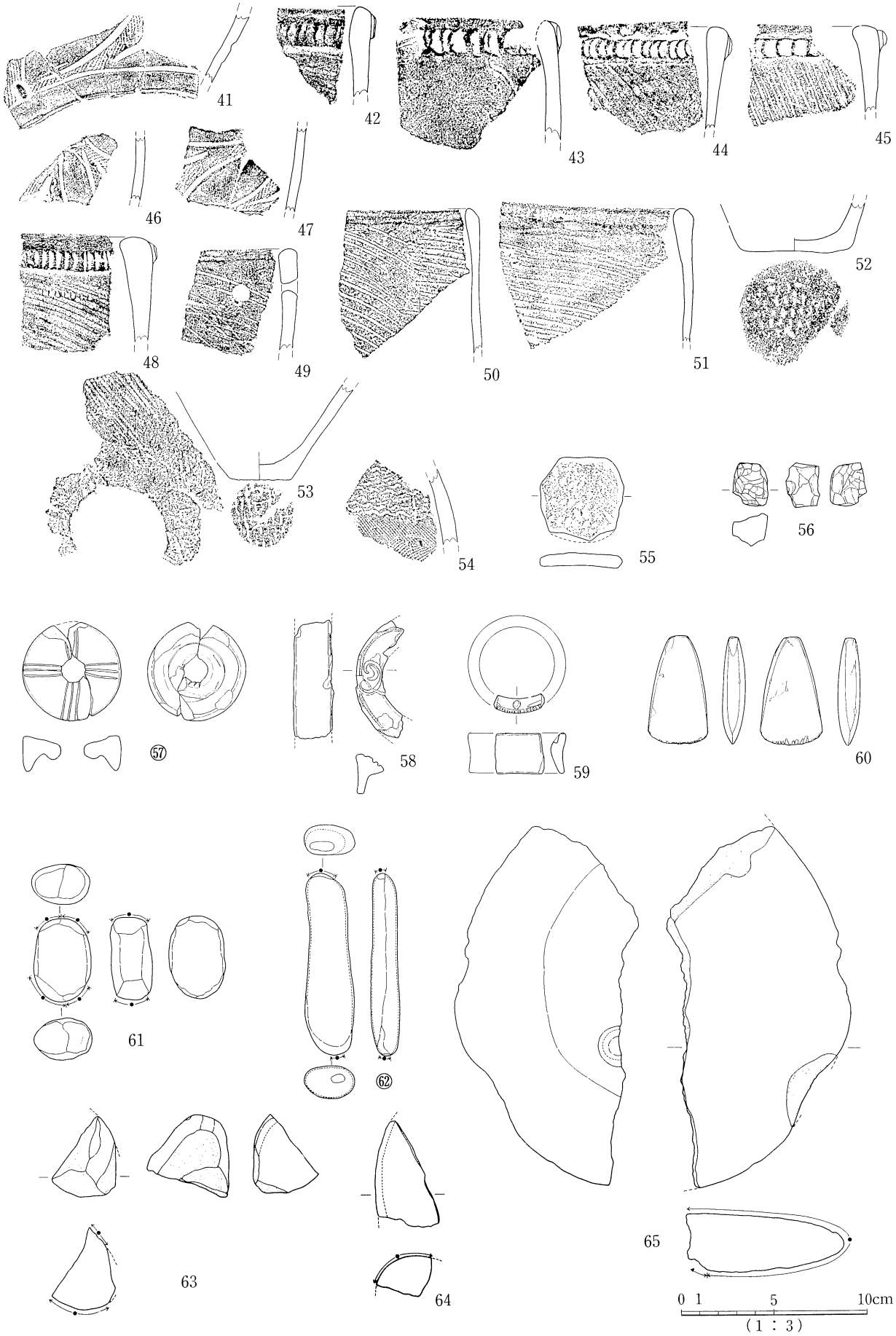
0 1 5 10cm
(1：3)

第69図　39号住居実測図および出土遺物

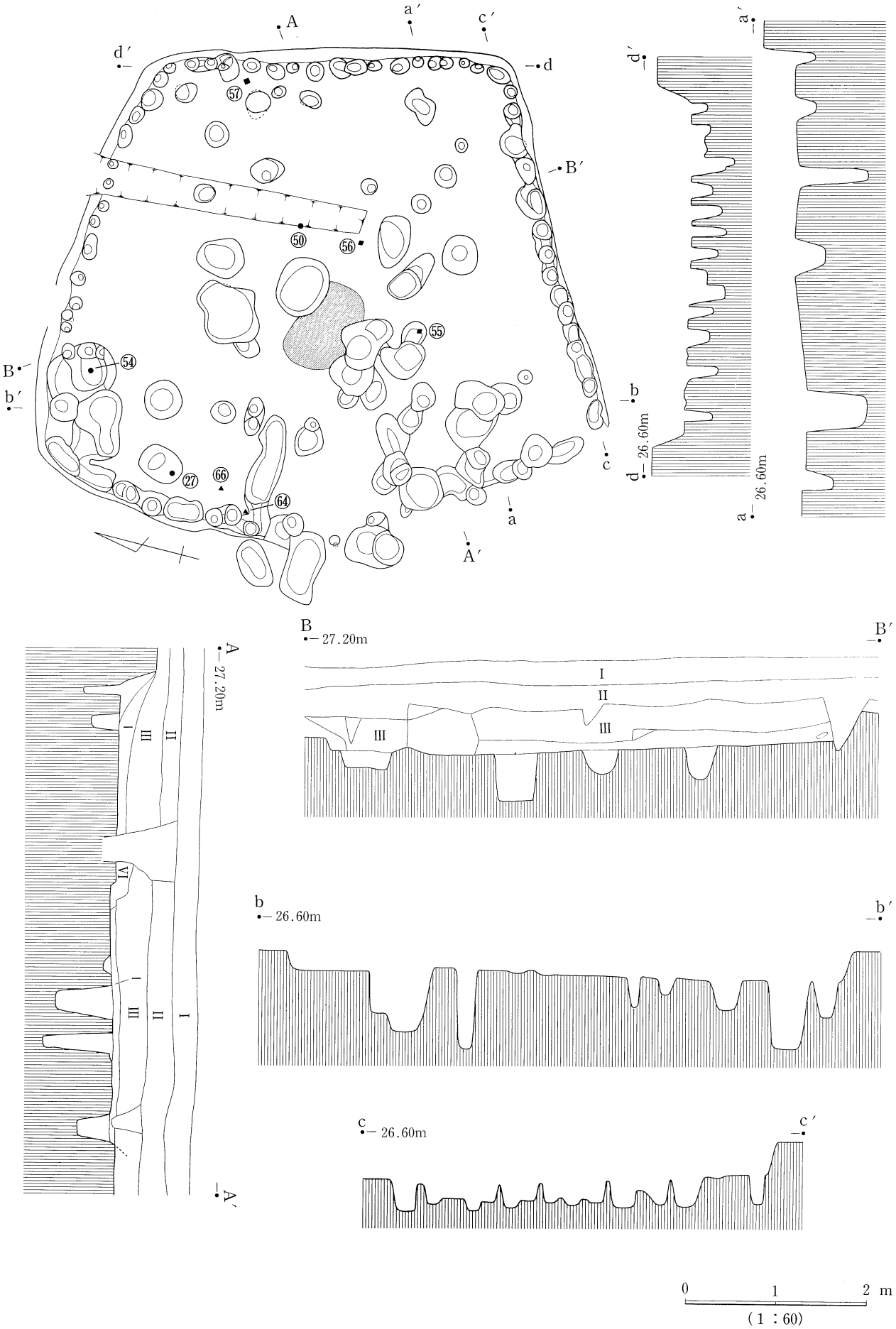
第70図　40号住居実測図



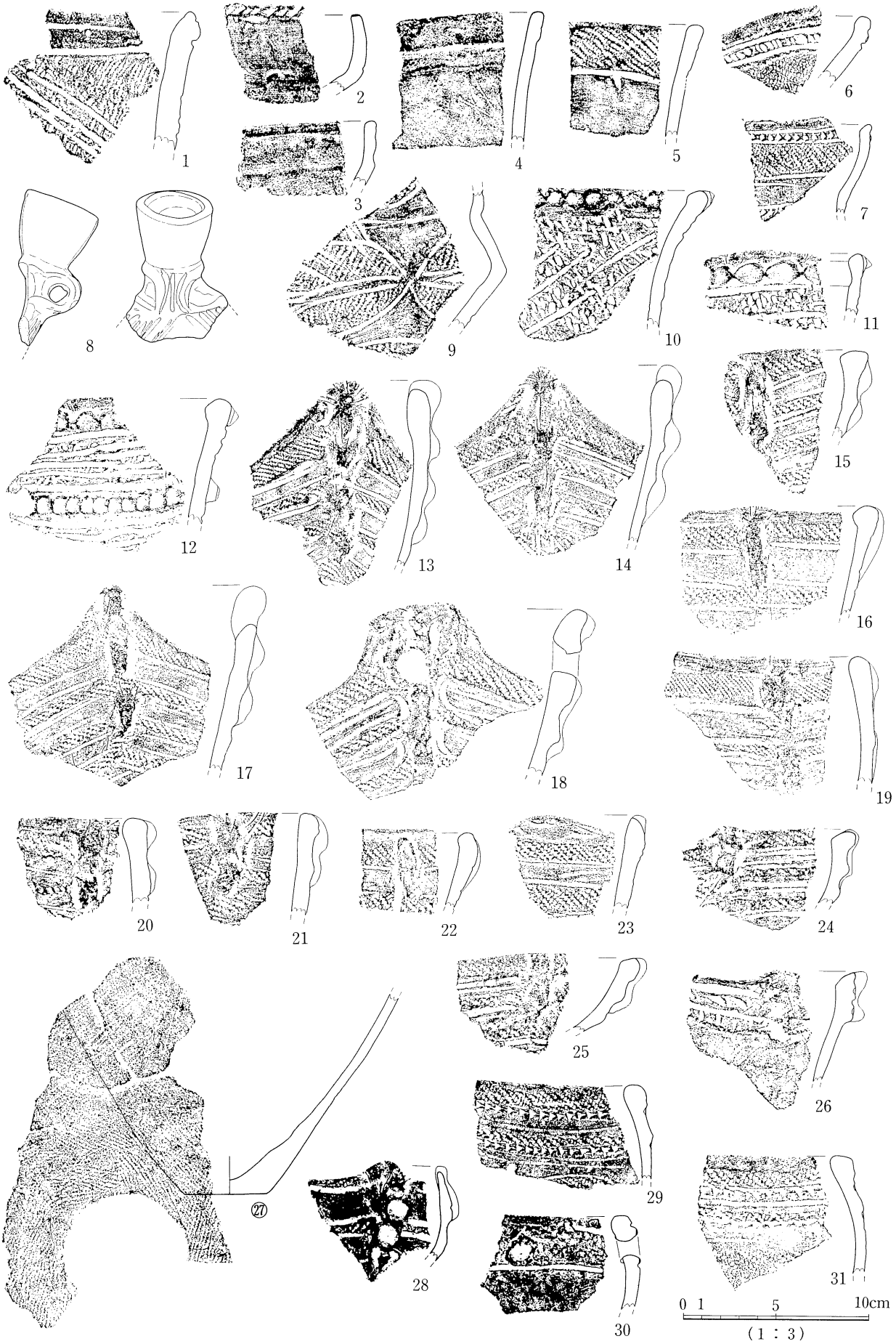
第71図　40号住居出土遺物(1)



第72図　40号住居出土遺物(2)

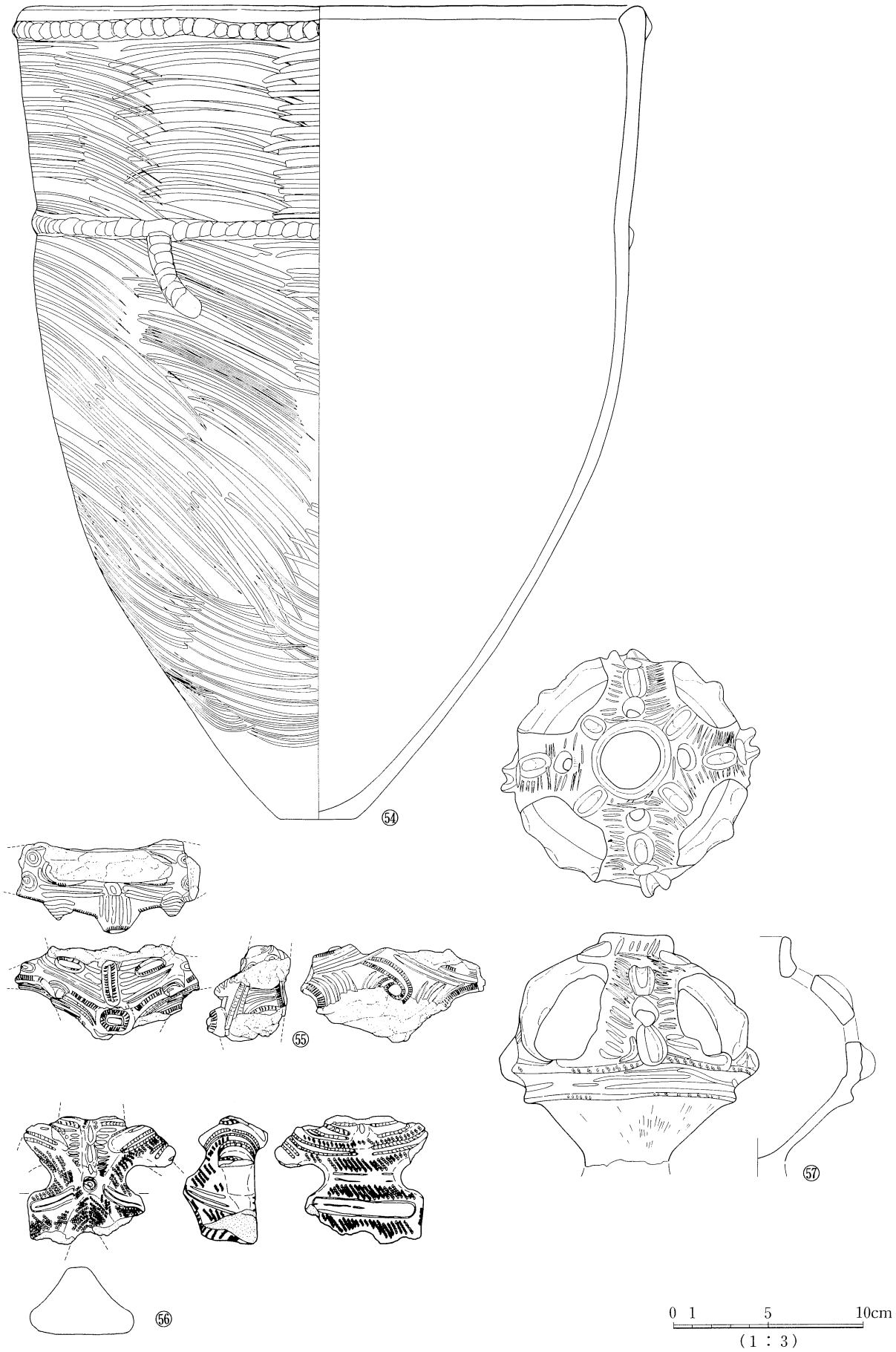


第73図　41号住居実測図

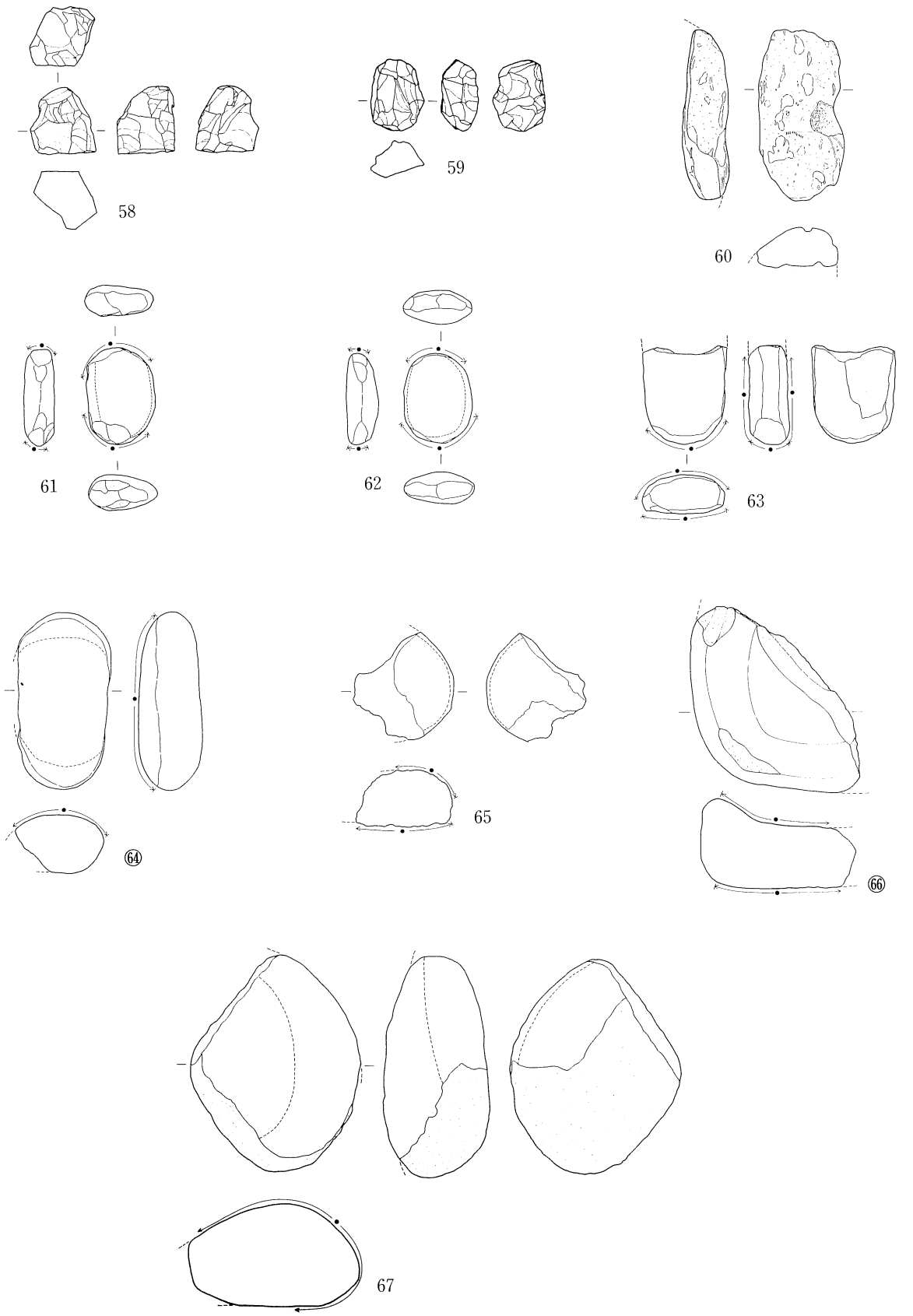


第74図　41号住居出土遺物(1)

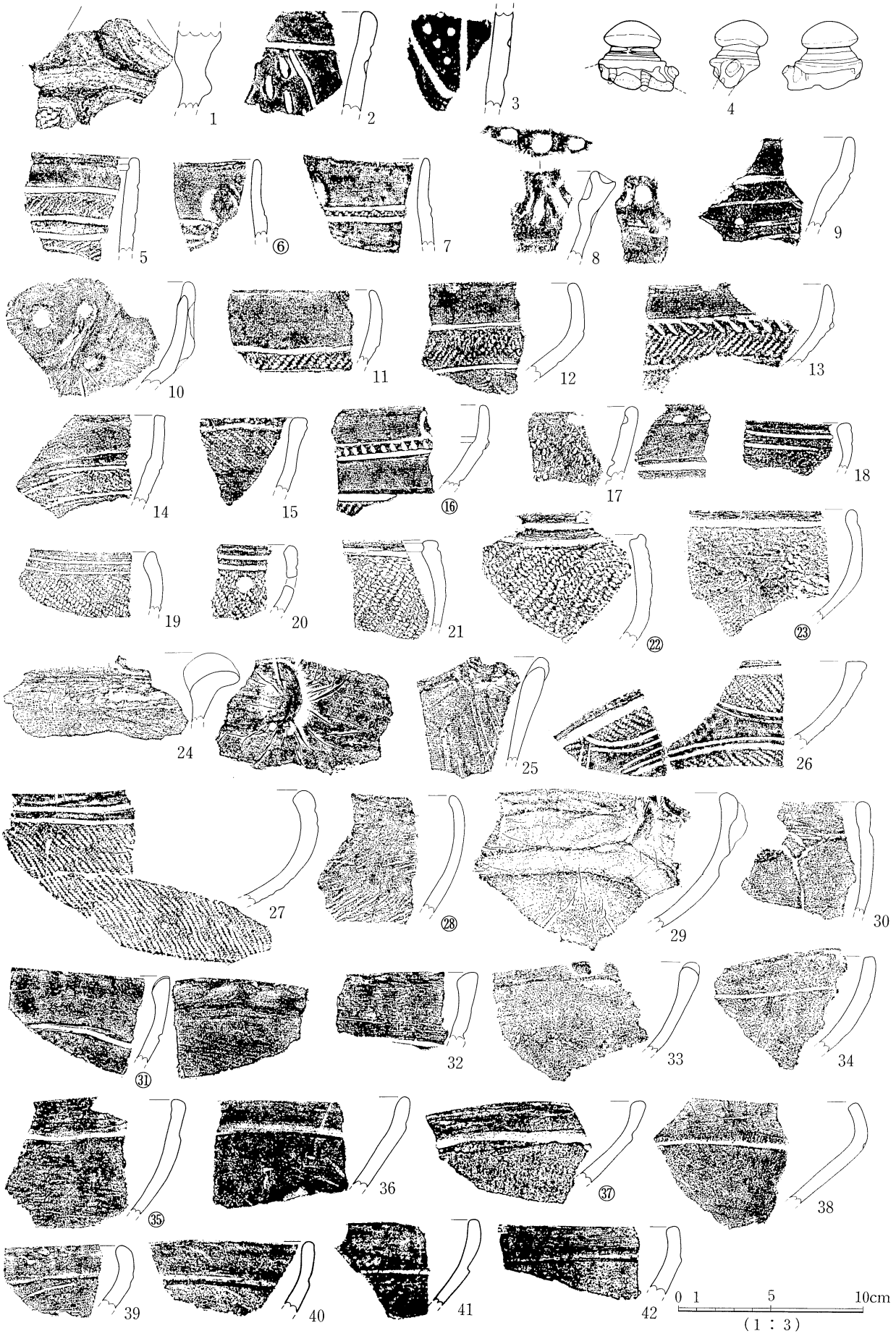
第75図　41号住居出土遺物(2)



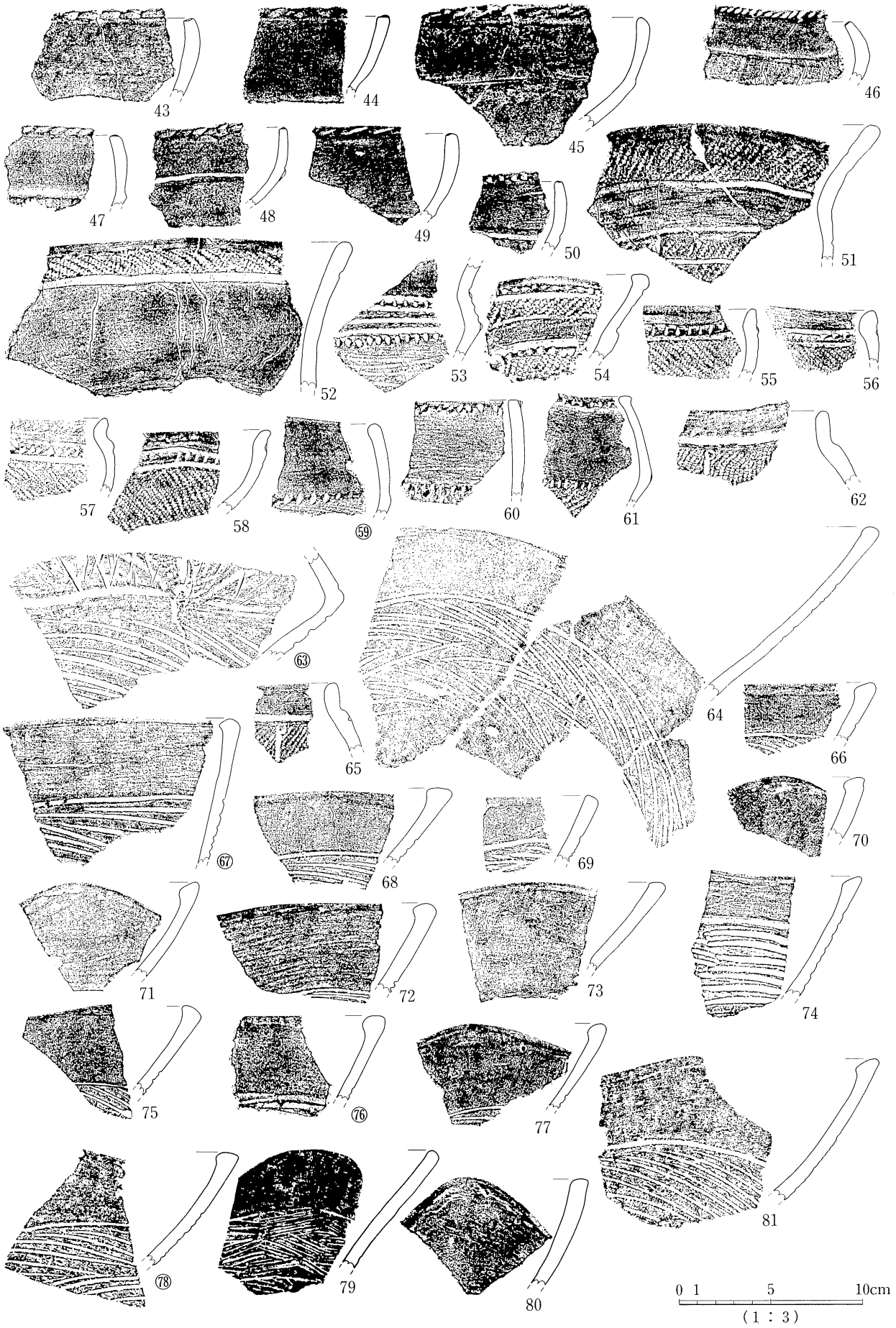
第76図　41号住居出土遺物(3)



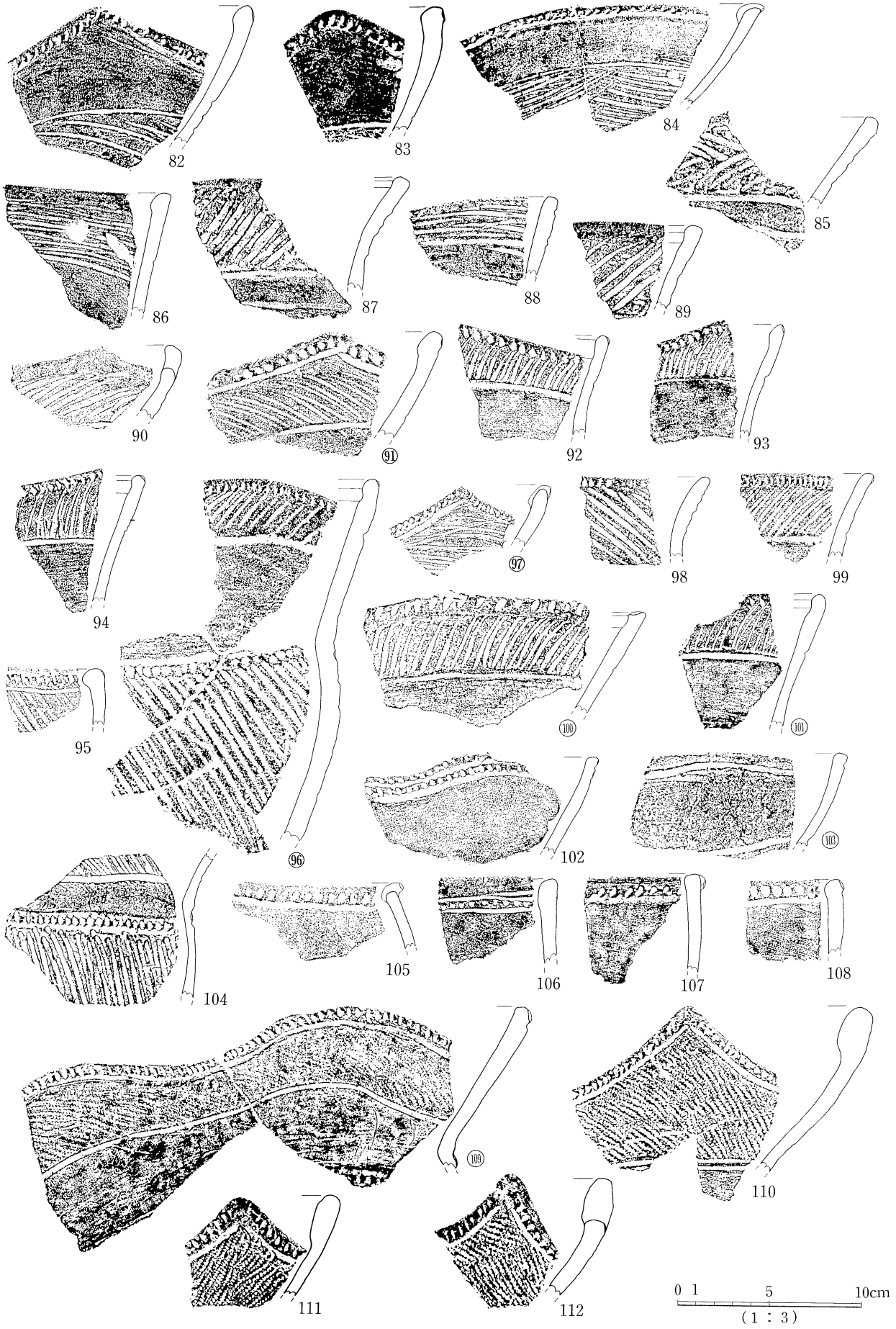
第77図　41号住居出土遺物(4)



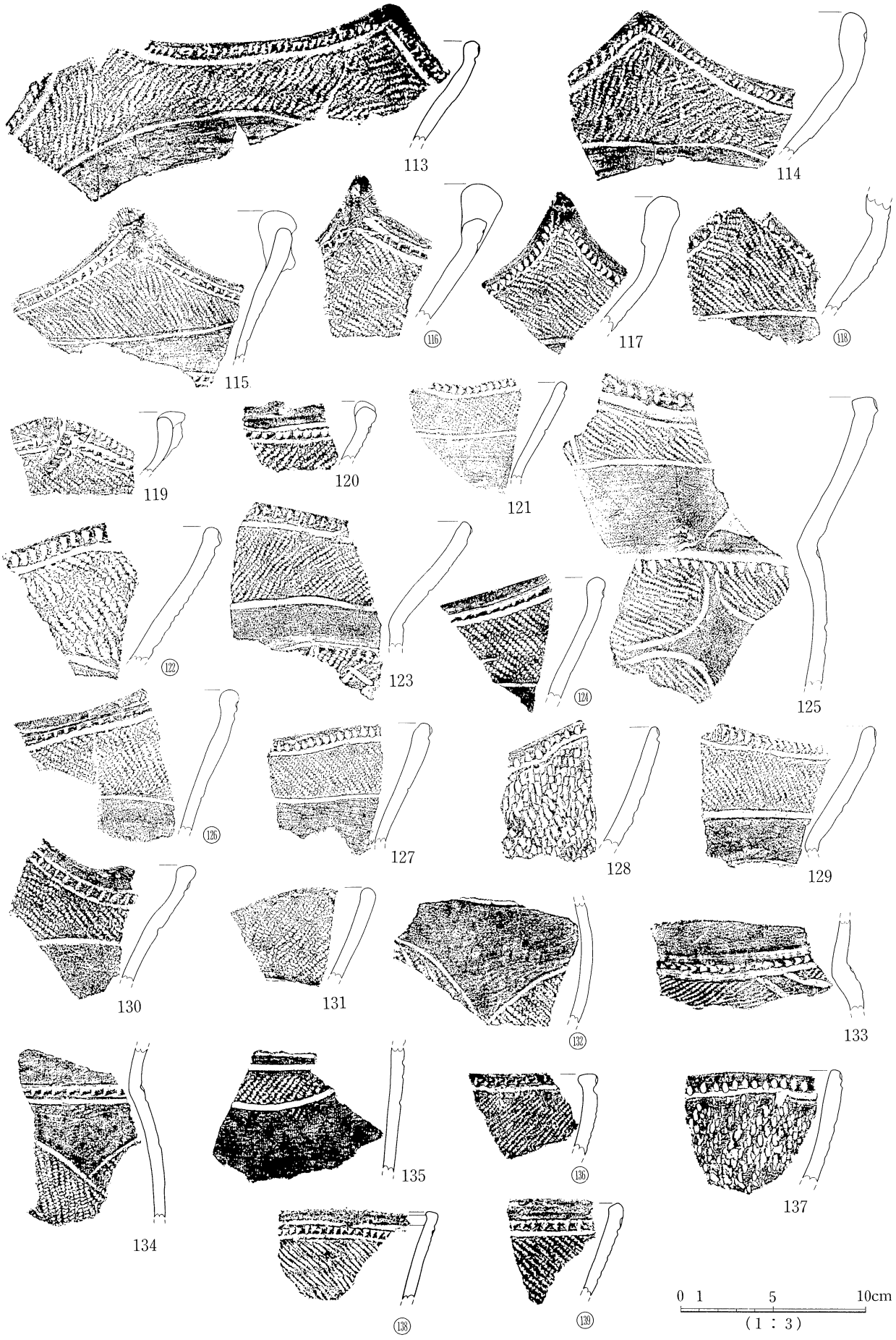
第79図　42号住居出土遺物(1)



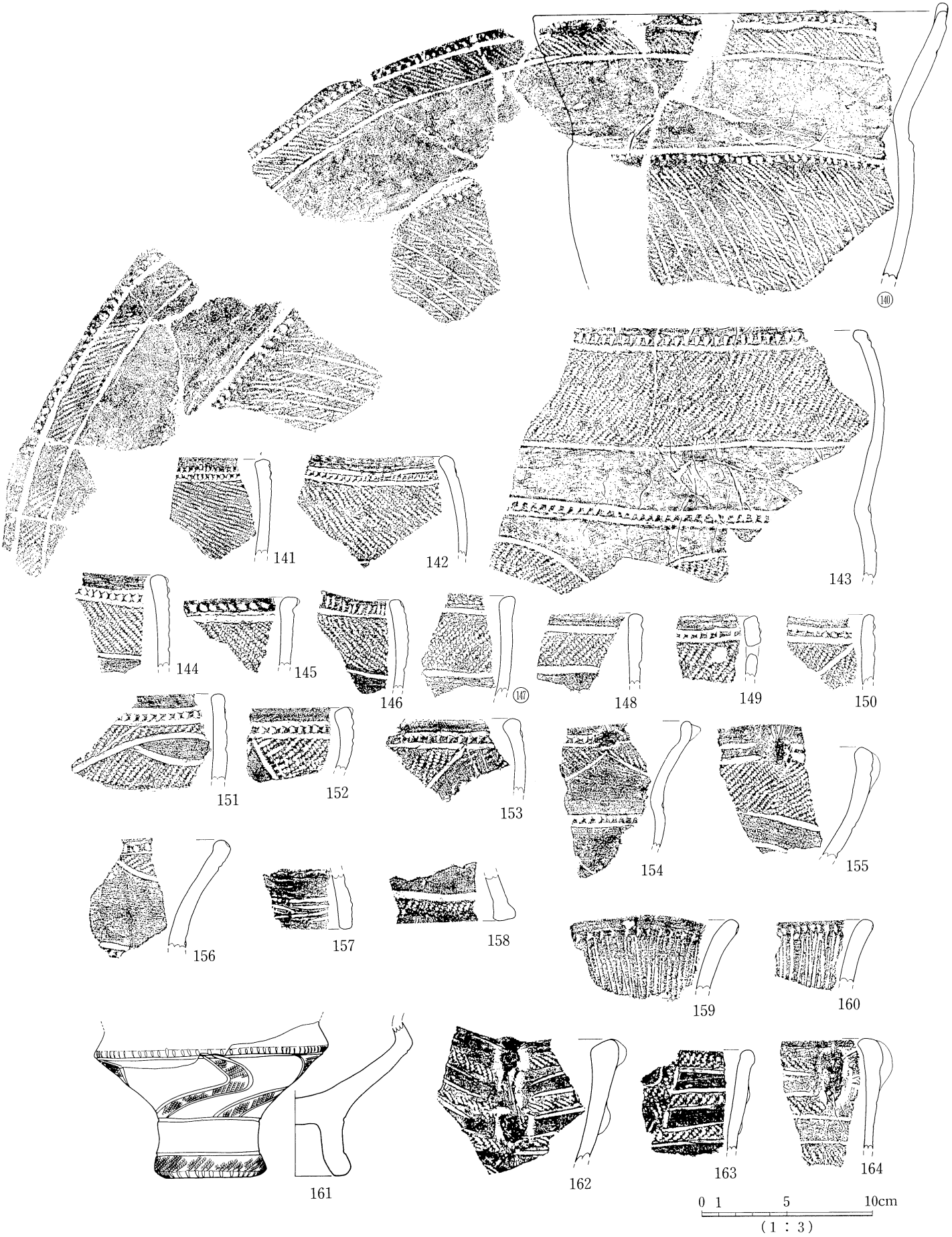
第80図　42号住居出土遺物(2)



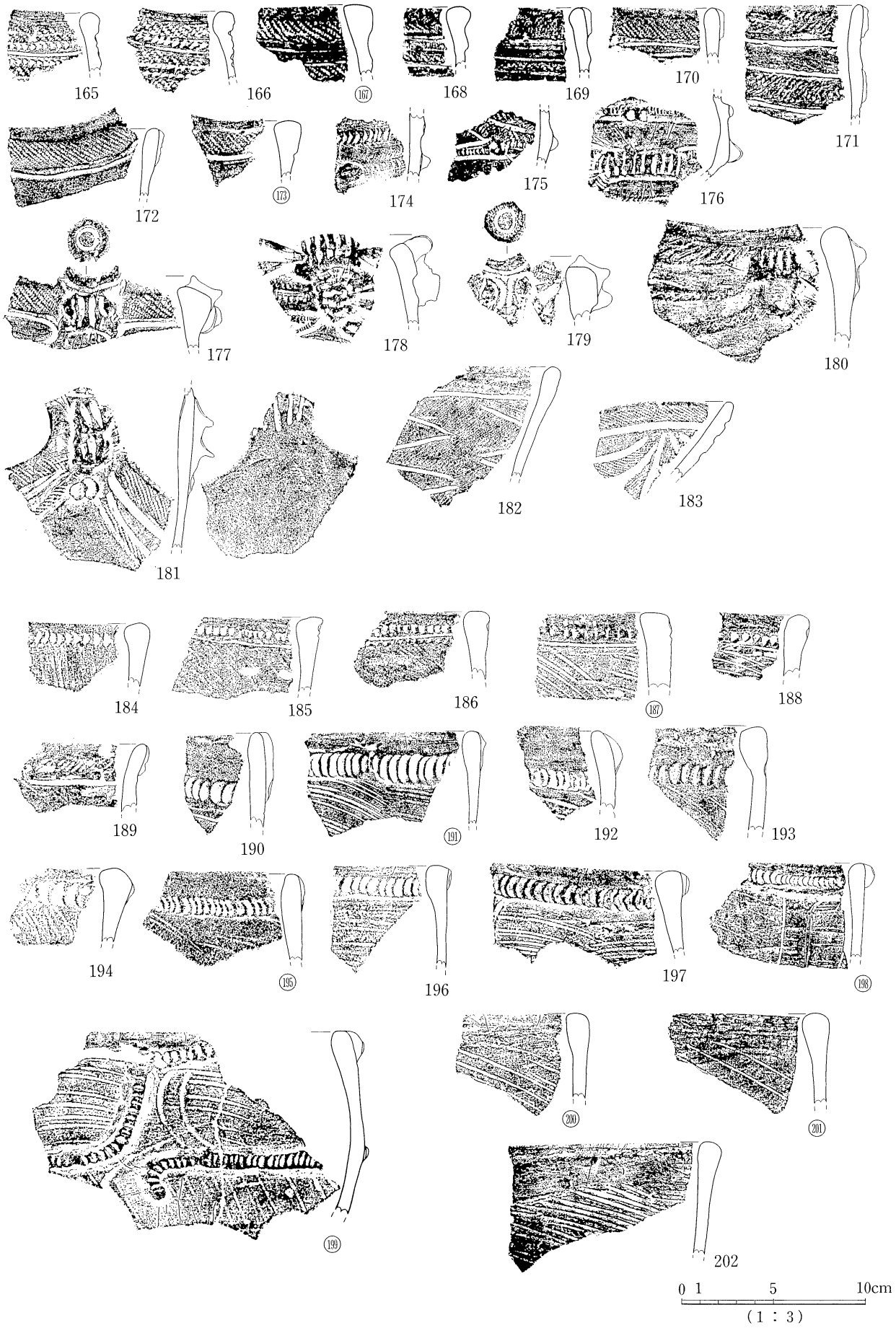
第81図　42号住居出土遺物(3)



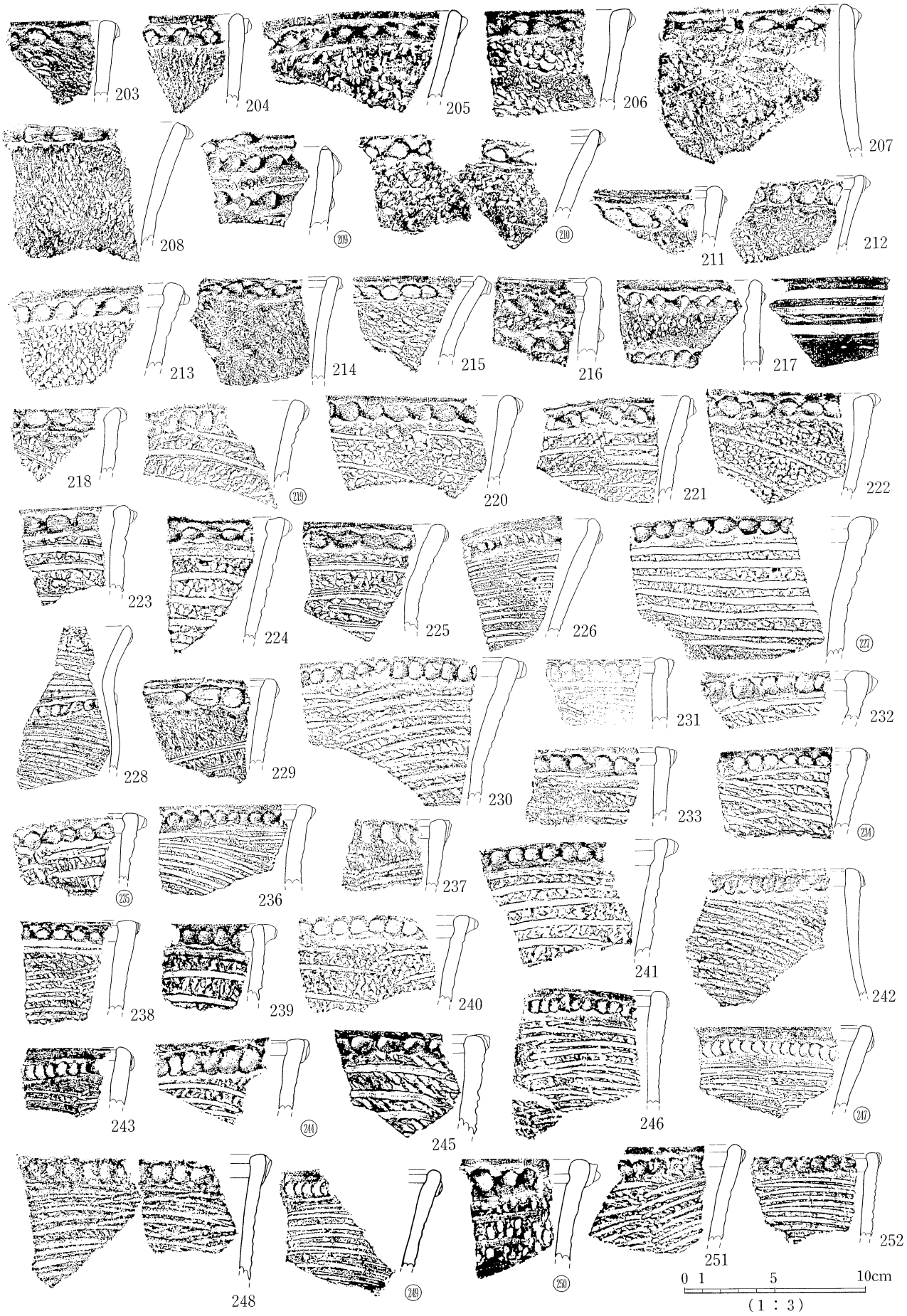
第82図　42号住居出土遺物(4)



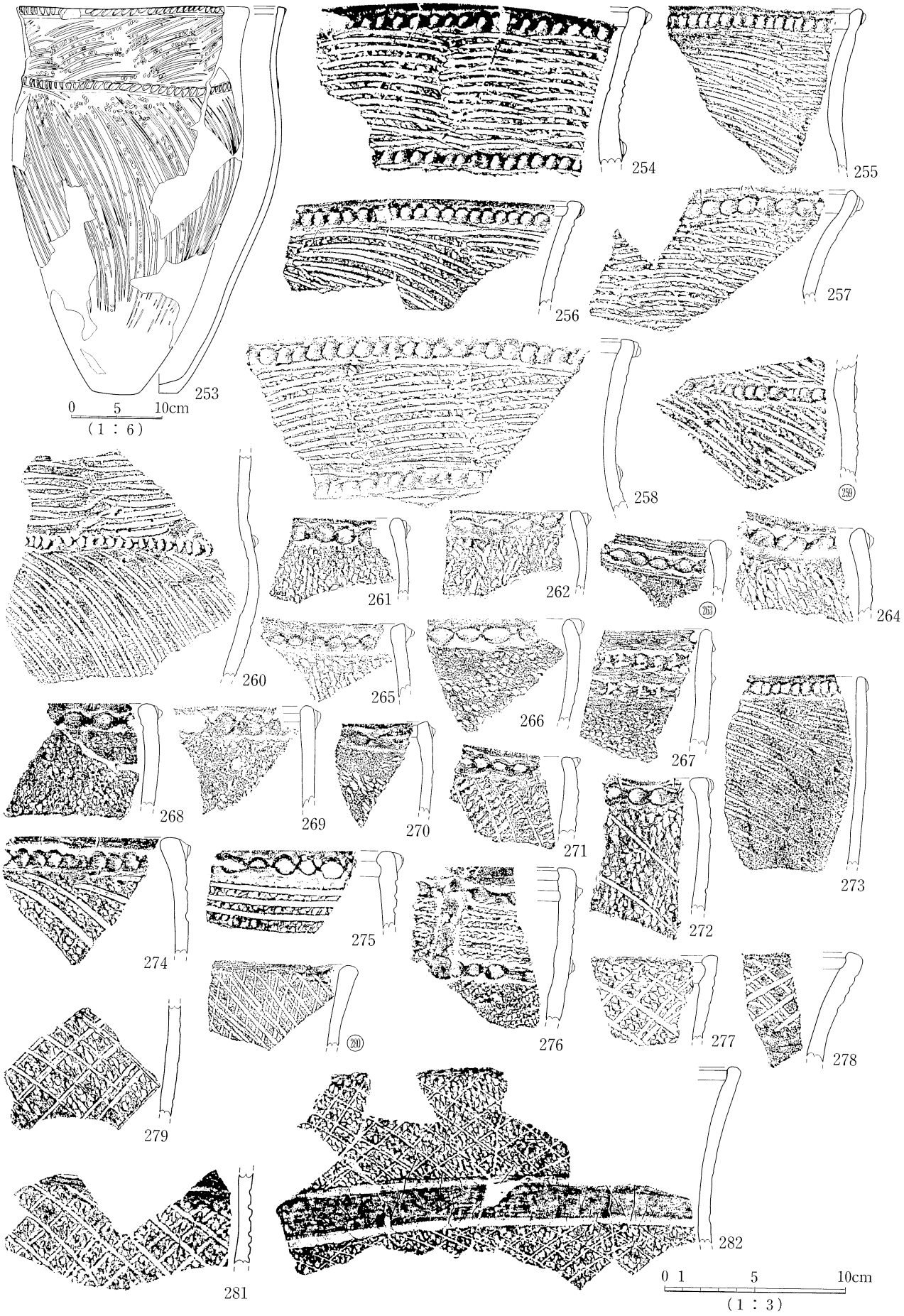
第83図　42号住居出土遺物(5)



第84図　42号住居出土遺物(6)

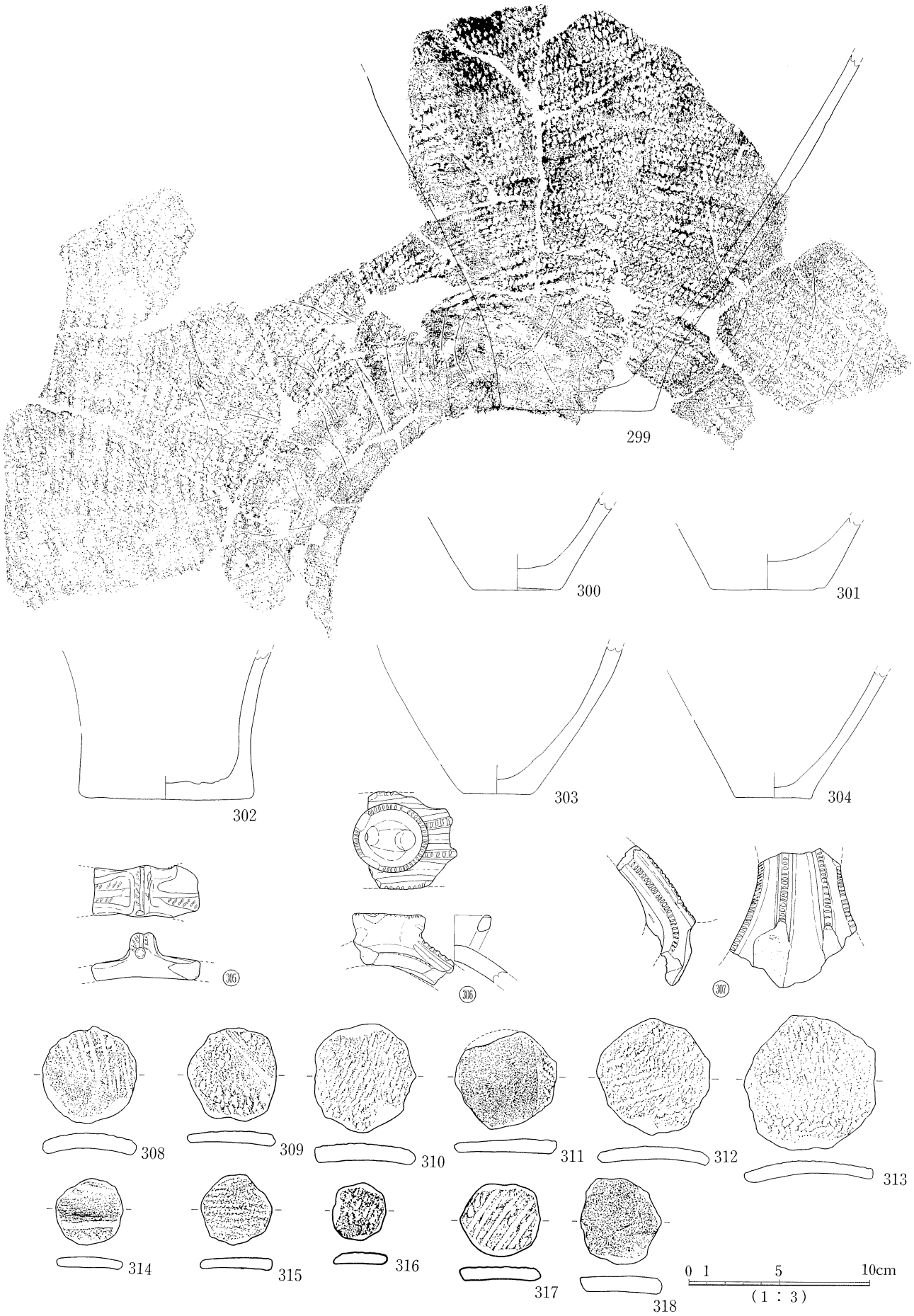


第85図　42号住居出土遺物(7)

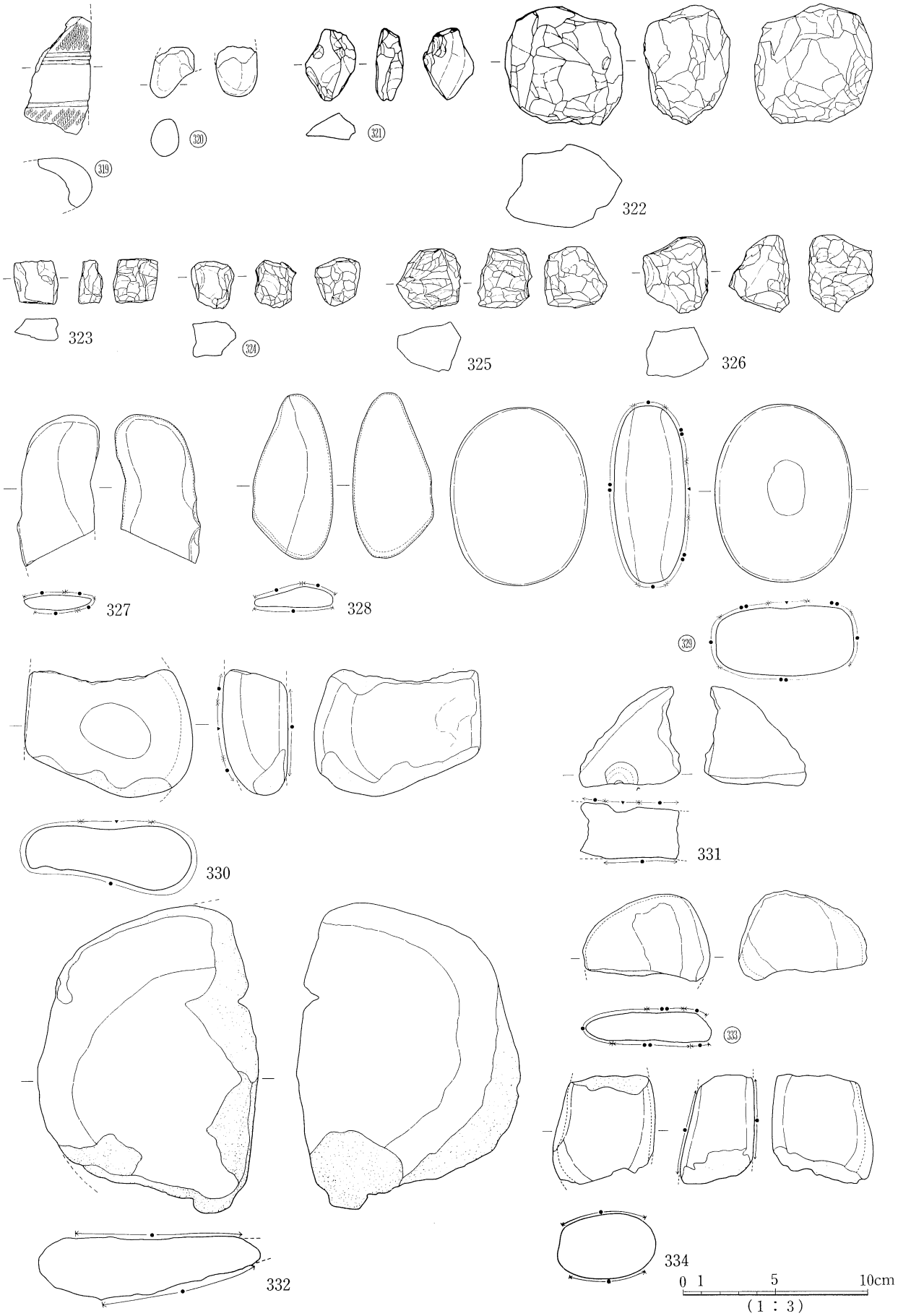


第86図　42号住居出土遺物(8)

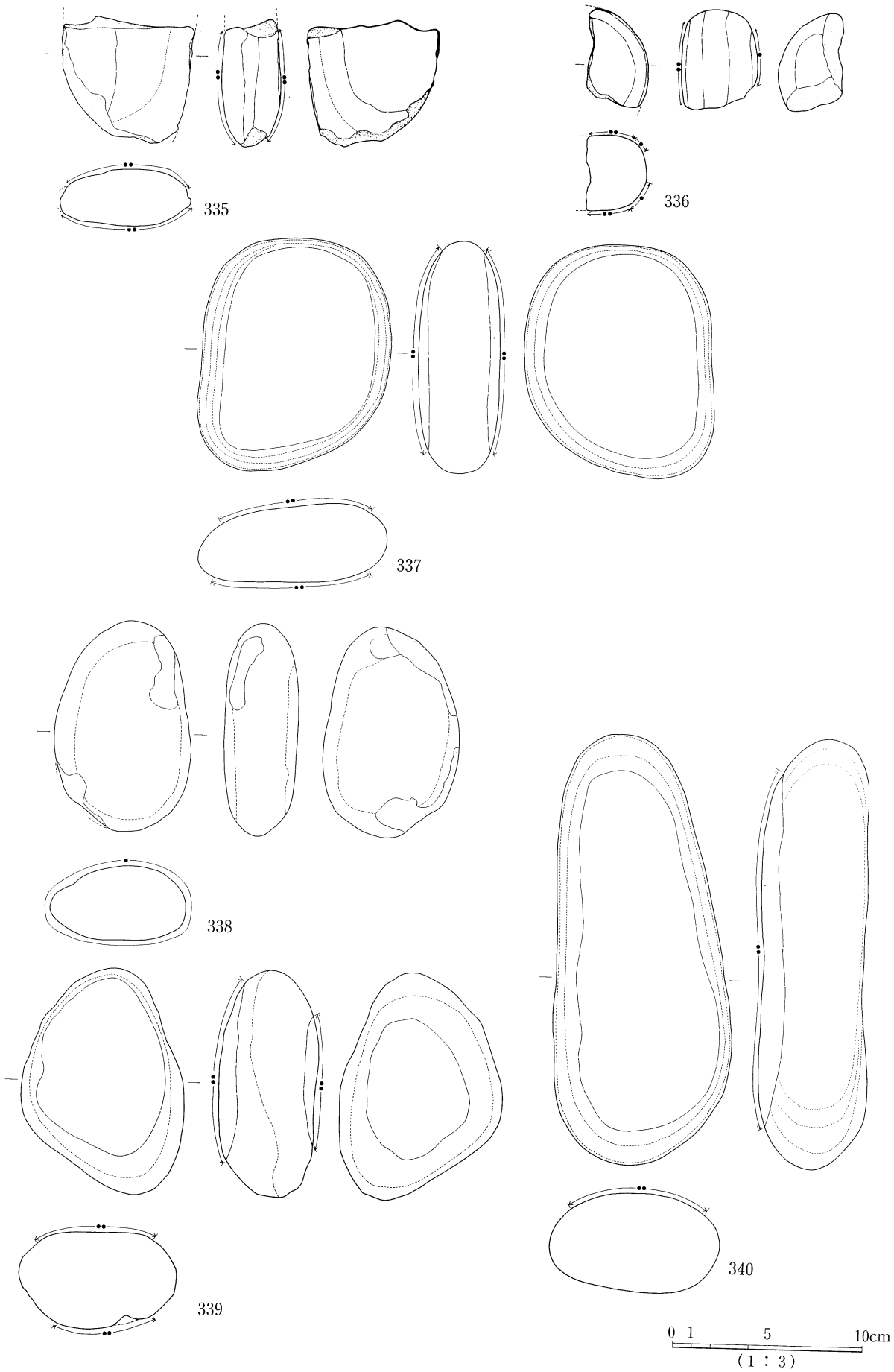
第87図　42号住居出土遺物(9)



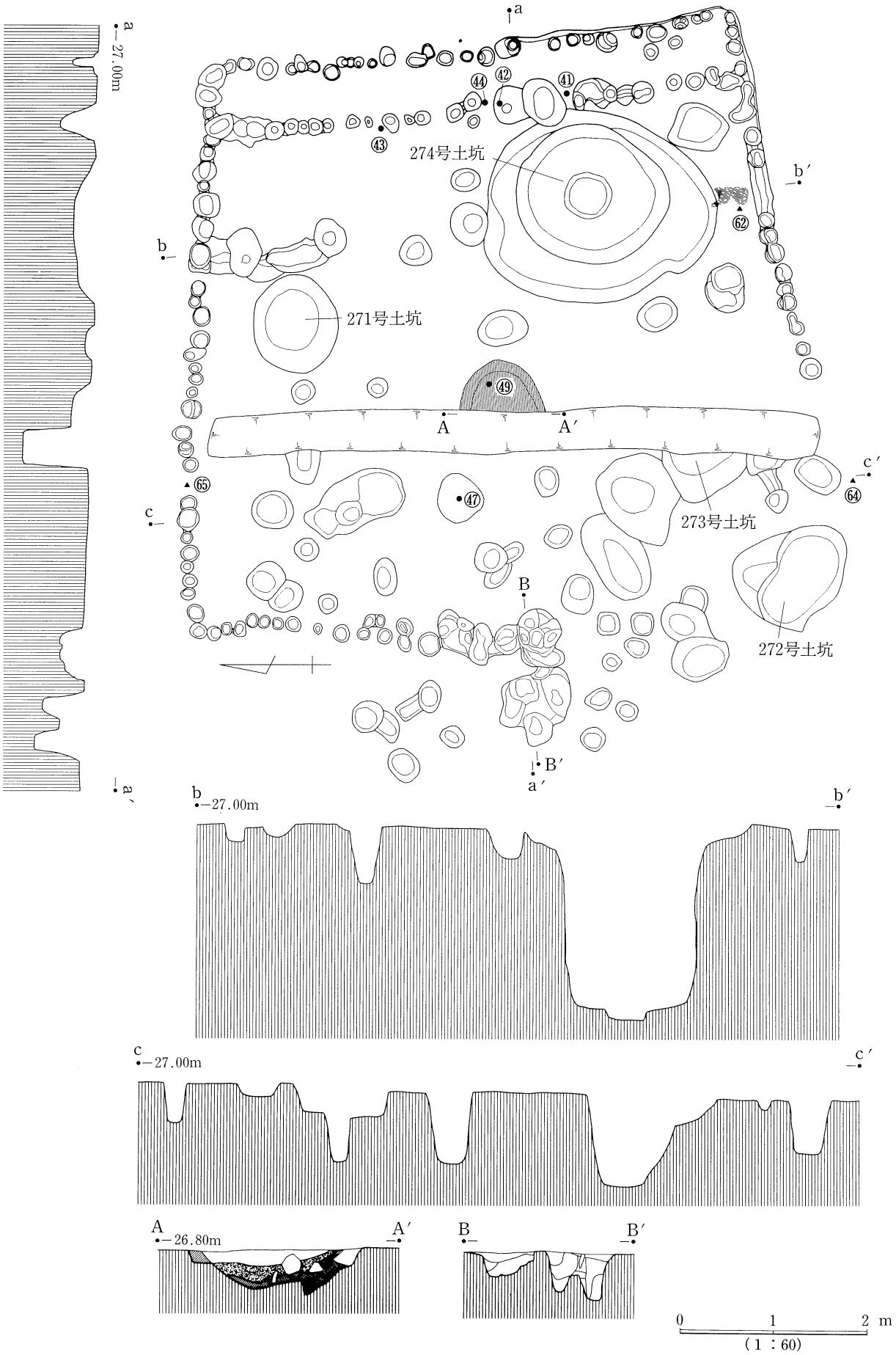
第88図　42号住居出土遺物(10)



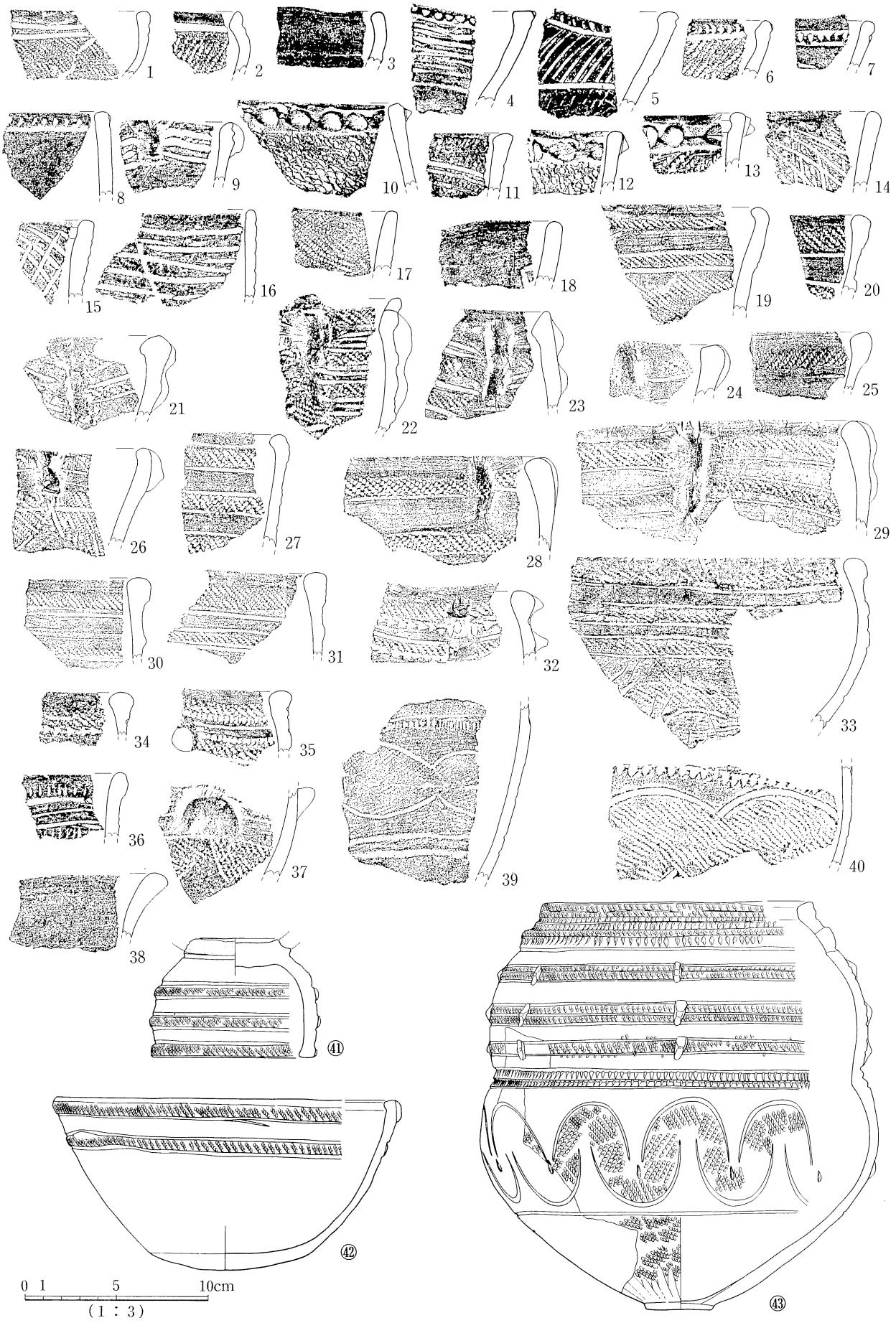
第89図　42号住居出土遺物(11)



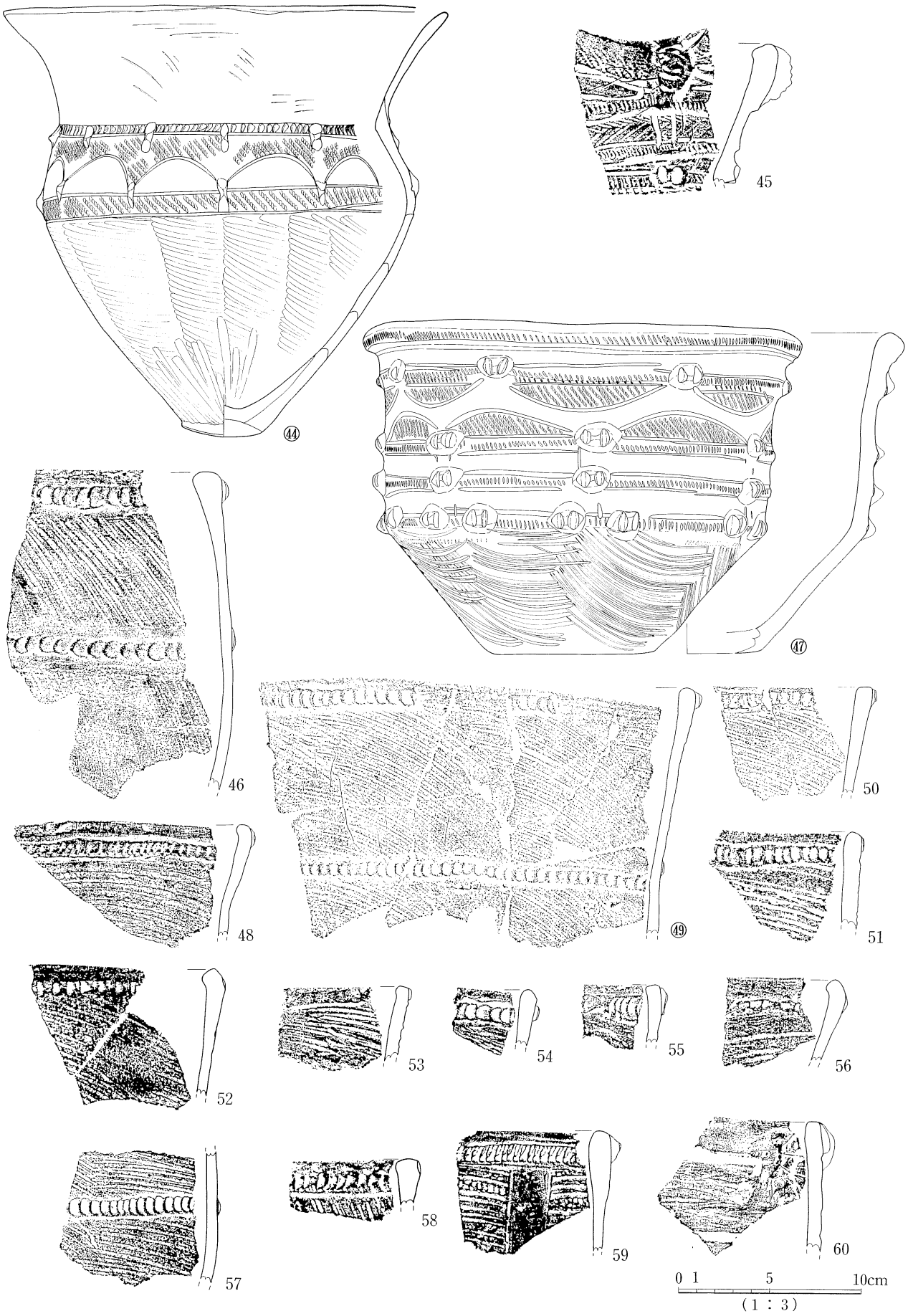
第90図　42号住居出土遺物(12)



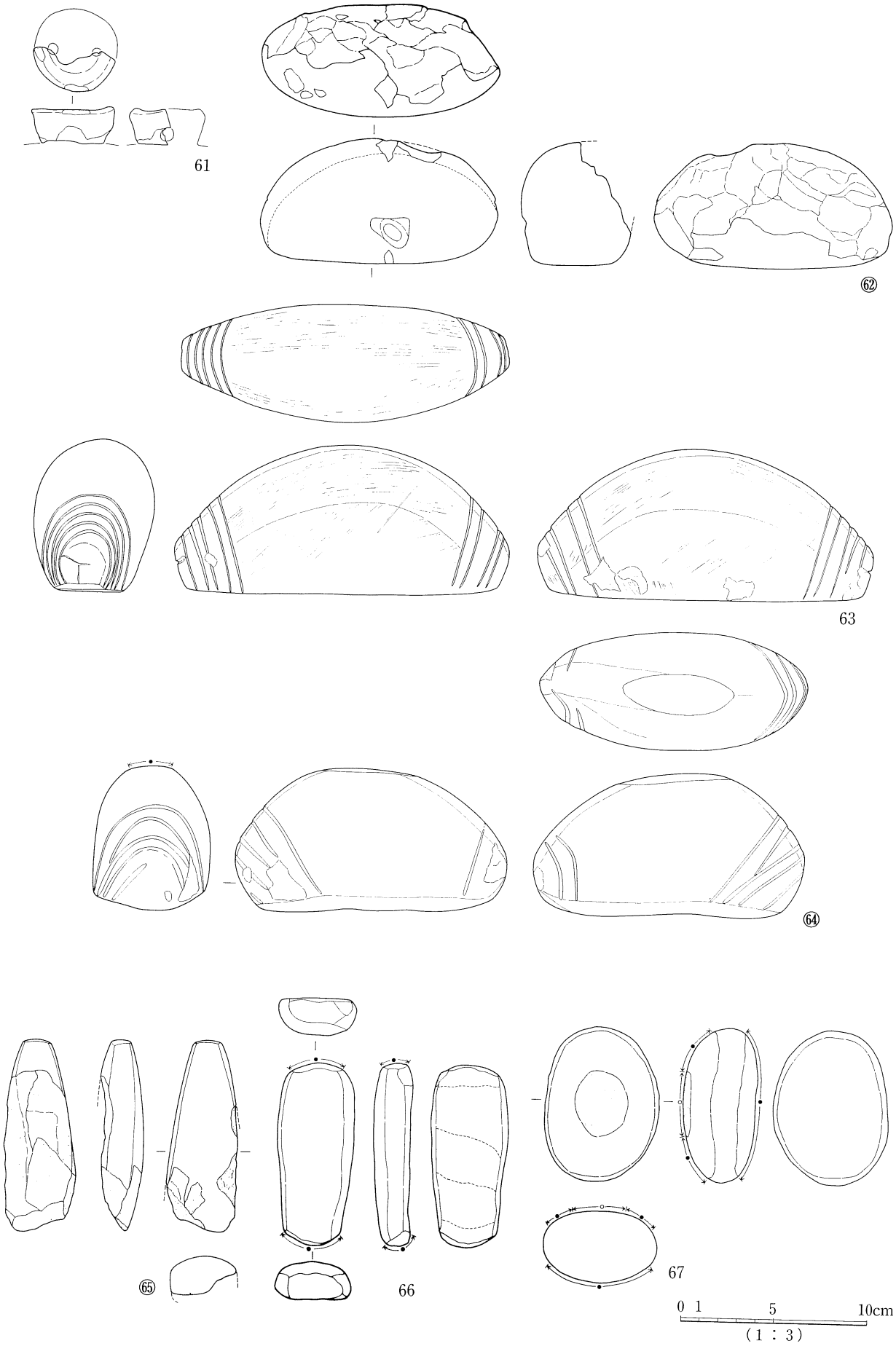
第91図　43号住居実測図



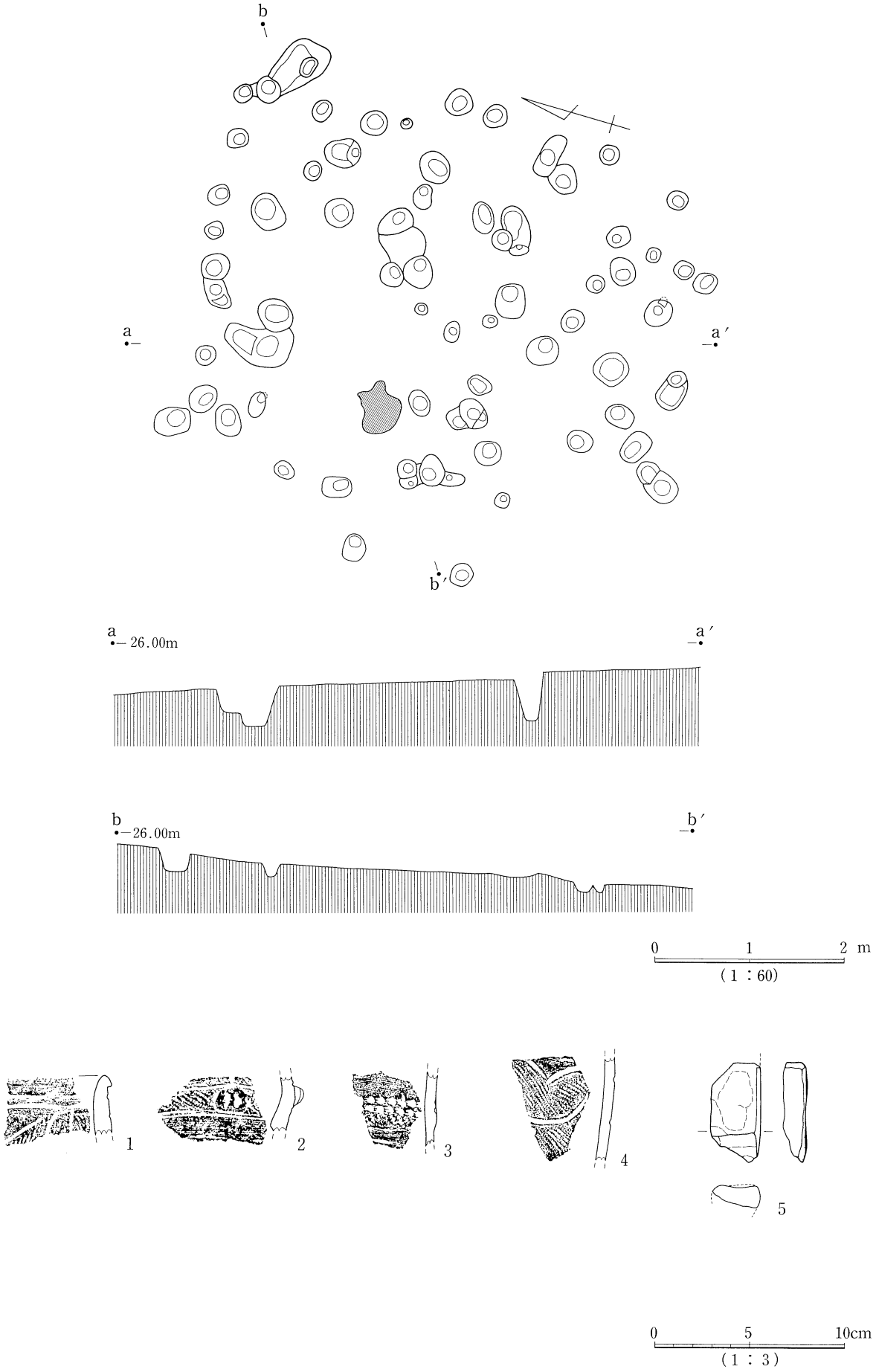
第92図　43号住居出土遺物(1)



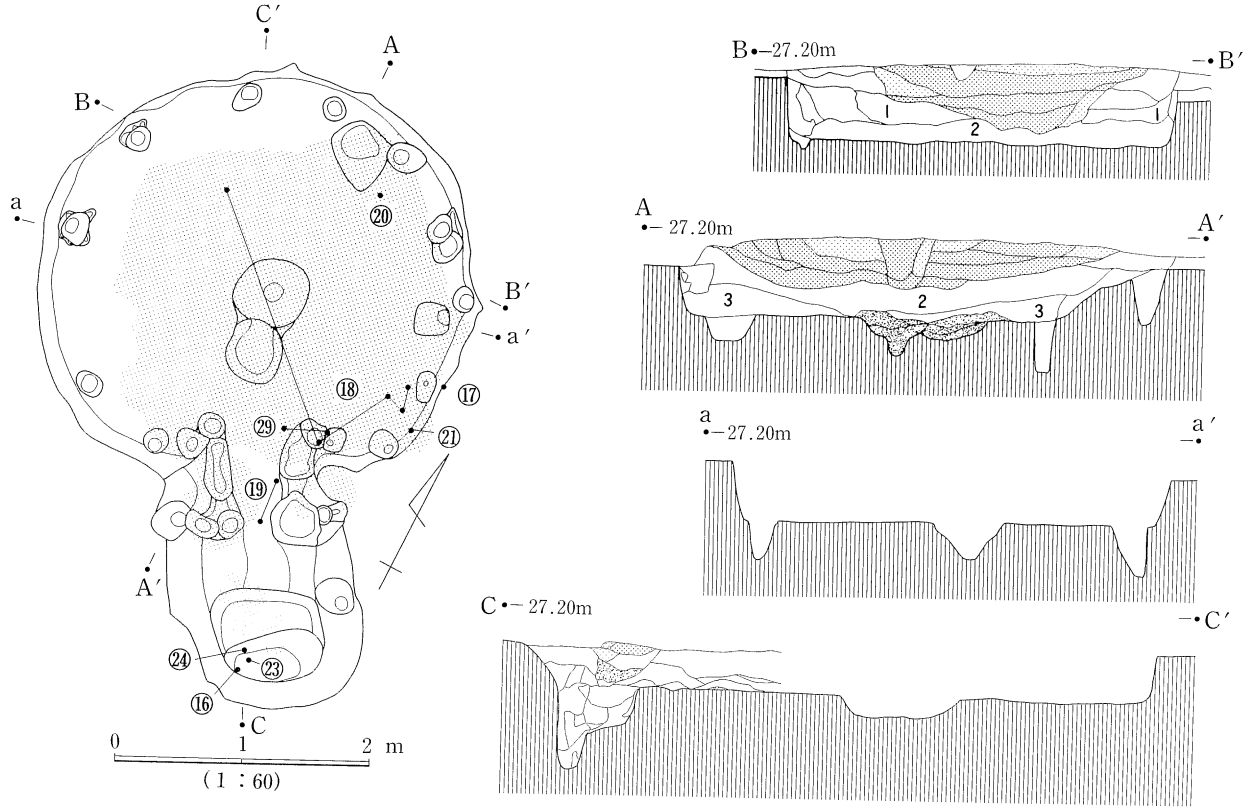
第93図　43号住居出土遺物(2)

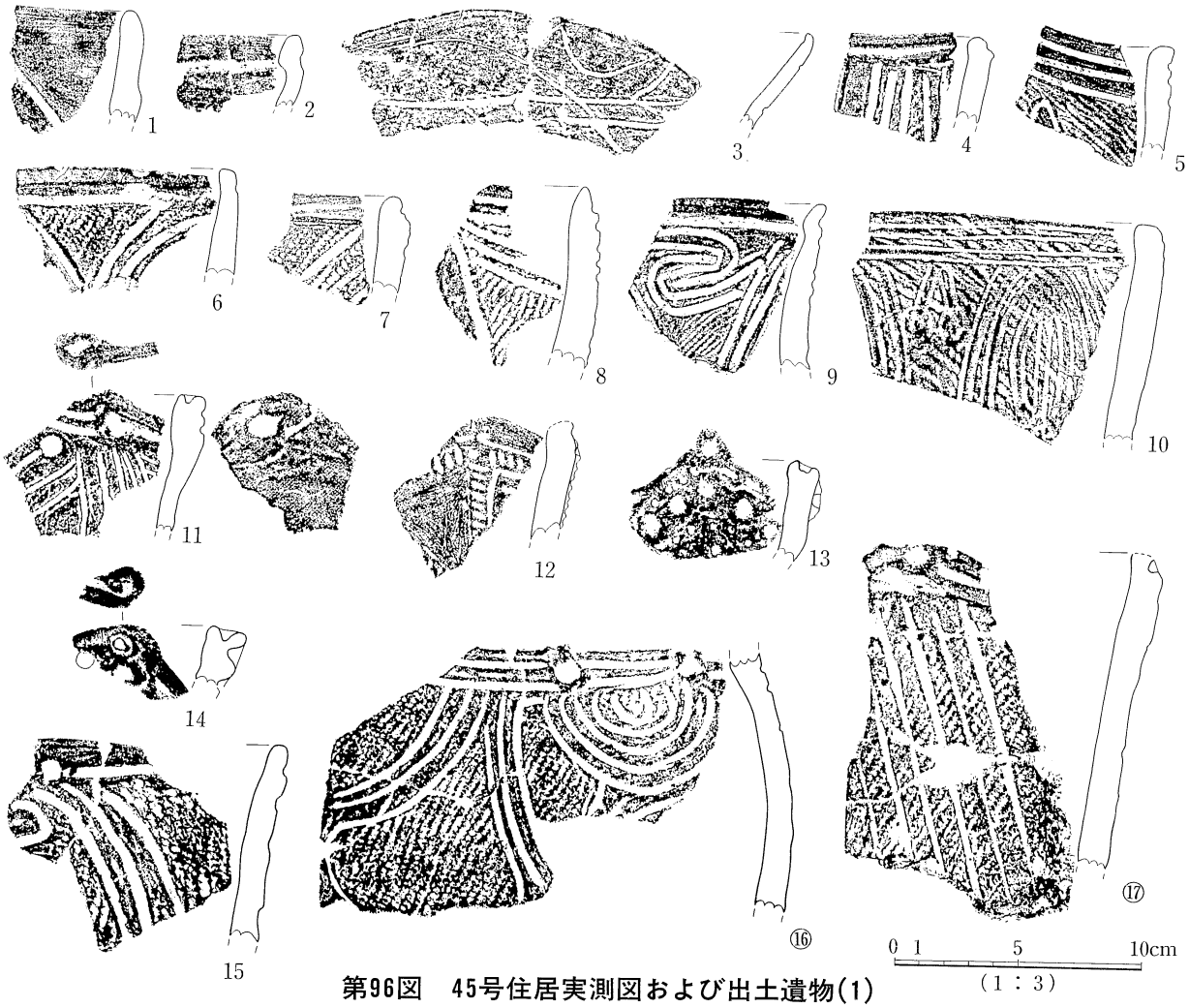


第94図　43号住居出土遺物(3)

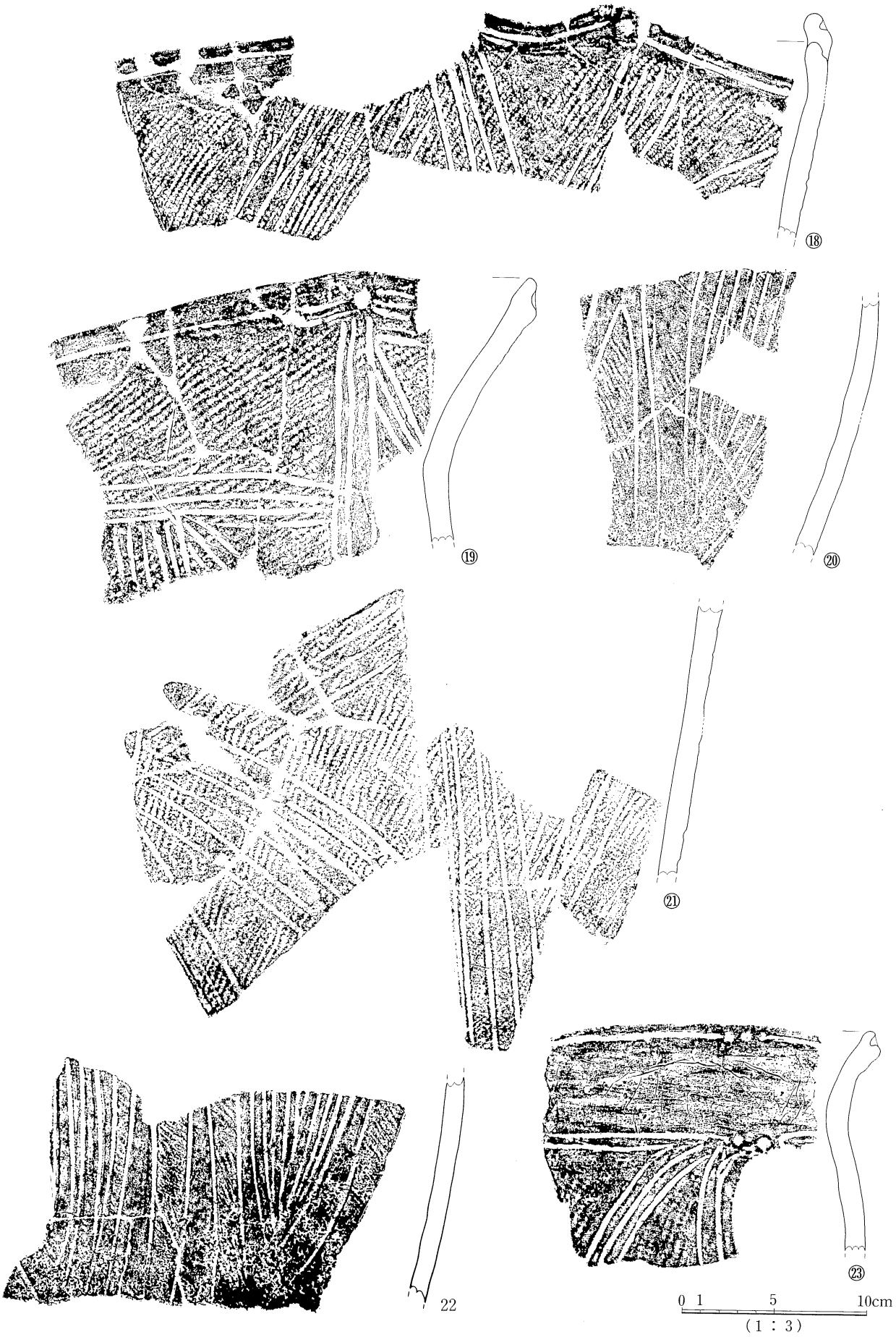


第95図　44号住居実測図および出土遺物

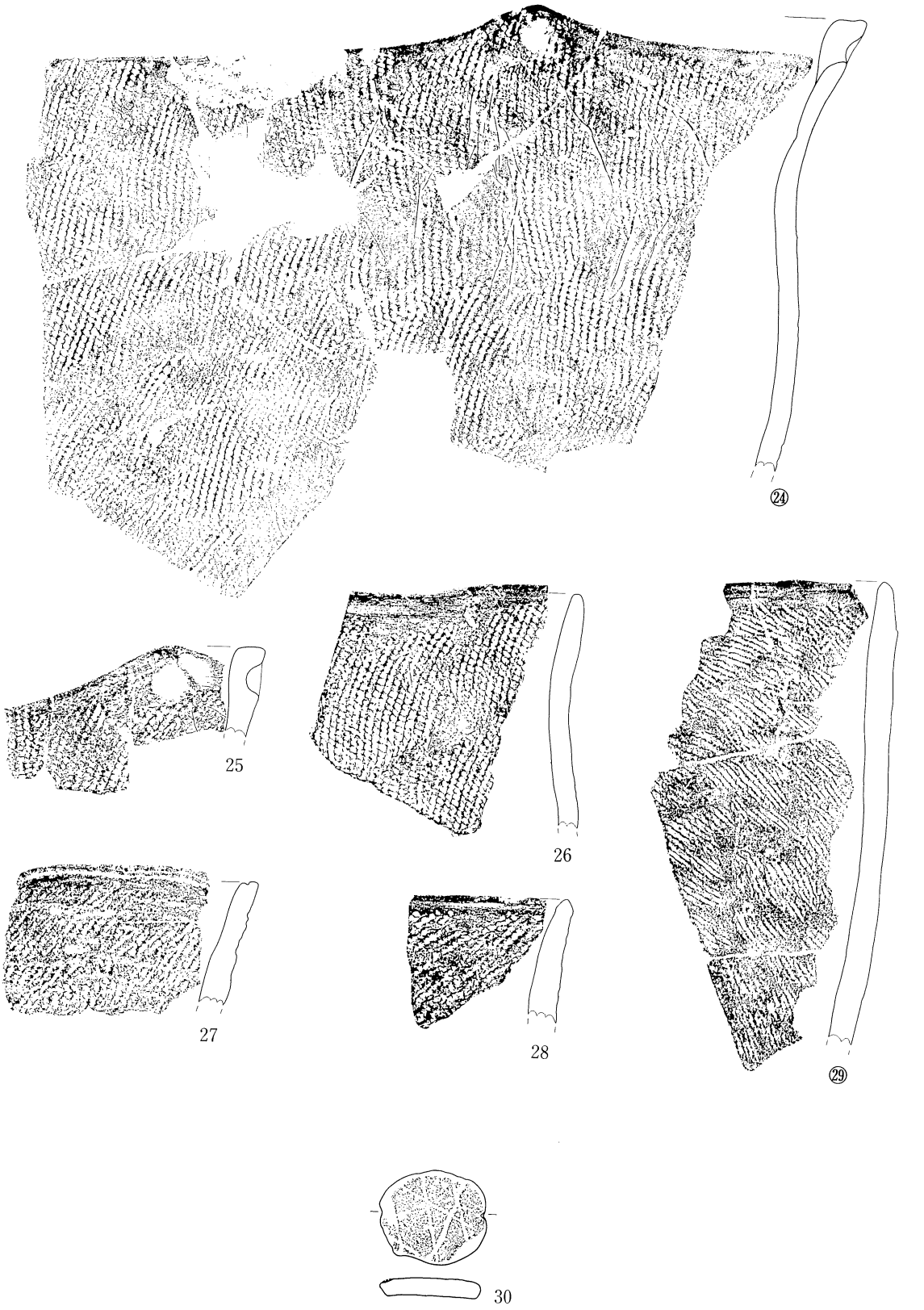




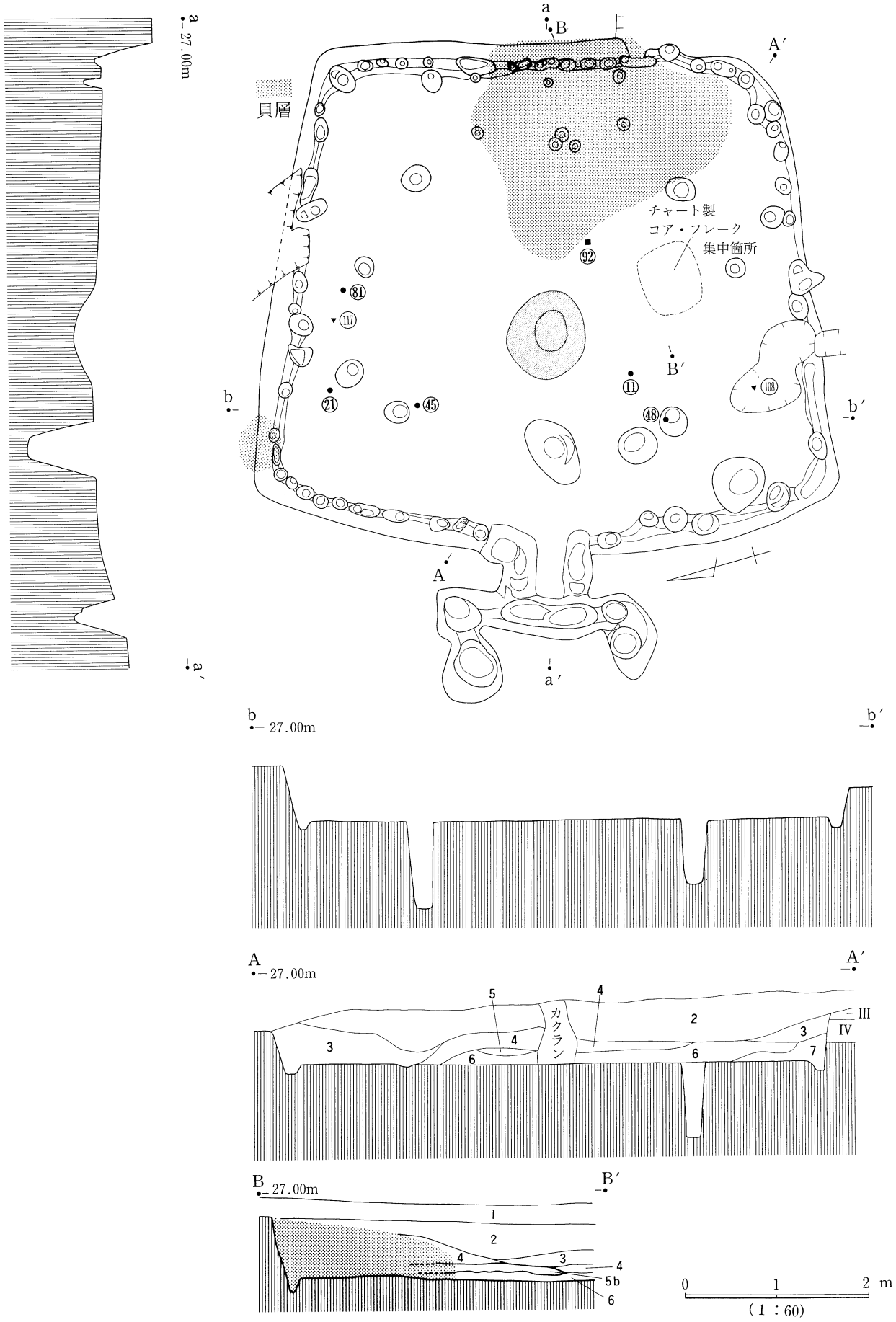
第96図　45号住居実測図および出土遺物(1)



第97図　45号住居出土遺物(2)

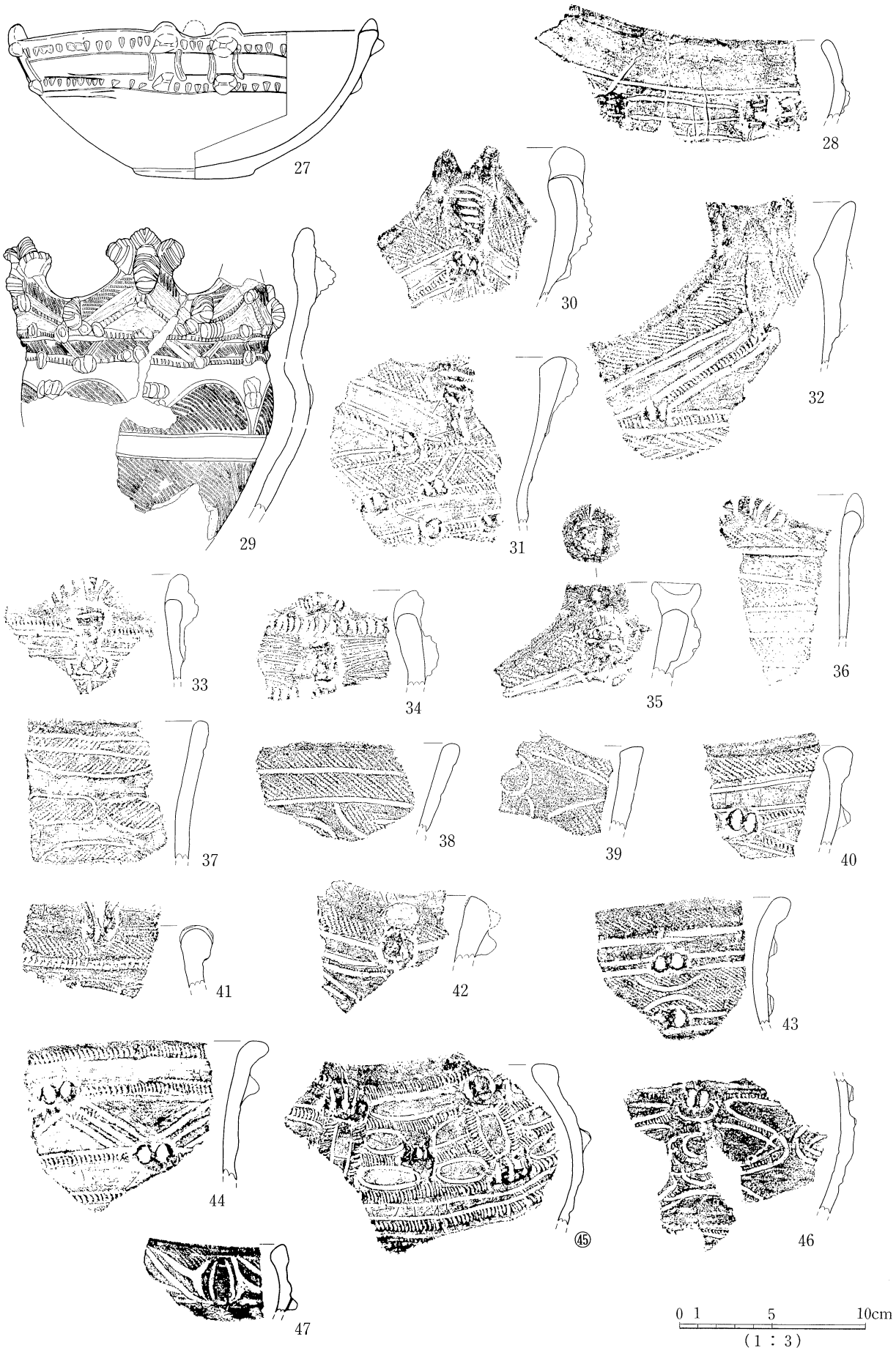


第98図　45号住居出土遺物(3)



第99図　46号住居実測図

第100図　46号住居出土遺物(1)

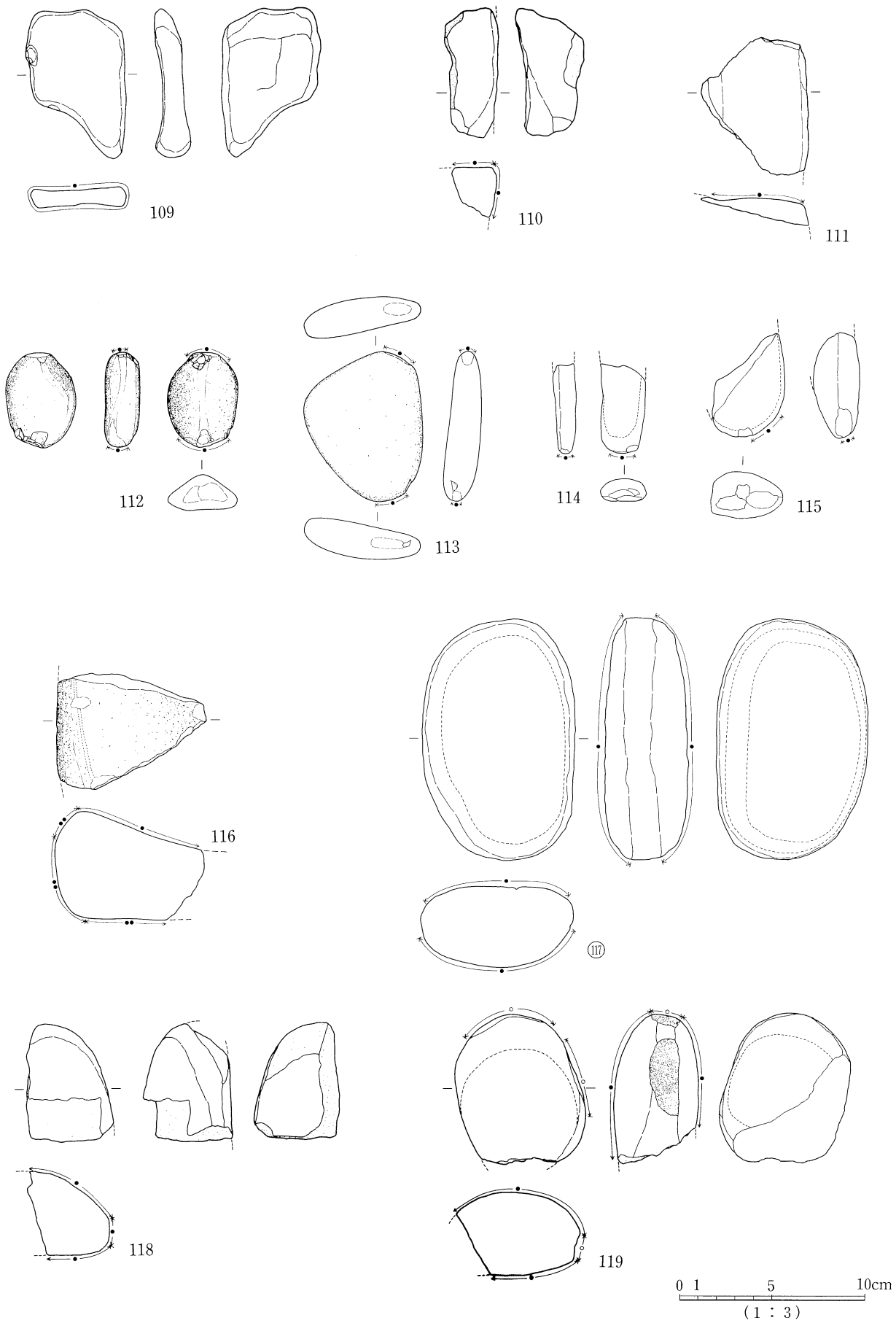


第101図　46号住居出土遺物(2)

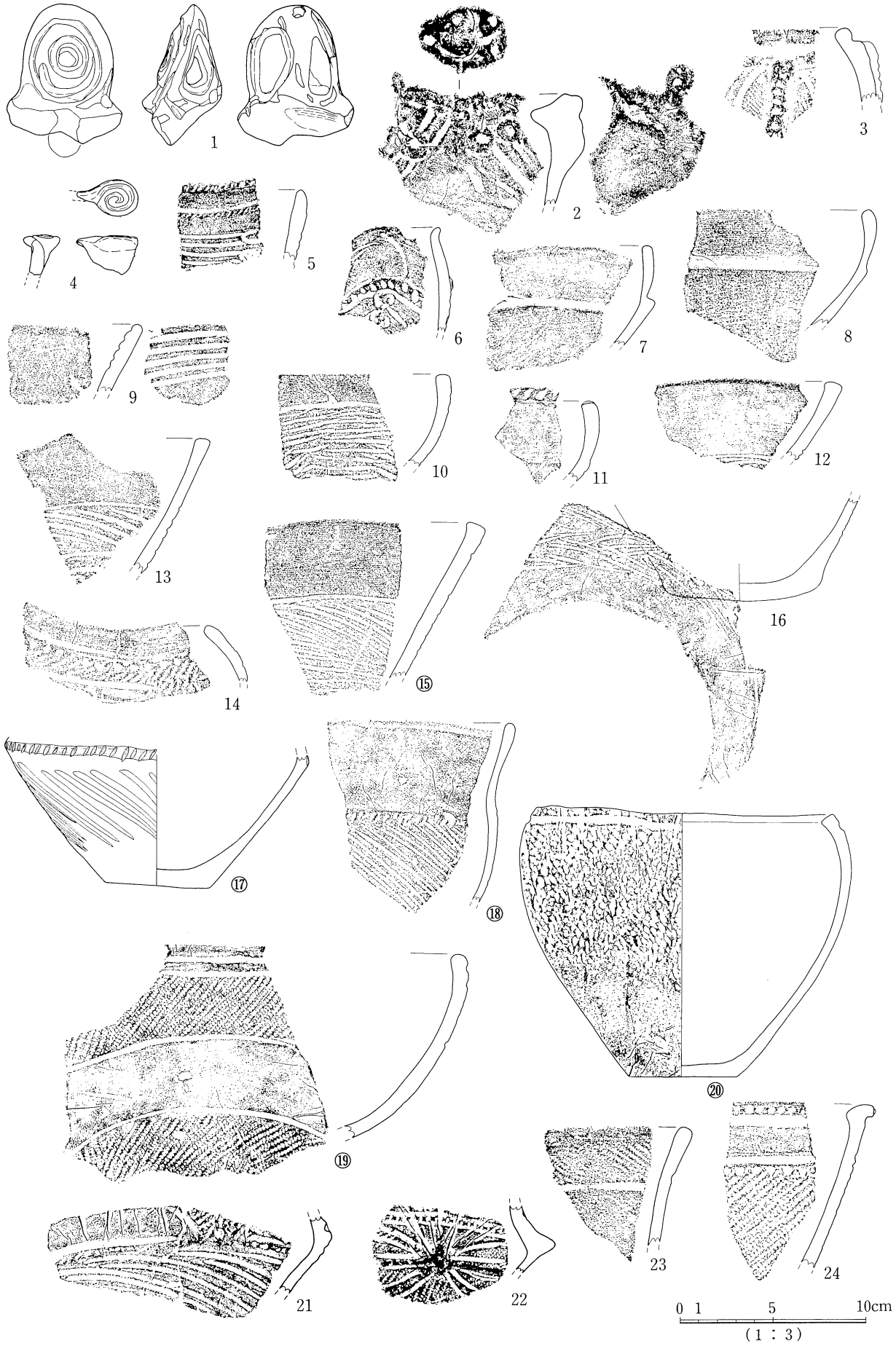
第102図　46号住居出土遺物(3)

第103図　46号住居出土遺物(4)

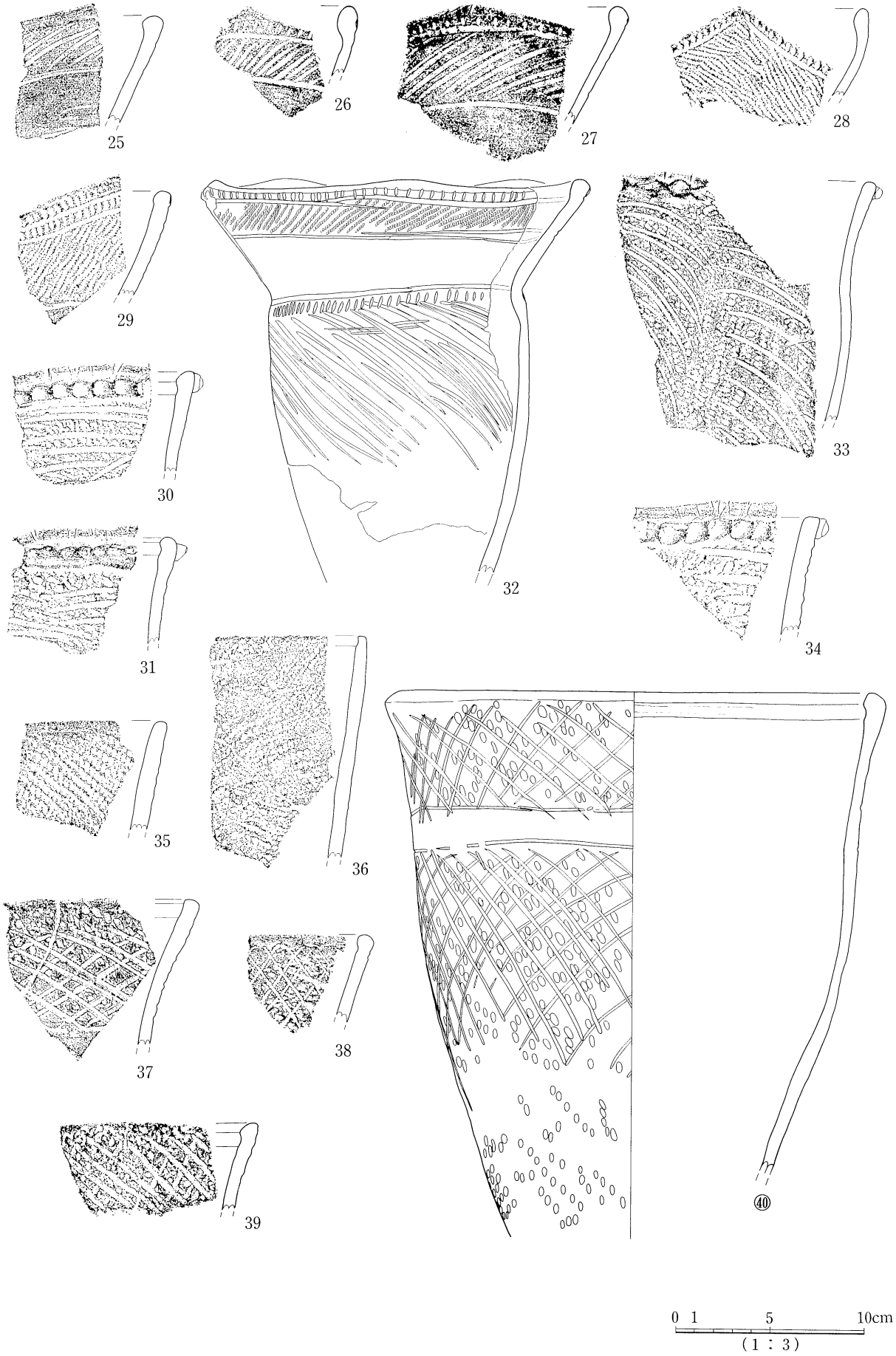
第104図　46号住居出土遺物(5)



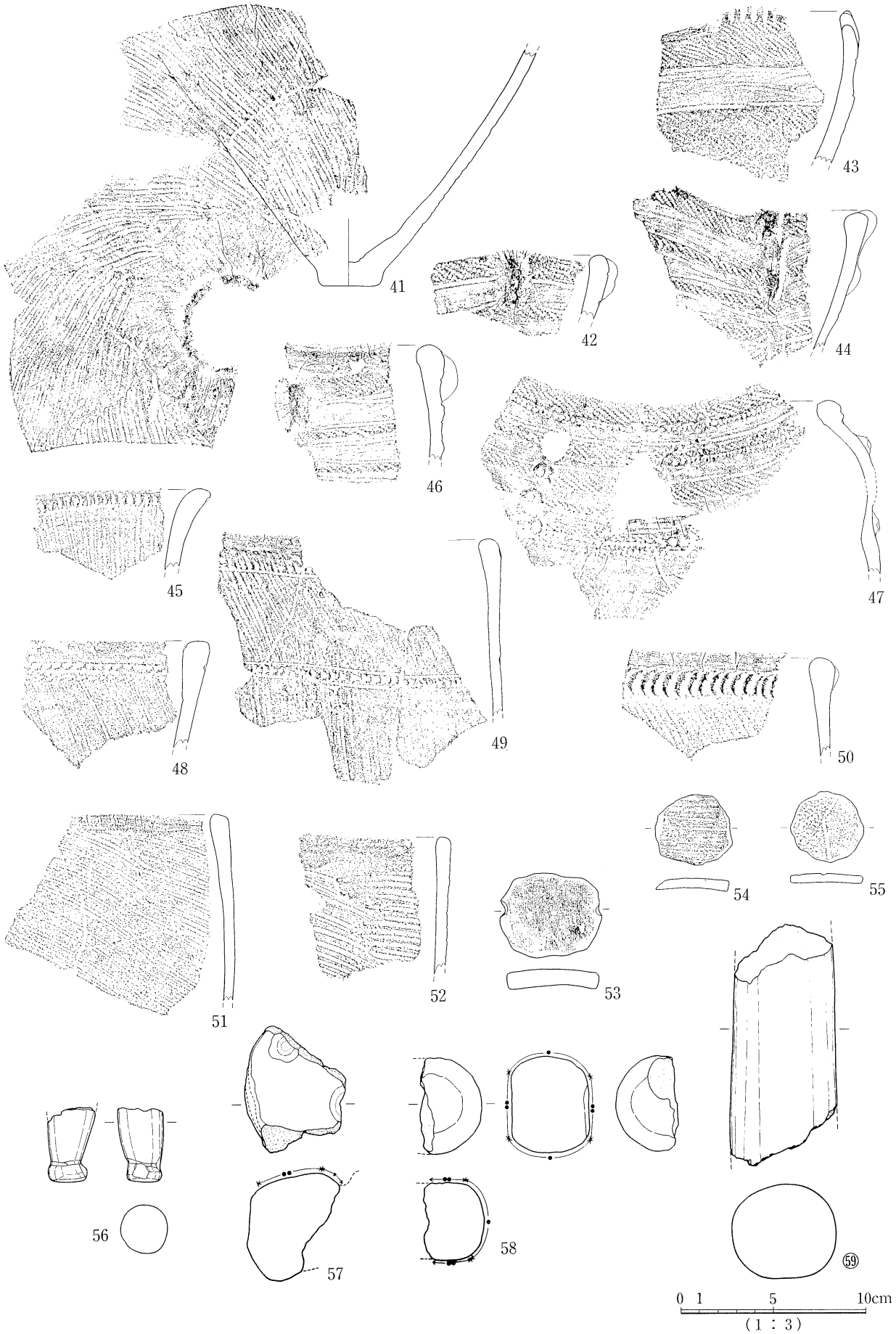
第105図　46号住居出土遺物(6)



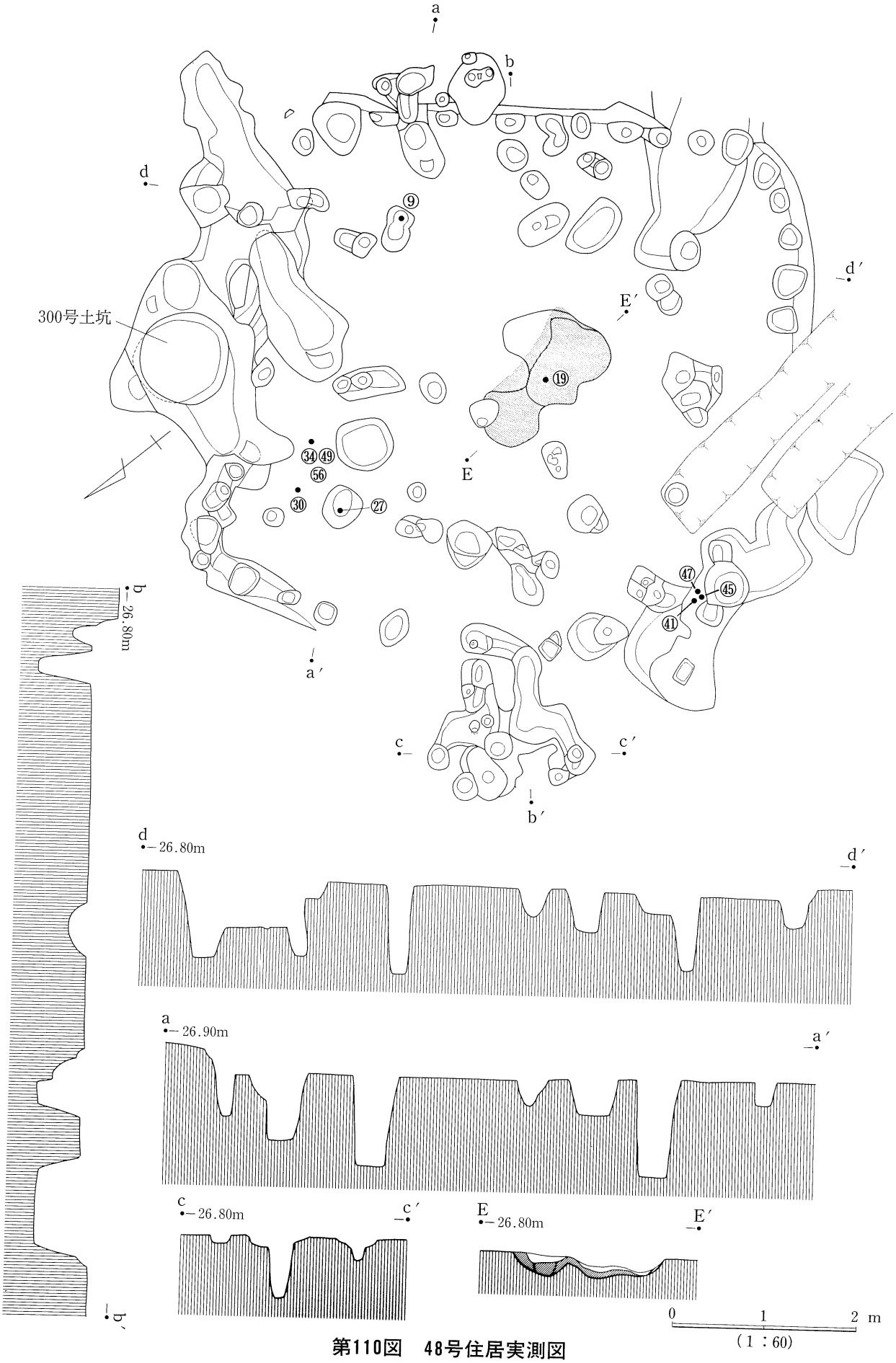
第107図　47号住居出土遺物(1)



第108図　47号住居出土遺物(2)



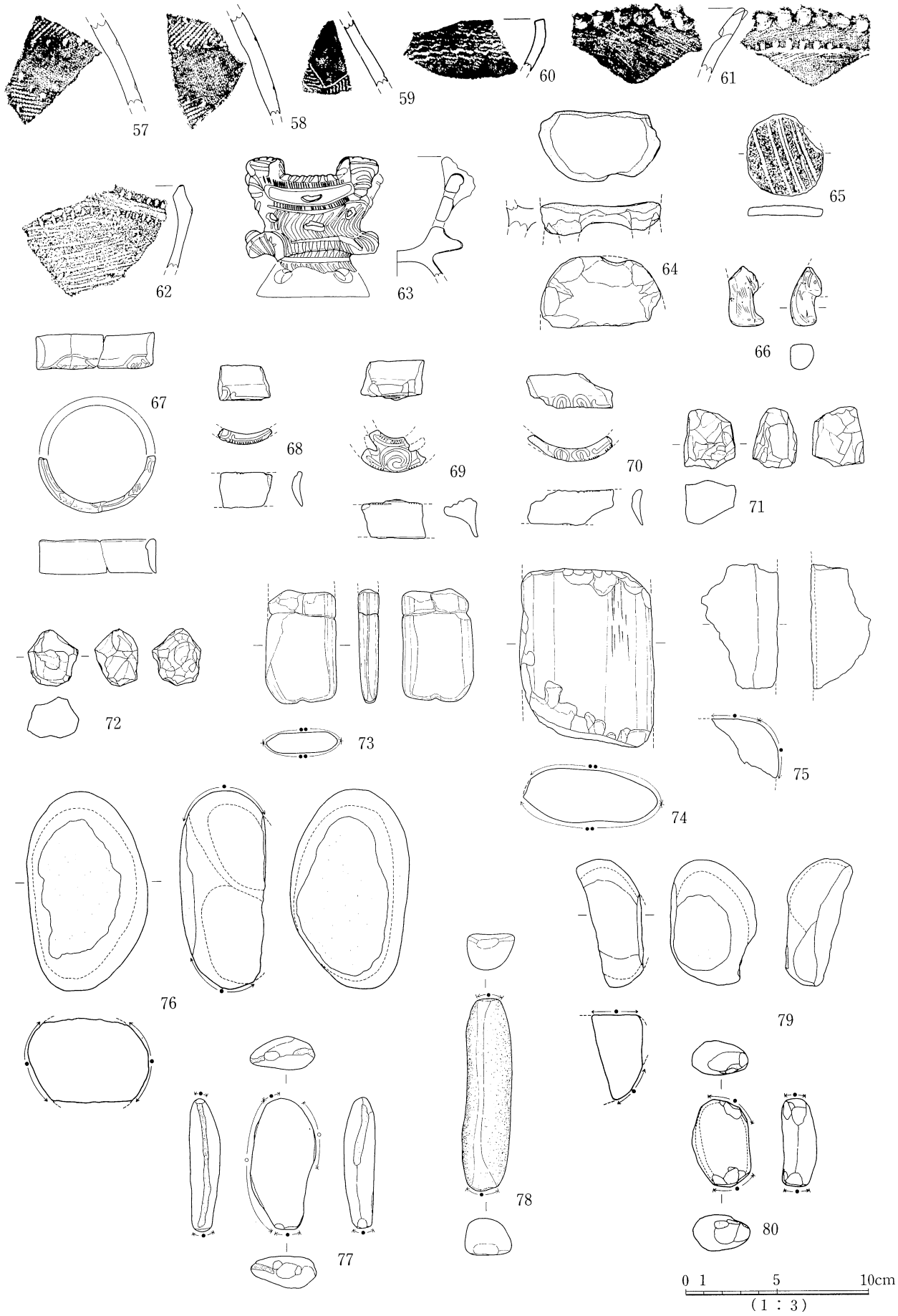
第109図　47号住居出土遺物(3)



第110図　48号住居実測図

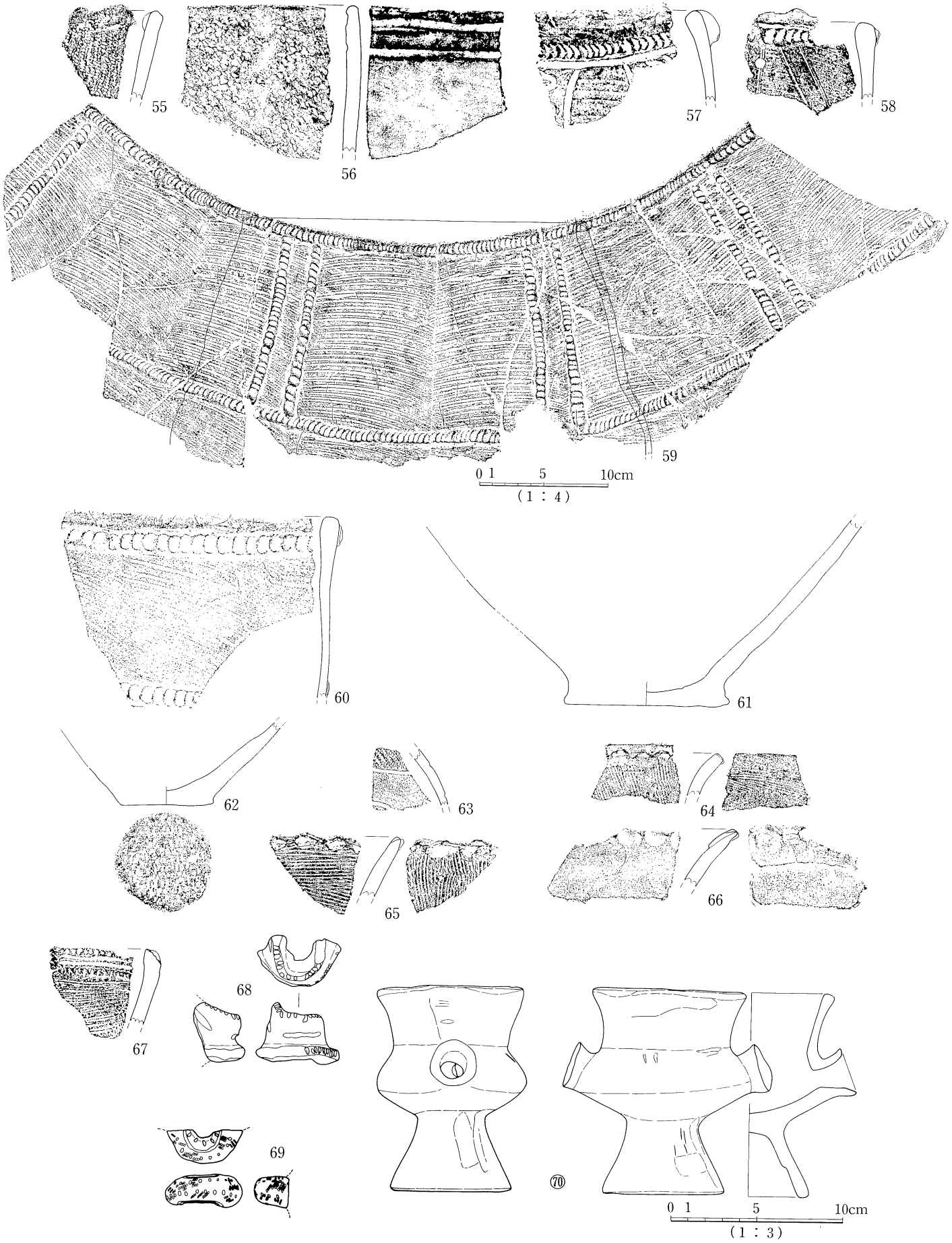
第111図　48号住居出土遺物(1)

第112図　48号住居出土遺物(2)

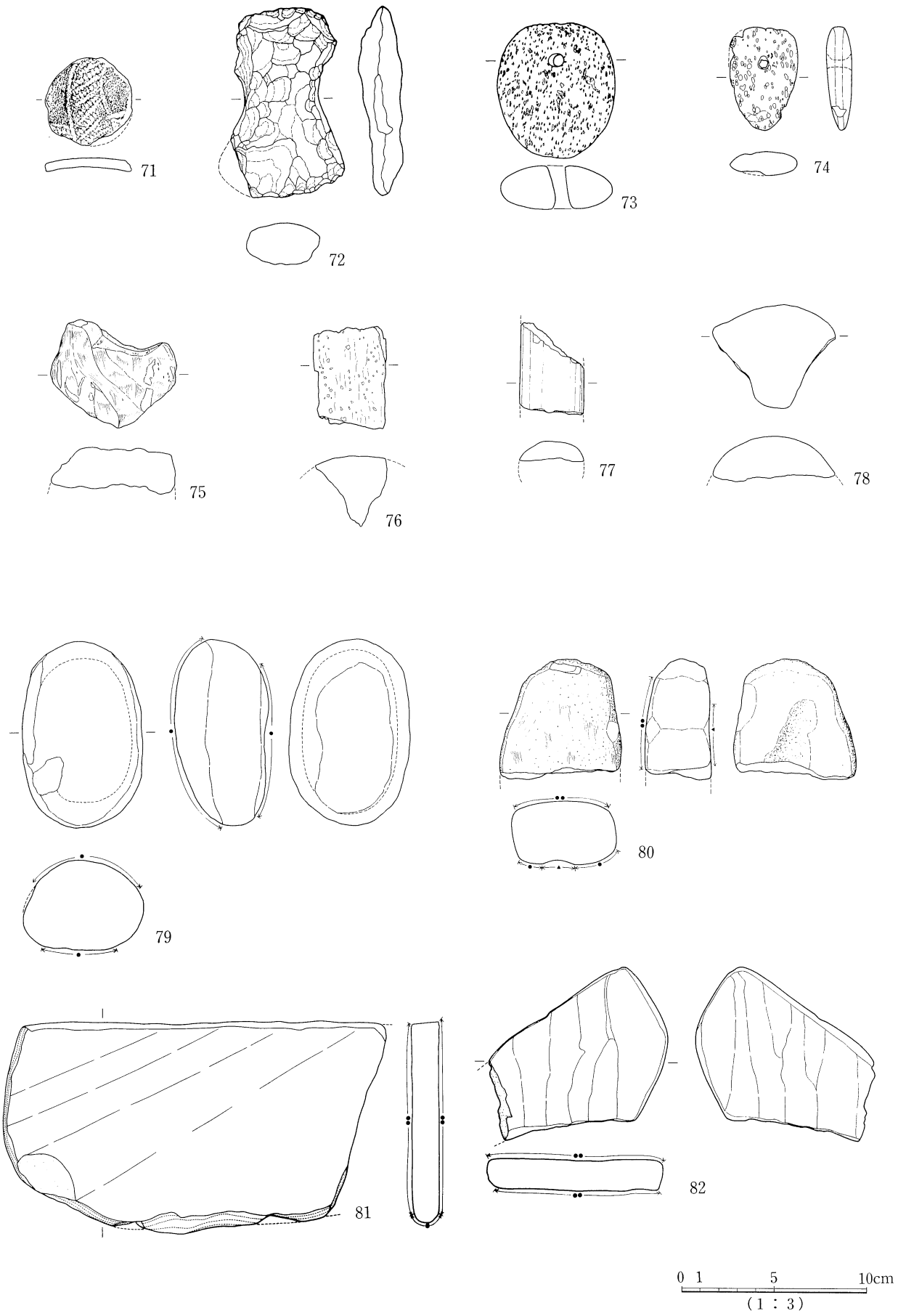


第113図　48号住居出土遺物(3)

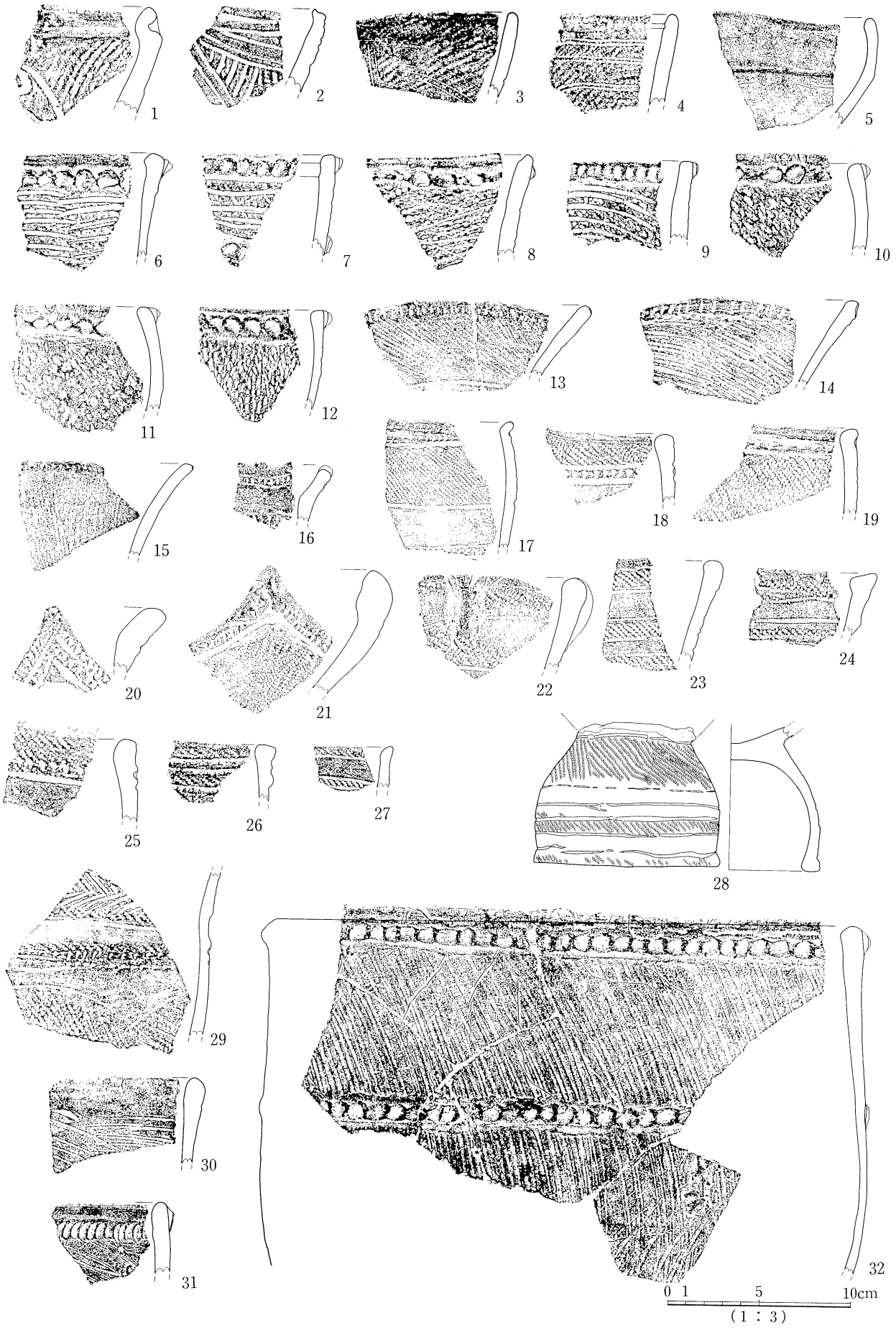
第115図　49Ａ号住居出土遺物(1)



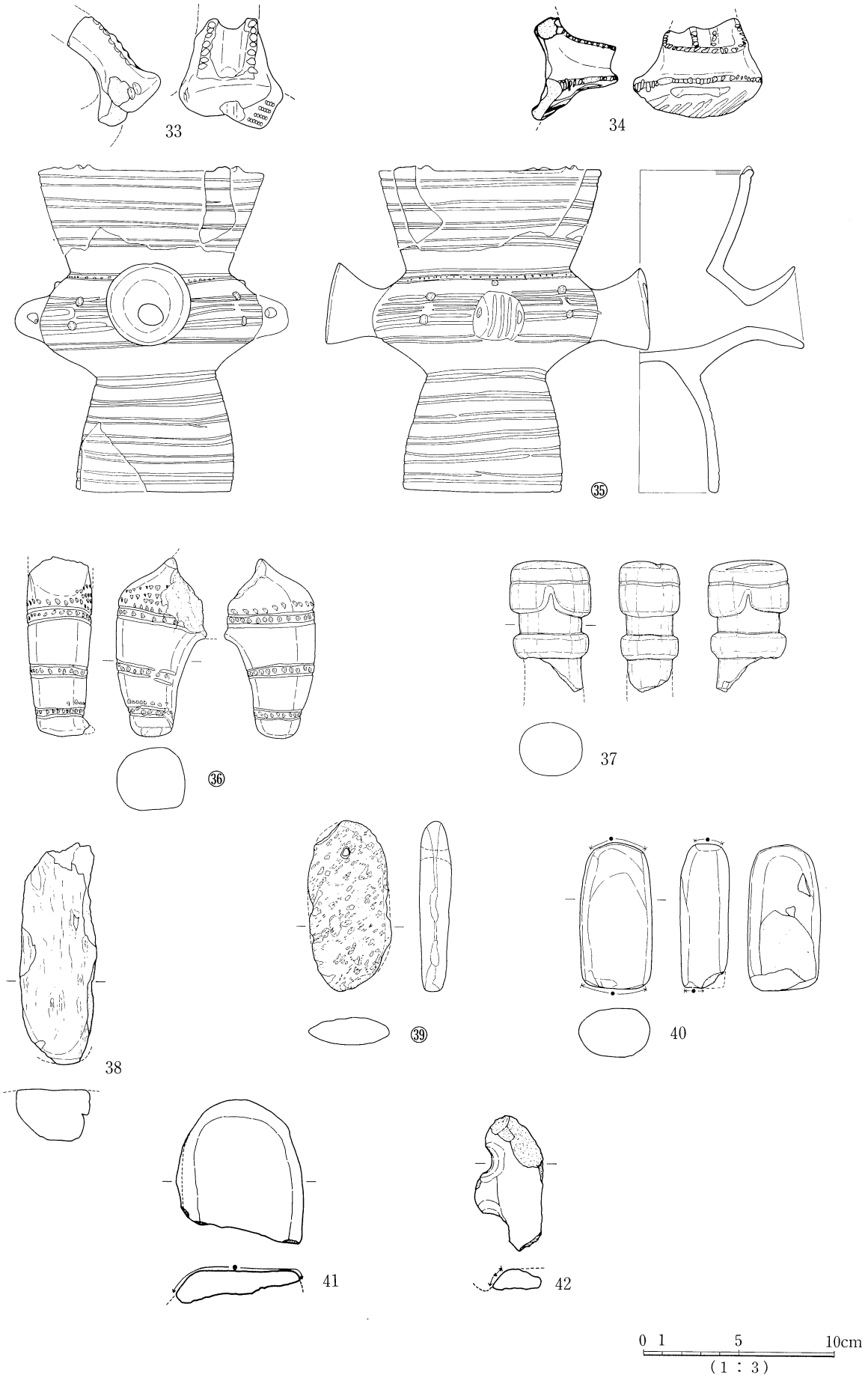
第116図　49Ａ号住居出土遺物(2)



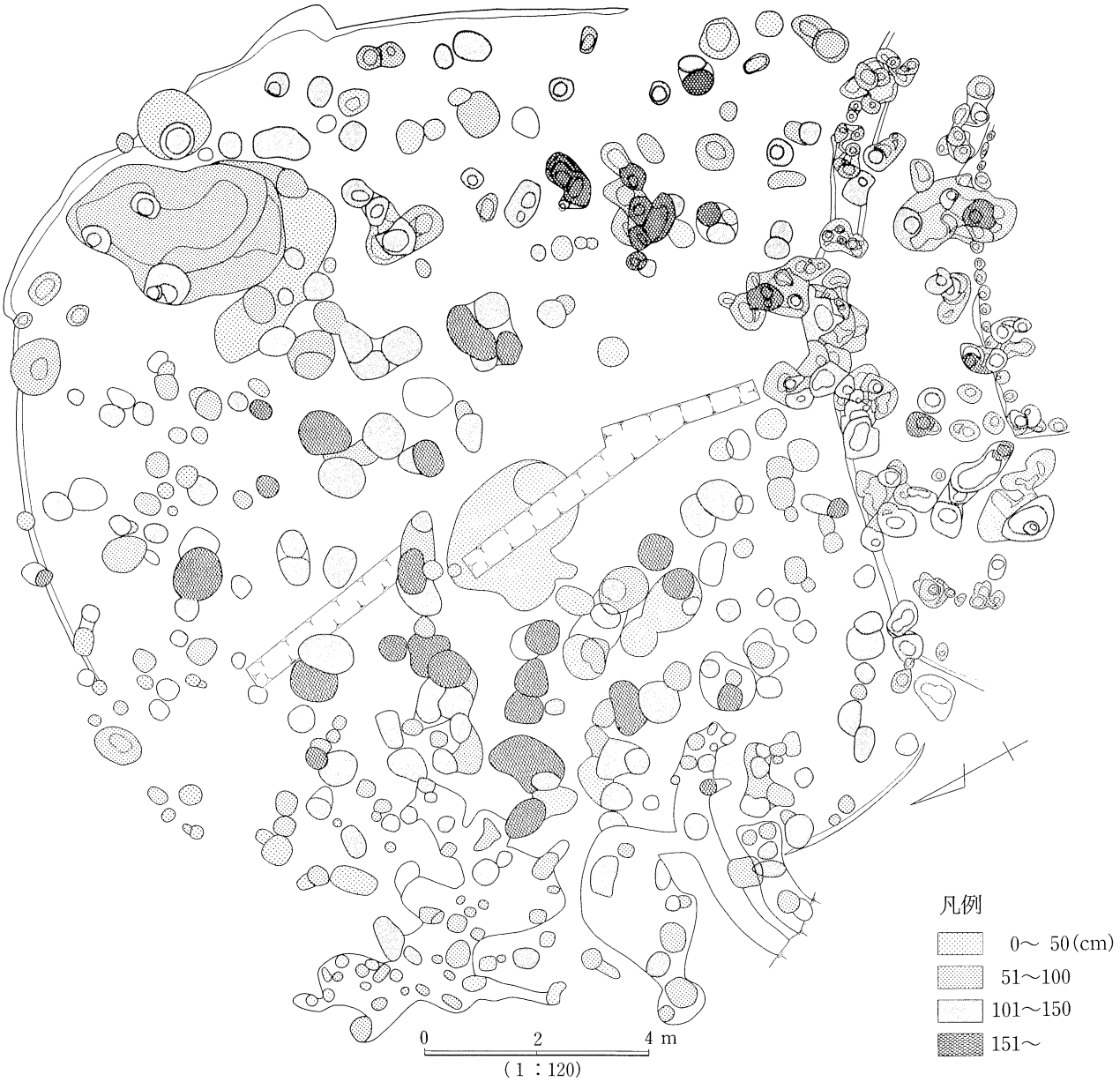
第117図　49A号住居出土遺物(3)



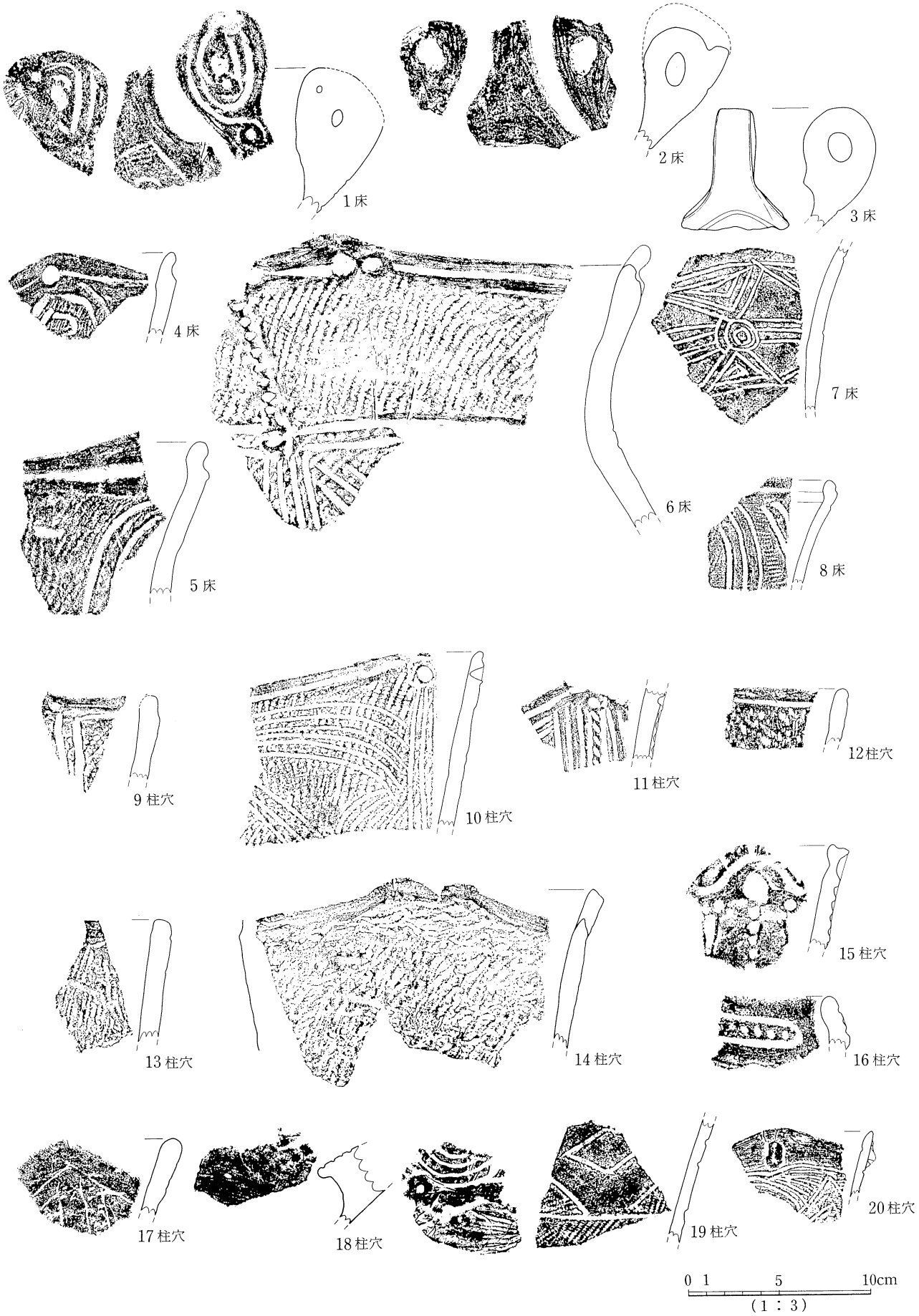
第118図　49Ｂ号住居出土遺物(1)



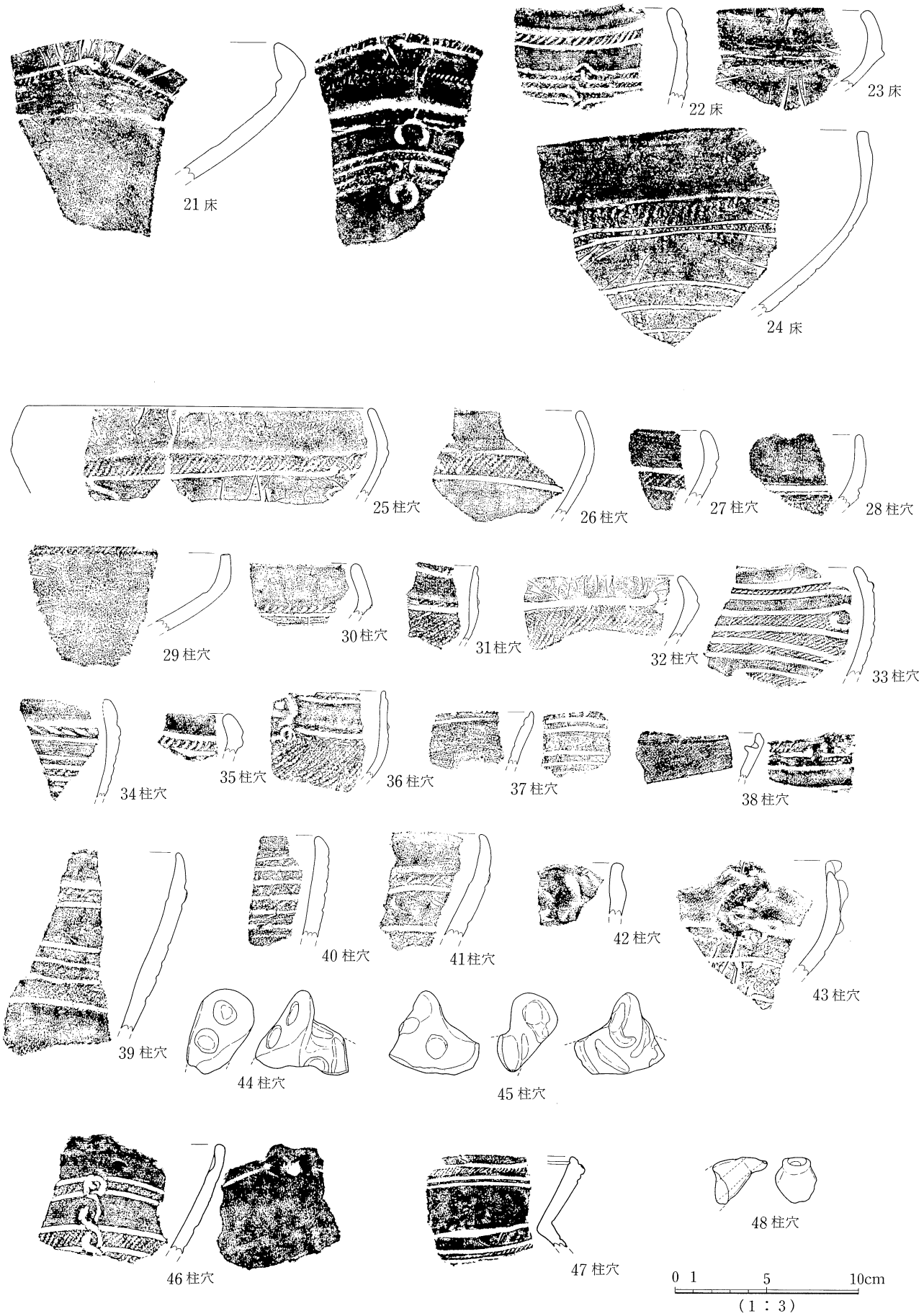
第119図　49B号住居出土遺物(2)



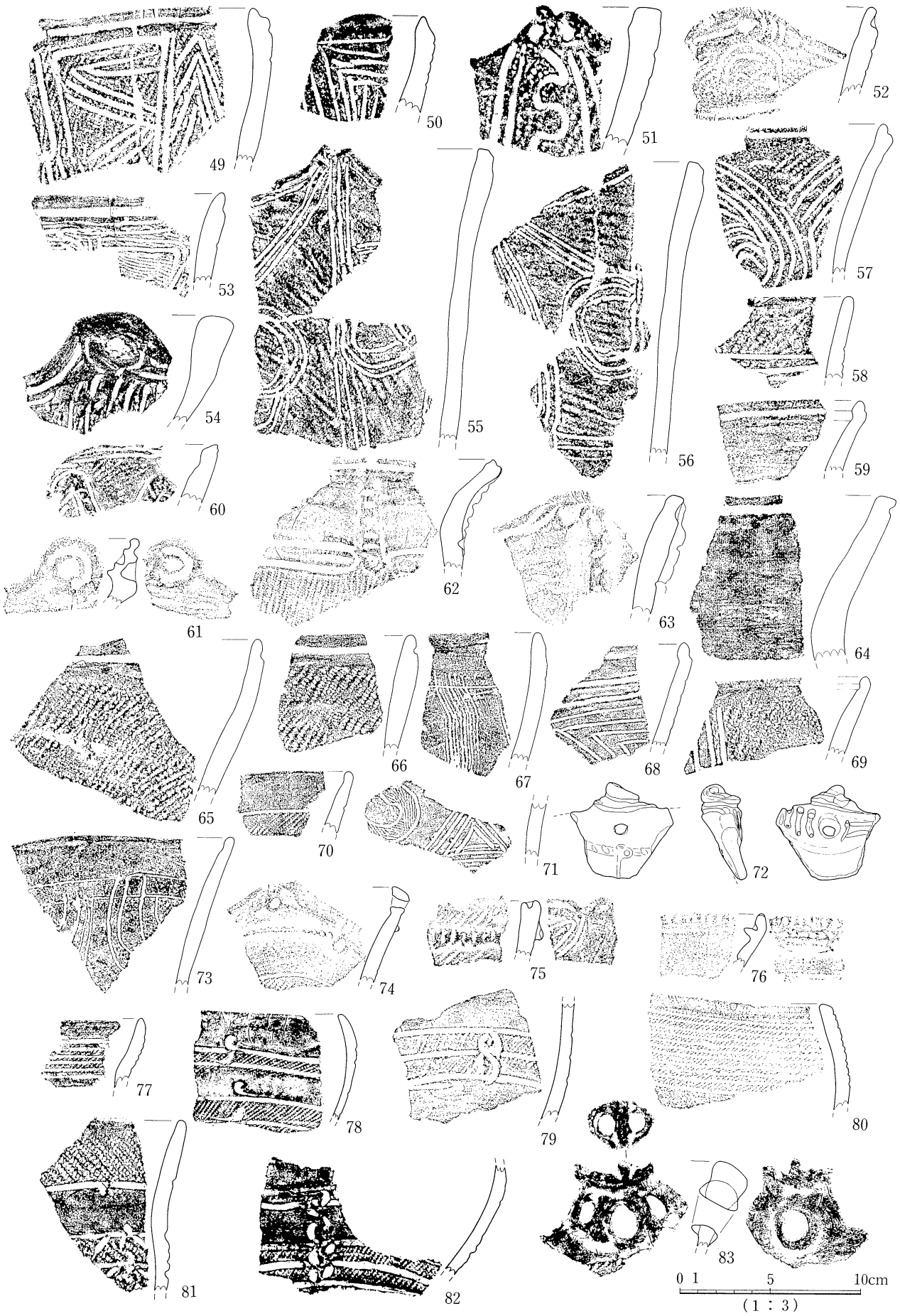
第121図　50号住居実測図(柱穴深度分類図)



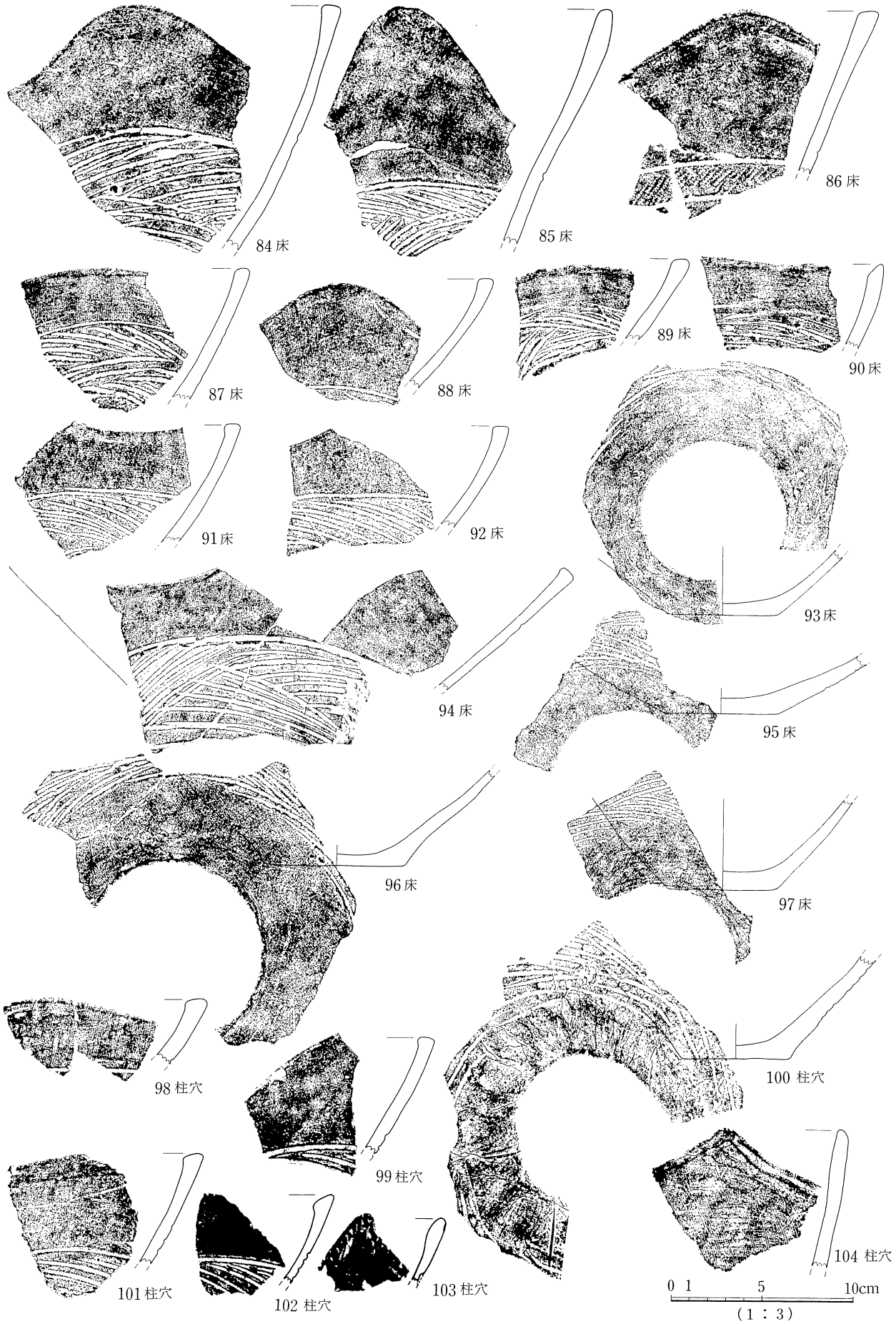
第123図　50号住居出土遺物1（床面・柱穴）



第124図　50号住居出土遺物 2 (床面・柱穴)

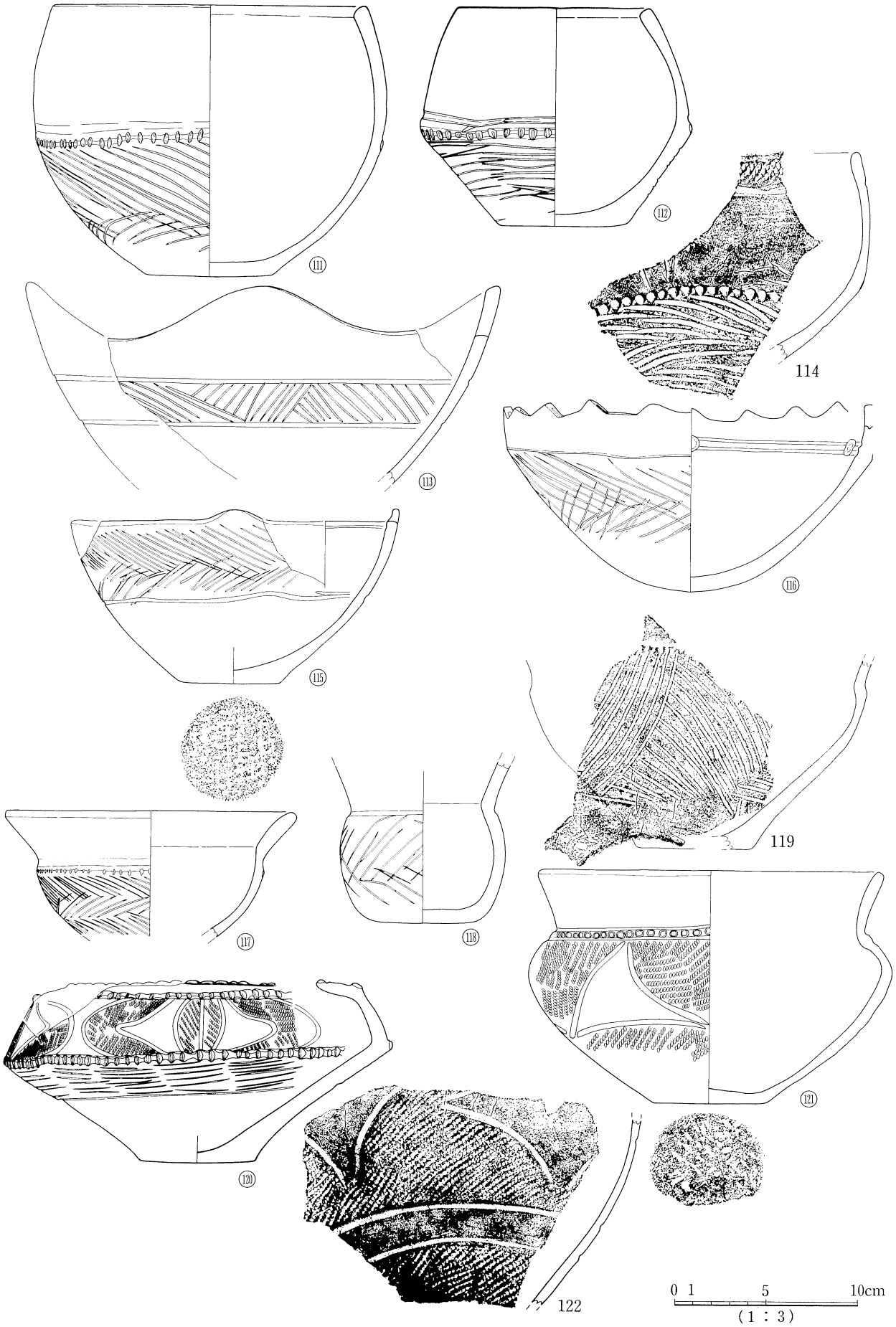


第125図　50号住居出土遺物 3（覆土）

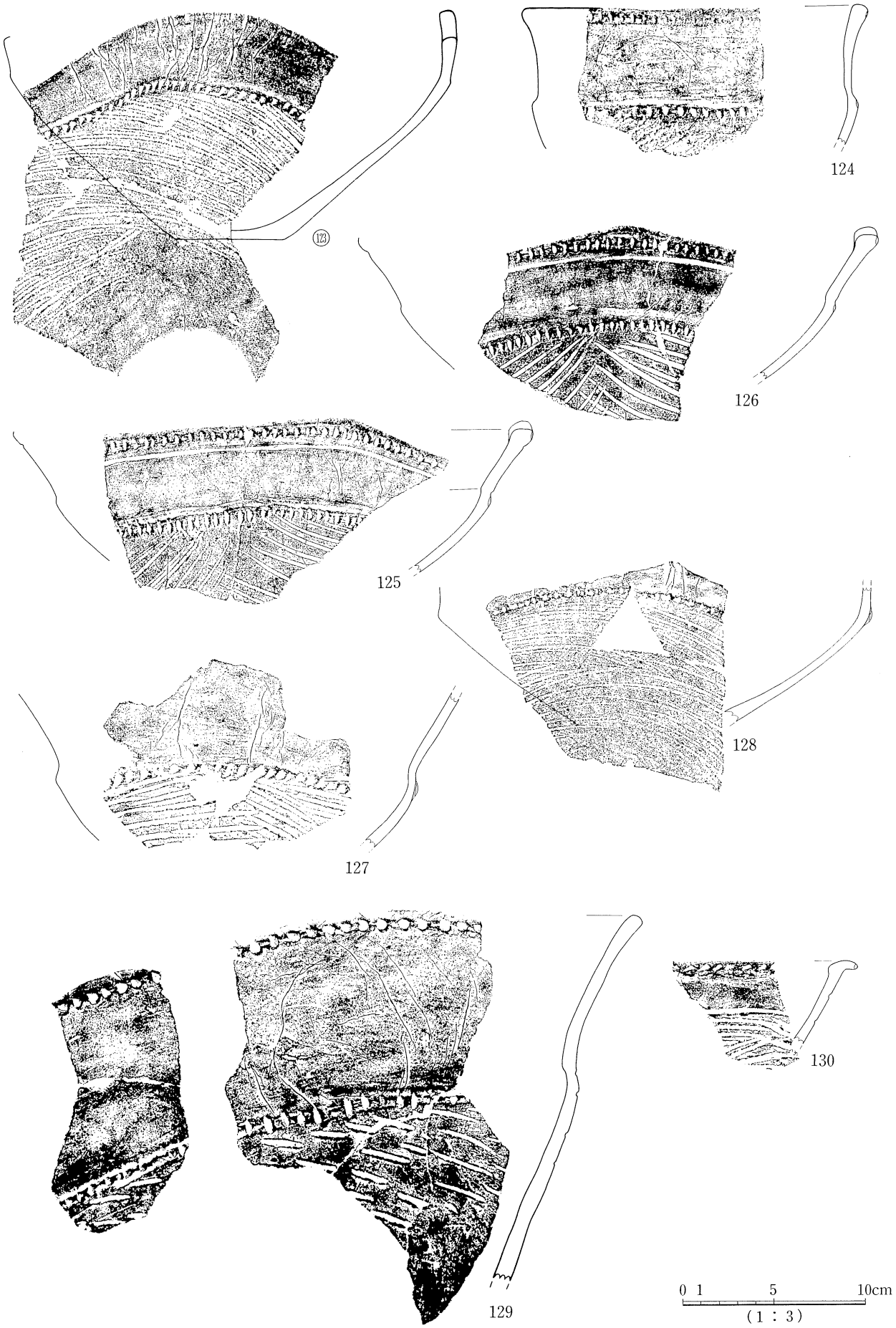


第126図　50号住居出土遺物 4 （床面・柱穴）

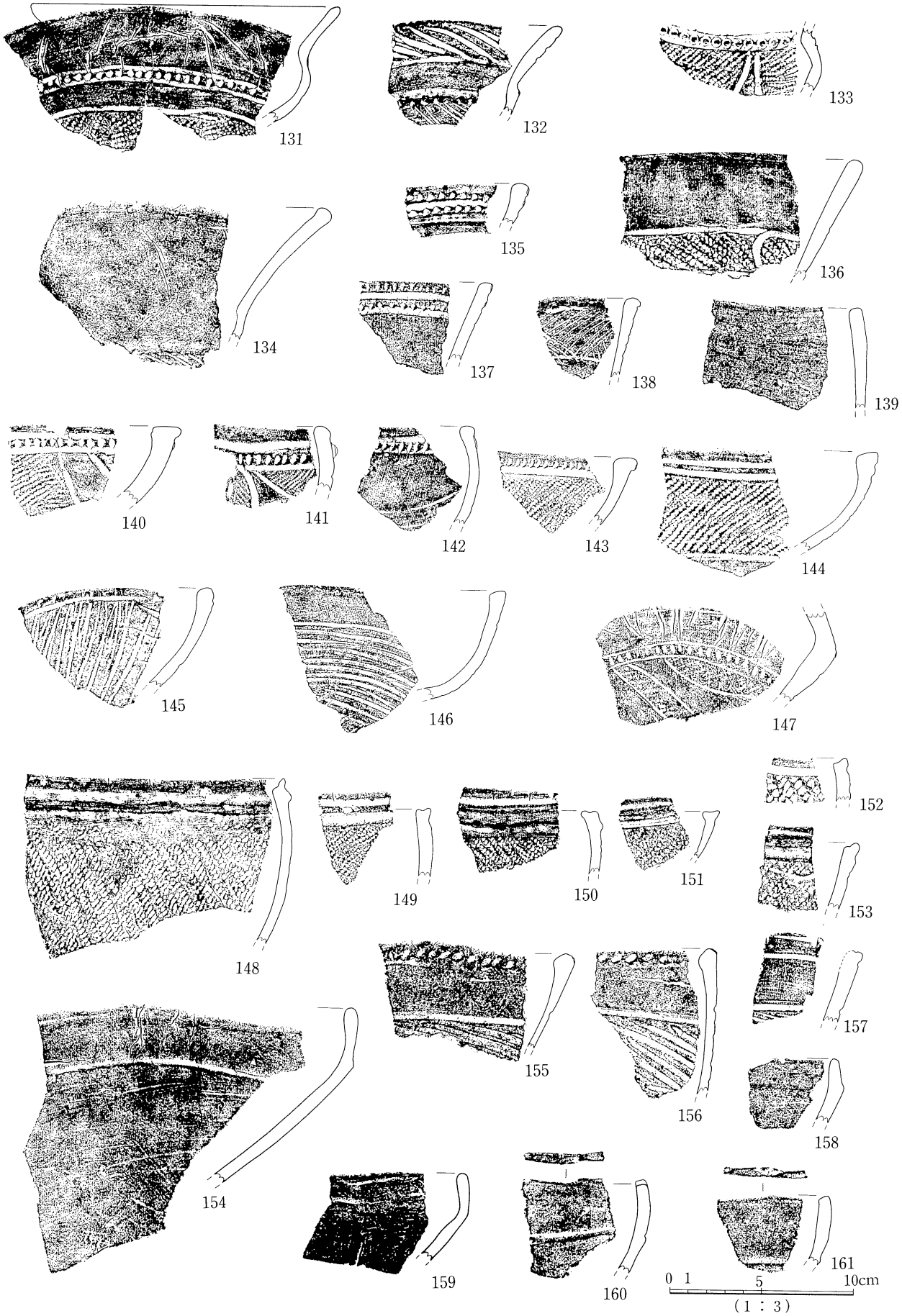
第127図　50号住居出土遺物５（床面）



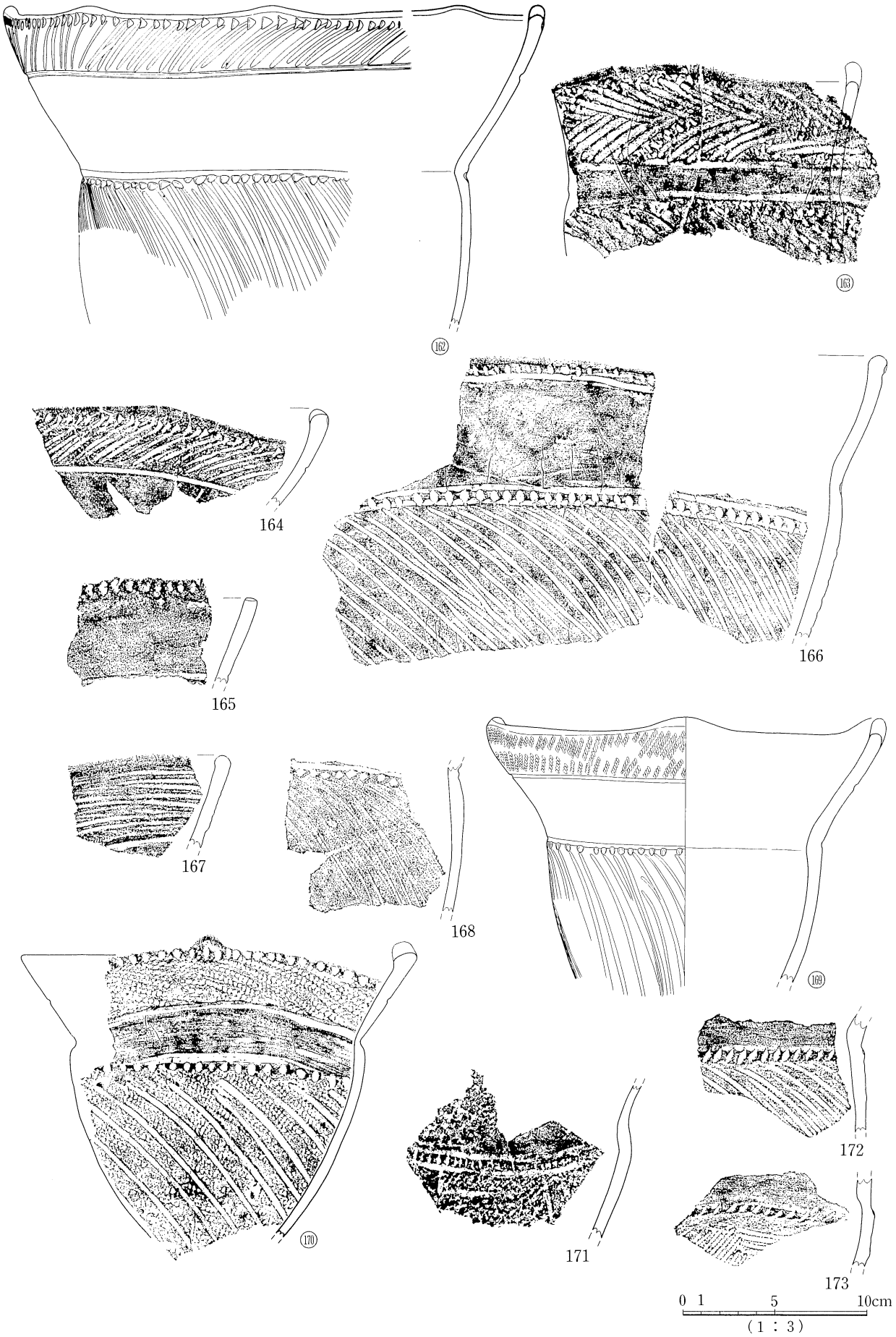
第128図　50号住居出土遺物 6（床面）



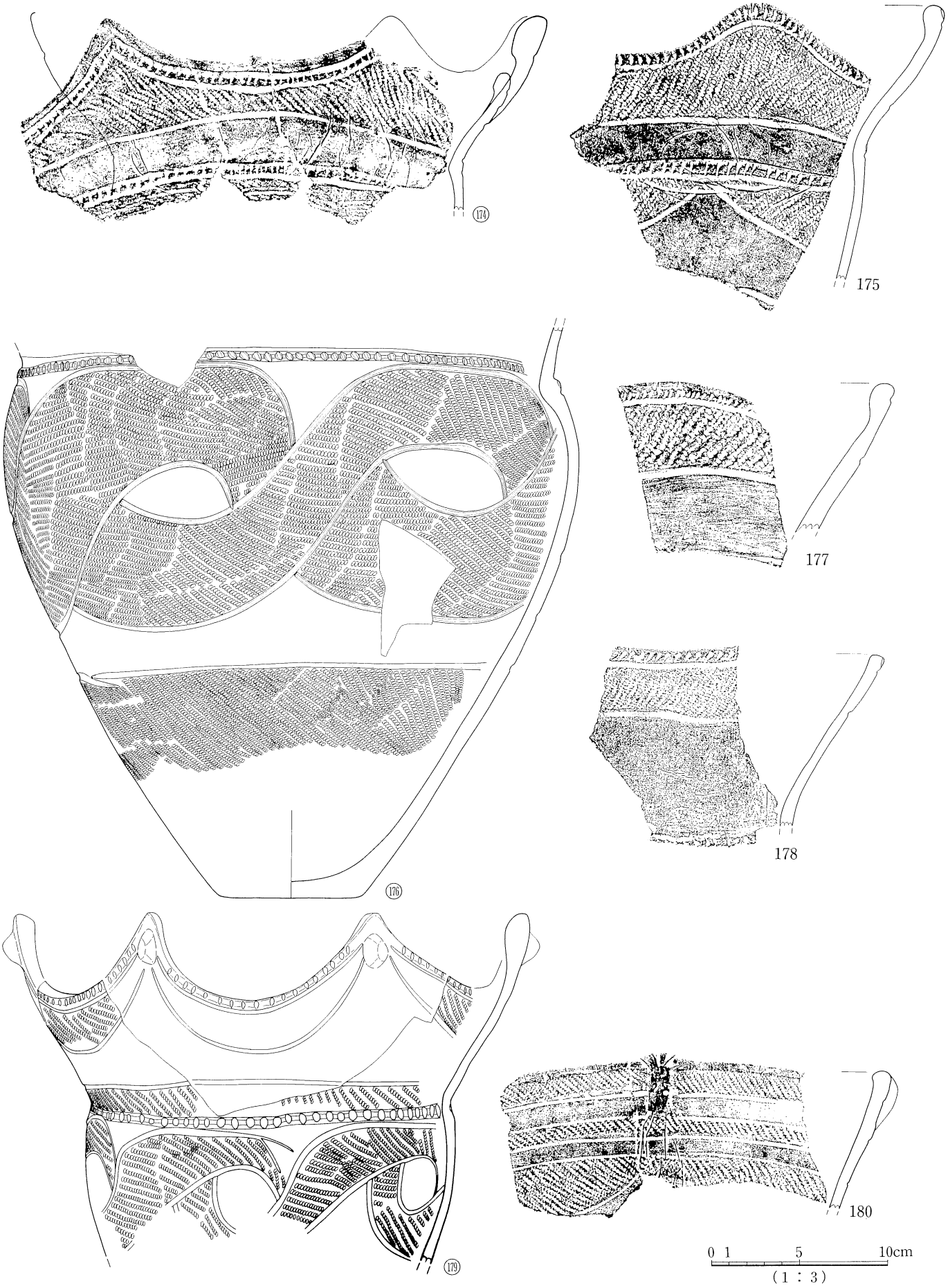
第129図　50号住居出土遺物７（床面）



第130図　50号住居出土遺物 8（柱穴）

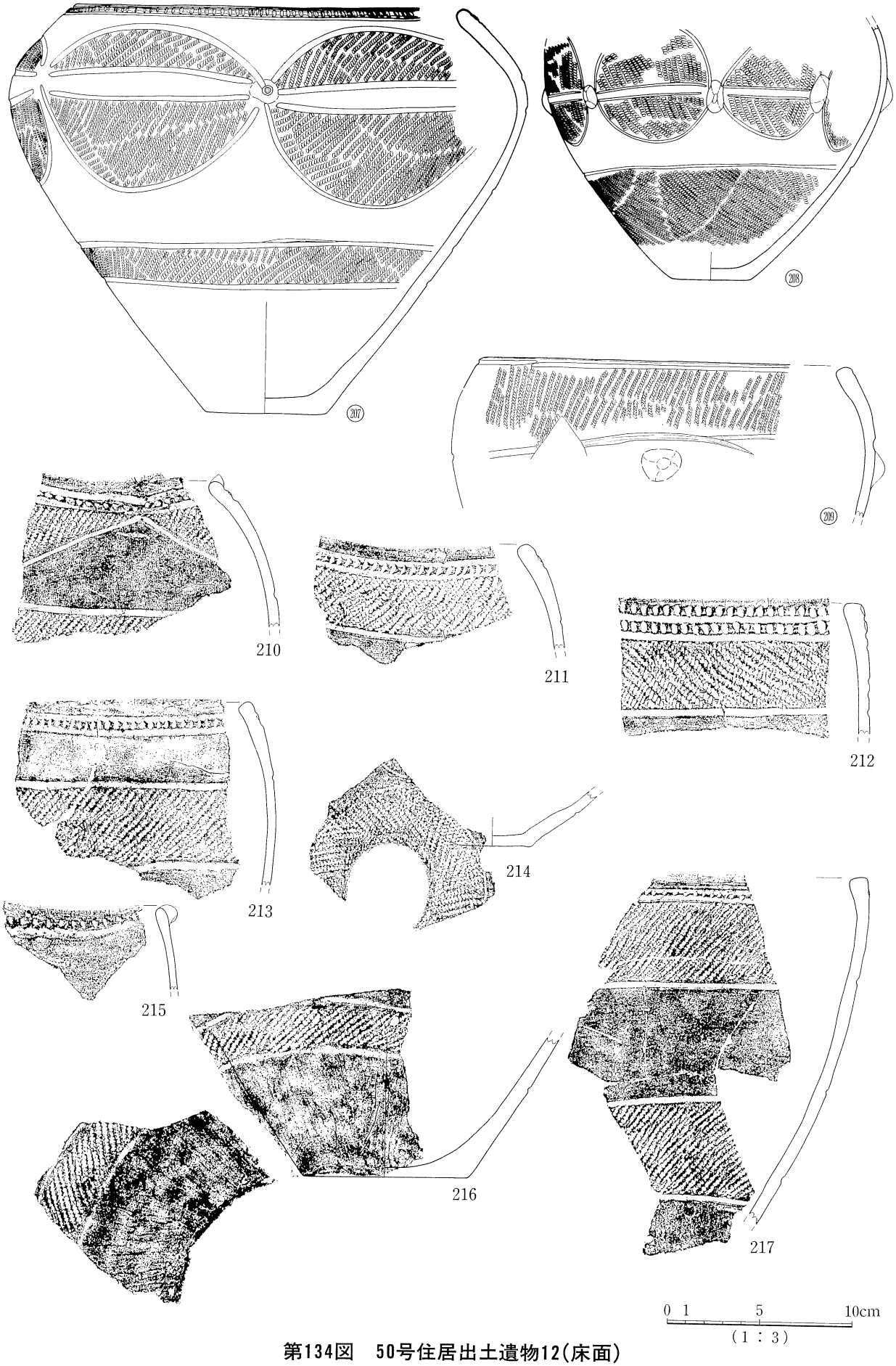


第131図　50号住居出土遺物 9（床面）

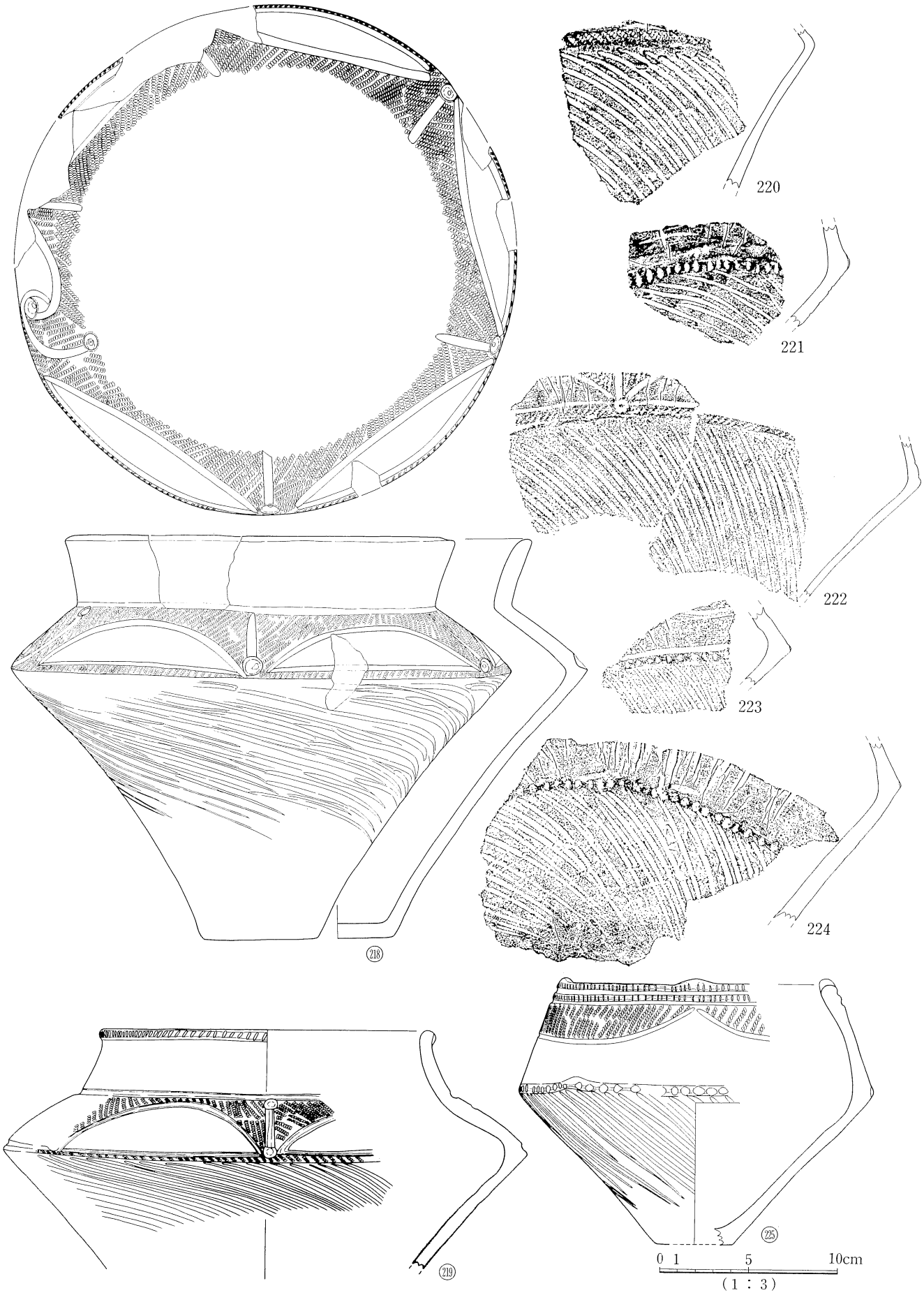


第132図　50号住居出土遺物10(床面)

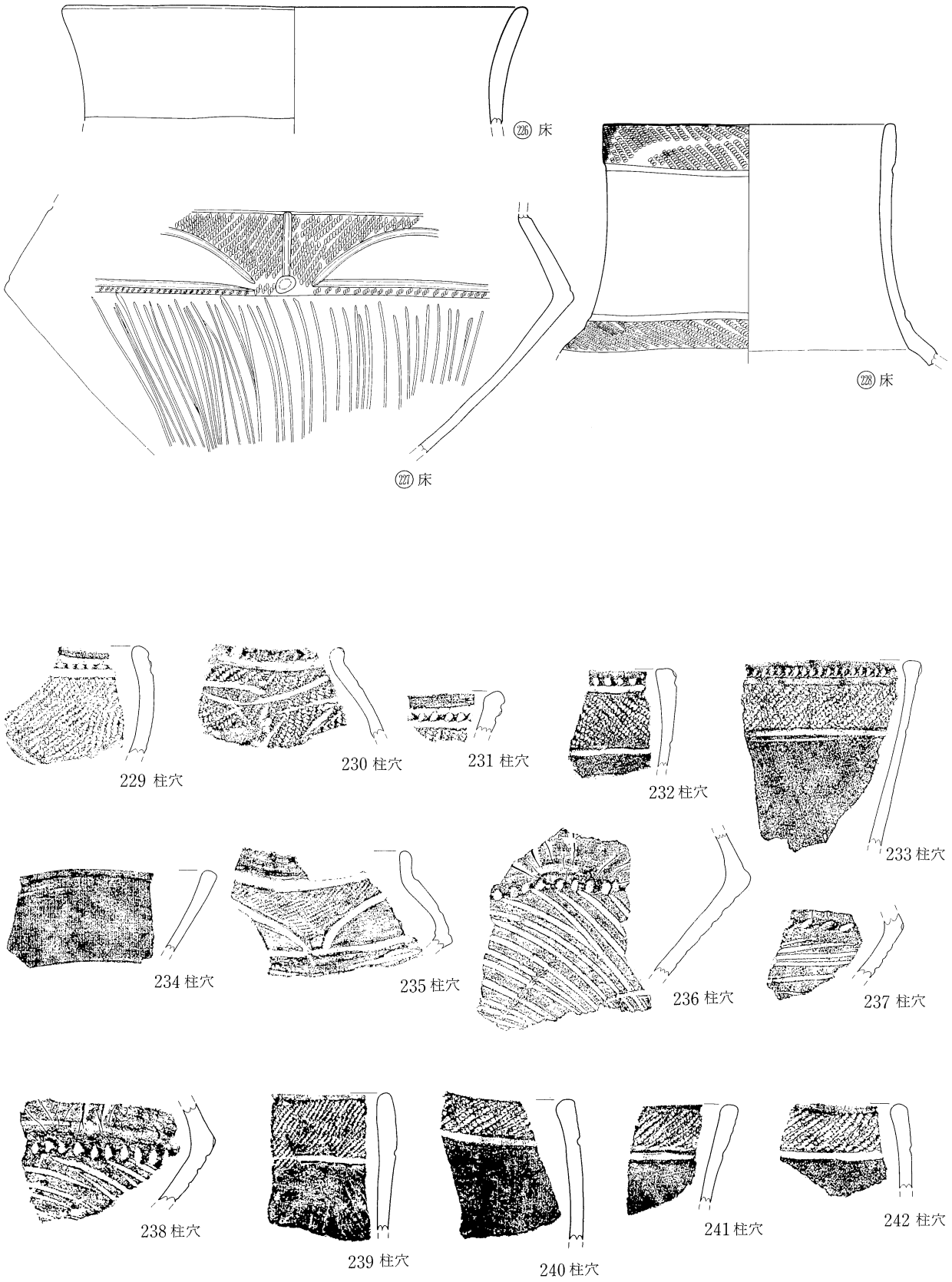
第133図　50号住居出土遺物11(柱穴)



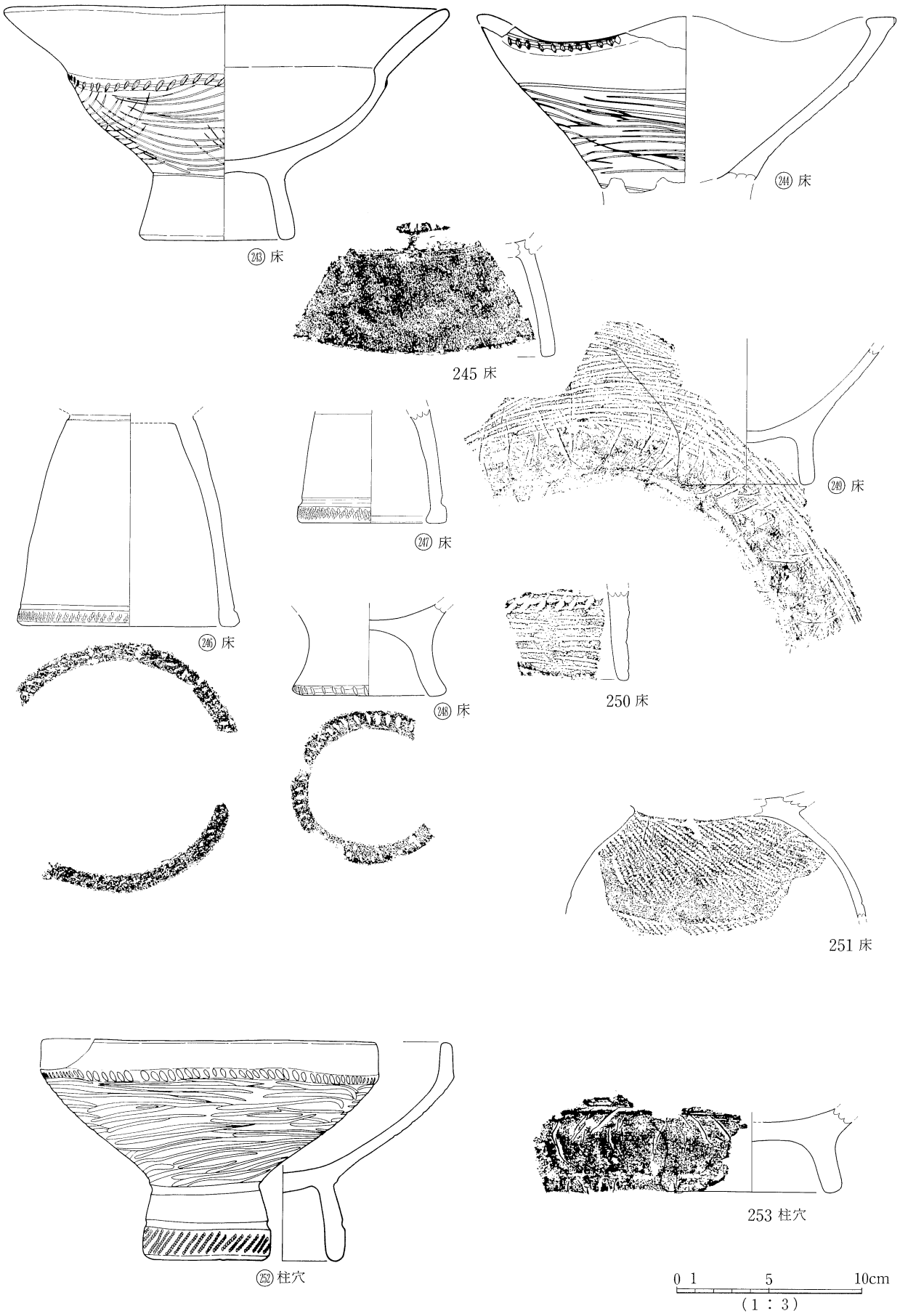
第134図　50号住居出土遺物12(床面)



第135図　50号住居出土遺物13(床面)



第136図　50号住居出土遺物14(床面・柱穴)



第137図　50号住居出土遺物15(床面・柱穴)